

博 士 論 文

中島敦とその時代

—人間認識の場としての植民地（朝鮮、中国・満州、南洋）—

2019年3月

宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程

国際学研究専攻

144605H

陳 佳敏

## 中島敦とその時代

### — 人間認識の場としての植民地（朝鮮、中国・満州、南洋） —

#### 目次

序章 中島敦とその時代、そして植民地体験	1
1. 中島敦の文学とその時代	1
2. 中島敦と植民地体験	3
2-1 少年時代の朝鮮体験	3
2-2 青年時代の中国・満州体験	5
2-3 晩年の南洋群島体験	7
3. なぜ古典のものなのか	12
4. 本論文の目的と構成	15
第I部 植民地に生きる様々な群像 — 少年時代の朝鮮体験	17
はじめに 1930年前後の朝鮮表象と中島敦<朝鮮もの>	17
第1章 植民地に生きる様々な群像	
— 「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」(1929)	19
第1節 離日前における中島敦の朝鮮認識	20
第2節 中島敦の朝鮮体験	23
第3節 1920年代の日本における朝鮮表象と「巡査のいる風景」	26
第4節 宗主国人としての日本人像	28
第5節 被植民者としての朝鮮人像	31
第2章 両班の末裔としての少年—「虎狩」(1934)	41
第1節 1930年前後の日本文壇と朝鮮認識	41
第2節 「虎狩」と1920年代の朝鮮社会	45
第3節 日本人としての生き方—<私>の見た趙大煥	48
3-1 出会い	48
3-2 交流	51
3-3 断絶	53

第4節	虎狩の現場から見せ付けられたもう一人の趙大煥	55
第5節	<朝鮮もの>に対するアンチテーゼとしての「虎狩」	56
おわりに		61
<b>第II部 中国憧憬と冒険を求める日本人たち — 青年時代の中国・満州体験</b>		
はじめに	1930年代における中国認識と中島敦<中国もの>	65
第3章	大連に生きる3つの階層—「D市七月叙景(一)」(1930)	67
第1節	「D市七月叙景(一)」における創作背景	67
第2節	権力に不安を持つ満鉄総裁	70
第3節	生活に不安を抱く渡満者	73
第4節	生きることに不安を感じる苦力	77
第5節	人間存在への追及	81
第4章	1930年の北京に暮らす日本人居留民たち — 「北方行」(1933—1936)	84
第1節	1930年代前半の日本国内における北京認識	86
第2節	「北方行」のあらすじと先行研究	89
第3節	上流社会の白夫人	92
3-1	華やかな世界に暮らす	94
3-2	墮落地獄に苦しむ	96
第4節	留学生の折毛伝吉	100
第5節	黒木三造の向かうところ	107
おわりに		111
<b>第III部 島民イメージを覆す南洋人—晩年の南洋体験</b>		
はじめに	1940年代における島民イメージと中島敦の<南洋もの>	114
第5章	植民地に生きるインテリ女性—「マリヤン」(1942)	119
第1節	インテリ性質にこだわるマリヤン	123
第2節	矛盾を孕む南洋社会	129
第3節	島民女のサンプル<ララフ>とインテリ女性<マリヤン>	133
第4節	南洋表象における<マリヤン>の存在	137

第6章 奸悪な老人像—「雞」(1942) . . . . .	142
第1節 土方久功の「鶏」と中島敦の「雞」 . . . . .	143
第2節 新任講師への不審 . . . . .	148
第3節 食欲な老人像 . . . . .	152
3-1 食欲な老人像 . . . . .	152
3-2 神様事件の密告者 . . . . .	156
3-3 盗難事件の窃盗者 . . . . .	159
第4節 3羽の雞の真意 . . . . .	161
第5節 「雞」に示される批判性 . . . . .	164
おわりに . . . . .	167
終章 植民地体験と中国古典もの、そしてその関連性 . . . . .	172
1. 誇り高い自尊心の持ち主 . . . . .	174
— 「虎狩」(1934) から「山月記」(1941) へ	
2. 懐疑者と行動者の間で . . . . .	176
— 「北方行」(1933-1936) から『わが西遊記』(1942)、そして「子路」(1942) へ	
3. 境界線に置かれる存在 . . . . .	182
— 「マリヤン」(1942) から「李陵」(1942) へ	
4. 中国古典の世界へ . . . . .	186
参考文献 . . . . .	188
1. 書籍 (中島敦に関する研究書・関連書籍) . . . . .	188
2. 論文及び学術誌 . . . . .	191
3. 新聞・雑誌、インターネット資料 . . . . .	195
初出一覧 . . . . .	196
付録 (中島敦年譜)	
謝辞	

## 凡例

- 書名・作品名・新聞は『』、雑誌・論文は「」で表した。
- 年号は原則として西暦を用いた。
- 引用文は原則としてそのまま引用したが、適宜旧漢字を新漢字に改めた。
- 頻繁に引用される著書については、最初の引用にのみ注釈をつけ、以後は頁数のみを本文に記載した。

## 序章 中島敦とその時代、そして植民地体験

### 1. 中島敦の文学とその時代

中島敦（1909-1942）が、本格的な文筆活動を開始したのは昭和 10 年代（1935-1945）である。この時代は満州事変を経て中国と全面的な戦争を行なった日本が、その勢いで太平洋戦争へ突っ走っていった、いわゆる戦争の時代である。政治上の弾圧と厳しい言論統制の下、国民の多くは自ら積極的に国粹主義の風潮に乗った。それ故に、この時代は価値観錯乱の時代<sup>1</sup>とも言われている。

このような時代風潮の下で、芸術界では 1937 年ごろから戦争美術展・聖戦美術展・大東亜戦争美術展などが開催され、大多数の一流の画家たちが戦争画を画いた。言論界では「聖戦」「八紘一宇」「大東亜建設」という言葉を用いて国民を鼓吹し、新聞には「無敵皇軍」の「大戦果」が紙面を飾った。そして、文壇においても大日本文学報国会・大日本言論報国会が組織され、多くの文筆人が競って会員となって、戦争を賛美・美化する戦争文学と国策文学が数多く執筆された。当時の文壇の様子について、荒正人は次のように述べている。

太平洋戦争以後になると、芸術の世界も国策一点張になってしまった。今日からは想像もできぬことだが、戦争を露骨に賛美または肯定した箇所を挟まなければ、作品発表はまず不可能であった<sup>2</sup>。

氏の指摘のように、当時は戦争を謳歌する作品しか認められない時代だったのである。高圧的になった文化統制の下で、公然と戦争を反対する行動は不可能に近く、無意味な行動であった。結局、言論統制に屈服した文学者たちは転向を余儀なくされた。一方、火野葦平の『麦と兵隊』（1938）、上田広の『黄塵』（1938）、棟田博の『分隊長の手記』（1939-1940）のような時局に追随する作品は発表とともに評判となり、有名作家になることも可能な時代であった<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 家永三郎『太平洋戦争』（岩波書店、2002）196-197 頁参照。

<sup>2</sup> 荒正人「中島敦論」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）28 頁。

<sup>3</sup> 閻瑜『新しい中島敦像—その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2011）305 頁。

このような時代に異彩を放っていたのがほかならぬ中島敦だったのである。彼は他の文学者と違い、日本の軍国主義や植民地主義や大東亜共栄圏の構想に迎合するような行動は一切取らなかった。彼は「戦争は戦争、文学は文学」（遺稿「章魚の木の下で」）と言い、文学が「国家的目的に役立たせられ得るものとは考えもしなかった」と言い切った。そして、文学の効用を発揮しようとするならば、この時世下では「見逃されがちな精神の外剛内柔性」、あるいは「気負い立った外面の下に隠された思考忌避性」への「一種の防腐剤」であると主張し、無理に作品の中で国策的色彩を施す文学者たちを批判した<sup>4</sup>。その証拠として晩年の中島敦は、「弟子」（1942）、「名人伝」（1942）、「李陵」（1942）といった中国の史実・古典に題材を求め、全く時代を感じさせない作品を残した。

例えば、「弟子」では師の孔子と弟子の子路の物語が描かれているが、子路は孔子の教化により道を体得しながら成長していくと同時に、師の教えに不満を示し己を堅持する。己を堅持するために衛の国の政変に巻き込まれ、君子のように死んでしまう。中島敦は「弟子」を通して、子路の己の性情に殉じる哀れな生き方を描きあげたのである。「李陵」は、漢武帝という絶対的意志と権力の下で、李陵、蘇武、司馬遷という三人のそれぞれの違う運命を描いた作品である。これらの作品には中国紛乱の歴史の中で彷徨したり、苦悩したり、そして執着したりする豊かな精神世界を持つ人間たちの生々しい生と死が描かれている。つまり、晩年の中島敦は、戦時下であるにもかかわらず、戦争とは無縁な中国の古典の世界を題材にし、そこに生きる様々な人間の内なる世界、人間存在の有り様を描き続けたのである。

周知のごとく、中島敦は幼い頃から母性愛の欠如、父との仲があまり良好ではなかったことや継母との折り合いの悪さなど、家庭内の複雑な人間関係に曝されていた。その人間関係が彼の人間認識の基調を作ったと言われている<sup>5</sup>。一方、後年のギリシャ哲学をはじめとするカフカやパスカルなどの西洋哲学思想の吸収が彼の人間への理解を深めたとも考えられている<sup>6</sup>。指摘の通りである。しかしながら、中島敦に人間を観察するチャンスを与え、興味を駆り立て、その人間認識を深められた場はほかでもなく植民地だったのである。

日韓併合直前の 1909 年に生まれ、太平洋戦争が勃発した翌年の 1942 年に亡くなった

<sup>4</sup> 中島敦「章魚木の下で」『中島敦全集 2』（筑摩書房、2001）22-24 頁。

<sup>5</sup> 鷲只雄『中島敦論「狼疾」の方法』（有精堂、1990）11-12 頁。

<sup>6</sup> 閻瑜、前掲書（註 3）95-166 頁。

中島敦は、日本近代史の中でももっとも激しい時代を生きただけでなく、朝鮮、中国・満州、南洋群島という北から南に渡って3つの植民地空間を体験している。これは、当時の日本文壇では極めて稀な経験である。これらの植民地体験<sup>7</sup>が、中島敦の人生と作品世界の形成にどのような影響を与えたかを明らかにすることは中島敦文学にとどまらず、日本近代文学史への新たな可能性を見出す重要な作業となるに間違いない。そこで、次節では、中島敦の植民地体験の状況について見てみる。

## 2. 中島敦と植民地体験

### 2-1 少年時代の朝鮮体験

1919年、日本の植民地支配に置かれて10年目の朝鮮は、3.1独立運動を機に植民地政策が「武断政治」から「文化政治」に変わった<sup>8</sup>。朝鮮総督の斎藤実は、朝鮮人の発行する新聞を認め、教師の帯剣を廃止した。また、公務員にむけて朝鮮および朝鮮人を理解するように訴えた<sup>9</sup>。つまり、朝鮮総督府は「差別廃止」という名目で、朝鮮人を「一視同仁」し、日本人と同じく帝国の臣民として平等に扱うべく「同化」・「融和」を宣言したのである。1926年刊行された総督府編纂の『師範学校修身書』には朝鮮総督府の融和政策が次のように書かれている。

明治の御代に至り、朝鮮と台湾とが版図となった結果、約千七百万の朝鮮民族と、三百万の支那民族とは、在来の大和民族と共に日本国民として融和連携し、共存共栄の道に尽くすこととなった。我等現在の国民はよくこれ等の事情を究め、祖先の成跡を理想として、精神的にも肉体的にもよく同胞一体の美を發揮して、一は我等の祖先の歴史を顕かにし、一は我等同胞の共存共栄の道を辿るよう努力せねばならぬ<sup>10</sup>。

---

<sup>7</sup> 植民地文学を論じるにあたって、朝鮮、関東州、満州、南洋群島といった場所については、植民地と共に「外地」という言葉もよく使われている。しかしながら、本論文ではそれぞれの場における当時の植民地政策の様子を取り入れ、また植民地となった社会に生きる人々の人間存在の有り様を強調するために、あえて「外地」という言葉は使わず、植民地を用いることにする。

<sup>8</sup> 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波書店、2002）121頁。

<sup>9</sup> 同上、141頁。

<sup>10</sup> 朝鮮総督府『師範学校修身書巻2』（朝鮮総督府、1926）104頁。

つまり、当時の朝鮮では日本人と朝鮮民族の間には「融和連携」と「共存共栄」の道に尽くすべき教育が行われていた。すると、日本人居留民の本音はどうかであれ、表では「良い日本人」の顔（朝鮮人との平等）が求められた。朝鮮総督府はこのようなスローガンを作って植民地統治の正当性を作ろうとしていた。この政策によって、安定したとは言えないが、以前の暴力的政治がある程度緩和されるようになった。

しかし、「文化政治」とは言っても、差別待遇や文化活動における統制はほとんど変わらず、むしろ同化主義の論理に基づく統制が強化されたとも言える。つまり、この政策の実質は「徹底した従属化<sup>11)</sup>」を図ることによって植民地をより長く支配するところにその目的があった。中島敦一家は、このような朝鮮人への「同化」、「融和」政策が基本方針として推進されていた時代に、朝鮮にやってきたのである。

1920年、父・田人の龍山中学校への転勤に伴い、中島敦は京城龍山区の龍山小学校5年生（男女組）の二学期に転入した。その後、彼はそこで中学校時代を過ごし、1926年に東京第一高等学校に進学するため日本に戻った。思春期の一番感受性の豊かな5年半に、中島敦は日本植民地支配下の朝鮮という異民族環境の中で過ごした。龍山地区は「南村」と言われ、日本人町として開発された地域である。この周辺には総督官邸、軍参謀長官邸、軍指令部、龍山憲兵分隊、鉄道局などが置かれ、日本の植民地支配の軍事と交通の要衝であった。つまり、ここは朝鮮にいながらも全く朝鮮を感じさせない日本式の空間であった。

一方、中島敦が通った京城中学校（現ソウル高等学校）は西大門駅北側の慶熙宮の敷地に位置しているため、「北村」と言われる朝鮮人街に置かれていた。ここはビルや建物が林立する日本人町とは違い、青臭く不潔で、貧民、乞食、流浪の民が蠢く貧民窟だらけの場所であった。このように、家と学校に往来する中島敦は、二つの空間を同時に接触する機会が与えられた。

その頃の中島敦は、学校の授業をさぼり、「学校の裏山に登り、さらに城壁を乗り越えて外に出た<sup>12)</sup>」。また、京城中学校に通った時には毎日約1時間電車に乗ってこの二つの異空間を往来していた。この電車の中こそ朝鮮人と日本人の構図が最も鮮明に映し出される場であった。この電車での経験はその後書かれた「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ」(1929)の中で描き出されている。自伝小説と言われる「プールの傍で」(1933)

---

11 森山茂徳「日本の植民地支配と朝鮮社会 植民地統治と朝鮮人の対応」『日韓歴史共同研究報告書 第3分科篇 上巻』（日韓歴史共同研究委員会編、2005）10頁。

12 山崎良幸「中島敦を思う」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）239頁。

は、中島敦の中学校時代の様子を垣間見ることができる書き方がされている。すなわち、主人公は家庭内の事情により、放課後に家に帰らず、学校周辺の支那料理屋、植民地の新開地じみた場末、朝鮮人の夜店、暗い路地裏にある朝鮮人の遊廓など様々な所に足を運び、朝鮮人の生の世界を観察している。そして、「虎狩」(1934)にも朝鮮人友達と一緒に虎狩の冒険に出かけたことが描かれている。

このように、少年中島敦は、朝鮮滞在中の5年半間、日本人の空間にとどまらず、積極的に朝鮮人の空間に入って彼らと接触し、友達を作るなど、多様な体験をしていた。この体験は、「一視同仁」のスローガンとは異なる朝鮮社会の現実を知り、彼らの生活に深い関心を持つ契機となった。と同時に、朝鮮に来る前に日本の学校で学んだ「日本＝強/朝鮮＝弱」という認識に疑問を抱き、植民者としての自分の存在と立場を見直す契機となった。中島敦は、朝鮮を回顧する時に、昔住んでいた故郷としての郷愁だけではなく、そこで味わった孤独、喪失感、不安、悩み、痛覚など無数の感情をも一緒に思い出していた。そして、それらの感情と感性は朝鮮を離れた後も消えることなく、「巡査のいる風景－1923年の一つのスケッチ」(1929)、「プールの傍で」(1933)、「虎狩」(1934)の中に遺憾なく反映されていたのである。

## 2-2 青年時代の中国・満州体験

5年余りの朝鮮での体験と違い、中国・満州での体験は数度の帰省、入院、旅行など一時的な滞在によって実現された。

周知のように、幼い頃から神童、天才と呼ばれてきた中島敦は漢学名門育ちだった。中島敦の家庭環境に関しては、村山吉廣『評伝・中島敦 家学からの視点』(中央公論社、2002)の中で詳しく述べられているので、ここでは詳細を略す。彼にとって、漢学の教養は「父親から血に享け<sup>13)</sup>」、また「母親の乳と一緒に飲んで育ったもの<sup>14)</sup>」だと言われているように、彼の精神と肉体の一部になっている。

このような家庭環境に恵まれた中島敦は、幼い頃から積極的に漢籍に触れ、漢文を勉強し、漢学への愛好がおのずと心の中に植えつけられた。彼は古典の中における伝統中国に憧れを持っているだけではなく、現代中国に対しても強い関心を持っていた。彼の2番目の伯父・斗南は30年間にわたって中国問題に傾倒し、日本と中国の間を往来する一論客

<sup>13)</sup> 中村光夫「中島敦論」『中島敦全集別巻』(筑摩書房、2002)8頁。

<sup>14)</sup> 同上、7頁。

であり、当時、欧米列強の利権獲得競争にさらされている中国の現状を『支那分割の運命』(1912)として執筆した人物である。中島敦は斗南の最愛の甥であり、晩年の伯父との交際を描いた「斗南先生」(1933)の中で詳しく描かれている。伯父は、彼の下宿に来ると、よく二人で「支那の時局のこと。共産主義のこと」などの話をしたり、入院中には毎日、中国関係の新聞記事の中島敦に読ませたりした。

このように、中島敦は現代中国に関する独自の見識を持っていた伯父から中国についての知識を得ていただけでなく、現代中国への関心も触発されたのである。伯父の影響だけではなく、彼の現代中国に対する認識には、彼自らの弛まない読書と研鑽に負うところが大きい。実は、中国・満州を舞台にした「D市 7 月叙景 (一)」(1929)と「北方行」(1933-1936)における現代中国関連描写は、ほとんど『満州日報』<sup>15</sup>や『朝日新聞』<sup>16</sup>によって得られた知識である。つまり、中島敦の中国認識は、感性的な共感が深い朝鮮認識と違い、生活の中で徐々に培われ、知的な努力によって得られた理性的なものである。

このような知的な努力と共に、中島敦は何度も現代中国に渡っている。年譜によると、彼は1924年、1925年、1927年、1932年、1936年の計5回中国の東北地方や江南地方へ行った記録が残っている<sup>17</sup>。1回目は1924年15歳の夏、旅順にいる叔父・比多吉宅に一ヶ月ほど遊びに行った。2回目は翌年5月、修学旅行で南満州を旅行した。3回目は1927年、高校2年生の夏休みの時に大連に転勤した父のところに帰省した。ただ帰省中の彼は湿性肋膜炎にかかり大連の満鉄病院(その後別府の満鉄療養所に移り、さらに千葉県に転地療養した)に入院し、1年間休学した<sup>18</sup>ことがある。4回目は1932年、大学3年生の時に比多吉を頼って旅順、大連などの南満州、及び天津、北平(現在北京)などの中国北部(“華北”あるいは“北支”と言われていた)を旅行した<sup>19</sup>。5回目は1936年27歳の時に上海、杭州、蘇州を旅行した。

一方、父・田人は1925年10月からすでに大連に赴任したことから、中島敦の妹である折原澄子が「私ども一家は父の勤務地である大連に住んでいました。兄上は一高の学生で、

---

15 安福智行「D市七月叙景(一)」論—「満州日報」を視座として—『京都語文8』(仏教大学、2001)を参照。

16 渡邊ルリ「中島敦「北方行」に見る一九三〇年中原大戦下の中国—「北方行」序論『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要(7)』(東大阪大学、2009)を参照。

17 勝又浩「年譜」『中島敦全集3』(筑摩書房、2012)447-450頁。

18 同上、450頁。

19 川村湊「中島敦伝 第4回 北方彷徨」『アイ・フィール15(2)』(紀伊国屋書店総務部、2005)30頁。

年に一度夏休みに帰省されました<sup>20</sup>」との思い出から、中島敦が実際に中国・満州に渡る回数は年譜より多かったことが窺える。しかし、彼の中国滞在はいずれも短期間であり、旅行的な性質のものであったため、中国人との接触は少なく、中国人の国民性や内面まで立ち入ることは困難があると推測できる。つまり、中島敦の中国・満州体験には、朝鮮滞在時のように現地に密着して現地人を観察するたぐいのもではなかったのである。

前述の通り、中島敦一家は大連に住んでいた。また中国行で度々お世話になる親戚の7番目の叔父・比多吉一家との付き合いが多く、特にその娘の荘島ケイ子と親しかった。比多吉は長年中国旅順に滞在し、中国の政治に大きく関与した人間であり、満州国の建国にも関係のある、のちに満州国顧問に登った人である。つまり、中島敦は現地の中国人より、大連や旅順に住んでいる家族や親戚の周辺にいる日本人と接する機会が多く、家族を通じて彼らの話を多く聞かされていたと想像できる。また、中島敦は満鉄病院に入院した時に、多くの日本人に接し、彼らから満鉄総裁の話、不景気の話など様々な情報を聞かされていたことを「病気になった時のこと」(1927)「ロシア人の名前」(1927)などの断片、習作などに書いている。

このように、中島敦にとって中国にいる日本人の生き様は、彼自身が注意深く観察した中国の生の現実だった。植民地朝鮮に暮らすことによって、他者を見る目が養われた中島敦は、青年期の中国・満州体験によって、中国の現実は無論、そこに住む日本人の生と運命に深く関心を持つようになったのである。それらの体験と認識は「D市7月叙景(一)」(1930)と「北方行」(1933-1936)に結実されている。

### 2-3 晩年の南洋群島体験

1941年6月28日、中島敦は開戦直前の日本の委任統治領であった南洋群島に赴いた。当時の南洋は、日本の植民地支配下に置かれて27年目を迎え、「これから人となろうとする未開無知のものを教化する<sup>21</sup>」という日本語教育、皇民化教育が中心に統治された土地であった。島民を教育することは<文明国>の日本の「神聖なる使命<sup>22</sup>」として見なされたのである。こうした南洋に赴いた中島敦は国語教科書編纂のために勤務しながら、現地人への国語教育に携わった。つまり、南洋行は帰省や旅行のための中国・満州行とは違い、

<sup>20</sup> 折原澄子「兄への便り(中島敦の思い出)」『中島敦全集別巻』(筑摩書房、2002)214頁。

<sup>21</sup> 小西干比古『南洋群島島民教育が概況(中)』(南洋経済研究所、1944)参照。

<sup>22</sup> 「国際連盟規約第22条」。

官吏として働くためのものであった。

実は、中島敦は国語編纂の仕事を「くだらぬ仕事<sup>23</sup>」と嫌がっていた。しかし、彼は嫌いな仕事を引き受け、しかも危険にさらされる戦地へと出かけた。しかも、「遊びに行くのではなく、勤めに行くのだから、何年間か、帰ってきません、あるいはこれきりになってしまうかもしれない<sup>24</sup>」という覚悟で、老いた父と妻と9歳の長男、1歳の次男を残し、大好きだった横浜の家を捨てて、彼は一人でパラオへと向かったのである。この一連の行動から、彼の南洋行への強い決心と決意が見られる。

このような強い意志で女学校の職を辞して南洋庁の役人となった理由として、おおよそ次の4つが考えられる。

一つ目は、持病の喘息から逃れるためである。18歳から喘息の発作が見られ、30代になった時にすでに命を脅かされるほどひどかった。1939年の年譜によると「この年、喘息の発作が益々はげしくな<sup>25</sup>」ると書かれている。1940年に吉村睦勝宛に送った手紙には、「何時やられるか分からないので、びくびくしています。ひどくやられた後はね、全く、生きるのがいやになっちまう<sup>26</sup>」と書かれている。このように、持病の喘息に苦しくなった中島敦は転地療養のことも考え始めたようである。1941年、深田久弥に残した南洋庁赴任の報告メモには「病気のため、及び、生活のため<sup>27</sup>」と書かれている。また、友人の氷上英広宛の書簡にも「今度ね、南洋（パラオ）へ行くことになった、喘息にも、いいだろうと思う<sup>28</sup>」と書かれている。つまり、中島敦は、南洋の気候が自分の体に適していると考えていた。南洋に行くことによって、健康になることを彼は期待していたのであろう。

二つ目は、金銭上の問題が挙げられている。父田人宛の手紙に「みんな貧乏人根性のさせる業です<sup>29</sup>」と書いている。また、妻のたかは「南洋にはお金のために行ったと思っています。義母コウさんの借金、それは浦和の志津伯母さんに用立ててもらっていたのですが、すべて其れを返済して参りました<sup>30</sup>」と中島敦の南洋行について思い出している。東京帝国大学卒の高学歴のため、彼は南洋庁の同僚より地位が高く給料も多くもらってい

23 中島敦「書簡Ⅰ」『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）558頁。

24 中島敦、前掲書（註23）555頁。

25 中島敦「年譜」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）503頁。

26 中島敦、前掲書（註23）550頁。

27 同上、556頁。

28 同上、554頁。

29 同上、558頁。

30 中島タカ「思い出すことなど」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）226頁。

た。このような事情から、彼の南洋行は金銭的に困窮していた理由も考えられる。

三つ目は、小説を執筆するためである。中島敦は南洋滞在中に妻たかに送った 1941 年 11 月 9 日付の書簡には、「実は、この十月一パイ迄に、オレは或る仕事をするつもりだったんだが（内地を出発する時も、そのつもりで、原稿用紙などを持ってきたんだが）（中略）十月に終わりになっても、一枚も描けなかった時は、さすがになさけなかったなあ！<sup>31</sup>」という記述が見える。おそらく中島敦は仕事の合間に小説を執筆するつもりでいたのであろう。

四つ目に、南洋行以前から持っていた南洋憧憬のためである。その証拠としてよく挙げられるのは、伊豆半島の旅行を題材にする「蕨・竹・老人」（1929）で描かれた色彩豊かな南の風景、「虎狩」（1934）の熱帯魚を鑑賞する場面、「狼疾記」（1936）の映画館スクリーンの中から映された南洋土人の場面、「カメレオン日記」（1936）のカメレオンを見て異国的な美を目覚めた場面と、「光と風と夢」（1941）の中で登場する主人公スティーブソンとの符合である。これらの作品に描かれる中島敦の憧れの南洋は、佐々木充が論じる「文明世界が失いつくした始原の世界<sup>32</sup>」、浦田義和が言う「ロマンの場、エキゾティズム<sup>33</sup>」、そして洪瑟君が指摘する「未開で、原始的な美に満ちている明るい場所<sup>34</sup>」、さらに杉岡歩美が述べる「原始的な蛮人が住む土地、＜文明＞を忘れさせてくれる場<sup>35</sup>」であった。岡谷公二は日本における「南洋行の系譜」に関心を寄せ、彼を南洋へと駆り立てたのは、「ランボーであり、ゴーギャンであり、スティーブソンであり、メルビルだったとさえ言えるのである<sup>36</sup>」と述べているように、中島敦も、西欧人の南方行の系譜に関心を抱かせて南へ赴いた文人、芸術家の中の一人であったと言えよう。

中島敦の「北方行」の中には、自意識過剰に陥る主人公が、「何か激しいもの、強いもの、凶暴なもの、嵐のやうなものに、彼はぐつとぶつかって行きたい」と願い、北平へ冒険に出かける場面が描かれている。この主人公の言った言葉は、南洋行の心情を描く「真

---

31 中島敦、前掲書（註 23）632 頁。

32 佐々木充「中島敦＜南島譚＞について」『帯広大谷短期大学紀要 7』（帯広大谷短期大学、1970）45 頁。

33 浦田義和「中島敦と土方久功－日本近代文学と南－」『沖縄国際大学文学部紀要』（沖縄国際大学、1989）78 頁。

34 洪瑟君『「光と風と夢」の一試論－「光」を巡って』『国文学攷（200）』（広島大学国語国文学会、2008）7 頁。

35 杉岡歩美『中島敦と＜南洋＞同時代＜南洋＞表象とテキスト生成過程から』（翰林書房、2016）25 頁。

36 岡谷公二『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』（富士房、2007）178-180 頁。

昼」(1942)の「お前が南方に期待していたものは、(中略)新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあってまだ己の知らないでいる力を存分に試みることだったのではないか」という記述と酷似する。つまり、中島敦は自らの疲れた精神を癒し、現状からの脱出を願い、自己変革を希求するために憧れていた南洋へと向かっていたのである。

上述したような理由で南洋行を決めた中島敦ではあったが、現実の南洋へ行って当初期待していた理由のうち実現されたのは、経済面だけであって、ほかはすべて期待はずれな結果に終わってしまった。

まず、南洋では体調が崩れたばかりだった。到着後の2ヶ月間はアミーバ赤痢やデング熱にかかり、9月まで体調が思わしくなかった。風土病だけではなく、南洋の蒸し暑さにも耐えられなかった様子だった。1941年11月6日父宛書簡には「普段のこの暑さでは、頭の方も持ちません、記憶力の減退には我ながら呆れるばかりです<sup>37)</sup>と語り、また同日、妻にも「この気温では俺には何一つ、仕事ができない<sup>38)</sup>と言っている。それに、南洋の高温多湿な気候は予想に反して喘息の発作を誘引した。

また、創作の面においては、結局「たくさん持って行った原稿用紙はそのまま持って帰ることにな<sup>39)</sup>ってしまった。

さらに、中島敦はパラオが彼の思いを描いた未開で素朴で純粋な世界ではなくなったことを発見しなければならなかった。到着後、彼は早々と南洋が原始的な世界ではなく、単なる日本化された場所であることに気づく。当時の南洋は植民地支配によって、すっかり近代的な場所へ変貌させ、内地とは変わらない所になってしまった。彼はパラオに来て一ヶ月も経たないうちに、友人山口比男宛の書簡に「どうも、まだ文化が美味しくて困ります。いっそパラオか、ずっと未開の島だったら、帰っていいのですが<sup>40)</sup>と述懐する。それだけではなく、彼は南洋庁の官吏として仕事を通して、南洋での日本語教育の過酷さに気づき、官吏生活に嫌悪感を覚え、教科書編纂という仕事への情熱も失ってきたのである。彼は妻への書簡の中で「ここの公学校の教育は、ずいぶん、ハゲシイ(というよりひどい)教育だ。まるで人間の子を扱っているとはおもえない<sup>41)</sup>と漏らし、また父には「現下の時局では、土民教育などほとんど問題にされておらず、土民は労働者として、使い潰

---

37 中島敦、前掲書(註23)628頁。

38 同上、632頁。

39 中島タカ、前掲書(註30)226頁。

40 中島敦、前掲書(註23)567頁。

41 同上、648頁。

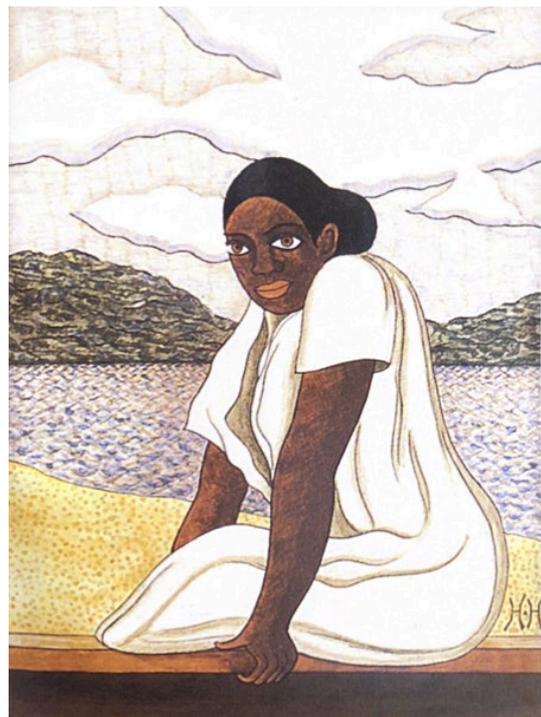
して差し支えなしというのが為政者の方針らしく見えます、これで、今まで多少は持っていた、この仕事への熱意も、すっかり失せ果てました<sup>42)</sup>」と語った。

このように見てくると、中島敦の南洋行は挫折と失敗ばかりを味わったものになってしまったような気がする。しかし、南洋行は中島敦にとって必ずしもマイナスしか与えなかったものではない。凡そ8ヶ月間の南洋滞在の間、彼は公学校を見学したり、島々を巡視したりすることによって、島民児童教育や植民地政策の現状を見、南洋の実態を知り、また様々な島民を訪れ、接触し、観察することができた。なによりも民俗学者で彫刻家・画家でもあった土方久功と知り合ったことは、中島敦のパラオでの生活を彩り豊かなものにし、小説の素材やモチーフを与えることになったのである。土方久功の情報と、中島敦と南洋での交流に関しては、岡谷公二『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』（富士房、2007）の中では詳しく紹介されている。ここでは、概略的にまとめてみる。

土方久功は1929年にパラオに渡り、1942年3月まで13年間を南洋で暮らした。そのうちの7年間はサテワヌ島の森の中で暮らしていた。彼は南洋の島々に出かけ、詳細に調査し、また絵画、彫刻の制作を重ね、さらに民族資料、民話、言語などの研究も進めていた。土方久功は現地の人々と溶けこんで生活し、その宗教や伝説、また生活習慣や特有の芸術文化を深く理解していたため、島民との間に深い信頼関係が築かれた。

中島敦はパラオ滞在中、ほとんど毎日のように土方久功の家に入出入りしていたようである。

南洋庁での仕事に馴染めず、職場の人々とうまく付き合うことのできなかった中島敦が、パラオで唯一、信頼できる友人として親しく交流したのは土方久功のみだった。土方久功も中島敦のことを「トン」と呼び、この才能豊かな若者が好きで、短い間の交遊ではあったが、忘れがたい貴重なものになった



【図1】土方久功「雲」<sup>43)</sup>

<sup>42)</sup> 中島敦、前掲書（註23）628頁。

<sup>43)</sup> 河路由佳『中島敦「マリヤン」とモデルのマリア・ギボン』（港の人、2014）より引用。

ようである。土方久功と親しむことで、中島敦はパラオの事情や伝説など南洋についてのたくさんの見聞を聞き、知ることができた。また、二人も一緒にパラオ諸島をめぐる旅に出かけた。後年、土方久功は二人の南洋での交際について、次のように書いている。

もう大分前に亡くなった中島敦は、パラオに来ていた頃、毎日欠かさず私の家に入りびたっていた。そして私の日記帳をあちこち引きずり出しては読んでいたが、時々「土方さん、この話、僕にくれませんか」と言った。「ああ、どうぞ」と私は答える。こんな話を、話のまま私が持っているより、敦が何かの材料に使ってくれた方がいいに決まっているから<sup>44</sup>。

詳細は後述することにし、実際中島敦が南洋を題材にして執筆した『南島譚』（今日問題社、1942）という作品集を結実できたのは、土方久功に負うところが大きい。

以上、中島敦とその植民地体験歴について整理してきた。周知のように、日本は明治維新以来、「文明開化」というスローガンを掲げ、西洋文明を唯一の指標として目指し、西洋文明を無分別に吸収してきた。また、欧米列強と肩を並べる文明先進国になるためには、彼らを習って対外拡張し、戦争を起し、台湾、朝鮮、南洋群島などの国を植民地にした。当時のほとんどの日本人にとってこれらの植民地は野蛮の地であり、日本よりはるかに遅れた地域にほかならなかった。それゆえ、大多数の日本人は優越感を持って現地人を差別し、蔑視してきた。

しかし、中島敦にはそのような見方はまったく見られなかった。なぜなら、彼は日本が植民地支配した朝鮮と満州、南洋を直接体験することによって、それぞれの現地に対して当時の日本人が持っていなかった認識をしていたからである。その実りとして、日本近代文学史では唯一一人の作家による朝鮮、中国・満州、南洋群島を舞台にした＜植民地もの＞が描かれたわけである。

### 3. なぜ古典のものなのか

1942年3月7日に南洋のパラオから8ヶ月ぶりに帰国した中島敦は、まもなく南洋庁

---

<sup>44</sup> 土方久功「鶏」『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991）73-76頁。

に辞職願を出した。南洋赴任中に、深田久弥の推薦で「山月記」(1941)と「文字禍」(1941)を、『文学界』1942年2月号に、「光と風と夢—五河荘日記抄」(1941)は同誌の5月号に掲載された。二作とも好評を博したことから、中島敦は宿願の作家としての道を本格的に踏み出した。その後亡くなるまでの8ヶ月間、中島敦は持病の喘息を顧みず死ぬ直前まで精力的に執筆活動を行った。

その一端を見てみると、6月には「悟浄出世」と「弟子」を脱稿、7・8月頃には「名人伝」を執筆し始め、8月には『南島譚』を書き上げた。さらに、9月からは「李陵」の執筆を開始、11月には入院中の病室で遺稿「章魚木の下で」を完成させるという奇蹟とも言える創作活動がこの時期に行われていた。注目すべきは、デビュー作「山月記」をはじめとする晩年の作品はいずれも評価が高く、敦の代表作となったことだ。しかも、これらは植民地の体験を語った初期の作品と違い、その多くが歴史上の人物と物語、特に中国の古典・史実を下敷きにしている。それゆえ、これまでの中島敦文学の研究は「山月記」など晩年の作品に注意と関心が集まり、研究もかなり進んでいる。

例えば、鷺只雄は中島敦の晩年の古典の作品について、次のように指摘している。

中島の抱懐する中核的な想念を今仮に大づかみにして「生とは何か？人は運命といかに関わりあい、どう生きるのか？」つまり＜人間の生のありよう、乃至人間と運命の葛藤相剋＞というふうに要約してみると、実はそれをもっとも鮮烈に原型的に提示しているのが中国古典にほかならないのであり、今から二千年前のもっとも古代的なものの中に、最も近代的なものを発見するという逆説が成立したところに中島の中国物が次々に描かれる必然性があったと考えられる<sup>45</sup>。

氏は中島敦の古典ものは「人間の生のありよう、乃至人間と運命の葛藤相剋」といった人間存在の生き方について描くものであると指摘し、またこれは単なる古代の人間ではなく、近代でも通じるような人間存在を追求していると述べている。また、荒正人は「蘇武は非転向者であり、李陵は転向者である。司馬遷は転向、非転向を超えて、刑罰を受け、芸術の道に自分の新しい生きがいを求めた<sup>46</sup>」と指摘し、「李陵」に登場する人物達の運

<sup>45</sup> 鷺只雄『中島敦論「狼疾」の方法』（有精堂、1990）305頁。

<sup>46</sup> 荒正人、前掲書（註2）29頁。

命を、戦時中の知識人の運命と結びつけて論じている。そして、山下真史は「晩年の中島敦の関心は戦時下の人間の生き方の模索に向けられたと言えよう<sup>47</sup>」と述べている。これらの先行研究によって明らかになったのは、一見時代と無縁な作品を描き続けた晩年の中島敦が、実は古典のものを通して、戦時下で人間はいかに生きるかという主題を貫いたことだ。

しかし、ここで注目すべきなのは、これらの名作群が死ぬ間際の8ヶ月間で一気に書かれたことである。これまでの先行研究では、中島敦の晩年の作品が書き上げられた原因について、いずれも彼の漢学の素養や西洋思想の影響から論じられてきた。例えば、佐々木充<sup>48</sup>の『『牛人』、『盈虚』：中島敦・中国古典取材作品研究（一）』、『『李陵』と『弟子』：中島敦・中国古典取材作品研究（二）』、『『名人伝』：中島敦・中国古典取材作品研究（三）』は、漢籍の典拠との比較、またその影響関係についての研究のうち、最も精到なものだと思われる。これは素材を検討し、明示しただけでなく、原典と敦の作品との比較から、相違点を見出し、さらに敦自身に対する影響にも言及している。孫樹林の『中島敦と中国思想—その求道意識を軸に』（桐文社、2009）は、中国思想の原点である儒学・道学といった漢文化がどのように敦の晩年期の名作に受容されたのかを浮き彫りにしたものである。さらに、閻瑜の『新しい中島敦像—その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2011）は、晩年期の作品を形成するには荘子、孔子など漢学からの影響の他に、カフカ文学、パスカルなどの西洋文学思想の受容も視野に入れ、詳細な研究がなされている。

これらの先行研究に異論はない。しかしながら、「弟子」「李陵」などの名作が晩年に一気に書かれた背景には、上述したような漢学と西洋思想の教養とともに、彼の人生に多大な影響を及ぼした植民地体験と、それらの体験によって書かれた〈植民地もの〉を見逃すわけにはいかない。この点については晩年の作品と〈植民地もの〉の人物像の繋がりを見れば明瞭である。

例えば、「山月記」に登場する「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という分裂した心理を持つ李徴の姿からは、実は「虎狩」の誇り高い自尊心を持ちながら臆病な存在である趙大煥の面影が垣間見られる。また、「弟子」に登場する行動者と思索者が一体となる子

47 山下真史『中島敦とその時代』（双文社出版、2009）27頁。

48 佐々木充『『李陵』と『弟子』：中島敦・中国古典取材作品研究（一）』（1961・『帯広大谷短大紀要1』）、『『牛人』、『盈虚』：中島敦・中国古典取材作品研究（二）』（1963・『帯広大谷短大紀要2』）、『『名人伝』：中島敦・中国古典取材作品研究（三）』（1965・『帯広大谷短大紀要3』）。

路の人間像は、実は「北方行」の三造からその原型を追求することができる。

#### 4. 本論文の目的と構成

中島敦は晩年、戦争文学・国策文学が幅を利かせていた文壇の中で、戦争を全く感じさせない中国の古典・古実を素材にした作品を多く執筆した漢文素養の高い作家として知られている。一方、彼は幼い頃から第二の故郷ともいえる朝鮮（1920-1926）、旅行先である中国（1930年代）、勤務先としての南洋群島（1941-1942）などに何度も足を運び、その体験を題材にして作品を執筆した作家でもある。

しかし、「山月記」「弟子」「李陵」など晩年の名作に比べ、初期の「巡査の居る風景—1923年の一つのスケッチ」、「D市七月叙景（一）」、「虎狩」、「北方行」などの植民地を舞台にした作品は、同時代の文壇ではあまり理解されず、「習作」、「未定稿」、「未完」という理由で注目されなかった。近年、「植民地もの」への関心が高まり、研究が進んでいるとはいえ、その晩年期の作品との関連性については南洋行の影響ばかり言及されることが多く、朝鮮や満州を含む「植民地体験」そのものはあまり問われていない。しかも、その多くは中島敦の社会問題への関心や植民地批判の立場から指摘する傾向が強い。

周知の如く、中島敦が生きていた時代は日清・日露両戦争を経て国際的な地位を高めた日本が朝鮮や台湾など周辺諸国を植民地支配し、さらなる植民地確保のためにアジア諸国と戦争を行っていた、いわゆる戦争の時代である。幼い頃から朝鮮、満州、中国、南洋群島という日本が支配していた植民地を見るチャンスに恵まれていた中島敦は、植民地という異質な空間に生きる人間の存在に強い関心を示し、それらを次々と作品化していた。

例えば、朝鮮を舞台とする「巡査の居る風景—1923年の一つのスケッチ」（1929）には、朝鮮人の巡査、娼婦、学生、府会議員、独立運動者から日本人の紳士、小僧に至るまで実に様々な地位、年齢、職業の人間たちが描かれ、「虎狩」では、同時代の朝鮮人イメージとは異なる両班の弟子としての朝鮮人少年が描かれている。また、中国を題材とする「D市七月叙景（一）」（1930）には、満鉄総裁、日本人社員、苦力という植民地大連に生きる3つの階層の人間の生き方を描き、「北方行」（1933-1936）において、様々な中国に憧れを持ち、冒険に出かけた在留日本人の姿を描き出したのである。さらに〈南洋もの〉では、これまでの単純で従順な島民イメージを覆す多くの南洋島民を登場させ、彼らが文明化された南洋社会における生き方に注目している。つまり、中島敦は〈植民地もの〉を通し

て、単なる植民地体験談を描いたわけではなく、植民地に生きる様々な人間像の表象を通して、人間存在のありようを問うていたのである。しかも、朝鮮から中国、南洋へとまったく異なる性質をもつ植民地社会を体験していくにつれて、人間存在のありようの問い方も深まっていった。

そこで本研究では、植民地体験が中島敦の文学世界、そして作家形成にどのような影響を与えたかを浮き彫りにする。そのため、中島敦が少年時代の朝鮮体験、青年時代の中国・満州体験また晩年の南洋体験によって描かれた〈植民地もの〉を対象に分析を行い、そのうち6作についてさらなる検討と考察を行う。本研究により、これまで軽視されてきた中島敦文学における植民地体験の重要性を浮き彫りにし、中島敦研究に新たな視点をもたらしたい。

本論文はその目的を達成すべく、3部構成を取ることとする。

まず、第1部では、中島敦は朝鮮を舞台にした「巡查のいる風景—1923年の一つのスケッチ」(1929)と「虎狩」(1934)2つの作品を手掛かりとして、植民地朝鮮に生きる人々の生とその運命について論じる。

第Ⅱ部では、中国・満州を舞台にした「D市7月叙景(一)」(1929)と中国北平を舞台にする「北方行」(1933-1936)を中心に、中国大陸に憧れ、様々な夢を見て冒険に飛び込んでいた在留日本人の姿に注目し、彼らの生き様に迫る。

第Ⅲ部では、南洋群島を舞台にした「環礁」の中の一編「マリヤン」と「南島譚」の中の一編「雞」の2作を取り上げ、そこに登場する島民の姿を分析することによって、当時日本社会に広まったステレオタイプの島民像を改めたい。

最後に、終章では、中島敦は植民地体験を通して、そこに生きる人間の存在に目を向けただけではなく、朝鮮から中国、南洋へとまったく異なる性質をもつ植民地社会を体験していくにつれて、人間存在のありようの問い方も深まっていった事実を明らかにする。それを踏まえ、〈植民地もの〉と晩年の古典作品との比較を行い、晩年の名作を一気に書き上げることができた背景に、植民地体験がいかに重要なのかを明らかにする。

## 第 I 部 植民地に生きる様々な群像 — 少年時代の朝鮮体験

### はじめに 1930 年前後の朝鮮表象と中島敦の〈朝鮮もの〉

第 I 部では、朝鮮を舞台にした「巡查のいる風景-1923 年の一つのスケッチ」(1929) と「虎狩」(1934) の二つの作品を取り上げる。

これらの作品が執筆された 1930 年前後はちょうど民族解放運動が急速に拡大するに伴って、プロレタリア文学が盛んになった時期である。朝鮮と朝鮮人を取り上げた小説の数が飛躍的に増加したが、この時期に書かれた〈朝鮮もの〉は、「朝鮮人が日本の被抑圧階級以下の存在として扱われていることへの批判を主題とするものであった。解放されるべきものとしての朝鮮人への共感は語られるものの、その朝鮮人を中国人や部落民と置き換えてもそのまま通用するような、極めて類型的な作品だった<sup>49</sup>」と指摘されているように、そこに描かれる朝鮮人は、農民、流浪人や労働者など、いずれも苦難に置かれた底辺の弱き朝鮮人のイメージが目立つものばかりである。一方、日本人の場合は日本官憲や帝国日本を代弁する悪の存在としてしか描かれていない。

つまり、当時発表された〈朝鮮もの〉のほとんどは、人間そのものに焦点を当てるのではなく、日本の朝鮮民族に対する植民地支配への批判がメインテーマとなっていた。その代表としては、藤沢桓夫「傷だらけの歌」(1930)、林房雄「痴情」(1930)、伊藤永之介「万宝山」(1931)、前田河廣一郎「朝鮮」(1931)、徳永直「火は飛ぶ」(1932)、堀田昇一「崔」(1934) などが挙げられる。しかし、中島敦が書き残した〈朝鮮もの〉は上述した作品とは一線を画した。

中島敦が描き出した朝鮮人たちは、必ずしも典型化・類型化された底辺に生きる憐れな民ではなく、「光栄ある日本人である」と主張する親日派の府会議員の候補、職業と現実生活に鋭い矛盾と葛藤を感じる植民地統治の手先である巡查趙教英、誇り高い貴族の子趙大煥（「両班の子弟」）など、年齢や性別、社会地位、立場などが全く違う人々だった。また日本人も、傲慢で悪辣な支配者から粗末な姿をした無知な女、親切な紳士、朝鮮人に同情を持つが日本人によって鉄拳制裁されて屈折する中学生などを登場させている。

<sup>49</sup> 渡辺一民『〈他者〉としての朝鮮 文学的考察』（岩波書店、2003）30 頁。

このような登場人物たちが同時代の他の〈朝鮮もの〉と色合いが異なっていることは前述の通りであるが、いったいなぜ中島敦は同時代の他の作家が顧みなかった人たちを描いたのか。その背景には、中島敦の少年時代における5年半間の朝鮮体験が裾えられている。

周知のごとく、中島敦は生母との生別、父の愛の不在、家族との折り合いの悪さ、第一継母を迎えて死別(京城中一年の時に産褥死)など複雑極まる家庭環境の中で育てられた。何よりも、彼は父の仕事に伴って思春期の一番感受性の豊かな時期を植民地朝鮮で過ごした。この時期の中島敦は、「自由な澁刺たる、物に怯じない逞しい精神<sup>50</sup>」が溢れ、何事にも好奇心を持っていた。この5年半を通して、中島敦は朝鮮人日本人を問わず多くの人たちに触れ、様々な冒険をした。高校に進学するために朝鮮を離れた中島敦は、帰国後3年目の1929年頃から同時代の文壇の雰囲気、従来の朝鮮表象とは全く違う〈朝鮮もの〉を執筆し始めた。

これまでの〈朝鮮もの〉に関する先行研究は、中島敦の社会問題への関心や植民地の現実を見る眼差しの側面から論じられてきた。例えば、李月順は「イデオロギーが先行する傾向があるその時期、中島敦のこの作品に見られる社会意識の広さ、公正さは彼が植民地朝鮮の現実から学びとったものなのである<sup>51</sup>」と述べ、南富鎮は「当時全盛だったプロレタリア文学の影響のためか、広い社会的関心を示している<sup>52</sup>」と指摘している。川村湊も「いち早く「社会問題」について目覚め<sup>53</sup>」た中島敦の姿勢を評価している。このように、従来の先行研究は上述したような中島敦の〈朝鮮もの〉から読み取れる人間存在の在り方についてはあまり指摘されていない。

---

50 中島敦「北方行」『中島敦全集3』(筑摩書房、2012)137頁。

51 李月順「中島敦と朝鮮—「巡査のいる風景」を中心に—」『アジア社会文化研究(8)』(アジア社会文化研究会、2007)81頁。

52 南富鎮「中島敦の初期—〈朝鮮もの〉の展開を中心に—」『日本文化研究：筑波大学大学院博士課程 日本文化研究学際カリキュラム紀要』(筑波大学、1995)72頁。

53 川村湊「中島敦と朝鮮」『アジア遊学(51)』(勉誠出版、2003)132頁。

## 第1章 植民地に生きる様々な群像

### —「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」(1929)

中島敦の「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」(以下は「巡査のいる風景」)は、1929年6月に東京第一高等学校の『校友会雑誌』第322号に発表された。この作品は全5章で構成されている。場所は1923年の冬の朝鮮京城である。主人公は朝鮮人巡査の趙教英である。彼は被植民地人でありながら、日本の植民地支配の最末端に繋がる手先となっている複雑な人物である。家族を養う為にやらなければならない巡査の仕事とこの仕事から見かけた様々な植民地の現実から疑問と矛盾を感じている彼は、失業を契機に覚醒していく。物語は趙教英ともう一人の主人公、関東大震災で夫を亡くした朝鮮人売春婦金東蓮という二人の眼を通して叙述され、章ごとに交差的に進められていく。作品には趙教英と金東蓮のほかにも、学生、府会議員、独立運動者、チゲ<sup>54</sup>の群れ、日本人の紳士、女など、さまざまな地位、年齢、職業、人種の間像が登場している。

この作品は世間に流布する文芸雑誌ではなくて、『校友会雑誌』という一高の同人誌、いわゆる相対的に狭い枠組みの中にあるので、同時代においては殆ど注目されていなかった。脚光を浴びるのはすでに戦後のことであった。

これまでの先行研究では、当時朝鮮を舞台とする小説、朝鮮人を主人公とする小説は、極めて少ない<sup>55</sup>中で、生々しく悲惨な植民地の現実を描き得<sup>56</sup>、さらにその現実が支配者からではなく、被支配者である朝鮮人の目を通して描いたという点が重要な評価の軸となっている。しかし、鷺只雄は植民地における被支配者の視点を高く評価する一方、次のように指摘している。

中島にとって折柄のプロレタリア文学全盛の中で、被植民者の視点からその実態をこの作品のようなかたちで告発することは容易であり、当然であった。しかし重要

54 背中に荷物を担ぐ時に用いる木製の背負子。

55 李順月、前掲(註51)67頁。

56 三浦穂高「一高<校友会雑誌>における中島敦—『巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ』を中心に—」『国学院雑誌 第111巻 第7号』(国学院大学、2010)58頁。

な事は、中島にとってこの視点・立場は人間認識の根源に位置するものであるゆえに、一時的な盛行、時好性に投ずる軽薄さとは無縁であった<sup>57</sup>。

つまり、この作品に見られる人間認識の根源を追求する点が一番肝心なところだといふのである。ただこの場合の「人間認識」は氏が「被植民者」、いわゆる主人公である巡查の趙教英と娼婦の金東蓮にのみ当てはめ、彼らを通して支配と被支配に分けられる「植民者と被植民者の間の不合理」、そして「存在の不条理性」を見出そうとする意図が続きの氏の分析から読み取れる。勿論主人公の眼差しから「不条理な人間関係」が読み取れるのは間違いない。しかし、主人公によって相対化された様々な人間の存在はいかなるものだったのか、という点については考慮されていない。しかも、それを「不条理」という認識だけで片付けるのがいいのかについても改めて検討する必要がある。すなわち、中島敦の人間認識を徹底的に探るために、趙教英と金東蓮の人物分析はもちろん、彼らによって相対化された人間の姿にも光を当てなければならない。

そこで本章では、朝鮮を舞台にした作品—「巡查のいる風景」を手掛かりとして、朝鮮体験によって中島敦はどのような認識が形成され、いかなる人間像が描かれたのかを具体的に検証していきたい。

## 第1節 離日前における中島敦の朝鮮認識

中島敦は朝鮮体験を通して、どのような認識を生み出したのか。この問題を考えるためには、彼の離日前の朝鮮認識は一体いかなるものだったのかを理解する必要がある。

中島敦が生まれた年は日韓併合直前の1909年であり、初めて朝鮮に渡ったのが1920年であったため、その朝鮮認識はほぼ1910年代のそれと重なったといえる。周知のごとく、日清戦争以来、日本は隣国朝鮮、清国に対していいイメージはなかった。メディアであろうが、従軍記者であろうが、兵士であろうが、みんなその住居の不潔さと異臭を強調し、朝鮮人や清国人に対する蔑視と偏見が強かった<sup>58</sup>。その認識は20世紀に入っても変わりはなく、却って日韓併合や中国東北侵略によって社会一般に広く流布するようになって

<sup>57</sup> 鷲只雄、前掲書（註45）66-67頁。

<sup>58</sup> 丁貴連「もう一つの〈小民史〉—国木田独歩と日清戦争（下）『外国文学61号』（宇都宮大学外国文学研究会、2012）10頁。

いたのである。例えば従軍文士与謝野鉄幹が渡韓見聞録「観戦詩人」（1904）においてその朝鮮像を以下のように描いている。

この国の賤しき者ども、人々の手荷物担はむと争ひ罵るさま、昔の歌に韓さへづりと云ひけむ、げに詞も分き難しく、いと見苦し。海岸には日本憲兵あまに行きかひたり。この国の巡査の三陵形の帽かぶりたるもまじれど、顔つき何れも分別足らず、薄き顎髭など、今の世紀の人種とも覚えざり。ましてこの国の民の立ち居長閑なる服装して、三尺の煙管咬へありく打見は、宛ら文人画の中の人なり<sup>59</sup>。

このように、朝鮮人は「賤しき者」であり、「見苦し」いばかりでなく、「今の世紀の人種とも覚えざ」るものとして存在する。それは彼らを人間として見るより、「文人画の中の人」、いわゆる朝鮮における典型的な風景の一つとしてしか見られていないのである。



【図2】白衣の姿で賑わう市場<sup>60</sup>

また、2度も朝鮮を旅行した高浜虚子は小説『朝鮮』（1911）の冒頭部には「愈々船が釜山に着いた時、余は妻と共に甲板に出て見て驚いた。栈橋を見下ろすと其処をぞろぞろと歩いている背の高い白衣の人は皆朝鮮人であった<sup>61</sup>」とされている。そして、1913年に

<sup>59</sup> 与謝野鉄幹「観戦詩人」『太陽』（博文館、1904）97-98頁。

<sup>60</sup> 「平壤名勝 白衣の雑踏する朝鮮人市場」<http://www.tobunken-archives.jp/DigitalArchives/record/1C54AD1A-4C92-51DE-1896-8907C1BD6402.html?lang=ja>（2018.9.1検索）。

<sup>61</sup> 高浜虚子『朝鮮』（実業之日本社、1912）6頁。

平壤を訪れた徳富蘆花も、『死の蔭に』(1917)において、朝鮮人について以下のように描写している。

霜枯れた野山の緑稀に、瘦せた田はそれでも熟して処々に白衣の農夫が収穫をやつて居る。霜の置く季節だけに、見た眼寒く、昼見ても亡国の亡霊、葬にいる民を象徴したようで、衰颯の気が山野に流れる<sup>62</sup>。

このように、また【図2】に見られるように、白衣姿は朝鮮人であるという根拠を与えるものとして、そして民族的特徴として常套化されたのである。

さらに、後ほど上京する、朝鮮人日本語作家一張赫宙は「僕の文学」(1933)では、日本における朝鮮イメージについて次のように指摘している。

禿山の国、赭土の国、等と、朝鮮を見て行った人達の紀行文を読むと、大抵そう書いている。それは、つまり貧乏を意味し、廢頹を表現したことになる。長い煙草を啜へて悠然と動いている朝鮮の百姓を見てば、怠惰な民族と言ってしまう<sup>63</sup>。

このように、当時日本社会における朝鮮人像、すなわち長煙管、白衣姿、怠惰、貧乏、廢頹などのマイナスイメージが長い間ステレオタイプ化され、朝鮮を象徴するもの、いわゆる朝鮮表象として認識されてきたのである。それは勿論、1910年代の日本社会における朝鮮認識にも当てはまる。

一方、このような朝鮮像を作り出すことによって、日本が朝鮮における植民地統治の正当性をアピールし、またあらゆる領域に浸透してきたのである。一例を挙げると、下野新聞主催栃木県実業家満韓観光団の『満韓観光団誌』においても、その趣旨が読み取れる。

朝鮮は実に貧弱国で、日に日に自滅に近づきつつある。住民は農を主とする人口約1千万、体力は強いが誠に憐れなもので、おそらくは商工業上に就いて物産なきには諸君も失望されることと信ずる。これ今日の疲弊を来した原因である。(中略)

<sup>62</sup> 徳富健次郎『死の蔭に』(大江書房、1917) 453頁。

<sup>63</sup> 張赫宙「僕の文学」『文芸首都』第1巻第1号(文芸首都社、1933) 11-12頁。

人民は貯蓄心なく儲ければ即ち田地を買ひ。位階を買ふのを最上の希望としてい  
る。近年日本の保護を受け、生命財産の安固を得たれば是より貯蓄心もできるよう  
なるでありませう<sup>64</sup>。

つまり、「貧弱国」で、「自滅に近づきつつある」朝鮮が、日本の保護を受け始めること  
で初めて、進歩していく様子が漸く見られるようになったと説明している。このように、  
日本国民が無意識中に「日本＝植民地/朝鮮＝被植民地」、「日本＝強/朝鮮＝弱」、「日本＝  
善/朝鮮＝悪」という固定とした図式を受け入れたのである。

中島敦もその影響を受けないとは言い難い。ただ当時まだ小学生だった彼は社会との  
関わりをどれほど持っていたか疑問が残る。彼にとって、〈朝鮮〉を最も身近に感じさせ  
たのは学校教育、さらに言えば、歴史教科書であった。

戦前の歴史教科書が何回も変遷された<sup>65</sup>が、時期的に推算すると、中島敦が使用したの  
は国定期（1904-1945）第2期教科書『尋常小学日本歴史』（巻1は1909年、巻2は1910  
年）であった。これが編纂された時期は、日露戦争を機に日本が朝鮮の外交権・内政権を  
奪っていた時期であり、朝鮮記述も「日韓併合」へと至る植民地化政策に合わせて、その  
歴史的必然性が強調されていった<sup>66</sup>。つまり朝鮮に対する侵略・支配を正当化するために、  
「三韓征伐」という虚構の歴史を粉飾されたり、天皇と日本国家の優越性、いわゆる「皇  
威」を強調した書き方になったりしたのである<sup>67</sup>。

このように幼い頃の中島敦の頭には朝鮮人に対する単一かつ固定した認識と、植民者  
としての優越感が植えつけられたのである。そしてこのような人間認識を持って少年時  
代の中島敦は現実の中の朝鮮に出会ったのである。朝鮮は彼にとっていかなる場であっ  
たのか、以下、彼の朝鮮体験を取り上げる。序章では彼の朝鮮体験歴について概略的に見  
てきたが、ここでは詳しく見ていく。

---

<sup>64</sup> 下野新聞『満韓観光団誌』（下野新聞社、1910）41-42頁。

<sup>65</sup> 鐘声の会「戦前の歴史教科書にみる朝鮮像」『季刊三千里 32号特集教科書の中の朝鮮』（三千里社、1982）97頁。

<sup>66</sup> 同上、97頁。

<sup>67</sup> 同上、98-99頁。

## 第2節 中島敦の朝鮮体験

1920年、父の転勤（龍山中学校）に伴い、中島敦は京城の龍山小学校に転入し、朝鮮体験が始まった。彼は1926年高校（東京第一高等学校）に入るまでに、いわゆる思春期の一番感受性の豊かな時期を日本植民地支配下の朝鮮という異民族の環境の中で5年半を過ごした。その頃の朝鮮は3.1独立運動を機に、その植民地政策が「武断政治」から「文化政治」に移り変わった<sup>68</sup>。日本政府が「差別廃止」という意味合いで、朝鮮人も日本人と同じく帝国の臣民として平等に扱い、「一視同仁」であると宣言したのである。この政策によって、前の暴力的な統治と比べて、全く安定しているとは言えないが、ある程度の緩和が見えた。しかし、実際には「文化政治」になっても、実質的な差別待遇や文化活動における統制がほとんど変わらない状況であって、同化主義の論理に基づく統制がまさに強化されたとも言える。それは中島敦が実際に体験した二分化した都市空間から、政策に裏切られる露骨な民族差別の一面に見られる。

中島一家最初の居住地は龍山地区の漢江通り6番地であった。龍山地区は「南村」といって、日本人町として開発された地域で、この周辺に総督官邸、軍参謀長官邸、軍指令部、龍山憲兵分隊、鉄道局などが置かれ、日本の植民地支配の軍事と交通の要衝であった。つまり、ここは朝鮮にいながらも全く朝鮮を感じさせない日本式の空間であった。家に雇った朝鮮人少女を「キチベエ」、「カンナニ」と呼んだりしたことから、ここは中島敦の植民者としての優越感を実感させる場とも言える。

そして1年半後、彼は龍山小学校を卒業して京城中学校（現ソウル高等学校）に入ることになる。中学校が西大門駅北側の慶熙宮の敷地に位置しているため、北村の朝鮮人街に置かれたのである。ようするに中島敦は日本人空間から朝鮮人空間へと足を踏み入れたのである。この二つの空間の様子は新聞記者によって記録されたのである。

本町は京城市街地の隅にあるが、なぜかそのように活気が充溢し和気が充満する。前後左右の家はすべて二、三階建てででぎっしり並び、鍾路のように低い家はない。暴走する物質文化や色とりどりの人々、その華麗燦爛とした様子は記者の目を驚かせ

---

<sup>68</sup> 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波書店、2002）121頁。

た。反面、鍾路は真ん中に位置していても、総じて朝鮮旧式の家屋で、大きな人が立てば天井に当たってしまうほどであり、その姿も陳腐で凋落している<sup>69</sup>。

すなわち既に近代化された日本人街とは違い、朝鮮人街は依然として青臭く不潔で、貧民、乞食、流浪の民が蠢く貧民窟だらけの場所であった。



【図 3】1920 年代鍾路通り<sup>70</sup>



【図 4】1920 年代南大門通り<sup>71</sup>

その頃の中島敦についての情報がほとんど残されていない状態であったが、わずかでも「学校の裏山に登り、さらに城壁を乗り越えて外に出た<sup>72</sup>」という同級生の回想や自伝小説と言われる「プールの傍で」などから、彼は学校の中だけではなく、その周辺の支那料理屋、植民地の新開地じみた場末、朝鮮人の夜店、暗い路地裏にある朝鮮人の遊廓など様々な所に足を運んだことがわかる。

さらに彼は京城中学校に通った時に、毎日約 1 時間電車に乗り二つの異空間を往来していた。中島敦と共に龍山小学校と京城中学校に通学していた山崎良幸の回想によると、中島敦は「龍山から市電で通学してい<sup>73</sup>」た。従って、「巡査のいる風景」の趙教英が仕事の帰りに乗った電車の中の風景描写は、中島敦の実際の体験によるものと言えよう。この電車の中こそ、植民者と被植民者の構図を最も鮮明に映し出す場であり、正反対な世界を発見させる場であったといえる。

69 全遇容「植民地都市イメージと文化現象—1920 年代の京城—」『日韓歴史共同研究報告書第一期第 3 分科報告書』（日韓文化交流基金、2005）226 頁。

70 『写真で見る昔日の朝鮮上』（国書刊行会、1986）22 頁。

71 同上、22 頁。

72 山崎良幸、前掲書（註 13）239 頁。

73 同上。

つまり、日本人空間、そして朝鮮人空間という移動の中から、少年の中島敦は日常生活の中において接触した人々が、日本人だけでなく、朝鮮人でもあったことが読み取れる。彼は実に朝鮮人の裏の空間に入り、彼らの生活の過酷、不合理な現実を目の当たりにしたと想像できる。この体験こそ、これまで中島敦の単一とした朝鮮認識を逆転させる契機を作ったのではなかろうか。次節では、中島敦は一体朝鮮体験を通してどのような認識が形成されたのかについて探してみる。

### 第3節 1920年代の日本における朝鮮表象と「巡査のいる風景」

「巡査のいる風景」が掲載された1920年代には、かなり多くの朝鮮地誌や観光案内、旅行記、紀行文、移住案内などの「旅行案内」や文学作品が掲載され、刊行された。日韓併合以後、日本「内地」の人々は、日本の一部となった朝鮮、いわゆる「新内地」への関心が高まった。鉄道の発達とともに、また大正期から始まった「旅行案内」刊行ブームに乗って、朝鮮や満州、台湾など植民地を紹介する「旅行案内」が本格的に刊行されるようになる。そして「日鮮満」ルートの開通によって1920年から1930年代にかけて次第に一般化していった<sup>74</sup>。この時期の出版状況を見ると、地誌や紀行に関する書物の出版は1918年に446件だったものが、1926年になると、1180件に上昇し、社会や歴史書の出版件数を上回っている<sup>75</sup>。

また大正期から昭和初期にかけて実際多くの文学者や知識人達が朝鮮を旅行し、そしてそれに基づいて数多くの紀行文、旅行記、見聞記や小説などが載せられている。谷崎潤一郎「朝鮮雑感」(1919)、大町桂月「朝鮮遊記」(1919)、喜田貞吉「庚鮮満旅行日誌」(1921)、田山花袋「満鮮の行楽」(1923)、若山牧水「朝鮮紀行」(1927)などがそれである。これらの旅行案内や紀行文などのメディアを通して読者が朝鮮というイメージを作っていく。

実際に「旅行案内」を記述する側が朝鮮総督府、鉄道院、朝鮮拓殖資料調査会、朝鮮研究会など、殆ど朝鮮において帝国日本を代表する立場の機関である<sup>76</sup>ため、「旅行案内」の内容は帝国日本の保護によって発展を遂げた観光地、いわゆる日本化されていく朝鮮

<sup>74</sup> 三浦穂高、前掲(註56)57頁。

<sup>75</sup> 徐東周「1929年の〈内地〉で呼び起こされた1923年の〈朝鮮〉—中島敦の『巡査のいる風景』の表象する文化政治の日常」『日本近代文学81』(日本近代文学会、2009)61頁。

<sup>76</sup> 書物の刊行所は以下の通り。朝鮮総督府(『朝鮮鉄道旅行便覧』1923)、鉄道院(『鉄道沿線遊覧案内』1913)、『朝鮮満州支那案内』1919、『鉄道の話』1921)、朝鮮拓殖資料調査会(『四季の朝鮮』1913)、朝鮮研究会(『最近京城案内』1915、『新撰京城案内』1921)などがある。

及びその文化や風習が紹介されている。朝鮮総督府が1923年に刊行した『朝鮮鉄道旅行便覧』において、郡山線の紹介にあたり、嘗て小漁村だったものが、「明治三十年開港以来年々膨張して<sup>77)</sup>いくようになった。また京釜線にある大田はもともと「一草生地」であったが、「十数年間の建設」によって「驚くべき進展」を遂げ、現在では、「新開地だけにすべての施設が純日本式<sup>78)</sup>」になるようになったと記述されている。

しかしその一方、朝鮮本来の伝統文化の無価値や朝鮮人を見下す描写も見られる。例えば、同『便覧』には、朝鮮人やその民族性について「朝鮮人程万事に従順なる民族は少ななかるべし<sup>79)</sup>」とされている。また、朝鮮人には「恬淡晏如」たる性質があり、それは彼らの「失敗しても諦めがよい。その分に安じ貧乏しても損しても苦しめない<sup>80)</sup>」所にあるとされている。そして1915年に出版される『最近京城案内』には、朝鮮の伝統的な民謡であるアリランに対して、このような歌は「聾啞の民族を製造し卑屈極まる無気力極まる思想を鼓吹せし俗歌」と断定している<sup>81)</sup>。



【図5】『朝鮮鉄道旅行便覧』表紙

このように、これらの「旅行案内」は日本における植民地統治の正当性を保持する役割を果たすものとして、また「劣ったアジアに対する優れた日本」を強調する<sup>82)</sup>ものとして、内地の人々に認識させたのである。そしてこのような「旅行案内」の特質が一般的な思考様式として、当時の旅行記や文学作品を通して繰り返されている。

つまり、中島敦が「巡査のいる風景」を発表した時期は、こうした植民地を観光地と目する風潮の最中であった。では、「巡査のいる風景」はどうか。

77 朝鮮総督府『施政二十五年史』（朝鮮総督府、1935）52頁。

78 同上、38頁。

79 同上、112頁。

80 同上、70頁。

81 徐東周、前掲（註75）60頁。

82 丁貴連「もう一つの旅行記－柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる－」『宇都宮大学国際学部研究論集第15号』（宇都宮大学国際学部、2003）11頁。

この作品には発展を遂げつつある観光地としての朝鮮は一切書かれていない。そこにあるのは臭味と汚さに囲まれた刺激的な画面であり、植民地の悲惨な現実であった。例えば、以下のような描写が作品の所々に配置されている。

磔石には凍った猫の死骸が牡蠣のようにへばりついた。(中略)

支那人の阿片と蒜の匂い、朝鮮人の安煙草と唐辛子の交ったにおい、南京虫やしらみのつぶれたにおい、街上に捨てられた豚の臓腑と猫の生皮のにおい、それ等がその臭気を保ったまま、此のあたりに凍りついて了って居る様に見えた。(中略)

傍には捨てられた魚の鰓が赤く崩れ、日蔭の雪溜りの上には生々しい豚の頭が嘔り散らされて居た。屋内では人々は、溝から上る瓦斯の様な葷と、蒜で腐った空気を彼等の不健全な肺臓に呼吸して、辛うじて生きて居た。(324-339 頁)

このような凄惨な街並みだけが生々しく描かれるのは、当時、この作品以外には見当たらないとあっていい<sup>83</sup>。では、このような悲惨な現状を背景とした空間において、どのような日本人と朝鮮人像が描かれたのか。以下に植民地にいる様々な人間像を取り出してみる。

#### 第4節 宗主国人としての日本人像

まずここでは、植民地下に生きる宗主国人である日本人はどんな姿で趙教英の目を通して映し出されたのかについて見てみる。主に4つの人間像が見られる。

##### ①傲然な学生

これは趙教英が毎度電車に乗る時に思い出す場面である。ある夏の朝、朝鮮人運転手が運転台側に立っていた日本人中学生に対して、「邪魔になるから奥に入ってくれ」と注意を払ったが、その中学生は同じく運転台に立っている趙教英に指差して「その人を中に入れないなら、俺も嫌だよ。」と「傲然」とした態度をとった。前述したように、朝鮮人に対して、日本人一般は支配者としての優越感を持っているため、この中学生のような傲然

---

<sup>83</sup> 三浦穂高、前掲(註56)58頁。

とした感情は当時の在朝日本人の普遍的なものだと言っていいだろう。いわゆる彼は相手を見下し、日本人としての誇りを自然に持っている人間として描かれている。

## ②粗末な姿をした無知な女

そして、①の中学生の場面を思い出しつつ、電車に乗っている趙教英は続けて次のような場面を見かける。一人の「粗末な姿をした」日本の女に、「白い朝鮮服をつけた」学生らしい青年が抗議する場面である。

——折角、親切に腰かけなさい、いうてやったのに。——と女は不平そうに言って居るのだ。

——併し、何だヨボとは。ヨボとは一体何だ、——

——だから、ヨボさんいうてるやないか、

——どっちでも同じことだ。ヨボなんて、

——ヨボなんていやへん。ヨボさんというたんや、

女には何も分らないのだ。そして怪げんそんな顔付をして、他の人達の諒解を得ようとするかの様にあたりを見まわして、

——ヨボさん、席があいてるから、かけなさいて、親切にいうてやったのに何をおこってんのや<sup>84</sup>。

朝鮮で「ヨボ」という言葉は、夫婦間（「あなた」の意味）、もしくは親しいもの間でのみ用いられた朝鮮語の二人称の称呼だが、政治による支配、被支配の関係で言葉本来の意味の自立を奪ってしまったのである<sup>85</sup>。植民地時代に「ヨボ」という言葉は、日本人が朝鮮人に対する侮蔑の意味を含んだ差別語になってしまう。そして「ヨボ」に「さん」を付ける場合は一応敬語であるものの、同時に蔑称でもあるという矛盾を孕んでいた<sup>86</sup>。この女は親切に席を譲っているのです、決して相手を軽蔑する意味はなく、何気なく使い、また「さん」と付けることで大丈夫だと信じている。しかし、被支配者側に対して「ヨボ」と聞くだけで、どれだけ敏感なものであったか、どれだけ侮辱感と傷を与えたか、無知な女は知る由もない。

<sup>84</sup> 中島敦『中島敦全集 1』（筑摩書房、2001）326-327 頁。以下本文の引用は頁のみ。

<sup>85</sup> 李順月、前掲（註 51）75 頁。

<sup>86</sup> 権錫永『「ヨボ」という蔑称』『北大文学研究科紀要 132』（北海道大学、2010）155 頁。

事実「ヨボさん」という呼び方は当時子供や女性によく使われていた<sup>87</sup>。ある資料では、これについて以下のように説明している。

電車内で「ヨボさん降ろしてください。ちょっと待ってください」というのを屢々聞く、来訪客の前でも、「ヨボのお客さんが入らした。」という家庭さえある<sup>88</sup>。

特に電車の中でよくあることで、中島敦も京城体験の際、電車に乗って中学校と居住地を往来する際、類似した情景を見かけたことも想像に難くない。また、もう一つの事例を挙げよう。

京城市内の電車に、内地の奥さんが子供を連れて乗ってきて、電車の中で子供が帽子を落としたのである。すると乗り合いした朝鮮の紳士がそれをとって、親切にも子供に被らしてくれたので、その奥さんが子供にむかい、「御前、ヨボさんにお礼を申しなさい。」と言った<sup>89</sup>。

このように、彼らは植民地支配そのもの、また朝鮮人のことを理解していない、理解しようとしめない。中島敦は女の無知と鈍感を描くことと同時に、彼女を通して、宗主国人としての日本人の醜さも描き出したのである。

### ③汚いなりをした小僧

作中において、もう一つ、日本人が朝鮮人に対して「ヨボ」と呼ぶ場面がある。ある府会議員の選挙演説の途中で、「二十にもならない汚いなりをした」小僧はたった一人の朝鮮人候補に向かって「黙れ、ヨボの癖に。」と怒鳴った。極めて低い社会地位にある汚い小僧は植民地支配によって、彼と候補との社会地位を逆転させ、怒鳴ることができたのである。彼は②の女のような無知から呼びかけただけでなく、①の学生のような傲慢さを見せるだけでもなく、朝鮮人に対して、「ヨボ」を侮辱語として、意識的に差別と蔑視を行ったのである。

<sup>87</sup> 権錫永、前掲（註86）155頁。

<sup>88</sup> 岡田鴻城「内鮮言語の種々相」『朝鮮土木建築協会々報』（朝鮮土木建築協会、1932）21頁。

<sup>89</sup> 守屋栄夫「朝鮮の開発と精神的教化の必要」『東洋』第25巻1号（朝鮮総督府、1922）31頁

#### ④紳士

最後にもう一種類、日本人の紳士も登場している。「獵虎の襟の外套を付けた」、「高官かもしれない」立派なこの紳士は「ちょっとお尋ねいたしますが」（329 頁）と頭を下げて、非常に丁寧な言葉で趙教英に、ある総督府の高官の住居を尋ねたのだ。その紳士はいわゆる川村湊氏が指摘している植民地朝鮮にいる「良い日本人」に他ならない。朝鮮人を差別することなく、彼らと人間的な交わりを持とうとする。民族の隔たりを無くして、貧しき者、弱き者への同情を隠そうとはしない<sup>90</sup>。いわゆるその紳士は文明人としての姿、善意的な日本人の代表と見ることができるだろう。

ただ、このような親切で、良心を持つヒューマニズム的な「良い日本人」について、それが本当に「良い日本人」であるか、あるいは支配された植民地朝鮮において本当に存在しうるのか、ということの中島敦は、後の〈朝鮮もの〉である「プールの傍で」で、日本人によって鉄拳「制裁」される「良い日本人」の話を通して、問いかけていたのである。

以上、朝鮮人巡査趙教英の目を通して見た日本人の姿を分析してきた。それは朝鮮人に対して傲慢だったり、差別したり、無知で鈍感だったり、ヒューマニスティックだったりした。つまり、同じく在朝日本人であっても、実は様々な種類の人間が存在した。そして彼らは「支配者として支配された植民地朝鮮に生きている」という現実（事実）に対して多様な認識と対応の仕方を見せてくれたのである。

それでは、被植民者としての朝鮮人像はどのように描かれたのか。彼らはもちろん上述した日本人の対立面に置かれた存在である。が、それだけではなく、朝鮮人と朝鮮人も相対化された立場に立たされることがある。以下、各々の朝鮮人像について考察してみたい。

#### 第5節 被植民者としての朝鮮人像

作品において、6つのタイプの人間像がまとめられている。

##### ⑤「白い朝鮮服をつけた」青年

②の無知な女に「ヨボさん」と呼びかけられた青年のことである。この青年は女に対して、「なんだヨボとは、ヨボとは一体なんだ」と抗議したのである。「ヨボ」に「さん」付けして言われたが、受け取る方の青年にとって、さほど違いはなく、まさに堪え難い侮辱

---

<sup>90</sup> 川村湊、前掲書（註53）153頁。

感を感じたのだろう。焦燥する民族と、どうであれ、統治する優越にある民族の相克は隠語において敏感である<sup>91</sup>。勿論その抗議は無力であった。青年は結局諦めるしかできなかった。

車内には所々失笑の声が起こった。青年はもう諦めて了って、黙って此の無智な女を睨みつけた。教英はまたしても憂鬱になって行った。何故この青年はあんな論争をするのだ。この穏健な抗議者は何故自分が他人であることをそんなに光榮に思うのだ。何故自分が自分であることを恥じねばならないのだ。(327頁)

朝鮮の地にいながら、朝鮮人であることを恥じねばならず、自分を認められず、あえて日本人であることを光榮に思い、日本人として認めてもらいたいという屈折した感情が描かれている。

「文化政治」「一視同仁」という「同化政策」の政治体制の下において、これは当時普遍的な朝鮮人の姿だと推測できる。

#### ⑥府会議員の選挙演説に出馬した朝鮮人候補

そしてこの青年とは違って、府会議員の候補が小僧に「ヨボ」と怒鳴られた後、以下のように一段と声を高くして叫んだのだ。

私は今、頗る遺憾な言葉を聞きました。しかしながら、私は私たちもまた光榮ある日本人であることをあくまで信じているものであります。(327頁)

日本語が「巧み」で、「内地人の間にも相当人望のある」この候補は自分が「光榮ある日本人である」と主張し、⑤の青年のような屈折した感情もなく、自らの民族的アイデンティティーをなくそうとした。いわゆる民族精神とプライドをなくした人格喪失な親日派としてみることができよう。彼は日本の同化政策に迎合することにとどまらず、すでに内面化した存在として現れる。

---

<sup>91</sup> 李順月、前掲（註51）75頁。

### ⑦民族の自由と独立のために戦う青年

彼は⑥の府会議員の候補と正反対に立つ姿として表される。その日、朝鮮総督が東京から帰るので、趙教英らの警官は厳重に警戒していた。そして、総督が降車口から現れ、すぐに用意した自動車に乗り込んだ。するとその時だった。突然群衆の中から「白衣にハンティング」を着けた男が踊りだしてピストルを持って車に向かって引き金を 2 回も引いたが、失敗に終わった。

この事件について一般的には 1919 年 9 月 2 日の斎藤実総督襲撃未遂事件<sup>92</sup>をモデルとしていると見なされている。そして三浦穂高がこのような指摘が不十分であるとして、さらにその奥に、1909 年の伊藤博文暗殺事件も置かれている<sup>93</sup>と指摘している。いずれにしてもその犯人像が朝鮮独立のために命をかけて闘う英雄の姿として造形された。

ところで、作中に見られる独立運動者の姿はこれで終わるわけではない。暗殺に失敗した彼は瞬く間に趙教英らの巡査に逮捕された。その逮捕された場面における幾つかの笑いの表情に注目してみたい。

凶漢は二十四五の瘦形の青年だった。彼もピストルを握りしめたまま血走った眼でしばらく警官の方を睨んでいた。が突然帽子をとって敷石に力一杯叩きつけて、カラカラと自棄的に笑い出すと、いきなり手にした武器を群衆の中で放り投げた。(中略) 彼は少しも抵抗しなかった。青ざめて幾分小刻みに震える口許に蔑むような微笑を浮かべて彼は警官たちを見た。青白い額には乱れた髪が長く垂れ下がっていた。眼にはもう周章の昂奮の跡が消えて、絶望した落ち着きと憐憫の嘲笑とが浮かんでいるだけだった。(335-336 頁)

これは斎藤実総督襲撃未遂事件の犯人像にも、伊藤博文暗殺事件の犯人像にも見られない、「巡査のいる風景」において独自に青年に付与されたものである。

カラカラと自棄的な笑い、蔑むような微笑、憐憫の嘲笑という描写は何を意味するだろうか。笑いの急変は心の複雑さを表しているのではないかと考えられる。「カラカラと自

---

<sup>92</sup> 1923 年の朝鮮総督は斎藤実だったが、彼は総督として着任した時 (1919 年) 京城駅で馬車に乗って爆弾を投げられたことがある。未遂に終わったが、死者 3 名負傷者 34 名の事件が起こしたのが姜宇奎 (当時 64 歳) である。

<sup>93</sup> 三浦穂高、前掲 (註 56) 61-63 頁。

棄的の笑い」は暗殺行動の失敗に対する絶望と無力感を意味するものであれば、「蔑むような微笑」、「憐憫の嘲笑」は彼を捕まえた巡査に向けたものに他ならない。

朝鮮独立のために行動した朝鮮人青年が、結局同じ朝鮮人に捕らわれたという逆説には、植民地朝鮮の悲惨な現実が歴然と描き出された。しかし、それより重要なのは、青年の「蔑み」でも「憐憫」でもあるような笑いの下で隠れている心の複雑さであり、人間存在の情けなさである。

#### ⑧現実に絶望した売春婦金東蓮

そして、⑦の独立運動者と同じく、同民族の朝鮮人巡査に逮捕された金東蓮のエピソードも描かれている。

金東蓮は元々夫を亡くした現実に従順する売春婦である。最下層に置かれながら、現実に何の痛みもなく被植民地人としての生活を受け入れている。夫が東京に商売に出かけたが、ちょうど関東大震災が発生し、地震にやられたと金東蓮は思い込んだ。ところで彼女は一人の客から、地震ではなく、朝鮮人虐殺事件で殺されたということを知らされた。

朝鮮人虐殺事件が起こった1923年には、中島敦がまだ朝鮮に滞在していた。当時朝鮮総督府の刑務局長であった丸山鶴吉は、震災が起きた当時の在朝日本人の反応について以下のように述べている。

朝鮮人が水道に毒薬を投じたとか、或は密かに武装して蜂起の計画があるとかの流言が飛び、為めに内地同様の自警団を組織し、釜山においてすら日本刀を携えて水源地を守る者さえあるに至った<sup>94</sup>。

虐殺事件は日本で起き、虐殺をもたらしたのも日本人なのだが、朝鮮人に抱いた警戒心は在朝日本人においても例外ではなかった<sup>95</sup>。この在朝日本人の反応から、被支配者側に対して、支配者側の感情は単に優越感や差別感のみではなかったことを雄弁に物語っている。そして中島敦は虐殺の事実を知ったのは帰国以後であると推測されている。

金東蓮の話に戻るが、このように客によって事実を知らせた彼女は夜明けの舗道を狂おしく駆け回り、そして通りすがりの人に呼びかけた。

<sup>94</sup> 丸山鶴吉「関東大震災当時の朝鮮」『朝鮮人虐殺に関する植民地朝鮮の反応』（緑蔭書房、1996）98頁。

<sup>95</sup> 三浦穂高、前掲（註56）107頁。

——みんな知ってるかい？地震の時のことを。

彼女は大声をあげて昨晚きいた話を人々に聞かせるのであった。彼女の髪は乱れ、眼は血走り、それにこの寒さに寝衣一枚だった。通行人はその姿に呆れかえって彼女の周りに集まってきた。

——それでね、奴らはみんな、それを隠しているんだよ。ほんとうに奴らは。

到頭、巡査が来て彼女を捕まえた。

——オイ、静かにせんか、静かに。

彼女はその巡査に武者振りつくと、急に悲しさがこみ上げてきて、涙をポロポロ落としてながら叫んだ。

——なんだ、お前だって、同じ朝鮮人のくせに、お前だって……

彼女が刑務所に行ってしまうから、S 門外の横町では、相変わらず真っ黒な生活が腐った状態のまま続けられていった。

寒いというより、痛かった。(338-339 頁)

生きること自体に精一杯だった彼女は植民地支配その現実に対して無力というより、関心を寄せる余裕さえもなかった。しかし、自分の夫を日本人に虐殺されたということを知った時、彼女はようやく狂おしくなり、目覚め、反抗するようになる。その悲惨な事実をより多くの朝鮮人に知らせようとしたが、周りにはただ彼女の姿に呆れるだけであった。

そして到底、朝鮮人巡査に阻まれたのだ。「同じ朝鮮人のくせに」と叫んだ彼女にはどれだけの悲しみ、どれだけの無力感があるだろう。しかし、その反抗は何の役にも立たなかった。刑務所に行った後も、すべてが変わらなかった。彼女は相変わらず真っ黒で腐った生活を続けるが、変わったのは心に消せない痛みのみだった。

最初の狂おしさから、また悲しみ、さらに痛みという屈折した心情の変化には、金東蓮の、植民地支配の野蛮さに気づいても何も変えられない絶望があった。

### ⑨現実に従う貧しい朝鮮人

金東蓮のような植民地統治の現実を発見する人間も存在するが、そうでない、現実にある一切の矛盾と苦悩の根源などに目向きもしない、する余裕もない、現実に従順する人間が数多くある。「巡査のいる風景」には、このような人間像をスケッチしている。幾つか例を挙げよう。

赤黒くカチカチに固くなった乳房を汚れたツルマキの上から出した女が一人、その前に立って湯気を吹きながら真赤に唐辛子をかけた饅頭を啜って居た。(中略)

毎朝、数人の行き倒れが南大門の下に見出された。彼等のある者は手を伸ばして門壁の枯れ切った鳶の蔓を浮かんだまま死んで居た。ある者は紫色の斑点のついた顔をあおむけて、眠そうに倒れていた。(中略)

其のチゲは脂だらけの眼を眠そうに一寸開けたかと思うと、直ぐに又閉じて了った。うるさそうに瘦せた手を動かして、教英の手を払いのけて一つ寝がえりを打つと、白い田虫に囲まれた其の口から長い煙管がコトンと舗道に落ちた。(324-342 頁)

その他にも、肺病やみの売卜者、膝から折れたいざりの乞食、腕を巻くって注射する金東蓮の友達福美などが登場する。彼らはいずれも貧しくて、暗い闇の中に希望のない生活をしていたことが窺える。そしてこれも生きる屍のように現実に感情を持たず、生きるにも無力的である当時朝鮮社会に普遍的な存在として現れてくる。

中島敦は趙教英の目を通して、植民地支配下で暗くて惨めな朝鮮、また苦しく生きる朝鮮人の姿を避けることなく、生々しく描き出そうとしている。それも作者自身のヒューマニズムの性格によるものではないかと思われる。

#### ⑩現実の矛盾と葛藤から目覚めていく巡査趙教英

最後に、上述した傲然な学生、無知な女、府会議員の候補、独立運動者、乞食など様々な人間と出来事を見聞する人物－朝鮮人巡査趙教英に注目する。

朝鮮人巡査はいったいどのような存在であったのか。それは朝鮮人でありながら、支配者日本の体制側に属して統治に加担している、いわゆる植民地の内部矛盾を象徴する存在<sup>96</sup>である。そしてもう一つ、植民地側の言説から見れば、その存在は平等を象徴するものにほかならない。朝鮮総督府の『施政二十五年史』の中には、朝鮮人巡査の登場について以下のように記されている。

大正八年八月十九日総督府官制の改革に際し総督府に警察局を置き全道警察・衛生事務監督の衝に当らしめ、(略)同時に警部の下に新たに警部補を設け、従来朝鮮

---

<sup>96</sup> 鷺只雄、前掲書(註45)63頁。

人に限り任命した巡査補を廃して、内鮮人共一律に巡査として差別撤廃の意を明らかにした<sup>97</sup>。

このように、「差別撤廃」の意で朝鮮人巡査を生み出したことは、朝鮮人も日本人と同じく平等に扱われるということを意味する。しかし、実際は給料も日本人の半分程度で、その任免権は各道知事や各警察署長にもあったので、職の保障はあまりされていなかった<sup>98</sup>。これは物語の最後で一方的に免職される趙教英の例に示されるように、平等という建前の下で、実質的には依然として差別的であるということがわかる。要するに、朝鮮人巡査という人間像自体は様々な矛盾を孕んでいるのである。

趙教英もこの中の一人である。彼のような朝鮮人巡査は実は数多く存在していた。1923年頃の統計によると、朝鮮人警官は全警官の40%を占めていた<sup>99</sup>。彼等の普段の仕事について、浅野豊美は以下のように述べている。

住民全員の顔を覚えることを任務の目標としていた。警官はあくまでことなく民衆の日常生活に眼を光らせ、怠りなく監視を続ける存在として、民衆から好感を持って迎えられるどころか、時として非常に恐怖の存在となった<sup>100</sup>。

つまり、植民地支配末端にいる巡査こそ一般の朝鮮人と密接な接触が出来る、また民族の葛藤が最も体験出来る職業であると言ってよいだろう。彼は巡査という仕事を通して、上述した人物による民族間の相克や自民族間の対立を見かけ、そしてそれによって不愉快さ、憂鬱さ、さらに圧迫感を感じるようになり、その内面世界の葛藤も深まっていく。以下の引用はその屈折した心情を端的に示している。

事実彼の気持は近頃「何か忘れ物をした時に人が感じる」あの何処となく落ちつかない状態にあった。果されない義務の圧迫感がいつも頭の何処かに重苦しく巣くって居るといった感じでもあった。併しその重苦しい圧力が何処から来るかということに就いては、彼はそれを尋ねようとはしなかった。いや、それが恐かったのだ。自

97 朝鮮総督府『施政二十五年史』（朝鮮総督府、1935）331頁。

98 徐東周、前掲（註75）99頁。

99 杉本幹雄『データーから見た日本統治下の台湾・朝鮮プラスフィリピン』（龍溪書舎、1997）49頁。

100 浅野豊美『植民地—帝国50年の興亡』（読売新聞社、1995）177頁。

分で自分を目覚ますことが恐ろしいのだ。自分で自分を刺激することがこわかったのだ。

では、何故怖いのだ？ 何故だ？

その答として、彼は青白い顔をした彼の妻子を挙げる。彼が自分の職業を失ったとしたら彼等はどうなるのだ、併し「なるほど、それには違いない。だが、そればかりなのか。恐怖の原因はそれだけなのか？」と聞かれたとしたら……。 (328 頁)

ここにあるように、趙教英の鋭い自問から内心の葛藤が窺える。彼は支配と被支配の狭間で揺れ動き、認識と現実の中で悩み、苦しんでいる人物である。家族のために続ける巡査という職業に従事すればするほど朝鮮民族としてのプライドが深く感じられ、「果たさない義務の圧迫感」に重苦しく巣くわれる。いわゆる自分を自分として生きていない不安と抑圧感を彼に押し寄せたのである。

しかし、このような自我矛盾に苦しめられた彼は、その苦悩の根源にあるものに触れようとはしない。怖くて触れることができなくなった。彼の内面世界はどんなに闘っても苦しくても現実には何の行動も出さず、自覚することができない。

そして、この重苦しい圧迫感⑦の朝鮮総督暗殺事件の青年を捕まえたことによって最大化を迎える。

彼の腕を捕まえていた趙教英はとてもその目付きに堪えられなかった。その犯人の目は明らかにものを言っているのだ。教英は日頃感じている、あの圧迫感が 20 倍もの重みで、自分を押し付けるのを感じた。

捕われたものは誰だ。

捕まえたものは誰だ。 (336 頁)

朝鮮民族の為に積極的に日本の植民地支配に抗議し、命を落とすまで朝鮮を守ろうとしたこの朝鮮人青年を捕まえた趙教英は、巡査の職務を果たしたと同時に、民族の裏切り者にもなった。愛国者と裏切り者というはっきりとした比較の中で趙教英は耐えられなかったのであろう。

ところで、今まで様々な人間像と事件に遭遇し、その差別と不合理を見てきた趙教英は作品の最後に覚醒していく姿が描かれている。その契機となったのは日本人中学生と朝

鮮人中學生との喧嘩であった。趙教英は彼等の懲戒について課長と少し言い争っただけで、免職になってしまう。彼の罷免は、K中学校（おそらく朝鮮京城府公立中学校）と徴文高等普通学校の喧嘩の懲戒処分を決める際、彼が徴文高等普通学校の生徒の側（朝鮮人側）に立ったために罷免されたのであろうことが推測できる<sup>101</sup>。

⑦の独立運動者を捕まえるしかできなく、現実に目をつぶろうとした趙教英は今度朝鮮人側に立ち行動するようになる。こうした趙の行動は、彼の民族精神の目覚めの萌芽とも言える。そして、これまで考えたこともない新たな道が展開された。

ふと彼は、彼の知っている裏通りのある2階の一室のことを思い浮かべた。(略)  
みんなが前途の希望に燃え立っているのだ。やがて彼等の間からひそひそした相談が洩れる。「京城-上海-東京」「……」……。 (341頁)

具体的に示されていないが、趙教英は独立運動に目を向け始めることが分かる。彼は「果たされない義務」を果たそうとしている。免職によって、彼は圧迫感から解脱し、現実に目覚めていく姿が見られる。

以上、被植民者としての朝鮮人も分析してきた。上述からわかるように、中島敦は「巡查のいる風景」を通して、朝鮮人の様々な屈折し、矛盾するといった複雑な感情を描いた。しかし、その被植民者の感情は支配側である日本人にわかるはずがない。そこでは和解し得ない民族的な矛盾が顕在しているからである。

このように、中島敦が5年半の体験を通して、植民地社会にいる人間（被支配者側だけでなく、支配者側でもある）は当時のメディアが規範している、離日前の中島敦が理解していた「支配と被支配」、「善と悪」、「強と弱」などといった単純な対立を超えて、遙かに複雑なものであることを発見したと窺える。日本人であれ、朝鮮人であれ、彼らは強い民族的な矛盾を内在化し、精神的において屈折していることを中島敦は「巡查のいる風景」を通して表しているのである。中島敦はその複雑性を認識することで、人間への興味を深めていくのである。

本章では、趙教英や金東蓮の人物分析にとどまらず、彼らに相対化された人間にも個別に考察することによって、この作品から中島敦の植民地の現実、社会問題への眼差しのみ

---

<sup>101</sup> 三浦穂高、前掲（註56）65頁。

ではなく、彼の植民地という特殊な空間に生きる様々な人間（被支配者側の朝鮮人、支配者側の日本人）に目を向けたことが読み取れた。また、それは抽象的な認識ではなく、植民地という具体的な状況の中に生きる人間存在を問うという、中島敦の鋭い観察の目による客観的な人間認識である。その結果、これらの人間は「支配と被支配」という枠に囚われず、複雑な感情を孕んでおり、精神的な面において常に民族的矛盾を内在し、屈折しているという人間認識を明らかにした。

すでに見てきたように、当時一般化されていた「旅行案内」、また朝鮮を旅行した知識人や文学者が書き残した旅行記の中には、日本の植民地統治を正当化するもの、朝鮮の中に日本を発見するもの、また朝鮮の古いもの、朝鮮人を軽視するもの、いわゆる「優れた日本」に対する「遅れた朝鮮」という見方が数多く見られている。

しかし、中島敦はこのような文壇の雰囲気、また従来朝鮮表象とは全く違うものを書き上げた。しかもこれはまだ20歳という若さで描き出した作品であることを考えれば、その同時代への意義をどれ程強調しても強調しすぎない。それはまさに当時の文壇への一種の批判と見ても過言ではないだろう。

もちろん中島敦も時代の状況から決して自由ではなかった。「巡査のいる風景」が「毒消し<sup>102</sup>」であった牧歌的な短編「蕨・竹・老人」（1929）と抱き合わせて発表されたことから、『校友会雑誌』という同人誌においても、中島敦は十分な配慮をしていたことが窺える。また、後年中島敦は同じく植民地支配を扱った「虎狩」（1934）を『中央公論』の新人募集の懸賞小説として応募したが、選外佳作と選ばれるだけで、誌面に発表されることはなかった。その背後には当時朝鮮関係ものの掲載禁止や厳しい検閲とは無関係ではないことが推測できる。

ただこのような時代状況の最中においても、彼は同時代の日本人と一線を画し、鋭い眼差しを持って、現実の朝鮮を見、そしてそこに生きる人間存在の根源に目を向けることができた背景には、実際に5年半の植民地朝鮮での体験が据えられている事実を、私たちは見逃してはならないのである。

---

<sup>102</sup> 氷上英広「中島敦一人と作品」『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）209頁。

## 第2章 両班の末裔としての少年 — 「虎狩」 (1934)

### 第1節 1930年前後の日本文壇と朝鮮認識

周知のように、中島敦は小学校、中学校（1920年から1926年までの5年半）を植民地朝鮮の京城で暮らした。それゆえ彼には京城を舞台にした作品が少なからず存在する。すなわち、「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ」（1929）と「プールの傍で」（1933）、そして「虎狩」（1934）がそれである。中でも「虎狩」は、本格的な文壇デビューを目指すべく『中央公論』の懸賞小説に応募した中島敦の自信作である。しかし、彼の期待とは裏腹に「虎狩」は佳作10編の8番目に選ばれるという屈辱的な結果となった。秀才として、競争に負けたことのなかった中島敦が受けた衝撃は大きく、以後彼は作品を発表しなくなった<sup>103</sup>。いったいなぜ「虎狩」は文壇の注目を得られなかったのか。梶田隆之の次の指摘は示唆に富む。

懸賞の選者が植民地朝鮮の深刻な状況への理解があれば「虎狩」評価は違っていただろう。ただこの時代としては、無理な注文であるが、朝鮮を植民地とすら見ることができず、日本の一部と思っていた作家たちには中島敦の視点は全く理解できなかったと思われる。自分の作品は理解されない。自分の小説を受け入れる場所もない。この小説を投稿後、小説を書いても発表することはなかった<sup>104</sup>。

つまり、「虎狩」が評価されなかったのは中島敦の朝鮮理解と当時の日本文壇の対朝鮮認識との間に大きなずれがあったからである。では、「虎狩」が執筆された1930年前後の日本文壇では、どのような朝鮮ないし朝鮮人理解が流布されていたのか。

周知のように、1920年代後半から民族解放運動の急速な拡大によって、プロレタリア文学が盛んになり、朝鮮と朝鮮人を取り上げた小説の数が飛躍的に増加した。代表的な作者として、葉山嘉樹、山内謙吾、黒島傳治、岩藤雪夫、平林たい子、中野重治らの名を挙げることができる。渡辺一民は、これらの作品はほとんどの場合、「朝鮮人が日本の被抑圧階級以下の存在として扱われていることへの批判を主題とするものであって、解

<sup>103</sup> 中島敦が文壇デビューを果たしたのは8年後の1942年である。

<sup>104</sup> 梶田隆之『山月記』論考（『津山高専紀要』第44号、2002）8頁。

放されるべきものとしての朝鮮人への共感は語られるものの、その朝鮮人を中国人や部落民と置き換えてもそのまま通用するような、極めて類型的な作品だった<sup>105</sup>と指摘している。

このような朝鮮認識は1930年初頭に入っても変わらなかった。「朝鮮もの」の代表的な作品を挙げてみると、藤沢桓夫「傷だらけの歌」(1930)、林房雄「痴情」(1930)、伊藤永之介「万宝山」(1931)、前田河廣一郎「朝鮮」(1931)、徳永直「火は飛ぶ」

(1932)、槇村浩「間島パルチザンの歌」(1932)、堀田昇一「モルヒネ」(1933)などがある。例えば、藤沢桓夫「傷だらけの歌」(1930)は、一朝鮮共産党員を主人公とし、「その戦いとそれにくわえられた残酷な日本官憲の拷問<sup>106</sup>」を生々しく描き出している。また堀田昇一「モルヒネ」(1933)は、日本での生活苦のためにモルヒネ中毒になっている在日朝鮮人労働者の惨状と同胞内の搾取を描く作品である。

ここでは、伊藤永之介「万宝山」(1931)を例として、プロレタリア文学作品によく取り上げられる朝鮮人像を具体的に考察する。この作品は、1931年に中国で起きた万宝山事件<sup>107</sup>を題材に、故郷を追われて満州に流されてきた朝鮮人夫婦趙判世(チョパンセ)・裴貞花(ベチョンハ)を主人公とし、「日本と中国の領土をめぐる対立の狭間で辛酸を舐める朝鮮人貧農の姿<sup>108</sup>」を描き出したものである。

趙判世と裴貞花、5歳の長男大秀(テス)は、日本人地主に田を奪われ、家まで借金の抵当にふんだくられ、故郷を追い出され、満州での長い放浪生活の末、万宝山へとたどり着いた。そこで趙は大勢の同胞たちと共に水路掘削作業を行い、開墾の仕事に従事することになる。趙たちは、中国人警官と、彼らと結託した中国人地主、商人たちから「県指定」の農具を購入することを強要され、家計のたしに「夜業」をして拵えた「柳斗子」(柳で編んだ種籠)までも取り上げられるなど、悲惨な日々を送っている。

<sup>105</sup> 渡辺一民、前掲書(註49)30頁。

<sup>106</sup> 朴杓禮「金史良作品試論—『光の中に』を中心に—」『駒澤國文37』(駒澤大学文学部国文学研究室、2000)223頁。

<sup>107</sup> 1931年7月1日に中国吉林省で起こった朝鮮人農民の開墾をめぐる中国人農民との武力衝突事件である。これはそもそも満州権益を持った日本政府によって万宝山に入植させた朝鮮人農民とそれに反発する現地中国人農民との水路に関する小競り合いだったが、中国の警察を動かし、それに対抗して日本の警察も動かし、日中官憲同士の対立へとエスカレートした。死者なく収まったが、この事件をきっかけに朝鮮半島で中国人への感情が悪化して排斥運動が起こり、多くの死者重軽傷者が出た。万宝山事件の経緯については以下の資料を参考した。大内力『ファシズムへの道』(中央公論新社、2006)353-355頁。岡田英樹「李輝英「万宝山」—事実と虚構のはざま」『石井英桑雄教授追悼記念論集第620号』(立命館文学、2011)77-78頁。

<sup>108</sup> 鳥木圭太「プロレタリア文学の中の植民地主義 伊藤永之介『万宝山』を読む」『フェンスレス』オンライン版第2号(占領開拓期文化研究会、2014)24頁。

そんな中、中国官憲と支那<sup>109</sup>農民は政府の朝鮮人農民排斥政策に乗っ取って鮮農たちを立ち退かせて、農地を強奪し、完全に支那人の支配に収めるために、趙たちの水路工事を妨害し、武器を所持して工事現場に襲撃してきた。趙たちは日本領事館と鮮人居留民会に政府からの工事中止の通告の取消を要求してくれるように訴えたが、一向返事が来ない。播種期が迫っていて水路が通じなかったら今年の収穫は皆無になるため、趙たちは交渉を続けると共に水路の掘削にも取り掛かる。しかし、趙は水路工事に出たある日に、当兵（支那兵）に連行されて消息不明になる。

趙が連行された翌日、5名の日本人警察は現場に来て形式的に駐屯した。すると、中国側には200名ほどの馬隊と歩兵まで増やし、部落の鮮人達を脅しつけたが、日本領事館は何の行動も起こさなかった。

長銃、ピストル、スコップ、そんなものを掲げた支那人百姓が、野鼠の群れのよう  
に野面を襲ってきた。発砲するのは主に彼らだった。

平原の支那農民は悉く官憲から武器を供給されて所持しているらしかった。が、  
長春に一箇連隊と多数の警察を擁している日本領事館は、鮮農の生命の危険など  
は、何処吹く風とばかりに、新たに一名の警官も送ってこない<sup>110</sup>。

このように、朝鮮農民は中国人警察や農民に襲撃されると同時に、日本側からも見捨てられたのである。

中国警察と日本警察側の対峙が続き、工事が進むことができない中、裴貞花たちは収穫期まで食糧不足に耐えながら、馬隊の威嚇と襲撃に耐えて恐慌と不安な日々を送っていた。とうとう過労と栄養不足による赤痢に見舞われ、子供たちが次々と死んでいった。そんな中、趙が戻ってきた。

しかし、彼を待っていたのは疫病に感染された長男大秀の死だった。悲しむ余裕もなく、趙は徹夜工事を急ぐが、保安局の馬隊が銃を持って突進してきた。鮮農の中に多くの死傷者が出た。趙もその日、領事館警察署に急を告げるために馬に乗って長春へいく

---

<sup>109</sup> 「支那」（現在：中国人）、「鮮農」（現在：朝鮮人農民）、「鮮人」（現在：朝鮮人）といった言葉はもともと朝鮮人、中国人に対する差別語だったが、ここでは伊藤永之介「万宝山」を考察するにあたって、当時の雰囲気を実感するために、原文のままにした。

<sup>110</sup> 伊藤永之介他『コレクション戦争と文学 満州の光と影』（集英社、2012）33頁。

途中、当兵に押さえられて馬から振り落とされ再び消息不明になる。結局裴貞花たちは、水路の完成を見届けることなく、当て所のない流浪を強いられることになる。次のラストシーンは、  
故郷を追われ、再び流浪を余儀なくされた朝鮮人農民の無力さが如実に描かれている。

百人近くの女や子供たちは、ただ押し黙ってボソボソと歩いた。彼等は言わばこうして、故郷を追われ、国境をさ迷い出で、涯しない満州の曠野をあてもなく歩いて来たのだ。またそれが始った。(中略)

もう平原に出て居た。

群衆は涯しない闇にほの白くのろのろと流れて行った。

工事場の柳條に当兵が放った火は、まだ東の空をポーと明るませていた。

霧に濡れた平原を、白衣の群は長春の方へ何処迄でも揺れ動いて行った<sup>111</sup>。

このように、伊藤永之介は「万宝山」を通して中国人警察官や農民に襲撃された一方、日本側からも見捨てられた朝鮮農民の悲惨な状況を描き出したのである。

以上述べた通り、この時期に書かれた作品には日本の植民地支配に抵抗する朝鮮人、または抑圧された朝鮮の農民、流浪人、労働者が多く見られるが、そのいずれも苦難に置かれた底辺の朝鮮人のイメージが目立つ。

いったいなぜ、当時の日本人文学者はこのような朝鮮人像を描き上げていたのか。考えられる要因は二つある。その一つは、朝鮮関連作品を書いた大多数の日本人作家は実際朝鮮に出かけ、朝鮮人の生活に密着し、朝鮮問題に真摯に取り組むより<sup>112</sup>、日本に住んでいる在日朝鮮人を通して間接的に朝鮮人像を作り上げていたことが指摘できる。つまり、1930年代当時の日本の作家たちが描き上げた朝鮮人像は、実は図式化され、加工されたものなのであった。その二つは、在日朝鮮人の増加が指摘できる。1922年自由渡航制度によって日本に渡ってくる朝鮮人が飛躍的に増加し、1927年に165,286人だったのが、1934年に573,695人まで急増し、1940年には1,190,444人<sup>113</sup>までに達した。そのため、日本人による在日朝鮮人との接触が以前より多くなり、作家たちは直接朝鮮の

<sup>111</sup> 伊藤永之介他、前掲書（註110）57-58頁。

<sup>112</sup> 渡辺一民、前掲書（註49）44頁。

<sup>113</sup> 「年度別人口推移」<https://www.mindan.org/shokai/toukei.html> (在日本大韓国民団) (2015年12月15日検索)。

地を踏まなくても手軽に朝鮮問題を題材に取り上げることができるようになった。一方、朝鮮に住む在朝日本人の朝鮮認識の低さも安易な朝鮮認識を増長した。この問題と関連した高崎隆治の指摘を見てみると、

在朝鮮の日本人は、朝鮮人とかわることなく、日本人だけの閉鎖的な日常に終始し、朝鮮に住むこと自体を不本意なものとして、朝鮮および朝鮮人から意識的に目をそらすことで、日本人としての己を維持しようとしていたのだろうと思った。つまり、別の言い方をすれば、朝鮮人は日本人にとってどうでもいい存在、というよりは、朝鮮人は最下級の日本人であるという意識が、彼ら在朝鮮の日本人の意識に絶えず顕在していたのではないか<sup>114</sup>。

というように、朝鮮滞在が長い日本人ですら朝鮮人のことはほとんど知らないばかりではなく、朝鮮問題から意識的に目をそらしていたのである<sup>115</sup>。日本人作家のほとんどが朝鮮人の生活や朝鮮問題を描き出せないゆえんはまさにここにあったのである。

しかしながら、中島敦の書き残した朝鮮ものは違っていた。とりわけ「虎狩」には植民地朝鮮という特殊な空間が描かれているばかりではなく、一人の日本人少年と朝鮮人少年との間の友情が描かれている。問題は、その少年がこれまで多くの作家たちが取り上げた社会の底辺に生きる農民や流浪人、労働者の子供ではなく、誇り高い貴族の子（「両班の子弟」）として設定されていることだ。そこで本章では、1930年代の日本文壇における朝鮮人像を手掛かりとして、中島敦の朝鮮人認識が同時代の文壇と如何にずれているかを明らかにすることによって、「虎狩」に込められた中島敦の執筆意図を明らかにしたい。

## 第2節 「虎狩」と1920年代の朝鮮社会

「虎狩」に関するこれまでの先行研究は、「これは作者の朝鮮時代の思い出に取材したものであり、同級生の趙大煥との関係において、自己の存在をふくめて、人間存在の得体のわからぬものを暗示し、作者の志向をはやくもしめしたものである」という瀬沼

<sup>114</sup> 高崎隆治『文学の中の朝鮮人像』（青弓社、1982）82頁。

<sup>115</sup> 梶村秀樹「植民地朝鮮での日本人」『地方文化の日本史第9巻 地方デモクラシーと戦争』（文一総合出版、1978）、343頁。

茂樹の論<sup>116</sup>を皮切りに、佐々木充の論<sup>117</sup>や濱川勝彦の論<sup>118</sup>といった存在論的な立場からとらえるものと、趙の「享楽主義者」としての性質を指摘した鷺只雄の論<sup>119</sup>など、主に植民地朝鮮との関係を重要視し、植民地文学論的な視点から行われたものがある。また、「植民地小説」として読み、趙の「屈折せざるを得ない」姿を指摘する川村湊の論<sup>120</sup>、「虎」を趙の比喩的な存在として、植民地朝鮮の支配と被支配の転倒した構造を明らかにした南富鎮の論<sup>121</sup>、「民族と民族、支配と被支配との間に横たわる虚ろな空間、心理的な深遠そのものについての作品」、「すぐれてポストコロニアルな主題と形式を重ね備えたテキスト」として読まれた李英哲の論<sup>122</sup>などもある。

これらの先行研究は、いずれも趙とく私との理解不能の関係に焦点を当て、それにより植民地政策への批判や社会問題への関心という主題に導く傾向がある。しかし、中島敦は果たしてどれほど社会問題に関心を持ち、当時流行ったプロレタリア文学と関係したのか。

例えば、「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ」を執筆した1929年は、小林多喜二の「蟹工船」(1929)を始め徳永直の「太陽のない町」(1929)などの名作が続出していた時期である。長年の植民地体験によって朝鮮や満州の実情を知っていた<sup>123</sup>中島敦はこういった文壇の影響を受けつつ、現地人を主人公にし、植民地朝鮮の悲惨な現実を描き出した。ところが、発表に際してはあえて「毒消し」といわれる牧歌的な短編「蕨・竹・老人」(1929)と合わせて発表することによって、「自己の作品が含むイデオロギーのためにそうした進歩的な連中と同一視されるのを嫌が」っていた<sup>124</sup>。つまり、中島敦は植民地

116 瀬沼茂樹「中島敦入門」『日本現代文学全集 82 梶井基次郎・田畑修一郎・中島敦』（講談社、1964）391頁。

117 佐々木充「主題と方法」『中島敦—近代文学資料1—』（桜楓社、1969）。

118 濱川勝彦「『虎狩』まで」の中で「社会への関心と自己への回帰・凝視という相反した内容と姿勢との、危うい均衡の上に成り立ったのが、この『虎狩』である」と指摘している。『中島敦の作品研究』（明治書院、1976）28頁。

119 鷺只雄「『虎狩—その享楽主義』」の中において「この作品はその発想において、登場人物の形象、また主題において、明らかに耽美主義に根を置くものであり、ディレクタントの、人生への絶えざる好奇心と体験の熱望・千変万化する印象の貪婪な享受と体験憧憬の現れに他ならないと考えられるのである。」前掲書（註45）101頁。

120 川村湊「中島敦伝2 植民地の“虎”」『アイ・フィール14（4）』（紀伊国書店総務部、2004）、「中島敦と朝鮮」『アジア遊学（51）』（勉誠出版、2003）を参照。しかし、この場合の「植民地小説」は「アフリカという植民地へ行って、無力な獅子を射殺したタルタランの物語」ではなく、あるいは「最後の授業」のような「過度に感傷的な」植民地小説ではないと氏は指摘している。

121 南富鎮「中島敦『虎狩』の展開—く虎くをめぐって」『稿本近代文学』（筑波大学、1994）、「く娼婦く」とく虎くの朝鮮表象—中島敦『人文論集56（2）』（静岡大学、2005）を参照。

122 李英哲「中島敦におけるく朝鮮く—挑発する植民地—」『朝鮮大学校学報6』（朝鮮大学校、2004）134-135頁。

123 氷上英広、前掲書（註102）209頁。

124 同上、208頁。

支配や政治政策への批判といったイデオロギーに対して、自ら身を引くような態度をとっていたのである。「虎狩」を応募する際にも、年1回の懸賞創作募集を行う『改造』（社会主義的な評論を多く掲げた日本の総合雑誌）にではなく、より中道的な路線にある『中央公論』に、しかも落選した後すぐに「趙大煥と虎狩」というタイトルに変更して、1934年7月号『文藝』に応募していた<sup>125</sup>ことから分かるように、作品を通して表したい彼の意図は、単に植民地支配への批判を行なうためではなかったことが知られる。では、中島敦は「虎狩」を通して何を言おうとしたのだろうか。

まず初めに、作品分析するに当たって、「虎狩」のあらすじを述べよう。語り手の〈私〉は、ある日、東京の町で、自分の旧知であるはずの男に出会う。しかし、彼が誰であったかがなかなか思い出せない。ようやく思い出した時にはすでに彼の姿を人混みの中で見失ってしまう。しかし、そこから彼についての記憶が蘇り始まった。彼は今から15、6年前に、〈私〉がかつて朝鮮にいた時の友人、趙大煥だった。名前で見ると分かるように、彼は朝鮮人である。〈私〉は小学校5年の2学期に内地から朝鮮京城の小学校へ転校した際に、趙と出会った。その後、二人は同じ中学校に入り、毎朝電車で通学し、同じ少女を慕い、熱帯魚の展示を見、また発火演習に参加するなど様々なことを体験した。もちろん喧嘩も不満も隔たりもあったが、お互いの友情も深まっていった。しかし、発火演習の日に、趙は上級生にリンチされ、〈私〉の前で大泣きをした。その後まもなく、彼は学校から姿を消し消息が分からなくなった。しかし、このように認識してきた趙だが、〈私〉は、虎狩の事件を通して彼の新たな一面に直面する。

以上、「虎狩」を趙と〈私〉との物語を中心にあらすじを見てきたが、その物語が描かれた時代背景について改めて考察する必要がある。「第1章」の冒頭では「今から20年ほど前」「まだ巡査の威張れる時代」などが提示され、作中では「父などは常に日鮮融和などということをして口にしていた」ことや、趙に対して「教師や友達が常に恩恵的に接することから窺えるように、時代的背景は、中島敦が実際に朝鮮へ移住した1920年頃の政治状況と重ねることができよう。その頃の朝鮮は、「武断政治」から「文化政治」に移り変わっている<sup>126</sup>。総督の斎藤実は、朝鮮人の発行する新聞を認めたり、教師の帯剣を廃止したりした。また、公務員に朝鮮および朝鮮人を理解するように訴えた<sup>127</sup>。つまり、総督

<sup>125</sup> 楠井清文「中島敦「虎狩」論」『論究日本文学第90号』（立命館大学日本文学会、2009）37頁。

<sup>126</sup> 高崎宗司、前掲書（註8）121頁。

<sup>127</sup> 同上、141頁。

府が「差別廃止」という意味合いで、朝鮮人も日本人と同じく帝国の臣民として平等に扱い、「同化」、「融和」を宣言したのである。それは朝鮮にいる日本人教員養成の場合からも窺える。1926年総督府編纂の『師範学校修身書』において、次のように記述されている。

明治の御代に至り、朝鮮と台湾とが版図となった結果、約千七百万の朝鮮民族と、三百万の支那民族とは、在来の大和民族と共に日本国民として融和連携し、共存共栄の道に尽くすこととなった。我等現在の国民はよくこれ等の事情を究め、祖先の成跡を理想として、精神的にも肉体的にもよく同胞一体の美を発揮して、一は我等の祖先の歴史を顕かにし、一は我等同胞の共存共栄の道を辿るよう努力せねばならぬ<sup>128</sup>。

つまり、当時の朝鮮では日本と朝鮮民族の間には「融和連携」と「共存共栄」の道に尽くすべきだとの教育がなされていた。朝鮮総督府はこのようなスローガンで植民地統治の正当性を作ろうとしていた。無論、実質は「徹底した従属化<sup>129</sup>」を図って植民地をより長く支配することが目的である。ただ一般国民は、この総督府の見せかけを知る由もなかった。大人達は依然として制度に反した形で朝鮮人を差別し続けるか、多くは作中の〈私〉の父のように、「常に日鮮融和を口にしていたくせに」、実際「私が趙と親しくしているのをあまり喜んでいなかった」という心の中では違和感と偏見を持ちながら、表では制度に反しないように融和を作るかであった。しかし、作中の〈私〉も含めて、当時の子供達はこういう大人の虚偽を理解することはなかった。

上述したように、朝鮮人へのこのような「同化」、「融和」政策が基本方針として推進されていた時代に、〈私〉は趙と出会ったのである。

### 第3節 日本人としての生き方 ― 〈私〉の見た趙大煥

#### 3-1 出会い

〈私〉と趙は、「第2章」の喧嘩事件を契機に知り合った。〈私〉は父親の仕事の都合で小学校5年の2学期に内地から朝鮮京城の小学校に転校した。しかし、新しい学校に入

<sup>128</sup> 朝鮮総督府『師範学校修身書巻2』（朝鮮総督府、1926）104頁。

<sup>129</sup> 森山茂徳「日本の植民地支配と朝鮮社会 植民地統治と朝鮮人の対応」『日韓歴史共同研究報告書第3分科篇 上巻』（日韓歴史共同研究委員会編、2005）10頁。

った<私>は同級生からの苛めに直面し、疎外された。しかし、一人の少年が<私>に接近してきた。授業でみんなに笑われてしまい、耐えられなくなって運動場まで逃げ出した<私>の隣に彼が出現し、「恥ずかしいもんだから、むやみと唾ばかりはいてやがる」と話しかけてくれた。<私>はこれがさらなるいじめだと思い、これまで喧嘩して勝ったことがない「弱虫」だったにもかかわらず、自らの自尊心を守るために相手にとびかかり、もみ合った。ただ、相手が思ったより腕力がなく弱かった。といっても、実際は無抵抗だった。つまり、趙は本当に<私>を嘲笑し、喧嘩を売ったのではなく、<私>と友達になりたかったから近づいてきたわけである。一方、<私>の方はあの自分と同じく「弱虫」の姿が、心の中で根強く残ることになった。

2、3日後、2人は学校の帰りに同じ道を歩いた。彼は自分が趙大煥であることを<私>に告げた。自分とは違い、朝鮮人である。<私>は驚いた。「朝鮮へきたくせに、自分と同じ級に半島人<sup>130</sup>がいるということは、全く考えもしなかった」し、それに何より彼の様子が「半島人とは思えなかった」からだ。後で分かったが、趙は「母親が日本人、父親が両班」という貴族の家柄で、しかも彼は「日本語が非常に巧み」で、「よく小説を読み」、「植民地あたりの日本の少年達が聞いたこともないような江戸前の言葉さえ知っていた」という一般の日本人よりも優れていたからだ。

中島敦の年譜によると、1920年、中島敦は父の転勤に伴い、京城龍山公立尋常小学校第5学年口組に転入学し、家族と一緒に京城に住みはじめた。そのゆえに、趙大煥の人物造形には、通っていた龍山小学校の同級生がモデルになっている可能性は大いに考えられる。実際、それについて同級生からの回想が残されている。例えば、京城中学校同級生の一人伊東高麗夫は「興味のある存在、中島敦」の中で、「虎狩」の趙大煥にはモデルがいたと次のように述べている。

「虎狩」中の同級生、趙大煥については、趙という柔道部にいた大きな男があるいはモデルだったかと思われまます。なお金大煥という同級生もおり、趙大煥とはこの二人の同級生を合わせた名前だと言えます<sup>131</sup>。

<sup>130</sup> 1942年『光と夢と風』という作品集に収録される際に、中島敦は当時の政治政策、検閲に配慮して実際残された清書原稿では、「朝鮮人」、「日本人」になっているところが、すべて差別を強調しない「半島人」と「内地人」という居住地や出身地だけを表す呼称に変更した。川村湊「中島敦伝2 植民地の“虎”」『アイ・フィール14(4)』(紀伊国書店総務部、2004)36頁参照。本稿ではテキストの引用を除き、清書原稿に従いすべて朝鮮人と日本人と記す。

<sup>131</sup> 伊東高麗夫「興味ある存在、中島敦」『中島敦全集別巻』(筑摩書房、2002)246頁。

つまり、中島敦は二人の朝鮮人同級生から「趙」と「大煥」という氏名を組み合わせ、  
「趙大煥」という名前を思いついたのだろう。また、趙の外見や出身については山崎良幸  
が次のような回想を残している。

また『虎狩』の中で出てくる韓国人の生徒ですが、同級生の二、三人韓国人の人がい  
ました。あるいはモデルとは言えなくても、何かのヒントは得たかもしれません。そ  
の一人、趙君と言ったか、背の高いハンサムな、優しくておとなしそうな生徒がいま  
した。なんでも名家の出で、母親は日本人だったのか、韓国人のだとの感じはしませ  
んでした。何処か陰鬱な印象でしたが、成績は優秀だったと思います<sup>132</sup>。

「名家の出」、「母親は日本人」かもしれない出身や、成績優秀で孤立していたという印  
象など、趙の人物設定に極めて近い。また、そのモデルの優秀な成績と貴族出身について、  
同級生の湯浅克衛も描いている。

「虎狩」に出てくる朝鮮貴族の同級生は、李達幸君がモデルであろう。日韓併合  
に功労があった、貴族の子弟だけが、京城中学校に入学資格があった。李達幸は、  
長身、色白、柔和で、いかにも貴族の子弟らしく、又、三番、五番といういい成績  
で、四年ではいった敦のあとを追ってたしか、一高にはいったのではないかと思う。  
あるいは三高だったかもしれないが<sup>133</sup>。

以上の回想から窺えるように、「虎狩」における趙の人物造形は中島敦の実際の朝鮮体  
験が大きく反映していることは間違いないだろう。

さて、このような趙に対し<私>は、

相手に、自分が半島人だという意識を持たせないように—これはこの時ばかりで  
はなく、その後一緒に遊ぶようになってからもずっと—努めて気を遣ったのだ。(95  
頁)

<sup>132</sup> 山崎良幸、前掲書（註13）241頁。

<sup>133</sup> 湯浅克衛「敦と私」中村光夫等編『中島敦研究』（筑摩書房、1978）231-232頁。

と、できるだけ思いやりを持って、民族のことに問わず平等に接するように努力してきた。しかし、次の文はそのことが<私>の思い違いであることを如実に示している。

趙は実はこの点を――自分が半島人であるということよりも、自分の友人たちがそのことを何時も意識して、恩恵的に自分と遊んでくれているのだ、ということに非常に気にしていたのだ。(95 頁)

このように、趙は態度の上では<私>の扱いに対して全く拘泥していない様子を見せながらも、心の中では自分が半島人であること、そして友達がそのことを意識しながら自分と付き合っていることに、反感を持っていたのである。つまり、趙は極めて優秀で自らの民族性に全くこだわらない外面を持ちながら、実は内面的には弱虫で、自分が半島人であることを非常に気にしている人物であると、<私>は認識していたのである。そして、そのような認識を<私>はいろいろな事実や手がかりを通して確かめていくのである。

### 3-2 交流

その手がかりの一つとして、「第3章」の少女への恋情を取り上げることができる。小学校の終り頃から中学校の初めにかけて、趙は一人の少女を慕っていた。しかし、彼は一度も前向きにその少女に声を掛けたことはなかった。と言っても、趙は相手から挨拶されても面喰ってまともに応じることができなかったし、電車の中で席を開けてくれても困ったような、また嬉しそうな、どうしようもない顔付きでしか対応できなかったからだ。それは、趙が恥ずかしがり屋のせいではない。<私>はその原因が「神経質な彼がこのことについても又、事新しく、半島人とか内地人とかいう問題にくよくよ心を悩ました」ところにあると推察した。換言すれば、趙は自分が半島人であることが相手に知られることを恥だと思い、劣等感を感じていたからである。

その証拠として、第一、「あれだけ親しく付き合っているながら」、「彼のお母さんを見たことがなかった」。第二、彼の家へ遊びに行ったこともなかった。第三、「自分の家庭での半島人としての生活」を見られたくなかったらしい。第四、「私の前であまり朝鮮語を使うのを好まない」ようである。つまり、趙は半島人としての生活を一所懸命に隠そうとし、友人の<私>でさえ素直になれなかったのだ。

それどころか、趙は植民者の前、あるいは公的な場はもちろん、＜私＞の前でも常に人を嘲笑、馬鹿にする所があり、小賢しく生意気な存在だったからである。具体的に言えば、第一に、いつも嘲笑的で冷笑的な表情で見構えている。第二に、彼は「学校でやらせられる事にほとんど少しも熱心を示さ」なかった。第三に、威張る上級生に対して、「道で会っても、あまり敬礼をしない」し、また彼らの「思い上った行為に対しても時として憫笑を漏らしかねない」。

このように、趙は「何時も人を小馬鹿にしたような笑いを浮かべ、人から見すかされまいと常に身構えしている」が、時として親友の＜私＞の前では、ひょいと正直な所を白状して見せるのだ。例えば、趙は二度ばかり上級生に「生意気だ。改めないと殴るぞ。」と脅かされることがあった。趙はその時の感情を＜私＞に漏らした。

自分は決して彼らを恐れてはいないし、又、殴られることを怖いとも思っていないのだが、それにも拘らず、彼らの前に出ると顫える。(略) 最も、そういう正直な所をさらけ出して見せたあとでは、必ず、直ぐに今の行為を後悔したような面持ちで、また元の冷笑的な表情にかえるのではあったが。(102 頁)

このように、趙は自分の弱音を＜私＞に吐き出したが、またすぐ自分の立場や自尊心を守るために元の防衛状態に戻る。つまりこれは、内面の分裂と葛藤を抱え込む趙の姿を描き出しているだけではなく、＜私＞に対してまだ警戒していることを意味する。無論、＜私＞は裏では趙の弱みを把握しているが、親友の前では、素直に見せず常に偉そうなふりをする趙のことが耐えられなかった。そして、その不満はついに爆発し、二人の喧嘩の元となった。これについて、第4章で書かれた出来事に注目しよう。

中学校の時、趙はある日の放課後、＜私＞を連れて三越に熱帯魚を見に行った。＜私＞はこれらの魚の美しさに惚れ、熱心に見つめているうちに、趙は傍で「どうだ」と自慢げに言った。＜私＞はこの時の趙の態度に対して不満と反感を持った。

私には趙の感激の仕方が、あまり仰々しすぎると考えられた。彼の「異国的な美」に対する愛好は前からよく知ってはいたけれども、この場合の彼の感動には多くの誇張が含まれていることを私は見出した。(98-99 頁)

つまり、＜私＞は趙の誇張した感動から、彼の人を見下す偉そうな態度を見出した。そのため、＜私＞は「その誇張を挫いてやろうと考え」、彼の仮面を取ってやろうとした。一通り見終わった後、＜私＞はわざと彼に言った。

——そりゃ綺麗でないことはないけれど、だけど、日本の金魚だってあの位は美しいんだぜ。——（99 頁）

友達の傲慢な、自分より優位に立とうとする態度に対する不快感から、わざと復讐し抗議する気持ちは、誰にでも一度は経験したことがあるものであろう。特に、自意識が強い思春期の子供にとって、これはごく普通の人間の感情だと言って良い。つまり、＜私＞の復讐はただ普通の友達同士の喧嘩であることだと、まず指摘しておくべき必要がある。ただし、「日本の金魚」といった言葉に対して、＜私＞は本意でなくても、敏感で神経質な趙はその中に差別意識を読み取り、自尊心が深く傷ついていた。「その後一週間ほど、彼は私に口をきかなかった」ことは、その証である。

このように、もともと心の中にあった違和感と隔たりがこの事件によって表面化され、二人の距離も前より遠くなったことは想像し難くない。ところで、二人の間の友情は第5章の発火演習の夜の出来事によって転換を迎える。

### 3-3 断絶

中学校3年生になったある日、3年生以上の生徒は、漢江南岸の一箇所で発火演習<sup>134</sup>を行った。夜になって、みんなは露営地に天幕を張ろうと準備にかかった時、大粒の雹が落ちてきて、我先にテントに潜り込んだ。しかし、その間趙は不意に隣の上級生のメガネを叩き落とした。私はその時、趙が大人しくあやまるだろうと思っていたが、謝らなかった。その夜、趙はずっと不安な表情でいた。そして夜中、ついにリンチされた。

＜私＞はそもそも趙のこういった生意気な所に不満を持っていたので、彼の不安、怖さと恐れ、そしてリンチされたことのすべてを諒解しても、何の行動もせず慰めの言葉を与えなかった。趙がリンチされた後、静けさに戻ってから＜私＞はようやくテントから出て、殴られた趙の側へ行った。その時＜私＞の見た趙の様子はこうだった。

---

<sup>134</sup> 鉄砲に火薬のみをこめて撃つ野外軍事演習。

月に照らされた真っ白な砂原の上に、ポツンと黒く、小さな犬か何かのように一人の少年がしゃがんだまま、じっと顔を伏せて動かないでいる。(略)しばらくして、突然、ワッという声を立てて身体を冷たい砂の上に投出すと、背中を震わせながら、おうおうと声を上げて赤ん坊のように泣き始めた。(105 頁)

このように、「小さな犬か何か」といった描写が趙の弱くて臆病な様子を描き出す一方、<私>は趙に一矢を報いた快感と彼への見下しもそのまま表現されている。ところで、趙は突然、今まで一度もなかった「おうおうと声を上げて赤ん坊のように泣く」姿を見せたのである。<私>はびっくりし、彼の「真率な慟哭」に感動した。それゆえ、<私>は趙を抱き起こし、引っ張って歩哨に見られない流れの近くへ連れて行った。その際、趙は泣きながら<私>に言った。

— どういうことなんだろうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いうことは。 — (略)

— 俺はね、あんな奴等に殴られたって、殴られることなんか負けたとは思いやしないんだよ。ほんとうに。それなのに、(略) やっぱり俺はくやしいんだ。それで、くやしくせに向って行けないんだ。怖くって向って行けないんだ。 — (106 頁)

<私>はその言葉の意味を読み取れなかった。ただ気がついたら、それは「現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではないだろうか」と民族間の問題まで思ったりもした。それはともかく、それより重要なのは<私>の心の中で何かしら嬉しい感情が湧き出したことである。

あの皮肉屋の、気取り屋の趙が、いつものよそ行きをすっかり脱いで一前にもいったように、これまでも時として、そういうこともないではなかったが、今夜のような正直な激しきで私を驚かせたことはなかった。— 裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の、彼を見せてくれたことが、私に満足を与えたのだった。(107-108 頁)

このように、趙が「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人」の姿を見せてくれたことに<私>は満足感を覚える。山下真史はこの点について、二人は「中学校における

主流派と反主流派、強者と弱者、差別する者と差別される者とに分かれてしま」い、「もはや対等な友達ではない」と述べている<sup>135</sup>。つまり、氏によればこれは、〈私〉が「強い私、弱い趙」を確かめたことで満足を感じたという意味である。

しかし、当時の〈私〉は朝鮮人との融和、同化教育を受け、そしてそれらに素直に取り組む少年なのであった。よって、人種にこだわって虚勢を張って強がりと言う趙に対してごく普通に不満を抱くだけであって、民族差別などを考えることはまずなかった。だからこそ、〈私〉が民族間の問題を意識した時「ハット気がつく」程度であって、彼が叫んだ「弱い、強い」の本当の意味は読み取れなかった。つまり〈私〉が嬉しかったのは、趙がこれまでの仮面を取り外し、〈私〉に対してすべてを包み隠さず見せ、弱音を吐き出し、そして真の親友として受け入れたことである。当時の〈私〉は、まさに民族の違いを超えて、趙と平等に付き合うことができると信じていたのだろう。

ところで、これは〈私〉の大きな思い違いだった。というのは、それからまもなく趙はまったく突然、〈私〉にさえ一言の予告もなしで、学校から姿を消した。発火演習の夜の出来事によって二人が本当の友達になれたと思っていた〈私〉は、これが友情の終焉とは思ってもよらなかった。失踪によって二人の関係性は断絶されてしまった。〈私〉は全く腹を立てた。彼の失踪した理由をいろいろと考えたが、どうしても分からなかった。ただ〈私〉は、例の「強い、弱い」という言葉が意味のあるものに思われてくるのだった。その意味は一体何だったのだろうか。読者は、第6章の「虎狩」において、とうとうこの言葉の真実に直面することになる。

#### 第4節 虎狩の現場で見せつけられたもう一人の趙大煥

趙は失踪した2年ほど前に、〈私〉を連れて虎狩に行った。〈私〉は初めて彼の父親に出会い、朝鮮人だけの空間に立ち向かった。この世界は趙の通訳なしでは、虎(ホランイ)という言葉以外に何も分からない世界だった。その夜、趙と〈私〉は一行に随行して目的地に着き、大木によじ登り虎を待っている間に、趙は、先年虎に襲われた朝鮮人の惨劇を話し、そして、この惨劇が今にも目の前で行われるのを、切望しているかのようだった。このような趙に対して、当時の〈私〉は単なるバナナの皮で「虎を滑らしてやろう」と真

---

<sup>135</sup> 山下真史、前掲書（註47）44頁。

剣に考えたりする無邪気な少年だった。

しかし、時間がたつばかりで、虎はなかなか出てこない。＜私＞はだんだん眠気を催して寝ていた途端、「鋭い恐怖の叫び」に目覚め、一匹の虎がすでに目の前に立っていた。が、次の瞬間、銃声が響き、虎は立ち上がったものの命尽きて倒れた。わずか10秒位の間の出来事だった。私達は下に降りた。先の叫びは恐怖のあまり気を失った勢子の声だった。＜私＞を驚かせたのはその時の趙の態度であった。

彼は、その気を失って倒れている男のところへ来ると、足で荒々しくその身体を蹴返して見ながら私に言うのだ。

—チョッ！怪我もしていない—

それが決して冗談に言っているのではなく、いかにもこの男の無事なのを口惜しがる、つまり自分が前から期待していたような惨劇の犠牲者にならなかったことを憤っているように響くのだ。そして側で見ている彼の父親も、息子がその勢子を足でなぶるのを止めようとしめない。ふと私は、彼らの中を流れているこの地の豪族の血を見たように思った。(121頁)

学校では日本人のように振舞う「弱虫」の趙が、朝鮮人の世界では本来のあるべき姿にたち戻り、他人の生死権を握る暴力的で残酷な権力者となっていたのである。彼は両班の息子であり、その体には豪族としての朝鮮人の血が脈々と流れていた。何百年間にわたって受け継がれた伝統に裏打ちされたその感情を30数年程度の植民地支配でもって変えるわけにはいかない。その深い伝統と文化、習慣、人情、思想はいかに教育されようとも、同化されようとも、決して変えられるものではないことを、＜私＞は趙一族の虎狩の現場で目の当たりにしたのである。

第1節で述べたように、1920年代後半から30年代にかけて日本人作家によって多く書かれた＜朝鮮もの＞に登場する朝鮮人たちは大人であれ、子供であれ、女性であれ、いずれも救いようのない社会の底辺を生きる憐れな民であった。しかも、そのイメージは時代を経るにつれて類型化・典型化していったが、これまで見てきたように、「虎狩」に描かれた朝鮮人少年は＜朝鮮もの＞に登場する朝鮮人とは全く異なる新しいタイプの朝鮮人なのであった。中島敦は読者に何を伝えようとしたのか。

## 第5節 「朝鮮もの」に対するアンチテーゼとしての「虎狩」

日韓併合を契機に、朝鮮を旅行する人たちが急増し、その体験談をまとめた旅行記が数多く出版された。しかし、日本を代表する文学者やジャーナリスト、学者たちが書き残したこれらの旅行記の特徴は、「劣ったアジアに対する優れた日本」を強調する<sup>136</sup>ものばかりであった。朝鮮人日本語作家張赫宙は、1933年に発表した「僕の文学」というエッセイの中で、日本人の描いた旅行記に見られる朝鮮認識に対して次のように述べている。

禿山の国、赭土の国、等と、朝鮮を見て行った人達の紀行文を読むと、大抵そう書いている。それは、つまり貧乏を意味し、廢頹を表現したことになる。長い煙草を啣へて悠然と動いている朝鮮の百姓を見てば、怠惰な民族と言ってしまう<sup>137</sup>。

つまり、彼らは単なる風景や人間であるはずの「禿山」「赭土」「悠然と動いている百姓」を見たまま、あるがままに捉えず、すでに日本で流布していた朝鮮人イメージ、すなわち「貧困」「頹廢」「怠惰」という言葉を介して朝鮮と朝鮮人を理解し、それを記憶として旅行記を執筆していたのである。

このような傾向は、無論旅行記に限ったことではない。1920年代後半から30年代にかけてプロレタリア文学者たちによって書かれた多くの<朝鮮もの>はまさにその典型である。しかし、中島敦は違っていた。多感な少年時代を植民地朝鮮で過ごし、家族を訪ねて満州や中国、朝鮮を繰り返して旅行していた敦は、自らの植民地体験と異なるステレオタイプの朝鮮認識が描かれている作品に違和感を覚えずにはいられなかったのであろう。

「虎狩」の最後の「7章」は、趙が失踪して15、6年後の現在、<私>は東京の町で偶然趙らしい男に出会い、彼の口を借りて燐寸とタバコの間違いについて語る場面がある。その男は私と並んで歩きながら、タバコを所望した。しかし、それを受け取ってから、自分が求めていたのはタバコではなく、燐寸であったことに気づく。そして、その間違いについて彼は次のように説明する。

<sup>136</sup> 丁貴連「もう一つの旅行記—柳宗悦の朝鮮紀行をめぐる—」『宇都宮大学国際学部研究論集第15号』(宇都宮大学国際学部、2003) 11頁。

<sup>137</sup> 張赫宙「僕の文学」『文芸首都』第1巻第1号(文芸首都社、1933) 11-12頁。

彼ははじめに自分に燐寸がないのを発見した時、誰かに会ったら燐寸をもらおうと  
考え、その考えを言葉として、「自分は人から燐寸をもらわなければならぬ」という  
言葉として、記憶の中にとって置いた。燐寸が本当に欲しいという実際的な要求の気  
持ちとして、全身的要求の感覚――へんな言葉だが、この場合こう言えば、よくわか  
るだろう、と、彼はその時、そうつけ加えた。――として記憶の中に保存しておかな  
かった。これがあの間違いの元なのだ。感覚とか感情ならば、薄れることはあっても  
混同することはないのだが、言葉や文字の記憶は正確な代わりに、どうかすると、ど  
んでもない別のものに化けていることがある。彼の記憶の中の「燐寸」という言葉、  
もしくは文字は、何時の間にかそれと関係のある「煙草」という言葉、もしくは文字  
に置き換えられてしまっていたのだ。……（略） こういう習慣はすべて概念ばかりで  
ものを考えるようになっている知識人の通弊だ、（125 頁～126 頁）

このように、趙は「燐寸」と「タバコ」の言い間違いを通して、「言葉や文字」による  
記憶は「とんでもない別のものに化けていること」を示そうとしている一方で、「感覚と  
か感情」による記憶は「薄れることはあっても混同することはない」と説明している。一  
般的に、我々はものを考える、また認識する時は、脳にあるそれらの記憶がものに的中し  
て、言葉や文字に変更して表現している。記憶自体には「感覚とか感情」そのものによる  
記憶があるが、人類の進化によって、「言葉や文字」で記憶するようになったことも一般  
的である。言葉や文字で記憶する例として、上記の張赫宙が指摘した朝鮮人に対するステ  
レオタイプの形成から窺える。

周知のように、「貧困」「頹廢」「怠惰」などの朝鮮人へのマイナスイメージが作り上げ  
られたのは日韓併合後ばかりではなく、日清戦争期（1894-1895）に遡る。日清戦争当時、  
新聞各社は戦況を取材するために、たくさんの特派員を送り出した。その中でも正岡子規、  
三宅雪嶺、国木田独歩、松原岩五郎などの文学者も多数参加し、従軍記者として記事を盛  
んに書いていた。しかし、松原を始めとする多くの記者たちは、異国の風土や建築、人々  
の生活風俗に対して素直な印象や感想を述べるよりも、現地の家屋や町の不潔さと異臭  
を強調し、それを野蛮の表象として蔑視しているのである<sup>138</sup>。なぜなら、当時、「文明国」  
の日本とは対照的に、朝鮮や清国といった隣国を「野蛮国」として位置付ける必要があっ

---

<sup>138</sup> 丁貴連『媒介者としての国木田独歩 ヨーロッパから日本へ、そして朝鮮へ』（翰林書房、2014）  
422 頁。

たからである。挙国一致で戦う雰囲気の中で、従軍記者を始め一般兵士たちの頭には、「文明」と「野蛮」という「言葉や文字」が深く刻まれ、記憶されていったことは言うまでもない。つまり、従軍記者たちは、現地の物事を客観的に書き記すのではなく、偏見や蔑視に満ちた内容の記事や日記、手紙を書いていたが、それが、そのまま家族や友達、そして読者の記憶となってしまったのである。その記憶が実体を伴わないイメージだけのものであることは言うまでもない。趙の言う「言葉や文字」による記憶が「とんでもない別のものに化けていること」はまさしくこのことを意味する。

すでに述べてきたように、「虎狩」を執筆した 1930 年代前後の文壇もまた、実際に朝鮮や朝鮮人を注意深く観察するよりも、これまで「言葉や文字」の記憶によって作られたステレオタイプの朝鮮人像しか描かれない文壇であった。このような文壇における朝鮮認識の仕方を、中島敦は「隣寸」と「タバコ」の例を通して、「概念ばかりでものを考える知識人の通弊」を否定的に捉えていたのである。

では、「虎狩」も「言葉や文字」の記憶によって作られた作品なのであるか。答えはもちろん否である。ここでは改めて「虎狩」の語り手の語り方について見てみよう。全 7 章で構成された作品は、初章と最終章を除けば、2 章から 6 章まではすべて趙についての話である。しかし、その五つの話は山下真史の言葉を借りれば、「時間的な順序だけがあって、お互いに因果関係を示せず、断片のまま<sup>139</sup>」に設置されている。そして、それぞれの物語において、語り手が可能な限り当時の場面（周りの風景も趙の表情と行動も）を還元しようとし、「感情や感覚」に忠実に語ろうとしたのである。つまり、中島敦が「虎狩」で目指したのは、まさに直接的な「感情や感覚」を通して、趙大煥をありのままに我々の前に投げ出そうとしたのではないだろうか。「言葉や文字」の記憶だけで朝鮮の現実を描いていた当時の文壇では、中島敦が描いた「虎狩」が理解されなかった所以はまさにここにあったのである。

落選作とはいえ、「虎狩」は中島敦の自信作であった。当時、中島敦は氷上英広に当てた書簡の中で腑に落ちない結果だと心情を吐露し、同年 7 月号の『文芸』に再投稿した。しかも、彼は落選した第一稿に何度も手を加え、処女作品集『光と風と夢』（1942）に収めた。これは彼が如何に「虎狩」に愛着を持っていたことかを端的に示す証拠にはほかならないが、残念ながら 1930 年前後の日本文壇には「虎狩」を理解する知見などなかった。

---

<sup>139</sup> 山下真史、前掲書（註 47）51 頁。

前述の如く、1930年代当時、大多数の日本人作家は実際朝鮮に出かけ、朝鮮人の生活に密着し、朝鮮問題に真摯に取り組んだ作品を描くよりも、新聞や雑誌などメディアが伝える情報、すなわち「文字と記憶」だけで朝鮮人像を作り上げていた。その結果、当時の日本の作家たちが描き上げた朝鮮人像は千篇一律の図式化されたものとなってしまった。しかし、中島敦は違っていた。

このように見てくると、中島敦が本格的な文壇デビューを目指して「虎狩」を執筆した所以は単なる植民政策への批判よりも、ステオタイプの朝鮮人像しか描かない当時の文壇に対して、「言葉や文字」による記憶だけで朝鮮ないし朝鮮人を認識すると、どんでもない図式化されたものに化けてしまうことに対して、警鐘を鳴らすためであったということが言えるのではないだろうか。

## おわりに

日清戦争を契機に、日本では「貧困」や「頹廢」「怠惰」に象徴される朝鮮人に対するマイナスイメージが流布し、「優れた日本」に対する「遅れた朝鮮」という見方が幅を利かせ始めた。このようなイメージは 1920 年代後半から 30 年代にかけても変わらなかった。この時期に書かれた<朝鮮もの>に登場する朝鮮人は、農民、流浪人や労働者など、いわゆる苦難に置かれた弱き朝鮮人が目立ち、一方、日本人は日本官憲や帝国日本を代弁する悪の存在として描かれていた。つまり、当時発表された<朝鮮もの>のほとんどは日本の朝鮮支配への批判がメインテーマとなっていたものが主流であった。

しかし、中島敦が書き残した<朝鮮もの>は上述した作品とは一線を画した。第 I 部で取り上げた「巡查のいる風景—1923 年の一つのスケッチ」(1929)と「虎狩」(1934)は、上述した典型化・類型化されたものではなく、年齢から性別、社会地位、立場、性格、生き方にいたるまで実に様々な人間が登場する。例えば、「巡查のいる風景」では、親日派の府会議員の候補、植民地人でありながら植民地統治の手先である巡查趙教英、民族的劣等感を持つ大学生、関東大震災の時夫を殺された娼婦金東蓮、朝鮮総督を射殺しようとした反日運動者などの朝鮮人が登場し、また日本人も傲慢な支配者から粗末な姿をした無知な女、優しい紳士などを登場させている。また、「虎狩」では誇り高い貴族の子趙大煥（「両班の末裔」）が取り上げられている。

<朝鮮もの>は、中島敦が朝鮮の中学校に通っていた時の体験を高校生と大学生の時に書いた作品である。それ故に<朝鮮もの>は発表当初から習作と見なされ、「内容的には弱点があ<sup>140</sup>り、「器用にまとめた感じ<sup>141</sup>」、「主題の重さに比べて、奇抜な表現が浮いている印象があり、成功した作品とは言えない<sup>142</sup>」など、未熟さが指摘されている。確かに初期のものは、中島敦が「巡查の居る風景—1923 年の一つのスケッチ」というタイトルをつけていたことが象徴しているように、それぞれの人物像の一側面しか描かれていない。

しかしながら、中島敦は当時の他の作家が見つめなかった植民地下の朝鮮社会を生き

<sup>140</sup> 藤村猛『「巡查のいる風景—1923 年の一つのスケッチ」論』『安田女子大学紀要 30』（安田女子大学、2002）16 頁。

<sup>141</sup> 瀬沼茂樹、前掲書（註 116）392 頁。

<sup>142</sup> 山下真史、前掲書（註 47）15 頁。

る朝鮮人と日本人に注目し、人間存在への認識は未だ浅かったとはいえ、彼らの置かれた立場と生き方を多面的に、場面を積み重ねて描き上げている。そこには、差別と反日、同化と親日、同情と迎合、矛盾と葛藤といった、善悪や支配/被支配の対立のみでは捉えきれない、植民地都市の日常に生きる複雑で多様な人間の有り様が描かれている。スケッチとはいえ、これはまだ学生であった若き中島敦の、当時としての最大の観察だと言っている。

しかしながら、この人間観察は中島敦の後の人間認識に深く関わっていく。なぜなら、中島敦のその後の〈植民地もの〉の中にも習作時期の作品に描かれた人物造型やモチーフがしばしば見られるからだ。〈中国もの〉にせよ、〈南洋もの〉にせよ、中島敦の〈植民地もの〉は、実はこの〈朝鮮もの〉から出発したのである。

一例として挙げられるのは、「巡查のいる風景—1923年の一つのスケッチ」の趙教英と「北方行」の中の登場人物権泰生との関連性である。趙教英は巡查の仕事を通して様々な植民地の現実と直面する。電車の中で無知な日本人の女に「ヨボ」と言われて抗議する朝鮮人青年に出会い、また選挙演説の際に汚いなりをした小僧に「黙れ、ヨボのくせに」と怒鳴られた親日派の府会議員を目の当たりにする。さらに、朝鮮総督の暗殺を企てた独立運動者の朝鮮人青年を自らの手で捕まえる。こうした中で、彼は重苦しい圧迫感を感じ、自我矛盾に苦しむ。その後、趙は日本人学生と朝鮮人学生との喧嘩事件をめぐる、朝鮮人学生を弁護したことが原因で免職される。そのことを契機に、彼は現実の矛盾と葛藤から目覚めていく。そして、それまで考えたこともない新たな道が次のように展開されていくのである。

ふと彼は、彼の知っている裏通りのある2階の一室のことを思い浮かべた。(中略)  
みんなが前途の希望に燃え立っているのだ。やがて彼等の中からひそひそした相談が洩れる。「京城-上海-東京」「……」……。

彼はぼんやりとこんな有り様を画いて見た。そして自分自身の惨めさをそれに比べて見た。

「どうにかしなくてはいけないのだ。とにかく。」(341頁)

引用文には具体的な事柄は明示されていないが、趙教英はおそらく独立運動に身を投げていくであろうということが暗示されている。

独立運動に加わろうとした朝鮮人の造型は、南富鎮が「中島の未完の長編『北方行』の権泰生からも窺える<sup>143</sup>」と指摘しているように、第4章で取り上げる「北方行」（1933-1936）にも見られる。「北方行」には、権泰生という朝鮮人青年が登場している。彼は貧しい家で生まれてやっとなり高等普通学校を卒業し、東京へ出奔して商売をやっていた。その後、家族を日本に呼び寄せ、貧しいながらも一家そろって生活を送るようになったが、関東大震災の際にその家族を失ってしまったのである。次の文は、彼の目の前で家族が殺される場面である。

十九歳の権泰生は、彼の耳で、母親の最後の恐怖の叫びを聞き、彼の目で恐怖と哀願を浮かべながら血にまみれた父親の断末魔の顔を見た。それから逃げ遅れて、蟻でも潰すように踏みにじられた四歳になるびっこの妹の姿をも。（192頁）

この事件を契機に、彼は日本への怨恨と憎悪の念を抱き、北京に流されて独立運動に加わっていったのである。

中島敦は関東大震災の際に朝鮮人が多く殺されたことが非常に気になったらしく、「巡査の居る風景—1923年のある一つのスケッチ」の中でも取り上げているが、家族を殺された権泰生が日本を憎悪するがあまりに独立運動家になったその感情を、中島敦は作中で次のように述べている。

僕のは、コンミュニズムや、アナキズムじゃないというんだ。（略）社会の改造なんて僕は考えたことなんか無いよ。僕の持っているのは、極く人間的な自然な憎悪と怨恨だけだよ。この復讐したいという憎悪の気持ち、自然でないだろうか、人間的でないだろうか？（243頁）

南富鎮は趙教英と権泰生が、「その現実認識の違いこそあれ、いずれも、民族という抽象的な概念からの反抗ではなく、現実の人的な当然の要求から行動していることである<sup>144</sup>」と両者の類似性について指摘している。

しかし、同じ性質を持ちながらも、その相違点も顕在する。趙は行動以前の人物であり、

<sup>143</sup> 南富鎮、前掲（註52）70頁。

<sup>144</sup> 南富鎮「中島敦の初期と朝鮮—その浮遊する朝鮮人像—」『稿本近代文学』（筑波大学、1995）86-87頁。

独立運動への願望がまだ「ぼんやり」としたもので、進むべき道の模索段階に位置しているといえる。それに対して、権は日本に対して強い怨恨と憎悪、そして復讐したい気持ちを持っており、正真正銘な反日運動者として描かれている。また、趙の抵抗は被支配者としての自分の惨めさや植民地の悲惨な現実への覚醒から出発したと言える。しかし、権のそれは人間の一般的で本能的な感情から来るものであり、より人間的真實に近い。つまり、趙教英から権泰生に至るまで、中島敦が朝鮮人に対する認識は支配/被支配といった民族レベルでのものから、普遍的な人間感情へと深まっていったのである。

ほかにも、「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ」の娼婦像は、「北方行」に登場する娼婦美代子に繋がっていく。また、府会議員の選挙演説の時、「黙れ、ヨボのくせに」と朝鮮人候補を野次る汚いなりをした小僧は、＜南洋もの＞の「雞」に登場する奸悪なマルクープ老人の悪質に相応する。そして、「虎狩」の誇り高い自尊心の持ち主である趙大煥は、のちに「山月記」（1942）の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を持つ李徴の姿へと発展していく。

このように、朝鮮体験は意識的無意識的に中島敦に影響し、後の＜植民地もの＞や＜古典もの＞にまで影響を及ぼしていったのである。李英哲の指摘を借りれば、「＜朝鮮＞こそ、作家中島敦を成立せしめたプロセスの原初段階において決定的な契機<sup>145</sup>」なのであった。

---

<sup>145</sup> 李英哲「中島敦における＜朝鮮＞—挑発する植民地—」『朝鮮大学校学報 6』（朝鮮大学校、2004）129頁。

## 第Ⅱ部 中国憧憬と冒険を求める日本人たち — 青年時代の中国・満州体験

### はじめに 1930年代における中国認識と中島敦の〈中国もの〉

第Ⅱ部では、中島敦は満州を舞台にした「D市7月叙景（一）」（1930）と中国北平を舞台にする「北方行」（1933-1936）の二作品を取り上げる。

1920年代前後、帝国日本の大陸進出とともに成立された大正ツーリズムによって、深い漢学の素養を持つ明治期に育てられた日本文化人は、中国への憧憬をもってこぞって中国を旅行し、その時の体験を書いた旅行記や小説などが新聞や雑誌の紙面を飾った。例えば、谷崎潤一郎は「秦淮の夜」（1919）、「蘇州紀行」（1919）、「廬州日記」（1919）など一連の小説を発表し、自らの「支那趣味」を表した。芥川龍之介は中国の視察旅行をもとに「北京日記抄」（1925）を執筆し、「何千年の昔からの文明<sup>146</sup>」を映し出す北京の伝統文化への深い愛着を描き出した。佐藤春夫は2週間ほどの台湾・厦門旅行を通して『南方紀行』（新潮社、1922）を書き上げ、彼の異国趣味、南への憧憬を表した。このように、1920年代前半の文化人たちは中国をエキゾチズムの対象として見ていた。

1920年代後半から1930年代初期になると、日本軍国主義気運の上昇によってプロレタリア文学が文壇を制覇した。中国大陸も慌ただしい政変下に置かれ、戦争と革命闘争が繰り返されていた。この時期に書かれた〈中国もの〉もその時流に逃れず、現代中国の革命や政治、そして人民の動向を取り組むものであった。平林たい子は「敷設列車」（1929）を通して、抑圧された苦力が日本人警備や日本人技手を反逆して職場から逃げ出す姿を描き出した。黒島伝治は反戦小説「武装せる市街」（1930）を執筆した。そして、前田河広一郎は長編小説「支那」（1930）を通して、登場人物の李刀達が被圧迫民衆の一人から青年革命家に成長するまでの物語を描き、支那の革命運動に関心を寄せていた。横光利一は長編『上海』（1932）の中で、「西欧の植民地支配下における東洋の運命」を主題にし、主人公参木の言動を通して、自らの「ナショナリズムとマルクス主義の相克に悩む姿」<sup>147</sup>を表明した。

1936年頃になると、日本軍部の侵略姿勢がさらに激しくなり、国家総動員法が公布さ

<sup>146</sup> 芥川龍之介『芥川龍之介全集8』（岩波書店、1996）3-4頁。

<sup>147</sup> 村松定孝等『近代日本文学における中国像』（有斐閣、1975）108-109頁。

れる中、文壇も戦争文学一辺倒の雰囲気にも包まれた。文学者は＜中国もの＞を多く執筆し、中国民衆に同情する気持ちをとるか、それとも戦争を肯定する態度をとるかの二者択一を迫られた。林房雄『戦争の横顔』（1937）、尾崎士郎『悲風千里』（1937）、火野葦平『麦と兵隊』（1938）などの小説がまさにそれである。

このように、当時の文壇で書かれた＜中国もの＞とその中国認識は、エキゾチズムから現代中国の革命と政治、戦争肯定などに至るまで時代の変遷に揺れ動かされていたことが指摘できる。

ところが、中島敦の＜中国もの＞はこのような時流の中で極めて特別な色を放っていた。第Ⅰ部で述べたように、中島敦は、朝鮮では日本人朝鮮人問わず彼らの生と運命を気遣った。しかし中国・満州では、彼は中国人ではなく、中国に暮らす在留日本人、しかも比較的社会的地位のあるエリートに注目し、彼らの生と運命を見つめた。彼のまなざしに変化した背景には、彼の家族関係（漢学者で大連第二中学校の漢文教師の父と、満鉄との関係がある中国通の満州国顧問の叔父比田吉など）と共に、彼自身の満鉄病院における入院生活が影響している。つまり、中島敦は現地の中国人より、大連や旅順に住んでいる家族や親戚の周辺にいる日本人と接する機会が多かったのである。

しかし、そのことが彼の＜中国もの＞を同時代の＜中国もの＞と一線を画すところとなったのは注目に値する。そこで第Ⅱ部では、中国・満州体験が生み出した「D市7月叙景（一）」（1930）と「北方行」（1933-1936）を手掛かりとして、中国に憧れ、様々な夢を見て中国大陸に飛び込んだ在留日本人の姿に注目し、彼らの生き様に迫りたい。

### 第3章 大連に生きる3つの階層 — 「D市七月叙景（一）」（1930）

#### 第1節 「D市七月叙景（一）」（1930）における創作背景

「D市七月叙景（一）」は中島敦が東京第一高等学校高校3年生の時に、学校の『校友会雑誌』（1930年1月）325号に掲載された短編小説である。作品の舞台となっているのはまだ建国される前、関東州に属している、日本の租借地の大連である。物語は3章で成り立っている。各章の主人公と言え、1章は満鉄の総裁。2章は満鉄に勤める日本人の社員。3章は中国人の苦力である。「D市七月叙景（一）」の作中時間を考えれば、1929年の7月から数ヶ月間であった<sup>148</sup>ことから、この作品はいわゆる作者と同時代で、リアルタイムで当時の中国を描いていることが窺える。当時、中国の情勢を反映する作品がほとんどいないことと合わせて考えると、貴重な存在と言えよう<sup>149</sup>。

これまでの先行研究では、「D市七月叙景（一）」から読み取れる中島敦の植民地社会の現状を見抜く鋭い眼差しに焦点を当てて論じられている。例えば、南富鎮は「D市七月叙景（一）」に見られる「社会問題への関心<sup>150</sup>」を指摘し、また川村湊は「中島敦の眼の方が、表層的ではなく、社会の構造にまで及んで深い把握をしていることは確かだろう<sup>151</sup>」と指摘している。つまり、「D市七月叙景（一）」を通して、中島敦が中国社会の実情を観察し認識したことが確かである。しかし、中島敦はあえて3つの階層を描き出し、彼らのそれぞれの1日の生き様を取り上げたのは、単なる社会問題への関心に止まらないと思われるのである。鷺只雄は「D市七月叙景（一）」は植民地D市の「単なる告発や現象批判を目指したもの」ではなく、人間認識がさらに深まったものである<sup>152</sup>と指摘しているように、この作品はD市に生きる人間存在の有様に目を向けたものであった。

では、中島敦が描くD市、つまり1930年代前後の大連市は一体どのような場所であったか。作品の分析を進める前に、まず、中島敦の中国体験の状況と時代背景、また作品の舞台となる大連の様子について見ておきたい。

<sup>148</sup> 藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」『安田女子大学紀要34』（安田女子大学、2006）3頁。

<sup>149</sup> 閻瑜、前掲書（註3）90頁。

<sup>150</sup> 南富鎮、前掲（註52）72頁。

<sup>151</sup> 川村湊「大連とハルピン」『中島敦伝第3回』（紀伊國書店評論、2004）。

<sup>152</sup> 鷺只雄、前掲書（註45）67-76頁。

序章で述べてきたように、34歳で世を去った中島敦は、その短い人生の中で何度も中国・満州へ渡っている。年譜によると、彼は1924年、1925年、1927年、1932年、1936年の5回で中国の東北地方や、江南地方へ行った記録が残っている<sup>153</sup>。しかし実際、残された記録より彼はより多くの回数で中国へ足を運んでいる。最初に行ったのは1924年夏、関正献・山本洗の従兄達と旅順の比多吉叔父宅に一ヶ月ほどいた<sup>154</sup>。また1925年5月、京城中学校（現ソウル高等学校）の修学旅行で南満州を旅行する。この年の10月、父、中島田人は京城龍山中学校の教諭をやめ、家族連れで関東庁立大連第二中学校（1931年退職し帰国）に勤務することとなる。そのため、東京の高校、大学へ通学している中島敦は毎年大連へ足を運び、帰省するようになった。それに、1927年8月帰省中の彼は湿性肋膜炎にかかり大連の満鉄病院（その後別府の満鉄療養所に移り、さらに千葉県まで転地療養した）に入院し、一年間休学した<sup>155</sup>ことから、大連は彼にとって住み慣れた都市と言えるだろう。

大連のほかに、中島敦は中国の北方と南方にも旅行した。1932年8月、当時旅順に赴任していた伯父の中島比多吉を頼って、大学3年生の中島敦は旅順、大連などの南満州、及び天津、北平（現在北京）などの中国北部を旅行した<sup>156</sup>。さらに1936年にも蘇州、杭州、上海をめぐる南方旅行を行ったのである。

このように、中島敦の1924年から1936年にかけて頻繁に中国に渡っていることがよくわかるだろう。20、30年代中国の時代状況を見てみると、まさに変動が多く、不安定な状況に置かれていた時期である。内部には1926年に北伐戦争が始まり、1927年に国民党と共産党との合作が破綻し、軍閥間の戦争が相次ぎ、そして1928年に南京政府は北伐を再開し、その後も断続的に対立状態が続くという、軍閥、国民革命軍、赤軍の勢力による政局の四分五裂、またお互いに戦争や軍事衝突を通して政権を争っている時期であり、外部にはソ連、英、米、日本がそれぞれ中国を支配するために、各勢力の後押しをし、勢力分割を拡大しつつある時でもある。そのうち日本は、1905年日露戦争の勝利により、徐々に中国への支配を進め、1932年3月傀儡国家の満州国が成立するに至った。そして日露戦争の激戦地であり、たくさんの政府機関が置かれた旅順、大連はまさに日本が東北

---

<sup>153</sup> 中島敦、前掲書（註25）447-450頁。

<sup>154</sup> 莊島ケイ子「敦と私」高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊『中島敦全集別巻』（筑摩書房、2002）236頁。

<sup>155</sup> 中島敦、前掲書（註25）448頁。

<sup>156</sup> 川村湊、前掲（註20）30頁。

地方における植民地統治の大本営となったのである。

中島敦はこのような時代状況の中で、8年間大連と日本とを往復し続けたのである。日本の植民地時代の大連は、ロシア時代に残された棲み分けの原則が採られ、西欧人町であった場所には日本人が住み変わり、大連市の中心に位置する円形広場を大広場（【図 6】）に変え、広場を取り囲むように大連市役所、大連警察署、ヤマトホテル、横浜正金銀行、朝鮮銀行、イギリス大使館、東洋拓殖会社など重要な施設が次々と新しく建てられていた。また、鉄道建設、東洋一の下水道、路面電車、電気ガスの供給など都市基盤整備を整い、大連と満州の玄関である大連港の港湾建設にも力を注いだ。大連はまさに国際的な商港都市として作りあげたのである。



【図 6】大連の中央大広場<sup>157</sup>

一方、このような実体験とともに、彼の心の中で中国に対して、また一層複雑な感情がある。周知の通り、中島敦は漢学名門育ちで、幼い頃から漢学の素養が高いとよく言われる。しかもその素養は、本格的に伯父達や父から句読を受けるのではなく、幼くして彼等の姿を見、そして無意識中に彼の血統の中、また魂の中に受け継がれたものである。孫樹林氏は「中島一族の血液に浸透している漢学素養、儒学思想が、祖父の撫山より、斗南伯父を経て、自分自身にまで伝わっているのである<sup>158</sup>」と指摘している。氏の主張したよ

<sup>157</sup> 西井一夫『決定版 昭和史 別巻 I』（毎日新聞社、1999）35 頁。

<sup>158</sup> 孫樹林「中島敦〈斗南先生論〉—東洋精神の博物館の標本」『国文学攷 181』（広島大学国語国文学

うに、祖父や伯父達から中島敦へという血の流れで漢学への愛好が子供の頃からすでに心の中で植え付けられていた。しかも、その愛好は強制的に押し付けられたものではなく、心から愛し、みずから積極的に漢籍や漢文を勉強したものである。つまり、中国への親しみと憧れは子供の頃から養われてきて、内面化したものであると言えよう。

このように、中国への愛好を内在化し、中国に憧れを抱いている彼の目にはどのような大連が映ったのか。また中国体験を通して精神世界がどのように変わり、そしてこれからの文学創作に影響を与えたかについて、以下はテキストにおける 3 つの階層の登場人物の分析を通して浮き彫りにする。

## 第2節 権力に不安を持つ満鉄総裁

第1章の主人公はM社総裁のY氏である。彼は「関東州だけの行政権を持っているに過ぎない関東庁長官などの威勢は、とても彼の足下にも及ばなかった」「南満州の王様」として描かれる。周りの人はすべて彼に頭を下げ、彼によって行動する存在でしかないと想像される。しかし、中島敦はこのような最上層にいながら高い権力を持ちすべてを支配するにふさわしい彼の様子を描いていない。作中のY氏の人間像は総裁という立場でありながら、吃逆に振り回されて苦しむという姿に代表されるように俗な存在にほかならない。

物語は、総裁Y氏が吃逆に襲われる場面から始まる。一晩中吃逆が止まらず、夜を明かした彼が、邸中の者すべてを巻き込み大騒動を巻き起こすのである。吃逆のため彼は食事も睡眠も満足に取れなかったばかりか、自分の態度まで自意識によってコントロールできない状態に陥ってしまう。

別に急ぎもしないのに、彼はしきりにイライラして夫人や女中達を叱り飛ばした、彼自らも、このような性急さは彼の様な大総裁の態度としてふさわしくないことに気がついてはいたが、この場合この意識は却って彼を一層いらだたせるのであった

159。

---

会、2004) 10 頁。

159 中島敦「D市七月叙景（一）」『中島敦全集 2』（筑摩書房、2001）82 頁、以下頁のみ。

その他にも運転手や小間使いなど罪のない周りの人を理由もなく怒鳴りつけた。このただの生理的現象に過ぎない吃逆は止まることなく十時間も続き、実に凄まじいものとして描き出されていく。

残虐で奇妙な発作はほとんど 60 秒毎に彼を襲い、彼の神経を怯えさせ、彼の全身の筋肉の震動に起こさせた。あまり頻繁なので終いには胃のどこかに疼痛さえ感ずるようになった。(83 頁)

つまり、彼はこの生理的な吃逆にコントロールされるうちに自らの醜さを暴露せざるを得なくなり、大総裁の態度として相応しくないことに気づきながらも、「大総裁」でない人間像を露呈させている。彼は「この痛烈な全身的の震動にはすっかり手こずってしまった」のである。さらに、彼はいつかまた出てくるか分からない吃逆のため、精神的に憶病、不安、恐怖に苦しむようになっていく。

彼はじくじく額から湧き上がってくる汗をハンカチで拭いながら、片手で臆病そうに、鳩尾のあたりを押さえてみた。(中略)

彼は恐る恐る指先で胃の上部をそっと押してみた。どうやら何ともない様子である。彼はほっと息をついて、初めて椅子に腰を下ろした。長い間、抜けなかった刺が分けなく、取れた気持ちであった。(84-85 頁)

このように、作中では中島敦が描く満州の王様は、王様としての権威や冷徹さを見せず、却って吃逆という自分の身体の内側に起こる不随筋の痙攣によって悩まされ、振り回され、そして自意識によってコントロールできない状態に陥る俗な人間像として描かれることが明らかになった。

また、先ほども指摘した通り、「D市七月叙景(一)」はリアルタイムで当時の時代を表しているものである。作品にはM社、Y氏、T内閣とぼかしているが、



実はモデルがあった。これまでの先行研究でもすでに指摘 **【図 7】 山本条太郎**<sup>160</sup>

されているように、作品の書かれた時期と内容によると、M者総裁のY氏のモデルは1927年から1929年まで南満州鉄道株式会社10代目の総裁だった山本条太郎だと推測できる。彼は満鉄中興の祖と呼ばれ、またその名称にふさわしい実績を挙げた人物として知られている。しかし、「南満州の王様」と呼ばれる一方で、順調に事業経営を進めていたにもかかわらず、彼は現実の政治の力の前で、自らが満州で得た地位と事業にあっけなく終止符を打つことになる。

作品において「あの重大事件のこと」、「かつてなかった程の不評を蒙ったT内閣」、また彼の辞任の挨拶の草稿について言及している。安福智行は作中に出てきたK時報に掲載されたあの重大事件についての場面は満州日報1929年8月18日付朝刊の記事を参考にしと指摘した<sup>161</sup>。その記事によれば、あの重大事件とは当時の日本政府が一般国民にはその真相を秘匿しようとして、国内の新聞やメディアにおいては「満州某重大事件」と称した、いわゆる1928年6月4日関東軍の謀略による張作霖の爆殺事件である。東京朝日新聞市内版昭和4年6月5日付、奉天特派員の報道によると、これらはことごとく「綿密を極めた便衣隊の所業」と主張し、また6日同新聞には「我警備隊には責任全然なし」という大きなタイトルで陸軍省の立場表明をしている。事件の真実が戦後になって初めて公表されたものなので、当時の中島敦も一般国民と同じく新聞などメディアに振り回される側であり、真相を知るはずはないのだが、ただ中島はこの事件について疑問を持っているように見える。作品の中で「あの重大事件」の新聞掲載について描かれた場面がある。S理事が、K時報という支那新聞があのだ重大事件のことをまた誇張し、例の打倒日本帝国主義を付け加えて書いているとのことである。それを聞かれたM総裁の行動は以下のように表現する。

「馬鹿な、そんなことが。」と総裁は慌てて、火でも消し止めるように手を振り回しながら云った。彼はこんな芝居には慣れ過ぎていた。あまり慣れているために、仲間同時の普通の場合にでも、つい、習慣的に芝居をしてしまうのであった。(84頁)

<sup>160</sup> 原安三郎『山本条太郎翁追憶録』(山本条太郎翁伝記編纂会、1936)。

<sup>161</sup> 『満州日報』1929年8月18日付朝刊の「排日紙『醒時報』/捏造記事を掲ぐ/付属地では発売禁止」という記事で、「奉天の排日紙醒時報は本日の紙面より<日本人張作霖謀殺>と題する見出しの下に張作霖氏の爆死は日本の謀計なる如く捏造し猛烈なる排日的文字を羅列し今後連載することとなった。」安福智行「<D市七月叙景(一)>論-<満州日報>-を視座として」『京都語文8』(佛教大学、2001)75頁参考。

彼の行為を「あわて」ることと形容し、また「芝居」と表現しているのは、まさに事件の背後にあるものを想像させる意図による表現であると言ってよいだろう。また後年執筆された「北方行」(1933-1936)の中でも「張作霖が奉天へ逃げ出す途中で怪死を遂げた」という表現を使っている。それは事件の原因が謎であることを明示し、疑惑を強調することであった<sup>162</sup>。つまり中島敦はこの事件に対する日本側の報道に不信感を抱いていることが伺える。

一方、日本国内ではこの事件の責任処理をめぐって当時の田中義一首相が、昭和天皇から叱責を受け内閣(作中のT内閣のモデル)を瓦解することとなった<sup>163</sup>。そしてT内閣によって「現在のこの地位に用い」、また「内閣が変わるとその余波で満鉄の上層部も入れ替わるといった政党内閣の弊害<sup>164</sup>」に振り回される山本総裁は満鉄から去らなければならない結果となる。ただ作品に出てきたのはまだ総裁の「辞任の挨拶の草稿」を準備している段階である。この「辞任の挨拶の草稿」は、「満州日報」掲載の記事と、ほとんど同じ<sup>165</sup>であるという指摘がある。中島敦は作品にリアリティを持たすために新聞の記事を参照にしたのだろう。

つまり、関東軍の暴走により張作霖爆死事件が発生し、そしてその責任処理のため田中内閣が瓦解し、それにより満鉄総裁は辞任の道を余儀なくされる。これは、いわば身体内部の未知でコントロールできない吃逆に振り回されるように、権力者内部という身内の陰謀に左右される不自由な人間、Y氏の状況なのである。「南満州の王様」といっても、いつ来るか予想できない吃逆に悩まされ、また政治や陰謀に振り回される運命に翻弄される人間なのである。中島敦は吃逆に苦しむ満鉄総裁を劇画化し、比喩的な描き方によって、鋭い眼差しで陰謀と欲望に満ちた植民地の現実を看破し、植民地支配への否定と疑問を表している。日本の植民地下に置かれた朝鮮半島で長年生活していた彼は中国体験によってその疑問をさらに深めたに違いないだろう。

### 第3節 生活に不安を抱く渡満者

<sup>162</sup> 渡辺ルリ、前掲(註17)110頁。

<sup>163</sup> 加藤聖文『満鉄全史<国策会社>の全貌』(講談社、2006)108頁。

<sup>164</sup> 同上、87頁。

<sup>165</sup> 安福智行、前掲(註161)75頁。

そして第 2 章に登場するのは、満鉄に勤める中年日本人社員と彼の家族一妻と 4 人の子供一である。作品はこの一家の D 市近郊の海水浴場の貸別荘で一夏を送る姿が描かれる。場面はよく晴れた日に、「5 つ位の男」、「小さい姉」と「18、19 の身体の大きい青年」の長男が奇麗な大連海岸にて砂遊びというほほえましい情景から始まる。その後も、一家の船での蟹釣りをする様子、畑のトマト狩り、また子供達の楽しい遊びなどが描かれる。人がうらやむほど幸せな一家の団欒と睦まじさである。それはまさに当時多くの夢を抱いて渡満する日本人の理想的な生活ともいえるだろう。その中年社員は満州に渡って満鉄に入り、初めてこのような生活を手に入れ、それまでにない幸福を感じている。

彼は、いつの間にか、もう十五年ほど前の東京での生活を思い出していた。父親のなかった貧しい彼は（これとてあまり豊かでない）今の妻の家から金をだしてもらって、やっと高等専門学校を出ると、すぐに、お決まりの下級会社員の生活であった。（中略）それから、今の長男が生まれると間もなく、知人の伝手で、この苦しい生活から逃げるように満州に飛び立ったのであった。生活は予想以上に楽であった。収入は内地の其れにほとんど倍した。彼は其れ以外、この M 社を離れなかった。そして今ではこの社員クラブの書記長を勤めていた。内地で、一生、いくら勤めた所で、とても、今の自分位の生活は出来なかったろうに、と、彼自身時々、非常に満足をして考えてみる程だった。（94-95 頁）

15 年前、下級のサラリーマンで貧しい生活をした彼が、満州にやってきて、給料が増え、外地手当が加算されるという好待遇<sup>166</sup>を以て、D 市で「極楽」を感じている。また、満鉄では福利厚生や住宅、病院、ホテルなどの施設が充実していて、多くの満州移住の日本人にとって、満州での生活はレベルアップに繋がった<sup>167</sup>。

彼のような日本よりよい生活を求めるために夢を抱いて渡満してきた日本人は少なくはなかった。そもそも満州への日本人移民の送出を呼んだ代表的な論者は初代満鉄総裁に就任した後藤新平であった。彼は 50 もしくは 100 万人の日本人を満州に送り込むことを提唱した<sup>168</sup>。ただ満州へ行けば成功や出世に繋がるとか、一般国民の立場で移民のこ

<sup>166</sup> 川村湊『満州国 砂上の楼閣「満州国」に抱いた野望』（現代書館、2011）99 頁。

<sup>167</sup> 同上、100 頁。

<sup>168</sup> 塚瀬進『満州の日本人』（吉川弘文館、2004）37 頁。

とを考えていたのではなく、多数の日本人を満州に移住させれば、「満州ハ事実上帝国ノ領土トナリ、後年還付ノ場合ニ於テモ我ノ利益ハ確定不動<sup>169</sup>」となるという考えが目的の根本にあった。つまり、満州移民の政策は権力者による満州権益の強化に繋がる発想だったのは言うまでもない。

勿論、これは裏話で表には国民に対して満州の夢を作りあげた。夢のような成功談が日本中に流布、浸透し<sup>170</sup>、多くの人々の目を光らせたのである。そして第一次世界大戦により日本政府が満州で獲得した新権益をきっかけにして、1916年以後在満日本人は増え、1929年時点には約216,000人を越えるに至った。その中には、大連に住む在満日本人が40%を占めており、最も多かった<sup>171</sup>。しかし、「新天地」に来たとしても、現実には残酷である。主人公のように成功を遂げた日本人は極めて少なかった。西澤泰彦はこれについて以下のように述べている。

異民族支配の上に成り立つ大連の経済には、国内よりも厳しい条件が待ち受けていたことは想像に難くない。(中略)「大連の夢」という自らの繁栄をつかんだのはほんの一握りの人々であり、資力も人脈もない日本人の多くは、夢とは裏腹に落ちぶれていくという現実があった。日本を出る時、周囲の期待を背負ってきた者、あるいは多額の借金をしてきた人達は、「功成らずば帰るには帰れず」路頭に迷うほかなかった<sup>172</sup>。

しかも、同じく満鉄の社員と言っても、その差が大きかった。満鉄は傭員という名称の人員と、1915年から儲けられた雇員を加えて、職員—雇員—傭員というランクが厳然と分けられた会社であった<sup>173</sup>。職員より低いランクの傭員は日本国内で住んでいた住宅より劣悪な社宅をあてがわれ<sup>174</sup>、子供におもちゃの一つも買ってやることができな<sup>175</sup>い、みすばらしい生活に苦しまされることとなった。彼等は満州で一種の徒労感と彷徨を覚えたに違いない。ある意味では、彼等は権力者の欲望に騙された人間である。この不安と

169 田川真理子「満州移民事業の理念と現実<前篇>」『言葉と文化4』（名古屋大学、2003）247頁。

170 西澤泰彦『図説大連都市物語』（河出書房新社、1999）74頁。

171 塚瀬進、前掲書（註168）46-47頁。

172 西澤泰彦、前掲書（註170）74頁。

173 塚瀬進、前掲書（註168）30頁。

174 同上、61頁。

175 同上、177頁。

浮遊感覚は、D市で想像以上に幸せに暮らしている満鉄社員ですら感じていたのである。

しかし、ずっと不如意な生活に慣れてきた者は、幸福な生活に入ってから、そんな幸福にほんとうに自分が値するかどうかを臆病そうに疑って見るものだ。そして、さらに滑稽なことに、その幸福の保証のために、時々小さな心配や苦労をさえ必要とすることもあるのである。(95頁)

彼の不安と臆病な心に存在するものとは、ようやくつかんだ幸福な生活がいつなくなるか予想できないことにある。なぜなら、彼の幸せな生活は自ら必死に努力して得た結果ではなく、被植民地で權益を奪い続ける満鉄への依存によって与えられたものにほかならないからである。1929年時点では、在満日本人20万人の内、90%近くの人口が関東州(49.6%)と満鉄付属地(43.0%)という限定された場所で生活し<sup>176</sup>、そしてその半分をしめたのは満鉄の社員とその家族<sup>177</sup>であった。つまり彼等は小さい空間に閉じ込められ、生活のすべてが満鉄の影響下に置かれていたのである。国内政争や満州をめぐる政治経済情勢の変化に大きく影響を及ぼす植民地的色彩の濃い満鉄に付随される以上、当然彼らの生活もそれに左右される。つまり、その不安は植民地生活そのものへの不安と怯えでもある。それゆえ、15年間大連に住んでいても、長男は「いずれ東京あたりの高等学校でも受けるつもり」であるし、彼も一度もここに骨を埋めるつもりはなかった。

こうして満州は彼にとって、極楽であった。にもかかわらず、彼は、子供達ももう少し成長するのを待って、日本に帰ろうとしているのである。まだ日本を知らない子供達に、彼等の父の生まれた国を見せるために、雨戸というもの、東屋、築山というものを見せるために、それから、老年は、どうしても彼の故郷の蜜柑と小川と遠い海とのささやかな風景の中に小さな家でもたてて暮らしたいという彼自身のいかにも日本人らしい望みのために……(95-96頁)

このような考え方は主人公一人のものではない。当時在満日本人社会の一つの特徴であり、在満日本人にとって集合的な記憶であると言ってよい。塚瀬進はこれについて以下の

---

<sup>176</sup> 塚瀬進、前掲書(註168)46-47頁。

<sup>177</sup> 同上、50頁。

ように指摘する。

渡満した日本人の多くは満州に骨を埋める覚悟がなく、やがて日本に戻ることを念頭に置いていた。(中略) 渡満の目的は永住ではなく、金を稼ぐことにあったので、目的を達成すれば帰国するのは当然の選択であった<sup>178</sup>。

つまり、彼等にとって満州はただの出稼ぎ先であり、一時的な滞在地に過ぎないことが伺えるだろう。その考え方もまた彼等の根無し草の不安意識に発車をかける。

以上述べてきたように、第2章では不安な渡満者の姿が描かれる。彼はD市で極楽を感じながらも臆病と疑惑に落ちる。なぜなら、彼の生活は自らの意識によって充実につかんだ生活ではなく、いつ消えて行くか見当がつかないものであり、そこにある幸福も不幸も政局に左右されるものだからである。一見自由で楽な生活をしていたように見えても、実は権力者の欲望に振り回される不自由な存在でしかないのである。1章の吃逆に振り回される不自由な満鉄総裁のように、2章においても、中島敦は人間の心の機微に注目し、幻のような植民地空間を暴露している。

#### 第4節 生きることに不安を感じる苦力

最後に3章で登場する二人の満人苦力の話を見してみる。

不況によって働き口を失い、二人はD市七月の午後の日差しにあえいでいた港で仕事を探す。しかしあちこち探したが、到頭見つからなかった彼等はお金がなく、行く場所もなく町中をふらふらする。第1章と第2章で描かれた綺麗な海岸、町中の自然や美しい市街などとは違って、苦力を取り巻く風景はまるで別世界のように一変した。「ひどく蒸れた尿臭のする狭い横町」、「屠られた豚の血と、金蠅と、青臭く涸れた溝」と「黄や赤のすすけた招牌」の間、また「痔疾や性病の薬の広告」の側において、二人が見かけたのが同じく下層被植民地人の売春婦たち、職人、商人、苦力と乞食などであった。彼等は近代の商業都市としてのモダン都市大連に属さない、否、属することができなかった。どこへ行っても厄介ものであり疎まれる存在でしかない。

---

<sup>178</sup> 塚瀬進、前掲書(註168)171-172頁。

社会のもっとも底辺の被植民地人として苦力が受ける差別、蔑視、そして搾取される生活は苦しくて悲惨である。貧困に迫られ、明日を生きて行くために自ら欲しないことであってもしなければならなかった。その中の一人の苦力は今のどうにもならない事情を考え、自身の過去を回想する。

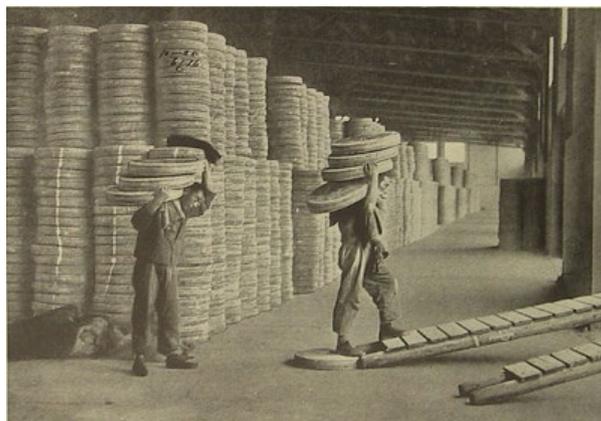
一体、俺は、どうなるのだろう。また、この前の時のように、三日間、飲まず食わずで、とうとう警察署の前でわざと乱暴を働いて、やっと留置場で飯にありつけよう様では、全く敵わないが、・・・・・・・・(101頁)

途方に暮れて仕方なくあえて道徳に反することをやってしまう。そして今日一日中また何も食べていない二人はある飲食店の「厨房の中から熱い臍物の揚げ物の匂い」に誘われて、空腹に耐えられず、「何とかなるさ、食ってしまえば」と、ついに無銭飲食をする。結局満腹になり酔っぱらった二人は亭主に白昼の道路に投げ出された。

「失せろ！この、いんちき野郎奴。」

彼は力を込めて、二人の腰のあたりを蹴っ飛ばした。二人は、だらしなく土間の上に転がった。亭主は、其れを追いかけて、二人の襟首を両手で掴むと、戸口から、眩しい往来に力一杯抛り出した。(103-104頁)

彼等は時代、植民地政策の被害者であり、本来はD市の主人公であるべきだが、迫害を受け不合理な軽蔑（差別）を与えられている<sup>179</sup>。近代モダン都市大連において、最下層の苦力達はこの空間の余計なものとして、人間性さえ認められず、明日の見えない日々だけが長く続いている。彼らのような苦力



【図8】大連埠頭苦力の豆粕搬出<sup>180</sup>

は、植民地満州の至るところまで散在する。この苦力の多くは中国の山東省から渡ってき

<sup>179</sup> 藤村猛、前掲（註148）7頁。

<sup>180</sup> 西澤泰彦、前掲書（註170）75頁。

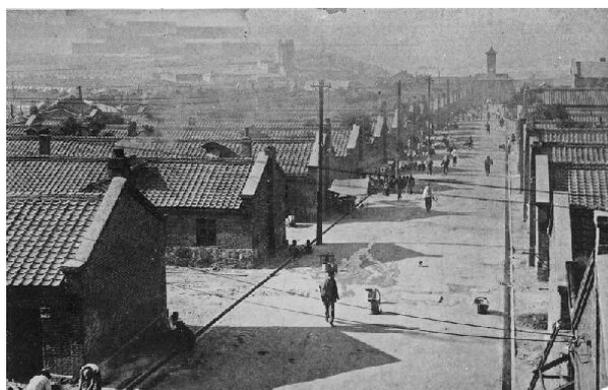
た人々である。安定的な生活を求めて、またお金を稼ぐ為に移民してきたが、ここでは成功が彼達と無縁なものであり、居場所さえなかったのである。結局、彼らが単純な力仕事に従事する苦力になったのも当然の成り行きであった。豆粕を



【図9】大連港の苦力<sup>181</sup>

運ぶ苦力（【図8】）もいるし、船へ荷物を積み込む苦力もいる。特に大連港の荷役に従事していた苦力（【図9】

だけで2万人ほどがいると言われている。彼等のほとんどは短期間の契約労働者で、生活条件が悪い。そして、権力者がそれらの苦力を一元化、全面的に支配するために、苦力収容所まで建設した。表面的には苦力を住居させ、生活状況を改善させるかに見えたが、



【図10】大連苦力収容所碧山荘<sup>182</sup>

実際には一人あたり一坪にも満たない居住空間の提供<sup>183</sup>は彼等を奴隷扱いにし、また徹底的に管理、支配した。

【表1】民族別の賃金（単位：銀円）<sup>184</sup>

一方、同じく肉体労働者といっても、日本人と中国人の賃金の差は大きかった。【表1】は1926年7月大連にいた肉体労働に属する職業の賃金について示すものである。表から分かるように、どの職業から見ても日本人と中国人の賃

職業	民族	大連
大工	日本人	3.0
	中国人	1.0
ペンキ職	日本人	2.7
	中国人	1.0
鍛冶職	日本人	3.0
	中国人	0.9
活版職	日本人	2.2
	中国人	0.9

金差には2-3倍がある。つまり、極めて不公平で苦痛な生活を送らざるを得ないのが彼等の現状であった。

<sup>181</sup> 「満州写真館 苦力」 <http://www.geocities.jp> (2018/9/1 検索)。

<sup>182</sup> 「満州写真館 苦力」 <http://www.geocities.jp> (2018/9/1 検索)。

<sup>183</sup> 西澤泰彦、前掲書（註170）75頁。

<sup>184</sup> 塚瀬進、前掲書（註168）193頁。

しかし、作中の二人の苦力はこのような一般的な肉体労働者にも及ばなかった。彼等は働き口も、お金も、行き場も何もなく、これ以上なく悲惨な生活をしているのである。彼等は空腹さえ満たされれば、それ以上の望みはなかった。

投げ出された二人は投げ出されたままの姿勢で、重なりあって倒れたまま、動かなかった。彼等はいい気持ちになっていた。殴られた節節の痛みを除けば、すべてが満ち足りた感じであった。腹は張っているし、アルコールは程よく全身に廻っている。一体、これ以上の何が要ろう？（中略）

二人は白い埃と彼等自身の顔から流れている血の匂いとを嗅ぎながら、ひどくいい気持ちで、重なり合ったまま、こんこんと眠りに落ちていった。（104頁）

二人は無銭飲食をして殴られて道に放り出されてもこれ以上なく満足を覚えている。植民地支配によって不合理な差別を受け、また生きることに迫られ、第2章の日本人社員が日本にいた時以上の悲惨な状況に陥っている。どこにも逃げる道がない存在である。再下層の苦力より自由意志がなく、不自由極まる人間はどこにいるだろうか。この時期に満州へ渡るほとんどの日本人が目当たりにした苦力は人間としてではなく、一つの風景として、また動物としてもっとも厄介な存在であったことは言うまでもない。しかし、中島敦は彼等を主人公として描き、下層労働者—いわゆる人間として見ていることに彼の人道主義的な面が表われていると見ることができる。彼は極めて繊細な観察力と描写で彼等の苦しみを表現し、そして最下層の苦力に同情を示した。

以上のように、D市に住む3つの階層を分析してきた。第1章の満鉄総裁は身内の吃逆に振り回されて「大総裁」にふさわしくない態度を表出しているように、彼は「南満州の王様」であっても、結局国内政争、身内の暴走により辞任に追い込まれる不自由な人間である。また第2章の渡満者は、D市に来て満鉄社員になり想像以上の幸せな生活を送っているが、植民地での生活を続ける限り、その幸せがいつかなくなるかという不安に苛まれ、自らの生活を自分の手で掴めない不自由な存在として描かれる。さらに第3章の二人の苦力はそのすべてが植民地支配によってコントロールされ、単に生きることさえこれ以上なく贅沢なことであるという自由意識のない人間にほかならない。

つまり、一見植民地大連にいる3つの無関係な階層であるが、実にこの満州社会において、それら全てが不自由な人間であり、自らの意識によって動いているのではない点で共

通している。言い換えれば、植民地満州にいる人間はみな植民地支配そのものに操られて、操り人形のような存在ではないかと思われる。次の一刻は如何なる運命に翻弄されるのか、自らの人生をコントロールできない不確かさ。それは中島敦の植民地政策の野蛮さへの否定と批判であると同時に、中国体験において初めて、運命の悪意と人間存在の不確かさを植民地満州にいる人間の観察を通して意識したのである。

そして、これらの観察と発見によって、中島敦の精神世界も変わりつつある。上述でも指摘したように、中国は彼にとって特別な場所であり、憧れの地である。漢学と中国の歴史文化は、中島敦の付き物のように彼の体と共存している。英雄が登場し、長い歴史をもち、輝かしい文明と文化を擁していた中国は、彼の心に描かれている世界であった。しかし、現実はどうだったろうか。陰謀、差別、圧迫、混乱、不安定、悲惨に満ちた世界は中島敦が目当たりにした現実である。彼は一方で中国を愛しながら、一方で中国を否定しなければならなかった。つまり高校時代の中国体験によって、「こんこんと眠りに落ちて行」く中国の現実に、失望感と憧れの崩壊を覚えたのだらう。

中国への関心を持つ芥川龍之介は中国に旅した後、「現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉墮落しているではないか？（中略）私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない<sup>185</sup>」と述べている。彼は中国への愛は一種の外向けの攻撃と蔑視に変えたが、中島敦の場合は中国への親しみが彼の体に根付いて簡単には抜け出すことができなかった。それと、彼の自己を責める性質のためでもあるが、中国の現実を意識した時、内向けの自我への不安と懷疑に変えたのである。彼は中国を否定すると同時に、自我も否定しなければならなかった。これは他者の存在の不確かさを感じる一方、自己、あるいは人間存在そのものの不安と懷疑をも感じなければならなかったのだといえよう。

## 第5節 人間存在への追及

1926年、中島敦は5年半に渡る人生初めての植民地体験—朝鮮体験を終えた。第I部でも述べたように、少年時代のこの体験は彼の生涯に大きな影響を及ぼしたことがわかる。そしてこれによって「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」（1929）という習作が執筆された。この作品においては、日本人と朝鮮人を同じ場面に置き、民族の対立

---

<sup>185</sup> 芥川龍之介「長江遊記」[https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/51216\\_56022.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/51216_56022.html) (2018/9/1 検索)。

をストレートに描き、植民地社会の矛盾と現実を様々な人間像を通して暴露する所が評価されている。少年時代の植民地朝鮮体験により彼は植民地の現実を発見し、また日本政府の植民地支配への疑問が芽生え始めたのである。

ただし、これらの民族の相克や植民地支配の悪や歪みより、「D市七月叙景（一）」においては、植民地社会の3つの階層を見出し、彼等ほどのように存在しているのかを機微にまで描いていることが窺える。それは、陰謀に満ちたまぼろしの満州、また被害者としての苦力達の悲惨な生活を見た時に植民地支配の野蛮さを再認識しただけではなく、その特別な社会における人間存在そのものに目を引かれた証ではないか。つまり、中国体験は朝鮮体験に比べると植民地支配への疑問や、また人間認識と人間存在の不安と不確かさがより深まったのだと言えるのではないだろうか。

中島敦の大学時代は沈黙の時代と言われている。高校時代の盛んな創作欲とは正反対に、大学ではほとんど書かず、活字として発表される作品は一篇もなかった。1932年頃に書かれたと思われる「断片十一」において中島敦は、自らの生活における変化に気づいた。

いつの間にか、内部まで変蝕してしまっていたのである。その野沢に行った前後、いや、もう少し詳しくいうと、さらにそれから半年ばかり以前。其の頃から私の生活の変化が次第に起こり始めた。それは私が、高等学校を卒えて、大学に入った年の春→夏にかけて始まった<sup>186</sup>。

「内部までの変蝕」というのは、1930年代前半の中島敦が中国体験を通して、高校時代の社会的な関心から、内面的な人生、生命、自己という観念的なものに悩まされるようになることであろう。子供の頃の植民地朝鮮体験によって中島敦はその人間社会の様々な悪に目覚め、また見た現実と人間に疑問を感じ始め、そして高校時代の中国体験によって彼の心の疑問はより深まり、さらに漢学との複雑な感情や人間の背後にある世界への発見から自己の身体に存在する矛盾にも意識を向けるようになった。大学時代の三年間こそ彼が自己と他者についてゆっくりと思考した時期だと思われる。

そして、1933年卒業後取りかかった「斗南先生」で描かれるのは、他者への観察を通

---

<sup>186</sup> 中島敦「断片十一」『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）341頁。

して自己を発見するものであり、「北方行」においては自我の屈折した感情が表出し、そして「虎狩」にも他者と自我の認識が描かれていくのである。さらに、後年の「カメレオンの日記」(1936)と「狼疾記」(1936)には、灰色で苦悶な雰囲気漂い、一種の哲学的懐疑、また人間存在の不安など極めて屈折した自己像が書き込まれたのである。中島敦は中国体験によって初めて植民地社会に生きる人間存在に気づき、そしてそれらがその後の創作のテーマとなり、段段作家として成熟していくのである。

#### 第4章 1930年の北京に暮らす日本人居留民たちー「北方行」(1933-1936)

明治期、身分も職業も渡航目的も全く違っていた数多くの日本人たちは、日本内地では決して実現できない数々の「夢」を抱えて中国大陸に向かった<sup>187</sup>。彼らの生活は、その厳しさとともに、豊かさと可能性が強調されて日本国内でしばしば取り上げられた。そして、その「成功物語」はやがて新たな「冒険者」の渡航を呼び続け、また多くの国内の日本人に大陸での生活に憧れを抱かせることになった。このような時代背景の下で、1920年代になると、帝国日本の大陸進出とともに成立された大正ツーリズムによって、谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、村松梢風、阿部知二、横光利一などの文化人が中国への憧れを持ってこぞって中国に旅行し、様々な旅行記や文学作品を執筆したものが新聞や雑誌に掲載された。こうした動きが、さらに多くの日本人の中国への憧れを呼び起こした。彼らは広大な中国大陸に夢や希望を託し、自己実現を目指して新天地を求めた。あるものは1人で渡航し、あるものは家族を連れて向こうに飛び込んだ。そして、その中国憧憬を持つ一人の中に中島敦がいた。

周知のように、中島敦は少年時代から朝鮮、青年時代に中国、さらに晩年には南洋群島へ出かけた。彼が朝鮮体験を通じて、中国や南方への希求を募らせていったのは、まさに上述した同時代における日本の外に抜けていく<外部志向>があったからである<sup>188</sup>。しかし、彼の中国大陸に抱いた憧憬と関心には、当時の一般日本人が抱いたものよりさらに複雑な感情があった。

序章でも述べてきたように、神童、天才と呼ばれてきた中島敦は漢学名門育ちで、祖父や伯父たちから中島敦へという血の流れで中国古典への愛好が子供の頃から植えつけられていたことがわかる。彼にとって漢学の教養は、芥川龍之介、谷崎潤一郎、佐藤春夫など明治期に育てられた他の日本の知識人たちの中国の伝統文化や風景に対する親しみと関心のようなものとともに、「父親から血に享け<sup>189</sup>」、また「母親の乳と一緒に飲んで育った<sup>190</sup>」ものをも彼の精神と肉体の一部になっていた。

一方、伝統中国のみならず、彼は現代中国に対しても強い関心を持っている。彼の2番

<sup>187</sup> 劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』(筑摩書房、2010) 186頁参照。

<sup>188</sup> 田中益三「遍歴・異郷ー朝鮮・中国体験の意味」『中島敦 昭和作家のクロノトポス』(双文社出版、1992) 30頁。

<sup>189</sup> 中村光夫、前掲書(註13) 8頁。

<sup>190</sup> 同上、7頁。

目の伯父・斗南は30年間にわたり中国問題に傾倒し、日本と中国の間に往来する一論客であり、当時、欧米列強の利権獲得競争にさらされる内憂外患の中国のことを『支那分割の運命』（1912）として執筆した人物である。この伯父の晩年は、中島敦の作品「斗南先生」（1933）の中で詳しく描かれている。彼は、中島敦の下宿に来るとよく二人で「支那の時局のこと。共産主義のこと」などの話をしたり、また入院中に毎日中国関係の新聞記事の中島敦に読ませたりした。

また、中島敦の7番目の叔父・比多吉は長年中国旅順に滞在し、中国の政治に大きく関与する人間であり、満州国の建国にも関係のある、のちに満州国顧問に登った人である。中島敦はこの7番目の叔父一家との付き合いが多く、特にその娘の莊島ケイ子と親しかった。彼の中国行のほとんどは、この叔父に頼ったものである。行くたびに叔父の家に訪ねた中島敦は、生の中国情報や日本人居留民についていろいろ聞かれたに違いない。

そして、彼自身も父の大連第二中学校への転勤により毎年帰省し、旅行だけではなく、実際にその空間に生活したりもした。しかも1927年の帰省中、肋膜炎にかかり、満鉄病院に入院し、数多くの日本人の姿を観察することができ、それを断片「病気になった時のこと」、「ロシア人の名前」で描かれている。そこでは満鉄総裁の話、不景気の話などが聞かされ、また社員淘汰に不安を感じる様々な日本人を描き出している。

このように、中島敦にとって中国に暮らす日本人の生き様は、自らが注意深く観察できた中国の最も身近な現実だった。つまり、叔父達の意識的無意識的な伝授と自らの長年の体験によって、中島敦は当時の一般文人より、現代中国に対して一層複雑な感情と深い認識をしていたことが窺える。

すでに述べたように、当時の中国は日本国内の人々にとって、日本より自由な地平、別天地として映っていた。そのため、多く的人是は中国に移住し、幸福な生活を念願していた。しかし、外地へ複雑な思いを抱いた中島敦は、大陸幻想が次々と作られていく日本国内の雰囲気違和感を覚えずにはいられなかった。

1932年8月、東京帝国大学3年生の中島敦は、叔父・比多吉を頼って、夏休みの時間を利用して旅順、大連などの南満州、および天津、北平（現在北京）などの中国北部を旅行した<sup>191</sup>。そして、この旅行の産物として翌年の1933年、彼は北京を舞台とする人生初の長編小説「北方行」（1933-1936）の執筆に取り組んだ。1930年の激動期の北平を舞台に

---

<sup>191</sup> 川村湊、前掲書（註19）30頁。

したこの作品は、お互いに異なる民族と国籍を持つ人々に囲まれながら異国に生きる在留日本人の姿を描き出している。この作品を通して、日本国内の中国認識に違和感を覚える中島敦の葛藤が垣間見ることができる。

本章では、「北方行」に登場する地位、性別、職業も違う様々な在留日本人に対する分析を通して、在留日本人の一側面を明らかにし、同時代作家における中島敦の北京認識の特異性の一端を明らかにしたい。第1節では、1930年代前半まで日本国内の北京認識を考察する。第2節では「北方行」のあらすじと先行研究を紹介する。第3節と第4節では、作品から読み取れる在留日本人描写の特徴を明らかにする。最後に第5節では、「北方行」の主題と未完の原因について考察する。

### 第1節 1930年代前半の日本国内における北京認識

本節では、「北方行」の舞台になっている北京が日本人にとっていかなる場所であり、日本国内ではどのような北京認識を持っているかについて見ていく。1930年代当時、多くの日本人が中国に憧れていたことは前述した通りである。しかし、それは広い範囲での憧れではなくて、それぞれの都市にそれぞれ違う夢とイメージが託されたものである。例えば、一攫千金の野望を持つ人達は満州の新天地に向かい、自由な生活と「華洋雑居」のロマンに惹きつけられた人達は「魔都」上海に目を光らせた。また、異国情緒を夢見る人達は中国南方に足を踏んだ。そして、北京は東洋唯一の故郷として、特に多くの知識人や文人達は憧れた。

周知のように、北京は遼・金・元・明・清各朝の、名称を異にした都<sup>192</sup>として、約千年の歴史を持<sup>193</sup>っている。それ故に北京は、1910年代後半から何人かの宗教家やジャーナリスト達によって描かれている。例えば、関和知『西隣遊記』（1918）と釈宗演『燕雲楚水 楞伽道人手記』（1918）は北京の建築の壮麗さに驚嘆し、懐古的な情緒に溢れる感情を表している。また、徳富蘇峰は『支那漫遊記』（1918）の中において古い建築が残された北京に感動し、明清時代を追憶し、さらに「巴里となりしにあらずや<sup>194</sup>」といった北京の町の新風景も発見した。さらに、東京高等商業学校東亜倶楽部の学生達が北京を観光し

<sup>192</sup> 契丹族の遼国は北京を「燕京」、女真族の金国は「中京」、また蒙古族の元朝は「大都」、そして漢民族の明朝は「北京」と称し、満州族の清朝もその名をした。

<sup>193</sup> 北川桃雄『古都北京』（中央公論美術出版、1969）10頁。

<sup>194</sup> 徳富蘇峰『大正中国見聞録集成「支那漫遊記」第8巻』（ゆまに書房、1999）95頁。

た後に残された本の中では、北京のことを「形勢雄大<sup>195</sup>」「神秘的、懐かしみ<sup>196</sup>」「我を忘れざるを得なかった<sup>197</sup>」と描かれている。つまり、1910年代の北京を見ていた人はまさに北京の歴史的な趣味に目を向けたと言える。しかし、その時の北京はまだ一般の日本人によって知られていなかったことも事実である。



【図 11】 1910 年代北京正陽門<sup>198</sup>

そして、1920年代になると、上述した大正ツーリズムの影響で、様々な北京案内や北京案内記が出版された。例えば、脇川壽泉『北京名所案内』（壽泉堂、1921）、上野大忠『天津・北京案内』（日華公論社、1922）、丸山昏迷『北京』（丸山幸一郎、1923）と中野江漢『北京繁昌記』（1922）などがそれである。そのほか、多くの知識人や文人達も北京へ旅立ち、北京への印象や思いが旅行記や文学作品によって多くの人の目に届くようになった。その中で、特に日本人の北京印象の形成に影響を与えたのは、芥川龍之介の旅行記「北京日記抄」（1925）をはじめとする彼の北京認識だった。

芥川龍之介は1921年、大阪毎日新聞社に派遣されて中国視察旅行に旅立った。彼は北京で約1ヶ月間滞在した。この短期滞在によって彼はすっかり北京に魅了された。上海の「騒がしく」「ソワソワ」した雰囲気に対して、北京は「落ち着き」があり、「大陸の気分」

<sup>195</sup> 東京高等商業学校東亜倶楽部『大正中国見聞録集成「中華三千里」』（ゆまに書房、1999）215頁。

<sup>196</sup> 同上、221頁。

<sup>197</sup> 同上、206頁。

<sup>198</sup> 「1910年代北京正陽門」[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_491bcbfd0102v42v.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_491bcbfd0102v42v.html)（2018年9月1日検索）。

がし、「何千年の昔からの文明」<sup>199</sup>が沈殿する場であると彼は認識した。北京を離れる直前に、彼は北京への思いを、ある雑誌のインタビューで次のように打ち明けている。

私は支那を南から北へ旅行して廻った中で北京程気に入った処はありません。それが為に約一カ月も滞在しましたが、実に居心地の好い土地でした。城壁へ上って見ると幾個もの城門が青々とした白楊やアカシヤの街樹の中へ段々と織り出されたように見えます。処々にネムの花が咲いて居るのも好いものですが殊に城外の広野を駱駝が走って居る有様などは何んとも言えない感が湧いて来ます<sup>200</sup>。



【図 12】 1920 年代北京の城外<sup>201</sup>

ここでは、芥川龍之介は北京の穏やかで快い風景を見出し、その限りない愛着が窺える。そして、その思いはその後も持ち続けていた。つまり、彼は北京の風景と雰囲気惚れ込み、近代化の影響を受けず、政治動乱も離れた静かで悠然とした、心の安らぎの場所として認識したのである。

この芥川龍之介の北京認識は、実にその後の多くの知識人や文人達に影響し、30 年代になっても変わらない。例えば、阿部知二の目に映った北京は「去日の美女」の面影<sup>202</sup>と

<sup>199</sup> 芥川龍之介、前掲書（註 146）3-4 頁。

<sup>200</sup> 同上、4-5 頁。

<sup>201</sup> 「1920 年代の北京」[http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog\\_14ecb017b0102y1pm.html](http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_14ecb017b0102y1pm.html)（2018 年 9 月 1 日検索）。

<sup>202</sup> 阿部知二『北京』（第一書房、1938）278 頁。

して映され、林語堂は「長く培われてきた穏やかな古い支那の魂を代表する」所、また「文化的慰安」と「田舎風の生活の最大限の美」<sup>203</sup>が調和された所として感受し、さらに一戸務の『現代支那の文化と芸術』の中には「東洋に残された唯一の文化都市<sup>204</sup>」と「静寂無韻の文化発祥地<sup>205</sup>」として描かれていた。

このように、1920年代、30年代の知識人が認識した北京は歴史的で、文化的で、静かな風景と雰囲気を持つ安らぎの場だった。問題は、これらの作品には北京に生きる人々の動きや描写がほとんど見られないことだ。つまり、当時の知識人や文人達は北京を観光的な目線で見えていなかったのである。

ところが、中島敦の「北方行」は違っていた。彼は北京の都市風景を描いただけではなく、その空間に生きるさまざまな人間のあり方も描き出していたのである。次節では、その違いを明らかにするための手順として、まず作品のあらすじと先行研究を整理する。

## 第2節 「北方行」のあらすじと先行研究

ここでは、分析に先立って「北方行」のあらすじを紹介する。全5篇から構成されたこの作品は、日本人大学生黒木三造（以下、三造）が行う北平行の旅から全ての物語が展開されるため、三造の北京での生活ぶりに焦点を当ててみる。

まず、作品の舞台は1930年9月の北平である。当時の中国国内は中原大戦という複雑な内戦状態下であり、蒋介石の政権と反蒋政権との争いや共産党の蜂起など、新しい中国を作るために国民革命が勃発する時期であった。「北方行」の物語はこのような時代背景の中で展開されていく。

作品の冒頭では、三造の船上での姿が描かれている。21歳の三造は常に他人によって決められた既成概念に従いながら、先入観を持って周囲をみる人物であり、客観的に現実世界と向き合って観察することができない人物である。そのため、彼は自ら「生とは何か」を真剣に考え、自意識過剰に苦しみ、現在の生活に不安と焦燥を感じている。このような生活に疲れ、そこからの脱出に苛立っていた彼は、新しい未知の環境に自分を投出して冒険し、そして「何か起こるに違い無い」という期待とも予感とも持ちながら大陸へ向かう

<sup>203</sup> 林語堂「古都北平」『改造』「支那事変増刊号」1937年11月付。

<sup>204</sup> 一戸務『現代支那の文化と芸術』（松山房、1939）26頁。

<sup>205</sup> 同上、34頁。

船に乗ったわけである。船上では、彼は例の自分の存在理由と文学や芸術について思索しながら時間を過ごす。そして、その思索が妨害されたのは彼の日本語の教え子であるイギリス海軍軍人トムソンである。トムソンは仕事のために三造と同船で天津に向かっているところである。三造はトムソンとの関係について考え、トムソンが持っている日本人に対する優越感と差別、また自分が持っている西洋人に対する劣等感と敵対感を思い浮かべる。

その後、三造は北平へ到着し従姉の白夫人の邸宅に落ち着く。白夫人は20年前に、自分の家に下宿していたある中国人富豪の息子である白雄文と結婚して中国に渡った人物である。8年前に夫に先立たれたため、現在彼女は夫の財産を相続して3人の子供を育てながら北平に暮らしている。三造は北平に10日間ほど滞在したが、その最初の一週間はほとんど白邸を中心に動き、これまでの生活と切り離して快い無為な生活を送った。

そして一週間後、白夫人は息子の誕生日パーティー兼三造の歓迎会を邸宅で開いた。この祝宴は白夫人一家だけではなくて、北平に居留するほかの日本人や日中混血児、そしてこれらの日本人の周りを囲む中国人、朝鮮人、西洋人など登場し、多様な民族と国籍を持つ人物たちが一堂に会する催しであった。三造もこの祝宴をきっかけとして、北平に生活する様々な在留日本人に出会い、彼らの生活を見つめた。

その中で、彼が興味を持つ一人は折毛伝吉という留学生である。25歳の伝吉はかつて東京で中学校を卒業した後、中国にいる伯父の保護で上海に渡り東亜同文書院に通うが、途中で退学し日本人ダンサーと同棲するなど頹廢した生活を送った。それが原因で伯父と喧嘩した彼は2年前に上海から北京へと漂泊してきた。現在彼は白夫人の保護を受けながら大学に通う一方、彼女の情夫でもあり、しかもその娘とも肉体関係を持っている。この伝吉の誘いで、三造は支那人ばかりの公寓に入り、伝吉の隣の部屋に引っ越ししてきて下宿生活が始まる。

下宿生活は極めて長閑な生活であった。三造は伝吉と様々な交流をするほかに、昼間はほとんど支那服を着て同公寓の中国人たちと北平の街散策をする。そして夜は決まって八大胡同で芸者遊びをし、行かない時は公寓で無駄話をする。このような生活を送っていたある日、三造は伝吉から友人の朝鮮人権泰生が2.3日中に鄭州の戦線へ出発する話を聞く。三造は今の無力的な幸福に酔いしれているよりいい刺激になるだろうと思い、戦場へ向かう決意を示す。しかし、その決意を示した後、なんの行動も見せないまま作品は中断される。

以上、「北方行」のあらすじを三造の目線から紹介した。この作品は、所々に脱字があり、またその一部が欠落していて、そして第5篇以後の作品の展開は未知であるため、多くの論者から未完と指摘されている。しかし、あらすじで確認したように、この作品は三造という語り手を通して、白夫人や伝吉を始め実に様々な北平に居留する日本人の有様と彼らの周辺に取り巻く多様な環境が描き出されている。それを手掛かりとして、1930年代の北京がいかなる都市であったか、またその空間に生きる在留日本人がなぜ北平に行き、そこでどんな生活を送っていたか、などを浮き彫りにするには十分な価値をもっていると思われる。

これまで「北方行」に関する先行研究では、二つの方面から議論されてきた。一つは作品が未完でありながら、「狼疾記」「カメレオン日記」という作品や、中、後期作品を生む母胎としての特徴が読み取れ、中島敦文学を理解するにあたって大きな意味を持っているという点である。濱川勝彦は「北方行」から『過去帳』への作業は、「「虚構」を捨て、作者自身の「主体的世界」を表現しようとした過程であって、そして以後の傑作は、このような形而上学な懊悩を歴史上の人物や過去の虚構の中に生まれた<sup>206</sup>」と指摘している。また、ちくま文庫版『中島敦全集3』に収められている勝又浩の「解題」では、作品の内容とその後の作品に与えた影響が言及されており、「北方行」がその後の中島敦文学を生み出す一種の母胎的な役割を果たしている<sup>207</sup>と主張している。さらに、平林文雄も「北方行」と『過去帳』との比較を通して、「北方行」から『過去帳』への脱出によって、中島敦の以後の作品は「第三者を中心とする客観的な手法」で自己分析や自己執着を描き続けた<sup>208</sup>と指摘している。以上の先行研究は、作品に見られる主要登場人物の姿が作者の分身や投影として見る傾向があり、また彼らの悩みもそのまま作者自身の悩みの表出として受け取り、登場人物をそれぞれ個性のある一人の日本人としての見方がほとんどない。

もう一つは、中国近代史の激動期を背景に、様々な民族と国籍の人物を造形して現代長編小説に挑戦することは、日本の近代文学史において稀な存在であり、価値のある作品だと評価している点である。渡辺一民はその著書『中島敦論』（みすず書房、2005）の中で「南京の国民政府と華北軍閥との対立・抗争を背景に戦争から革命まで包摂し、様々な異

<sup>206</sup> 濱川勝彦、前掲書（註118）54-56頁。

<sup>207</sup> 勝又浩「解題」『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）480-481頁。

<sup>208</sup> 平林文「中島敦『北方行』の研究-その成立と構成と撤退-「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』-」『高崎商科大学紀要（27）』（高崎商科大学、2012）174頁。

文化が交錯する北平に焦点を絞った、裾野の広い、ユニークな国際冒険小説が生まれたかもしれない」とし、「その完成の暁には、(略) 全く新しいロマンとして、近代日本の文学の地平をさらに広げるだろうことは十分予測できる<sup>209</sup>」と指摘している。川村湊も「現代的歴史、中国の近現代、その中に主人公が入り込んでいろいろ行動し、その分身のような副主人公の男もいる。それを通して当時の現代中国を描こうとした<sup>210</sup>」と指摘し、国際現代小説としての可能性を主張している。しかし、それらの指摘もいずれ作品に埋め込まれた中原大戦を背景とした中国現代史の膨大さ、また登場人物の国際性に焦点を当てており、現代中国に生きた日本居留民の視点には目を向けていない。

つまり、上述した先行研究からわかるように、「北方行」は中島敦文学や日本近代文学史に与える意義を浮き彫りにしているものであって、当時の中国に生きる日本人の視点を通して中国認識を深めようとした中島敦の意図についてはほとんど考察されていないということだ。

前述したように、中島敦はその家族や親戚類が長年中国に滞在しており、彼自身も旅行や帰省などの形で度々中国に渡っていたため、そこに居留する日本人たちを身近に観察することができる環境に恵まれていた。「北方行」はまさに中島敦の在留日本人たちへの認識とそれに伴う中国理解を理解する上でなくてはならない作品である。三造が期待を持って渡った北京は一体どのような空間であり、そこにはどのような在留日本人が暮らしているのか。第3節と第4節では、これまでの先行研究を踏まえながら、上流社会に暮らす白夫人と一般留学生の折毛伝吉に焦点を当てて、1930年代に北京に暮らした在留日本人の姿を浮き彫りにする。

### 第3節 上流社会の白夫人

本節では、20年間以上に北京の上流社会に暮らしている三造の従妹である白夫人と彼女の周辺にいる様々な在留日本人について考察する。20年前、白夫人は東京の小石川の高台に家族と一緒に平穏に暮らす女学校の学生だった。ところが、彼女の家に私立大学に通うある中国人富豪の息子である白雄文が下宿しはじめた。

---

<sup>209</sup> 渡辺一民、前掲書（註49）45-46頁参照。

<sup>210</sup> 川村湊「帝国に抗する力を表現した作家」『中島敦 生誕100年、永遠に越境する文学』（河出書房新社、2009）3頁。

周知のように、中国人の日本留学は 1896 年に 13 名の公的派遣から始まり、1905 年に 8000 名、1906 年には 12000 名などピークを迎え、1910 年までの中国では、第一次日本留学ブームを巻き起こった<sup>211</sup>。彼らは近代化運動に乗り出し、近代化に急激な成功を遂げた日本に多大な関心を持ち、留学を通して日本の政治、経済、軍事、文化、思想など諸方面にわたって習い始めた。たくさんの留学生は、革命の道を歩み、また日本で新聞と雑誌を創刊したり書籍を翻訳したりして新文化と新思想を宣伝した。その中には、東京で中国同盟会を組織した革命家の孫文、変法運動のリーダーであった梁啓超、中国近代文学の父となる魯迅など、のちに中国をリードする多くのエリートが含まれていた<sup>212</sup>。日本は衰えた中国にとって新時代の揺りかごであった<sup>213</sup>。白夫人の家に下宿した白雄文は、まさにこのような日本留学ブームの中で来日し、新時代の声に感化されていた留学生の一人であった。

当時の日本では、多くの中国人留学生を引き受けるということは、人道的な立場に立って「清国獨立」「日清提携」<sup>214</sup>のためであると宣伝された。しかし、実際当時の駐華公使矢野文雄は、外務大臣西徳二郎に出した手紙の中では、その目的について「我国ノ感化ヲウケタル新人才ヲ老帝国内ニ散布スルハ、後来我勢力ヲ東亜大陸ニ樹植スルノ長計ナルベキトノ次第<sup>215</sup>」であると述べたように、日本の国益や「大陸進出」、さらに中国の日本への従属化の野心に繋がっていた。日露戦争に勝利を遂げた日本は、清朝のことを「東洋の病人」と見下し、そして一般の日本人まで中国人留学生たちに対して傲慢な態度をとった<sup>216</sup>。そもそも「小国」として中国に軽視された日本の立場は逆転した。

この日露戦争以後、日本の中国への優越意識と軽蔑が深く植え付けられたわけである。白夫人、つまり前川柳子も最初は、白雄文に対して「支那人、間が抜けている」と言い、当時多くの日本人が持つ一般的な中国人への偏見と軽蔑から逃れなかった。

しかし、その後 2 年の歳月が流れた時に、二人の関係は恋人同士へと発展していき、彼女は彼に対して「性急に燃えるような愛」、彼もまた彼女に対して「穏やかな寛容の愛」を抱くようになった。キリスト教の家庭で生まれ育った柳子は白氏と付き合い初めて間

---

211 王玉珊「中国人日本留学の歴史問題について」『中央学院大学社会システム研究所紀要 10(2)』（中央学院大学社会システム研究所、2010）101 頁。

212 菊池秀明『ラストエンペラーと近代中国 清末中華民国』（株式会社精興社、2005）130 頁。

213 同上、130 頁-131 頁。

214 上田万年「清国留学生に就きて」『太陽第 4 巻第 17 号』（博文館、1898）10-15 頁。

215 外務省外交資料館「在本邦清国留学生関係雑纂」。「清国人の日本留学に関する一考察—1980 年から 1910 年まで—」『社学研論集第 18 号』（早稲田大学、2011）190 頁を参照。

216 菊池秀明、前掲書（註 212）136 頁。

もない頃に、彼に聖書を買って渡し、教会に連れて行き、そして洗礼も受けさせた。そして、彼女の白氏に抱いた感情や思いを作品の中で次のように描いている。

この善良な男を助け、慰めを与え、毅然として世に立たせてやることより外、自分のこの世に生まれた意義はないのだと感じた。(初めから彼女は、白氏に頼る気持ちより、白氏を悪から「基督教的見地よりの悪から」庇ってやろうとする気持ちの方が強かった)そして白氏のすることはなんでも、その日本語の不自由ささえも彼女に限りない愛憐の気持ちを起こさせるのであった。(168頁)

この文章からは白雄文に日本語を教え、彼をキリスト教的な悪から庇い、助け、そして世に立たせてやるという柳子の真摯の思いが窺える。白雄文も柳子の情熱な指導に抵抗することなくすべての事に内気で受け、彼女の愛を呼応していた。

その後、白雄文が卒業する年に、柳子は父親に結婚の許しを乞うたが、父や親族達の強い反対を受けた。その反対に対して、柳子は「愛には国籍がない」と意気揚々と説いた。クリスチャンだった柳子は、ほかの中国人に対して差別を持つ一般の日本人たちの見方とは違い、自分が心から白雄文を愛することと同じように、ほかの中国人に対しても平等に扱い、国籍と国家の違いが超えられると深く信じていたに違いない。そのため、半年間紛糾があっても、彼女の気持ちは一度も動かなかった。半年後、彼女のこの情熱と白雄文の財産がものをいい、つい二人はすべての反対を押し切って結婚を遂げた。そして、彼女は毅然として中国国籍を取り、旦那に付いて北京に渡った。

### 3-1 華やかな世界に暮らす

さて、結婚後の二人は北京の白附馬大街にある邸宅で生活していた。この邸宅は何棟に分かれていて、寝室棟の他に、宴会を開くことが好きな白夫人のために宴会場も設け、さらに棟と棟の間にはかなりの広さの庭を作り、日本風の泉などが拵えられていると描かれている。その描写から彼女の生活ぶりが想像できる。8年前に夫が亡くなった後も、白夫人は夫の財産を相続して3人の子供を育てながら以前と同じような豊かな生活を続けている。それは、例えば娘に高級ショッピングモール中原公司<sup>217</sup>内に並べてある最も高価

---

<sup>217</sup> 1926年に開業された中原百貨。当時天津初めてしかも最大のショッピングモール。

なハンドバッグを買ってあげたりする。また、それは今回の息子の誕生日パーティー兼従弟三造の歓迎会のために開いた祝宴からも窺える。

その宴会において、人々は名飯店の料理人を借りてきて作った饗応を食べ、装飾燈の下にレコードを聴きながらダンスを踊り、柔らかい椅子に座って雑談やカルタをしたり、中国情勢の話を楽しんで交流したりする。この宴会から、白夫人の生活の華やかさが明らかに見える。極めて内輪の宴会だが、白夫人は在留日本人だけではなく、中国人、朝鮮人、イギリス人なども招いている。そこには同じく上流社会に属し、享樂な生活を楽しむ白氏の早稲田出身の従弟の白崇礼や白家の旧知である混血児の劉煥東などがおり、海軍軍人のトムソンなどがいる。注目すべきは、出席者の日本人のほとんどが白夫人の援助を受けている苦勞人であることだ。ここでは、宴会に出席した森と小西の生活ぶりについて見てみたい。

ひどく気の弱そうな目と顔の大きい、そして背が低く胴の長い森は、20年近くも前に何の縁故もない白氏の家に入り込んできた居候人である。子守が上手だったため、白氏の子供たちの世話をしながら、ほとんど人に気づかず、家具の一部になりきったように寄生している。そして4、5年前に裏町の骨董屋で偶然安く買ってきた仏像が、大したものだと分かった彼は、それを売りに東京に出掛け、人生初めて自分の腕で設けた500円を手に入れた。それは彼の久々の野望心を駆り立て、翌年も同じような仏像を仕入れて上京した。しかし今度は無駄足だった。一方、貧相な黒の背広を着た40がらみの小西は、3歳の女の子、5歳の男の子と妊娠8ヶ月の醜い妻と崩れかかった支那家屋に日本畳を敷いた胡同の裏通りの家で住んでいた。彼は日本人のために新聞を作る夢を持って白夫人から寄付してもらっている。しかし、いつも創刊号だけで終わってしまうなど、失敗を繰り返していた。このような生活がいつまでも続けられるという見通しもなく、今回こそ寄付金が集まったら満州へでも逃げ出そうと、彼は思っている。

森や小西のように、日本での生活が続けられなくなって、あるいは自分の手で商売をやりたくて憧れの地に渡ってきた人たちは当時多数いた。実際、北平在住の居留民の職業特徴や状況について、北京在住の居留民を管轄していた天津総領事館北平分署の1934年の報告書の中で次のように報告している。

内地人は爾来一千名を前後し所謂土着者と称する者大部分を占め、其の他、銀行、会社、新聞、通信員、病院勤務者、留学生等にして、一般商人と称する土着の者の

内主なる商売としては売薬、古美術商等を始めとし、輸出入、請負業、雑貨及旅館等なるも就中売薬、古美術商等は比較的隆盛にして、其の他は余り振はず、唯辛うして現場を維持し居る程度に止り<sup>218</sup>。

このように、北京の居留民構成を見てみると、その大部分を占めるのはやはりサラリーマンである会社員、商売をやる個人経営者であることがわかる。そして、その警察署長の報告から実際当時の北平の居留民の商売がやっと生活を維持する程度のものであって、ほとんどうまく行っていなかったことが読み取れる。つまり、森や小西のように野望を持って何かをやろうとしたが、結局失敗した（成功できなかった）居留民が少なくなかったことだ。失敗を繰り返した末に、森のように白氏の家閉じこもるか、小西のように寄付金を騙して北平から逃げ出すほか道がなかったのである。

以上、白夫人の宴会に出席していた二人の居留民について見てきたが、中島敦が彼らの描写を通して当時の文壇に言いたかったのは、知識人や文人たちが認識していた憧れの地、安らぎの場としての北京とは異なるもう一つの北京の姿ではなかろうか。

1930年代当時の北京、多くの居留民は自らの理想と相反する生活を北平で送らなければならなかった。そんな彼らに対して、白夫人の生活は贅沢そのものだった。ほかの居留民に援助するほどお金に充足し、華やかな世界に暮らしていた彼女は、当時の在留日本人たちの憧れの対象であった。しかし、果たして彼女自身はその生活に満足していたのか。

### 3-2 墮落地獄に苦しむ

当初、白夫人は「愛には国籍がない」と信じ、中国人と偏見のないように暮らすことができると思いついで北京に来た。実際、彼女もそれに相応する様々な努力を見せてくれた。それは、例えば彼女は中国籍をとり、中国語を勉強して話せるようになったことはもちろん、周りの在留日本人たちの中国人に対する偏見について、彼女は女らしくない言葉で以て揶揄して嘲笑し、中国人を庇う姿を見せていた。そして、これまで自分の中にある中国や中国人に対する差別意識に対して、彼女は「懸命な意志的な努力」や「必死な努力」をしてきたと言う。

しかし、努力したと告白しながら、白夫人は本当に心から努力したのだろうか。この点

---

<sup>218</sup> 外務省亜細亜局「昭和九年天津総領事館北平分署警察事務状況（同警察署長報告摘録）」176頁。

について、彼女の姑に対する態度からみていこう。土地の豪家だった白氏の父親はずっと前に亡くなっていたため、白夫人の姑は実質的な家長として、多くの親戚達と夫が残した7人の愛妾たちと一緒に西安のある巨大な邸宅の中に住んでいた。結婚後、二人は郷里西安に戻らず北京で生活していた。そのため、嫁になってから白夫人は一度も姑と会ったことがない。結婚5年目に、白氏は「どうしても北京に出て来ない母親」に妻を合わせるために自ら妻を連れて西安に行ったのである。白氏は妻と母親が5年も会わなかった原因を「どうしても北京に出てこない」母親に責任を追い、妻を庇う姿が垣間見ることができる。では、白氏の母親は果たして日本人嫁に対して偏見と反感を持っているが故に、会いに来なかつたらうか。作品では、二人が初めて会った時、彼女の息子の結婚に対する態度が次のように描かれている。

白氏の母親は、不思議にも、倅が日本人を妻にしたことについていささかの反対も唱えなかった。恐らくは息子に対する絶対的な愛と信頼とのためであつたらう。彼女はむしろ親類たちの反対に対して息子の立場を支持していたぐらいであつた。  
(187頁)

このように、白氏の母親は日本人の嫁を反対するどころか、あえて息子の立場を支持し、嫁を認めている。しかも、彼女は結婚して5年も挨拶に来ない嫁に対して、「いささかの反対も唱えなかった」。当時の西安と北京間の交通事情を考慮しても、嫁が姑に会いに行くのは当然のことである。

官吏の家庭で生まれ、女学校を卒業し知識を受けた白夫人が一般常識を知らないはずがない。新婚の時に挨拶に行かず、しかも5年後も自分が積極的に行ったのではなく、夫が仕方なく連れて合わせた事実から、白夫人は心の中では無意識に姑に対して一種の拒否があることが推測できる。彼女自身は、姑に対して「できるだけ敬愛しようと努めてきた」と言うが、もし本当にその通りであれば、中国に渡ったら真っ先に姑のところに挨拶に行くべきであり、たとえ姑に反対されても積極的に姑の好感をもらう努力をすべきであろう。しかし、白夫人は姑のために何かを努力する姿勢をまったくとらなかった。

前述のように、白夫人は中国人への偏見をなくそうとして「懸命な意志的な努力」や「必死な努力」をしていた。しかし、姑に対する彼女の言動を見る限りに、彼女は中国人と腹から溶け込もうとしなかつたと言える。彼女はもう一度姑に会っている。その再会によっ

て、彼女は自分の中にあった中国人への蔑視感情に気付かされるのであった。

その再会は、亡くなった夫の遺骨を持って財産整理のために一人で西安に向かった時だった。夫の遺骨を前にし、白夫人は姑と手を執り合いながら涙に咽せんだが、心の中ではどうしても「純粹に悲しんでいる」姑と同じ悲しみの気持ちの中に溶け合うことのできないものを感じた。この人間のもっとも原始的な喪失の感情さえ白夫人は姑と分け合うことのできない理由について、彼女は次のように打ち明ける。

彼女は姑をできるだけ敬愛しようと努めていたにもかかわらず、やはりなお彼女の心中には一点の傲岸さが姑を軽蔑し、姑との共鳴を防げようとしているのを彼女は発見しなければならなかった。それは決して無智や無教育への軽蔑ではなかった。その軽蔑は明らかに——彼女にはそう認めるのが辛くはあったが——人種的なそれに違いなかった。(188 頁)

日本にいた時の白夫人は「愛には国籍がない」と言い、自分がほかの日本人達とは違い、中国人の中に溶け込んで、偏見と蔑視のないように暮らすことができると信じていた。しかし、中国に来て姑との接触を通して、彼女自身は認めたくないが、改めて自分の中に深く潜んでいる中国人への蔑視を気づくのであった。

そもそも白夫人が、「愛には国籍がない」と思っていたことや、ほかの中国人たちと溶け込むことができると思ったのは、彼女の周りが日本人の家族と、知識人の白氏やほかの少数の中国人留学生だけがいる環境の中にいた時である。つまり、彼女の中国像や中国認識は間接的で一方的なものであって、必ずしも現実そのものではなかった。

ところが、実際に中国で暮らし現実の中国に触れ、また自分の目で様々な中国人を見て接触することによって、それまで頭の中で築かれた虚構の中国像が崩壊されていった。北京に来てから「自分の立たされた苦しい立場」を感じた彼女の告白からも裏付ける。特に、愛する夫が亡くなったことによって、幻想がなくなり、現実の中国と対面せざるを得なくなった時、彼女の苦しみはさらに増していく。つまり、白夫人の中国人への蔑視や差別は、はからずも中国体験によって露呈されたと言えるのである。

それだけではなく、中国に暮らすことによって、彼女は改めて自分の日本人としての自覚、また中国籍になりながら帰属意識のない自分のおかしさに気づかなければならなかった。例えば、中国に来て日本語を使う環境と 20 年以上離れていても、白夫人は未だに

日本語の本ばかり読んでいる。また、彼女は月を見ている時に、「月を見て悲しい物思いに耽るのが好きな日本人の血」が自分の体に深く沁み込んでいることを感じる。さらに、従兄弟の三造が自分のところに来るといふ知らせを受けると、幼年時代の雰囲気が現れて明るい気持ちになる。つまり、彼女は日本人としての性質が自分の中に深く染み込んでいる事実に気づきながら、一方で中国語への不自由さを感じており、依然として「椿」という字の発音もできないなど、中国への帰属意識のなさにも気づくのであった。

このように、白夫人は北京に暮らし、現実の中国社会と接触することによって、そもそも「愛には国籍がない」と説き、ほかの日本人達とは違って中国人と溶け込むことができると深く信じていた自分が、日本人としての性質が自分の体に深く染み込んでいること、また中国人への蔑視が芽生えたことを発見したのである。それに気づく彼女は、とうとう異国人と恋に落ち、異国に住むことに対する後悔の念が堪られなかった。

自分が、そんな大それたことを、異国人と恋に落ちて、その異国に住むようになるなどという様な冒険をするわけがないではないか。そんな、考えてみただけでも恐ろしいことを。あれはみんな夢だったのだ。自分はそんな恐ろしいことをするような悪い子じゃない。(中略) 悪夢と思っていたことはやはり現実だったことに気がつく。言いようのない嫌悪の情を以って、彼女の周りを十重二十重に取り巻いている現実の絆の厳しさが彼女の全身を振るわせる。自分はどうしたってそこから逃れられるものではない。(186頁)

このように、白夫人は中国人と結婚し中国に住むことを「冒険」「恐ろしいこと」「悪夢」といい、自分を「悪い子」と言う。異国人と恋に落ち、異国に住んだからこそ、彼女は自分の中にあった中国人への差別感情に気づいた。それはまさしく恐ろしい悪夢にほかならない。当初、周りの在留日本人たちの中国人蔑視に対して女らしくない言葉で揶揄し嘲笑していた白夫人は、彼らと少しも変わらない自分のことを意識しなければならなかった。彼女は自分の体にある異国人を蔑視し差別する悪い子の存在を見出したのである。もし白夫人が異国人と恋に落ち、異国に住まなかったら、彼女は中国人を蔑視し差別する悪い子にはなっていなかったであろう。しかし、いま彼女がどんなに後悔しても昔に戻るわけにはいかない。

このように白夫人の世界は崩れていき、墮落の道へと走っていく。自分の暗闇にいる心

を救うために、彼女は伝吉を情夫にし、彼との肉体関係に執着した。しかし、そのような行為が意味のないものだとして認識する。そして、長女の麗美と伝吉が関係を持っているという事実を知るにつれて、彼女の精神世界はさらに狂っていく。結局、彼女は「自分にはもう何もわからないと思う。もうなにもかもがめちゃくちゃだと思われてくる。地獄だ、地獄だ、と覚えず声にまで出」して叫ばずにはいられない救いようのない世界に陥ってしまったのである。

以上見てきたように、本節では上流社会に暮らす白夫人と彼女を取り巻く周りの在留日本人の分析を通して、北京という空間が必ずしも当時日本内地で宣伝された憧れの場所ではなくて、精神的にも物質的にも理想とはかけ離れた生活を送る在留日本人が彷徨する場所であることを浮き彫りにするができた。

#### 第4節 留学生の折毛伝吉

前述したように、白夫人の援助を受けているのは森や小西だけではなく、彼女の周りにはもう一人重要な人物、折毛伝吉がいる。留学生として中国に渡った伝吉を通して、白夫人とは違う角度から当時の在留日本人の生活を読み取ることができる。本節では、留学生の折毛伝吉を中心に考察してみたい。

折毛伝吉は白夫人の援助を受けている「25にもならない」中国大学の貧書生であると同時に、彼女とその娘麗美との情夫でもある。彼は、白夫人によれば「道徳的な制約を以ていない」「何事にも興味を失った」「話をしても何の面白味もない」男、麗美によると「光明を失ってしまったような目つきや風貌」を持つ男、そして三造には「知的退廃の泥沼に落ち込んでいる人間の見本」、「ニヒリステイックな男」という人物として映されている。つまり、伝吉は周りの人から見れば正常の人間ではなく、虚無的、退廃的な傾向に蝕まれていることが窺える。彼はなぜ中国に行き、そこでどのような日々を送っていたか、そしてなぜこのような人間になってしまったか、以下詳しく考察していく。

伝吉は幼い頃から、自分を取り囲んでいるすべてのものに対して疑惑を感じている。彼にとって、世界とは「確固たるもの」でもなく、宇宙とは、「安んじて身を置けるような場所」でもない。少なくとも「人間の営みとは、もっともっと安っぽい代物だ」と彼は世界、宇宙、そして人間存在の貧しさを感じ、絶望へと導く。その絶望はまだ中学生だった彼を「都会生活の表面的享楽」へと走らせ、さらに享楽の他愛なさに思われてきた後、芸

術、特に文学の世界へと入り込んだ。しかし、彼は次第に文学の無意味さ、他人の思想の範囲の狭さに気づき、再び人生の貧しさに対して絶望し苦しむ。その悪循環が子供の彼を激しく噛んでいた。このように、伝吉は世界、宇宙、さらに人生の無価値に絶望し、すべてを否定し、みんなが無意味だと思っている。このような「すべての事象な根底に虚無を見出し、なにもものも真に存在せず、また認識できない<sup>219</sup>」という思想はニヒリズムと呼ばれる。つまり、中学校の伝吉はすでにニヒリズムに浸されていたことがわかる。

その中で、一つの転機が来た。ある日、彼は晴れた空に聳立する山々の連なりを眺めているうちに、天啓を見たように思われた。その天啓について彼は次のように語る。

世界は概観によっては決して大きくはならない。逆に、顕微鏡的な細部の観察によってこそ、無限に拡大されるのである。(202 頁)

この概観の世界とは、他人の目で見えた世界、あるいは他人によって決められた既成概念下の世界だと言える。前述した通り、このような世界は伝吉にとって貧しいものばかりだった。しかし、細部の観察、つまり山々の連なりを見て彼が感動したように、実際自分の目で見て体験した世界は逆に無限に拡大されると伝吉は覚醒した。そのため、彼はこれまでのニヒリズムから脱出することを願い、自ら行動し、直接自分の目でこの世界を見に行くことを決め、その気持ちのまま中国に行き、上海へ奔った。

1920年代の上海はまさに東洋のパリ、魔都上海と言われた通りの国際都市そのものだった。そこは高層建築が次々と建てられ、百貨店、カフェ、ダンスホール、競技場、映画館などの娯楽施設も栄え、また女性の自己主張の象



<sup>219</sup> 『デジタル大辞泉』(小学館) 参照。

徴として大量のモダン

【図 13】 1930 年頃の魔都上海<sup>220</sup>

ガールが出現した。「すべてが銀の上を流れているということであった。この感じは感覚的なもので、至るところにある銭庄と書かれた両替所が私に刺激を与えたのである<sup>221</sup>」

と 1928 年に上海を訪れた横光利一が感じたように、当時の上海は資本主義大都会の姿を演じていた。そして、「華洋雑居」の空間もその上なく異国情緒が演出され、多くの人に惹きつけられ魅了されてきた。さらにその上、「そこには伝統がない代わりに、一切の約束が取り除かれている。人間は何をしようか勝手だ<sup>222</sup>」と村松梢風が『魔都』（小西書店、1924）に書かれたように、上海の性格には、国家の枠組みにとられない自由さがある。

このように、当時の上海の全てが日本人を魅惑させた。彼らはこの「自由」の天地で様々な夢を託し、あるいは冒険し、あるいは耽溺し、あるいは新たな栄養にしようとして上海へ渡航した。つまり、当時多くの日本人と同じく、伝吉も上海を細部観察の対象とするのは、まさに上海の多様性と多変性に可能性を見出したと言える。上海には親戚の伯父がいて、そして伯父の庇護で伝吉は東亜同文書院の学生になった。

周知の通り、東亜同文書院は戦前の上海の日本人社会における最高学府であって、日本の対華文化事業の主要団体の一つだった<sup>223</sup>。ここは「中国や他の外国の実学を講じ、日中の英才を教育する」「中国の富強の基を建て、日中友好協力の根を固める」<sup>224</sup>ことを主旨とし、1901 年設立されてから数多くの政界、商界のエリート達を育んだ。つまり、東亜同文書院の学生であったということは、伝吉は将来日中間の人材として期待されていたことである。このように、生の希望に燃え、伯父の庇護の下で最高学府に入学した伝吉はまさにその上なく光明の未来が待たされているに違いない。では、上海へ行った彼はいかなる日々を送ったか。

上海へ行って最初のうちに、彼は享楽に落ち、「猥雑なエクゾティズム」に楽しまれた。しかし、「突然、何の原因もなしに」、「彼の周囲のすべては一斉に色彩を失って後退し始めた」。状況は前よりも悪くなった。彼はその時の心境を次のように表している。

今は思索する気力さえなく、絶望は思索の結果としてではなく、絶えざる不安の気

<sup>220</sup> 「時代と流行 魔都上海 1930 年代」 <https://cragycloud.com/blog-entry-81.html> (2018 年 9 月 1 日検索)。

<sup>221</sup> 劉健輝、前掲書（註 187）282-283 頁。

<sup>222</sup> 同上、202-203 頁。

<sup>223</sup> 陳祖恩『上海に生きた日本人 幕府から敗戦まで』（大修館書店、2010）229-230 頁。

<sup>224</sup> 同上、229-230 頁。

持ちとなって、常に外から襲ってくるようになった。(略) 彼は次第にすべてのことに無感動になり、恐怖以外の感情を忘れてしまったようになってしまった。(202-203頁)

このような心境から、上海にきた伝吉は周りの世界を直接自分の目で見て観察するどころか、再びこれまでの無感動で無意味なニヒリズムの世界に堕ちたことが窺える。しかも、症状は以前よりさらにひどくなったと彼は感じていた。その後、伝吉は東亜同文書院を怠けてのちに退校され、漁色に耽け、ある日本人ダンサー美代子の援助を受けながら、彼女と同棲する。美代子はある日本人の不良青年との間に男の子清を設けていたが、その男が二人を捨てて日本に逃げたため、彼女は現在ダンサーの仕事をやりながら3歳の清を育てている哀れな女である。伝吉はいつも母がそばにいない孤独の清を過去の自分を見つめたように彼のことを愛していた。しかし清は間もなく病気で亡くなった。清が亡くなった後、伝吉は美代子と別れ、人生をさらに無感動へと導く。つまり、上海での3年間は、伝吉は光明の道とは真逆の道ばかりを歩んでいたのである。

時期的に言えば、伝吉が上海に滞在した1926年から1929年頃に、上海は「学生運動や労働運動が頻発していた時代だった。例えば1924年、東亜同文書院中国人学生4名が旅大回収運動(日本による旅順、大連の租借を認めず回収しようとする運動)を起こし、対日経済断交、日本製品ボイコットを訴えた<sup>225</sup>。また1925年の「五・三十事件<sup>226</sup>」による排日・排英・排外運動のナショナリズムが全国的に広がった。さらに、1927年4月国民党による反共クーデターがあり、120人の労働者が殺され、多くの共産党員が逮捕また殺された。

このような現実を前にして、この世界を自分の目で確かめ、その意味を付けようとする伝吉なら、本当は心が撃たれても何かの行動を起こすのが普通だが、実際は何の行動も起こさないままだった。ニヒリスティックな彼ができることはただ日記の中で神への抗議を表すのみだった。彼の上海時代に書いた日記に古来幾人かの人々の抗議によってもたらした結果について打ち明けている。

---

<sup>225</sup> 陳祖恩、前掲書(註223)237-238頁。

<sup>226</sup> 1925年5月30日、上海で起こった中国の反帝国主義運動。日本人経営の紡績工場のストライキ弾圧に抗議した労働者・学生のデモが起こり、これに英国人警官が発砲して多数の死傷者が出た。

それを敢えてした人々は、あるいは社会から、故国から追われ、あるいは同時代の苛酷な制裁を受けねばならなかった。彼らの同国人、同時代人、同僚はそれらの人々のすべての上加えられた神の残虐に対する抗議をなしたがために、その自分たちのために弁じようとした代表者を断頭台に送ろうとしたのだ。ちょうど現在の幾つかの被征服民族の間で、彼らのために立とうとする志士たちを彼ら自らが牢獄へ送って、得々としているように。(略) この、神の我儘な嗜虐性の恐ろしさの前に、無に等しい個人の憤激も、それによって生じさせられた狂気も暴行も自棄も何の意味もない。(215頁)

巨大な権力の前で人間性そのものが踏みにじられたことに対して、伝吉は憤激し、神の残虐性に抗議する。しかし、結局彼にとって、この憤激は「無に等しい憤激」であり、「狂気も暴行も自棄も何の意味もない」ものに過ぎなかった。自分がいかに憤激しても、世界は少しも変わらない。つまり、自分を変えるために上海に渡ったはずの伝吉であったが、彼は依然として、ニヒリスティックな考え方を持っていた。ニヒリズムに陥っていた彼の生活はどこへ行っても変わらなかったのである。

この事実に気づいた伝吉は上海から離れて北京へと流れ、全くあてのない漂泊が始まった。北京に来た彼は、前述したように白夫人の援助をうけ改めて大学生になった。北京にいる伝吉は依然として地獄行の「ニヒリスティックな男」にはかならなかった。彼は恋愛にも、女の肉体にも無感動的であり、白夫人と肉体関係を持つと同時に、その娘の麗美とも関係を持ちながら「何等の羞恥の念も起こらない」「モラルの喪失者」と自己認識する。また、彼自身も常に中学校時代から続けてきた「運命の不確かさ」「必然性のなさ」についての不安と恐怖を感じ、周囲のすべてに疑惑を感じずにはいられない。こうした伝吉はまさに本節の冒頭で述べたように、白夫人の言う「何事にも興味を失った」男であり、麗美の言う「光明を失った」無気力な男であり、三造の言う「知的退廃の泥沼に落ち込む人間なのであった。

ある日、ニヒリスティックな彼はスパイの仕事を依頼される。その日、公使館員の柴崎から同級生の朝鮮人権泰生ら三人が独立運動の動向があるかどうかを監視してくれと依頼され、大量のお金も与えられた。伝吉に差し出されたお金は、外務省警察から出される抗日分子諜報のための資金なのである<sup>227</sup>。中国の利権獲得のためにあらゆる武装蜂起や

<sup>227</sup> 荻野富士夫「総力戦下の治安体制」『岩波講座アジア・太平洋戦争第2巻 戦争の政治学』(岩波書

独立運動を監視し、ナショナリズムを高揚させていく日本の姿が公使館員の柴崎を通して象徴的に描き出されている。そして皮肉にも日本官憲の手先にならざるを得ないのは伝吉のような一般居留民であった。

このように当時の北京は、中原大戦という国民革命を抱えながら、日本帝国の侵略にも晒される状況にあった。つまり、伝吉が体験したのは白夫人に囲まれた華やかな北京ではなく、その底に隠れている様々な政治権力が闘争し操る暗がりの北京空間だった。

さて、伝吉はお金を引き受けたものの、官憲の手先になる積もりはなく、ただお金を巻き上げて小遣いに充てようとするだけだった。しかも、彼はその夜酒酔いのためお金も取られた。その後、白邸の宴会では、伝吉は「金もなくしたから、」「君を監視する義務もなくなった」と密偵の話の顛末を反日活動の恐れがある朝鮮人権泰生にすべてを話す。政府資金を巻き上げた上に、権泰生にスパイの話を手平と打ち明ける伝吉の行為は、確かに日本人としての倫理観も良識も欠け、祖国を裏切る行動に違いない。彼にとって、国家さえ怖くなく、何の価値も持っていないのである。それは上海時代以来、彼がこの世界に堅固な摂理も正義も存在しないという恐ろしい事実を知ったからであり、この世界の安っぽい現実の背後には虚無の暗がりしかないことを見抜いてしまったからである。彼の無感動で無気力に見えた顔の背後には、実は世界を支配する存在に裏切られ続けたことに対する根深い不信と憎みが心の底に染み込んでいるのだろう。そして、その憎みと憤激がついある形を取って露出するのである。

スパイの依頼を受けたその夜、お酒に酔った彼は様々な意識の錯乱を起こし、人をも自分をもいじめたいような強い邪悪な思念が湧き上がってきて、また中学時代の友人をいじめた記憶や若夫婦を凌辱する妄想を引き起こす。彼はその夜の感情は珍しく平生の無感動を忘れ、快い凶悪な激情に浸ったのである。

みんな失くなれ、みんなこわれろ、何もかも。(中略) 大地震や大噴火や大津波が起こって、みんな目茶苦茶になってしまえ。(中略) 自分の知っている人間はみんな惨らしい死方をするがいい。今までの女達も、学校の教師も友人も、この公寓の同宿舎達も、美代子も、「麗美」も「白夫人」も。(232 頁)

このような凶悪で嗜虐的な感情は、最後にく自分は「白夫人を殺すようになるかもしれんぞ」という観念に変わっていく。この自分でもさすがに驚いた観念について、伝吉は様々な理由を探してみたが、混乱ばかりで何一つ必然的な理由が見つからない。結局これは自分自身を「精神的な狂燥の見栄坊」と責めることで終わってしまう。

ここで出てくる伝吉の白夫人殺害幻想や凶悪な感情は一体何を意味するだろう。上述したように、これまでの伝吉は自らの世界の不合理への憤りと世界への不信を内攻の形で自分を苦しめ、頹廃と虚無に陥る。しかし、「現実の行為によって反撃することが不可能なとき、想像上の復讐によってその埋め合わせをしようとする<sup>228</sup>」者が抱くルサンチマンのように、彼は世界への破滅幻想や白夫人への殺意幻想によって、内面的な神への復讐を行ったのである。この内なる復讐は彼の心の中に染み込んでいる憤りの表出であり、希望が見えない時代を生きてはいけない、あるいは生き抜くための最後の抵抗なのかもしれないのである。それでもなお、彼はその反抗して復讐したい気持ちを自らの精神的な狂躁に起因するものとしてこの観念を抑えようとしていたのである。まさにニヒリズム的な考え方ほかならない。しかし、この抑えようとした内なる復讐と反抗は朝鮮人の権泰生によって新しい意味が与えられる。

スパイ依頼を受けた夜の一週間後、例の宴会が白邸で開かれ、伝吉は権泰生に会い、密偵の話を彼に話したことは前述の通りである。この宴会において、権泰生は伝吉に対して自分の人生経歴や持っている反日感情について打ち明ける。高等普通を卒業した後、彼は朝鮮から東京へ出奔して商売をやっていた。その後家族も一緒に上京したが、関東大震災に遭った。この大震災において、権泰生は自分の両親と妹が目の前で殺される悲劇に見舞われた。それ以来、彼の心の中では日本に対する怨恨と憎悪の気持ちに満ちていた。彼は自分の反日感情について作品の中では次のように描かれている。

僕のは、コンミュニズムや、アナキズムじゃないというんだ。(略) 社会の改造なんて僕は考えたことなんかないよ。僕の持っているのは、極く人間的な自然な憎悪と怨恨だけだよ。この復讐したいという憎悪の気持ちが、自然でないだろうか、人間的でないだろうか？ (243 頁)

---

<sup>228</sup>永井均『道徳は復讐である ニーチェのルサンチマンの哲学』(河出文庫、2009) 15 頁。

このような権泰生の言葉に対して、伝吉は返す言葉がなく、珍しくも、尊いものを見るような気持ちを彼に感じたのである。上海時代に世界を支配する存在に傷つけられ「情熱的な憤り」を持つ伝吉は、権泰生の純粋な憤激に共鳴したのだろう。権の憎悪と怨恨が自然で人間的であれば、自分の「憤り」も当然正当な意義を持っており、そしてその感情による反抗と復讐もまた抑えるべき恐ろしいものではなく、「憤り」の人間的で自然な結果の表出として認められるものである。この権の言う「人間的な自然な憎悪と怨恨」という言葉はまさに無気力で無感動に生きてきた当時の伝吉の冷たい心を開かせたと思われる。つまり、反日運動者権泰生の言葉に感銘を受けた伝吉は、自らの憤激に正当性を与え、そしてこれまでの人生が、新たな方向へと向かうかもしれないのである。ニヒリステイックな伝吉は、権泰生によって、自分の人生に別の生き方があることに気づかされたのだ。

つまり、「北方行」を通して、中島敦は光明を追い求めて、生の希望に燃えながら中国を訪れたが、暗がりの上海や北京という現実世界に傷つけられ続け頹廢と虚無に陥ったあげく、国家を裏切り反日運動者の味方にし、反抗と復讐に正当性を与えようとした折毛伝吉という人物を生み出したのである。

## 第5節 黒木三造の向かうところ

上述したように、「北方行」では、日本から北京へ旅行しに来た三造の眼差しを通して、当時北京で生活する在留日本人の姿や彼らの生活状況をそれぞれ違う立場と角度から見る事ができた。その内容を確認してみると次のようになる。

「愛には国籍がない」という理想を持って北京に渡り、20年間上流社会において華やかな生活に暮らしてきた白夫人は、贅沢な生活を送る一方、中国体験によって自分の心の中の中国人蔑視を改めて芽生えさせるなど、理想とはかけ離れた墮落地獄の深淵を徘徊している。また底辺に暮らす森は、一攫千金の野望を持って骨董商売をするが、夢破れて人々に軽蔑されながら白氏の家に戻り子守として閉じ込まなければならなかった。小西も新聞を作る夢を持って北京にやってくるが失敗を繰り返し生活が貧困に落ち、結局お金を騙して北京から逃げ出すほか道がなかった。そして、留学生の伝吉は生の希望を追い求めて中国へと向かうが、世界の暗がりを知り尽くし頹廢と虚無に陥ったあげく、国家を裏切り反日運動者の味方にし、反抗と復讐に正当性を与えようとした。つまり、三造が北京で見つめた居留日本人たちは、みんなそれぞれの理想を持って憧れの北京へ出かけた

が、夢破れて苦勞し、理想とは違う生活を送らなければいけない人物たちだった。

このように、北京という空間は当時日本中で宣伝されていた憧れの場ではなく、あえて様々な問題を生み出し、挫折させる幻の場にほかならなかった。これはまさに同時代の知識人たちが認識した北京の姿を覆すことにしたものである。では、このような北京の姿と北京に暮らす居留民を描き出すことによって、中島敦は何を言おうとしたか。その答えは三造の向かうところにある。

あらすじで述べたように、北平に着いた三造は自分ともっとも親密な関係を持つ、あるいは三造のこれからの人生に変化を与える可能性の高い人物が伝吉だとわかる。なぜなら、三造は自分と似ているが違う伝吉に対して大変興味を持ち、彼の隣に下宿しているいろ話をしたり、また自分の日記で伝吉について分析し感想を漏らしたりするからである。ある日、三造は伝吉から友人の朝鮮人権泰生が2.3日中に鄭州の戦線へ行く話を聞いた。その詳細は次の通りである。

「権がね、——あいつは北支晨报の記者をやってるんでね、——何でも二三日中に戦線の方へ行くそうですよ。ついて行ってみませんか。新聞記者に仕立てて連れて行ってくれるそうだ。僕に行かないか、って話だったんだが、僕より君が行くといい。」

「そりゃ、行きたいな。戦線ってどっちです。」

「さあ、それは僕も知らないが、いずれ鄭州がどこか、あっちの方じゃないかな。」  
無気力な幸福(と、彼は自分で強いて考えるのだが)に酔いしれている自分にとって、いい刺激になるだろうと、三造は思った。(265-266 頁)

三造は自分の自意識過剰の病に苦悩したすえ日本での生活に疲れ、そこから脱出して未知の世界に冒険するために中原大戦下の中国北平に来た。ところが、あらすじで紹介したように、北平にいた三造の体験は冒険どころか、古都の雰囲気染まって観光や芸者遊びばかりする無為な長閑なところだった。つまり、彼が期待していた刺激的な生活はなかった。そんな三造に、伝吉の戦線への勧めはまさに彼の待ち望むところだった。三造が行きたがる中原大戦は軍閥闘争の産物、内戦と言われるが、別の側面からみれば、新たな中国を作るために国民党、反国民党軍閥、共産党という国内の三大勢力が参加する盛大な国民革命だった。革命は当時の内憂外患で泥沼に落ちていく中国にとって、混迷から脱出できる唯一の道であり、希望であった。結局、三造は戦線へ行く決意をしたままに作品が終

わってしまうが、その後三造が本当に権泰生と一緒に戦線へ行ったら、彼の人生が大きく変わったかもしれないのである。実際当時日本国内では、三造のような自意識の病にかかり頹廢や混迷を感じる学生や知識人が少なくなかった。

周知のように、「北方行」が執筆された1930年代は、日本歴史上最悪の時代であった。1931年、日本は満州事変を引き起こす。いわゆる15年戦争の幕開けである。翌年には満州国建国宣言、五・一五事件と続き、その翌年には国際連盟を脱退する。やがて、二・二六事件、そして盧溝橋事件を契機に日中全面戦争へ至る<sup>229</sup>。つまり、1937年日中全面戦争が勃発される前の日本社会は、日に日に軍国主義に向かい厳しくなり、重苦しい空気に包まれた状況が想像し難くない。

このような急激な軍国主義の突入にともなう一切の左翼思想の禁圧、右翼の台頭に直面し、そして権力の前に自分の信念や人間性そのものが踏みにじられ、知識人の中には混迷に苦しまなければならなかったのであった。

「北方行」が執筆され始めた1933年から、不安精神を段々内在化していくことを描いた「不安の思想とその超克」(1933)、また当時の底流する「不安」を文章化していく「不安の文学」(1933)、そして一切の価値の転倒を説き、転向者の醜怪な内面を描くシュストフの『悲劇な哲学』の日本版が1934年1月に出版され、大きな反響を呼んだ<sup>230</sup>。さらに1936年頃になると、太宰治「ダス・ゲマイネ」(1935)、高見順「故旧忘れ得べき」(1936)、阿部知二「冬の宿」(1936)などのような心の傷口を押し広げて自嘲し、頹廢的傾向のある文学作品が多く書かれ、ニヒリズムの影を宿していた。

つまり、自意識過剰、頹廢、焦燥と不安に身を落とす三造の姿は、まさにファシズムに向かっていく日本社会に翻弄され、その時代の暗い影に色濃く染められていた悲劇的な日本知識人の中の一人ほかならない。どんどん厳しくなっていく日本社会に脱出して中国国民革命の戦場へ冒険しに行く三造が望んでいるのは自己救済だけではなく、彼と同じく頹廢と混迷に墮落してゆく人々の救済と抵抗でもあった。そして、そこには一つの道が開かれ方向が与えられている。それは、権泰生の人間的で自然的な反日道路、また伝吉の頹廢から覚醒していく道にあり、さらに三造の向かう革命の戦線にある。

中原大戦という政治的背景に暗示されたように、この時代に翻弄されて夢破れて絶望

---

<sup>229</sup> 濱崎一敏「日本における戦時下の文学者たち」『長崎大学教養部紀要（人文科学篇）終刊号第38巻第1号』（長崎大学、1997）65頁。

<sup>230</sup> 樫原修「＜背教＞と＜不安＞—シュストフ的不安」『講座昭和文学史第2巻 混迷と模索＜昭和十年前後＞』（有精堂、1988）127-129頁参照。

する人々に残されたのは革命の道しかなかった。これは日本社会の悲劇であり、白夫人とその娘たち、西、森、折毛伝吉、黒木三造を含む日本人の悲劇でもある。つまり、「北方行」は、日本人が夢託した中国北平の政治状況を背景に、夢破れて絶望と頹廢の闇から覚醒して革命という方向へ向かわなければならない日本人の悲劇を描こうとした作品ではないかと思われる。しかし、1930年代の日本社会は自分を不幸に陥れた世界へ復讐して革命の道へ向かう日本人を創造することは許されない時代であった。

前述したように、1931年満州事変の後、日本のナショナリズムは勢いを増していき、軍部の発言力も強くなった。言論や思想の自由は制限され、新聞や出版物への検閲も厳しくなり、頻繁な伏せ字と発禁もよくなされていた。1933年、京都帝国大学法学部の滝川辰教授は、講演や著書の内容が危険思想であるという理由で文部省から一方的に休職処分された事件が起きた<sup>231</sup>。1934年には出版物改正が公布され、同年文部省に思想局が設置された。そして、1935年には、憲法学者の美濃部達吉が長年唱えてきた天皇機関説が、不逞思想だと強調され、政治問題にされた<sup>232</sup>。当時の出版法や新聞紙法について、河原理子は次のように指摘している。

出版法は、新聞紙法と並ぶ、明治以来の言論統制である。新聞紙法が、新聞雑誌など定期行物を対象とするのに対して、出版法はそれ以外の文書図画と、もっぱら学術、技芸、統計、広告を載せる雑誌を対象とした。発行時に内務省に納本することを義務付けており、安寧秩序妨害や風俗壊乱だと認めれば内務大臣が発売頒布を禁止できる。また、国憲を紊乱するものなどを出版した場合は犯罪として著者、発行者らに刑事罰を科す規定があった<sup>233</sup>。

このように、「安寧秩序」を妨害するものと判断されれば、状況に応じて犯罪者になる恐れもあった。反日運動者朝鮮人を描くだけでも検閲の対象になるかもしれないが、暗黒な時代を不幸に生きる日本人、国家を裏切り反日運動者の味方にし、反抗と復讐に正当性を与えようとする伝吉、さらに軍国主義に向かっていく日本社会に脱出して革命へ向かう方向が与えられた三造などを描き出す「北方行」は明らかに当局の禁忌に抵触しそうな

<sup>231</sup> 西川伸「滝川事件とはなんだったのか」『大阪市立大学史紀要』（大阪市立大学、2016）参照。

<sup>232</sup> 国防研究会「天皇機関説事件「概略」」[http://www.kokubou.com/document\\_room/rance/rekishi/seiji/tennoukikansetu.htm](http://www.kokubou.com/document_room/rance/rekishi/seiji/tennoukikansetu.htm)（2018年5月18日検索）

<sup>233</sup> 河原理子『戦争と検閲 石川達三を読み直す』（岩波新書、2015）137頁。

ものであり、印刷を許可されるものではなかった。結局、中島敦は作品を中断した。その後、彼が二度と同時代人を描くことはなかった。これが時代への妥協ではないことは言うまでもない。

## おわりに

1920、30年代の中国は多くの日本人にとって自己実現の場であったり、一攫千金の場であったり、希望に満ちた憧れの地だった。幼い頃から漢学に恵まれた中島敦も中国憧憬を持っていた一人であった。しかも、彼は中国にいる家族や親族を会いに何度も中国に足を運んだ。その過程で中国に暮らす多くの在留日本人の生とその運命を直に観察するチャンスに恵まれていた。

第Ⅱ部で取り上げた「D市7月叙景（一）」と「北方行」は中国に憧れた日本人が中国で暮らす様子を取り上げたものである。しかも、主な登場人物の多くは満鉄総裁と満鉄社員、留学生、若き知識人、富豪の未亡人など、いわゆる社会地位を持つエリート層に属する人たちであった。彼らは様々な目的を抱いて中国に渡った。しかし、現実の中国は宣伝していた通りの世界ではなかった。それ故に「D市7月叙景（一）」では、満蒙権益を獲得しようとした満鉄総裁は辞任の道を余儀なくされ、日本での苦しい生活を逃れようとした満鉄社員は依然として安心できる生活を手に入れなかった。また「北方行」では、自己変革を求めて積極的に行動し冒険しようとした三造は無為と怠惰のみ感じ取った。「愛には国籍がない」と説き、中国での新生活に夢見る白夫人は改めて中国人蔑視に気づいた。ニヒリズムの脱出を願う伝吉はさらなる退廃の生活に蝕まれていく。

つまり、中島敦は当時の日本文壇でよく取り上げられていた<中国もの>と違い、日本での生活を捨てて冒険に出かけたものの、夢破れた日本人たちを様々な角度と立場から探究し、彼らの存在を描き出したのである。

日本を脱出し、植民地に生きる日本人の姿は<朝鮮もの>の中でもすでに散見されている。例えば、朝鮮人への優越感を持つ傲慢な学生、無知で鈍感な女、朝鮮人を蔑視する人種差別意識を持つ小僧や朝鮮人に同情する優しい紳士などを登場させている。これらの日本人たちはそれぞれの特徴が断片的に取り上げられ、ストレートに書かれている。しかも、決して内面までは踏み込まない。一方、<中国もの>では、日本人への描写がより立体的かつ豊かになっており、矛盾、苦悩、不安、恐怖、懐疑などといった内面的心理も

複雑になっている。

ここでは、同じく人種的差別意識を持つ「巡査のいる風景－1923年の一つのスケッチ」の中の汚いなりをした小僧と、「北方行」の中の白夫人を取り上げ、その具体像を考察する。

「巡査のいる風景－1923年の一つのスケッチ」では、ある府会議員の選挙演説の途中で、「二十にもならない汚いなりをした」小僧が一人の親日派の朝鮮人候補に向かって「黙れ、ヨボのくせに」と怒鳴った場面が取り上げられている。このような公の場で「ヨボ」といった侮辱語を使い、朝鮮人を意識的に揶揄し嘲笑することから、小僧の朝鮮人偏見と蔑視の激しさが窺える。

小僧と同じく、「北方行」の中でも登場人物の一人である白夫人の現地の中国人に対する人種的差別が見られる。第4章で述べたように、北京に行く前の白夫人は中国人と恋に落ち、「愛には国籍がない」と説き、中国人と偏見のないように暮らせると信じていた。しかし、彼女は実際に中国国籍に変わって北京に住むようになり、現実の中国に触れ、様々な中国人と接触することによって、これまでの中国認識が崩れた。それでも彼女は長い間苦しみながらも「懸命な意志的な努力」を持って、中国人への偏見をなくそうとし、自分を誤魔化そうとした。次の文は、姑との接触によって自分の中にあった中国人蔑視に気づかずにはいられない白夫人を描いたものである。

彼女は姑をできるだけ敬愛しようと努めていたにもかかわらず、やはりなお彼女の心中には一点の傲岸さが姑を軽蔑し、姑との共鳴を防げようとしているのを彼女は発見しなければならなかった。それは決して無智や無教育への軽蔑ではなかった。その軽蔑は明らかに――彼女にはそう認めるのが辛くはあったが――人種的なそれに違いなかった。(188頁)

自分の中の中国人蔑視を認めざるを得ない白夫人は、異国人と恋に落ち、異国に住むことを「悪夢」「恐ろしいこと」といい、自分を「悪い子」と決めつけるなど後悔の念に駆られている。彼女は「人種と国籍とのこと」で恐怖に陥り、毎晩不眠に悩み、「自分にはもう何もわからないと思う。もう何もかもがめちゃくちゃだと思われてくる。地獄だ、地獄だ、と覚えず声にまで出」し、とうとう自己嫌悪の闇に墮落していく。

このように白夫人も人種差別意識を持つ日本人として描き出されているが、<朝鮮も

の>の小僧のような単なる差別意識を持つ人物像ではなく、遥かに複雑な内面世界を持ち、矛盾と葛藤に置かれている。白夫人ばかりではなくて、<中国もの>に見られる日本人は、必ずしも被支配者側の人間より優位に立ち、気軽な生活を過ごす者ではなく、実は様々な悩みに囚われ、理想な生活とはかけ離れた不安な日々を追われている。例えば、満鉄総裁はしゃっくりに振り回され身内の恐怖を実感し、満鉄社員は根無しの不安を感じている。また三造は無為と怠惰のみ感じ取り、傳吉はニヒリズムの世界に陥っている。

つまり、<中国もの>から読み取れる植民地に暮らす日本人に対する中島敦の認識は、朝鮮体験によって生まれた日本人認識より奥行きを増やし、確実に深まっている。そして、常に存在論的な不安を持ち、苦悩する人間像は、その後の中島敦文学でしばしば取り上げられるようになった懷疑者・思索者の原型となり、<古典もの>の一つのテーマになっていく。

そのほか、<中国もの>では<朝鮮もの>に見られない新しい人間存在の有り様を顕在化している。つまり、不安と苦悩との対決、「行動への願望」を持つ人間像の登場である。このような人物造型が、その後の<古典もの>に取り入れられていくのはあらためて言うまでもない。

しかしながら、この<中国もの>も、<朝鮮もの>と同じく発表当初正当な評価を受けていない。未完という理由も指摘されるが、戦時下の当時の日本社会と文壇には夢破れた日本人たちが中国をさまよう中島敦の作品をまともに判断する環境ではなかったことを指摘しておきたい。

### 第Ⅲ部 島民イメージを覆す南洋人 — 晩年の南洋体験

#### はじめに 1940年代における島民イメージと中島敦の〈南洋もの〉

1941年6月から翌年3月まで中島敦は、文部省図書監修官釘本久春の斡旋により南洋庁内務部地方課国語編集書記として南洋群島に赴任した。当時の南洋では、「我々の任務は、島民の福祉を増進することにある。(中略)1日も早く、人種的、民族的差別が消滅し、混然融和した同じ国民となることを希望する<sup>234</sup>」というように同化政策が推し進められていた。そして、現地住民の幸福を増進するためには、日本語教育と道徳教育が強調され<sup>235</sup>、「教育こそが現地住民を従順な忠誠心のある人間に育てるための手段」だと考えられていた。つまり、教育を施すことによって、日本精神を教え、従順たる島民を育ち、彼らを幸福にしてやるという方針だった。

1920年、当時文部省の図書監修官だった高木市之助は、「トラック島便り」という植民地教材を執筆し、それを国定の尋常小学校国語読本の巻九に採用した。次の文は当時の日本が早くから「大人しく」て従順な「土人」のイメージを子供たちに植え付けさせていたことを端的に物語っている。

土人はまだよく開けていませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、(略)子供などはなかなか上手に日本語を話します。この間も十ぐらいの少女が「君が代」を歌っていました<sup>236</sup>。

同様の島民イメージは、南洋を訪れた多くの知識人たちも持っていた。矢内原忠雄は『南洋群島の研究』(1935)の中で、「現今にても若し労働の環境に置かれる時には、彼らは従順にして勤勉なる労働能力の所有者たること<sup>237</sup>」と島民の性質の従順さを指摘している。旅行者として南洋群島を訪れた児童文学者の久保喬は、その著『南洋旅行』(1941)

<sup>234</sup> 松岡静雄『ミクロネシア民族誌』(岩波書店、1943)。

<sup>235</sup> 荒井利子『日本を愛した植民地 南洋パラオの真実』(新潮新書、2015) 131頁。

<sup>236</sup> 川村湊『南洋・権太の日本文学』(筑摩書房、1994) 26-27頁。

<sup>237</sup> 矢内原忠雄『南洋群島の研究』(岩波書店、1935) 15頁。

の中で「日の丸旗が空に挙げられて、その下で君が代を歌う、島民の子供たちを見ますと、何か強い感動が胸の中に湧いてくるのを覚え<sup>238</sup>」ると指摘し、同書の「ココホレ ワンワン」の節では、「島民たちの中にも、もうこれほど、日本のものが溶け込んでいるのだということを、感じないでいられませんでした<sup>239</sup>」と述べている。そして、「カナカの親子」の節では、椰子の実を取ってくれた親切な親子の話が次のように描かれている。

「すまないが、その椰子の実を一つ売ってくれませんか。」

といて、主人にたのんでみました。

すると主人は、黒い顔に未開人特有の、人の良さそうな笑を浮かべて、

「アア、アゲルヨ。コレハ ウマクナイネ。コプラ トル ヤシ ウマクナイ。

アチラノ ウマイ ヤシ トツテ ヤルヨ。」

と答えてから、そばの子供へ、何かしら早口の島民語でいいますと、子供はこっくりとうなづいて、すぐにかたはらの十メートル以上もあるヤシの木へ、するすると登ってゆきました。(中略) 見かけたよらずやさしく親切な島民へ、私はお礼をいってから、お代だといって十銭出しますと、

「イラナイヨ。」

と、首を横に振って、主人はなかなか取ろうとしません<sup>240</sup>。

このように、当時、南洋を訪れた知識人たちは、島民たちが如何に親切でおとなしい人なのかを様々な文章を通して紹介していた。

では、中島敦はどうであったのか。島民の子供たちが使う教科書を編纂するために南洋に出かけた8ヶ月の間、中島敦は1941年9月中旬から11月の始め、そして11月中旬から12月中旬の2回、約3ヶ月間、視察旅行としてトラック諸島、ポナペ島、クサイ島、ヤルート島、ヤップ島、ロタ島、テニアン島、サイパンなどを渡り歩いている。その際、彼は島々にある公学校（島民学校）、国民学校（日本人学校）を見学し、授業参観をしている。それだけではなく、各島の校長や支庁の官吏など長年南洋に滞在する日本人にも招待され、彼ら南洋に関する話を聞かされるとともに、島に案内され、島民部落に連れてい

<sup>238</sup> 久保喬『南洋旅行』（金の星社、1941）48-49頁。

<sup>239</sup> 同上、274頁。

<sup>240</sup> 久保喬、前掲書（註238）31-34頁。

かれた。それ故に中島敦は近距離で島民の姿を観察し、彼らの歌声を聞き、踊りを見て、彼らと直に会話することができたのである。何よりも、南洋滞在中に民俗学者の土方久功と出会い、間もなく彼と親しくなったことだ。中島敦は、毎日のように土方久功の宿舎を訪れ、やがて彼の日記・草稿を読むことを許されるようになった。

中島敦は、島で体験したことを書簡や日記の中で書いている。彼は「僕が生徒を捉まえて話しかけても、向こうはコチコチで、「ハイ、\*\*\*で、あります」と大人しく返事するのみで、「がっかりする」<sup>241</sup>心情を妻たかに吐露し、また日本語の発音ができない生徒に対して、「何時迄も立たされて練習しつゝあり<sup>242</sup>」、怒鳴りつく校長の酷烈な生徒扱いに驚き、さらに「帽子を脱ぐにも1, 2, と号令を掛けしむる」様子に対して、「如何なる趣味にや<sup>243</sup>」と書いている。つまり、中島敦は島民の子供たちの性質を無視して、強制的に日本文化を押し付け、大人しく改め直す教育に疑問を覚えていたのである。次の文は、中島敦が南洋での仕事の無意味さに気づく場面である。

今度旅行して見て、土人の教科書編纂という仕事の、無意味さがはっきり分かってきた。土人を幸福にしてやるためには、もっともっと大事な事がたくさんある、教科書なんか、末の末の、実に小さなことだ。ところで、その土人達を幸福にしてやるということは、今の時勢では、できないことなのだ。(中略) なまじっか教育を施すことが土人達を不幸にするかもしれないんだ。俺はもう、すっかり、編纂の仕事の熱が持てなくなってしまった<sup>244</sup>。

では、中島敦にとって、島民はいかなる存在だったのか。妻への書簡の中で彼は自分の島民への思いを次のように書いている。

僕は島民(土人)が好きだよ。南洋に来ているガリガリの内地人より、どれだけ好きか知れない。単純で中々可愛いところがある。大人でも大きな子供と思えば間違いない。昔は、彼らも幸福だったんだろうがね。パンのミ・ヤシ・バナナ・タロ芋は自然にみのり、働かないでも、そういうものさえ食べればよかったんだ。後

<sup>241</sup> 1941年12月2日付妻たか宛書簡、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2001)648頁。

<sup>242</sup> 1941年11月28日付日記、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)484頁。

<sup>243</sup> 同上。

<sup>244</sup> 1941年11月9日付妻たか宛書簡、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)631頁。

は、居眠り、と踊りと、おしゃべり、とて、日が暮れていったものを、今は一日中こき使われて、おまけにヤシもパンの木も、どんどん切られてしまう。全く可哀そうなものさ<sup>245</sup>。(下線は筆者)

中島敦は、南洋の人間は「大人でも大きな子供と思え」るような自由で単純な人々だったが、そんな彼らが「一日中こき使われて」いる生活を強いられていると指摘している。

さらに中島敦は、エッセイ「章魚木」(1942年3月)の中で、パラオ本島北部の島民部落の章魚木と日本人町に通じる道で見た章魚木との比較を次のように描かれている。

既に蒼茫と暮れかかった坂道の両側に、葉をおどろと振り乱したたこの木どもが、モモンガアとでも言いたげに私たちを威すが如き風情であった。生くさい坊主のような狡そうな奴や、寒山拾得みみたいな飄逸な奴や、今にもアカンベエをして見せそうな奴や、後ろを向いて舌でも出しかねない奴や、(中略) どれを見ても全く一本一本に個性が躍動しているようだ。(中略) 数日後、アイミリーキから瑞穂村への道で私はまたたこの木の群を見た。(中略) 個々のたこの木達は、声を揃えて大人しくコンニチハと頭を下げそうな、よくしつけられた優等生ばかりである。飼い慣らされた檻の中の猛獣を見る時のような気味無さを私は感じた<sup>246</sup>。(下線は筆者)

中島敦が南洋で出会った島民は、ステレオタイプ化した極めておとなしい個性のない「たこの木」で表象された人間ではなく、「個性が躍動している」存在であった。そして、この「個性が躍動している」「たこの木」が、ナポレオン、マリヤン、夾竹桃の家の女、マルクープ老人になり、中島敦の〈南洋もの〉になる。中島敦は〈南洋もの〉を通して表現しようとする島民の姿は、「よくしつけられた優等生」ではなく、それぞれ自分なりの世界を持ち、意地を持つ豊かな人間なのである。

これまでの先行研究では、島民の姿に関しては「植民地政策の犠牲者<sup>247</sup>」(山下真史)、「マリヤンは植民地の統治者の目から見ると南洋政策の成功例であるが、「私」の目の中には犠牲者といえよう<sup>248</sup>」(閻瑜)、「ナポレオン少年を通して為政者に対する不満さえ表

<sup>245</sup> 1941年11月9日付妻たか宛書簡、前掲書(註244)631頁。

<sup>246</sup> 中島敦「章魚木」『中島敦全集2』(筑摩書房、2001)20-21頁。

<sup>247</sup> 山下真史、前掲書(註47)182頁。

<sup>248</sup> 閻瑜「中島敦の南洋物にみられるその時代意識-「マリヤン」を中心に」『大妻国文第45号』(大妻

している<sup>249</sup>」（閻瑜）など、文明統治の犠牲者や脱植民地主義思想の象徴として論じられている。一方、中島敦の「不可解」なものの存在を認める姿勢を主張するために、杉岡歩美は南洋の人間が「わからない」存在<sup>250</sup>」、木村一信は「不可解」な存在、不可知さとの遭遇<sup>251</sup>」と述べ、また和田博文は「不可解」を「不可解」のままに見つけようとする眼差しは、「南島譚」「環礁」に偏在している<sup>252</sup>」と指摘するなど、島民の姿を「不可解さ」と認識する傾向がある。このような二つの方向による指摘は、いずれも個々の人間存在のあり方、人間の内面を追求する視点ではない。

そこで、第Ⅲ部では、＜南洋もの＞の中で「マリヤン」と「雞」を取り上げ、そこに登場する島民の姿を分析することによって、当時日本社会に広まったステレオタイプの島民像を改めたい。

---

女子大学、2014）150 頁。

<sup>249</sup> 閻瑜、前掲書（註 248）151 頁。

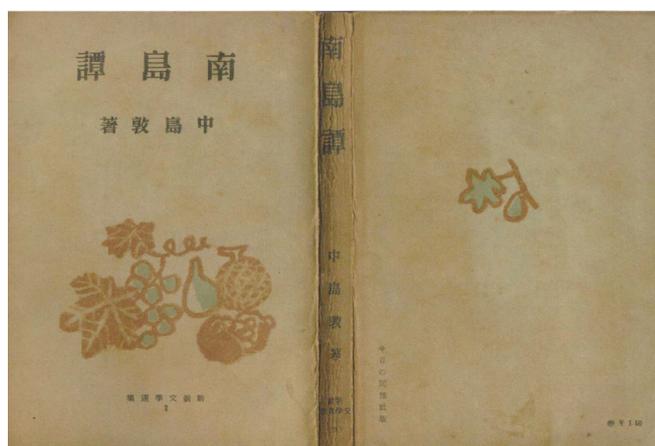
<sup>250</sup> 杉岡歩美、前掲書（註 35）36-37 頁。

<sup>251</sup> 木村一信「南洋行—新たな認識との出会い」勝又浩・木村一信編『中島敦』（双文社出版、1992）56 頁。

<sup>252</sup> 和田博文『単独者の場所』（双文社出版、1989）166 頁。

## 第5章 植民地に生きるインテリ女性像 — 「マリヤン」 (1942)

『南島譚』は、1942年11月、今日の問題社から刊行された。この作品集は「環礁」と「南島譚」に分かれ、さらに「環礁」には、中島敦自身が現地での体験をもとに創作した「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」計6編の短編が収録されている。また「南



【図14】『南島譚』初版表紙と背表紙<sup>253</sup>

島譚』には、南洋の民話や風習を物語化する「幸福」「夫婦」「雞」の3編が収録されている。

これらの多くの作品は、中島敦が南洋滞在中に親交のあった土方久功から聞いたパラオの事情、風習、伝説あるいは二人で一緒に体験したことをもとに書き上げたものである。例えば、「ナポレオン」は土方久功の草稿「南方離島記」の中の話を書いたものであり、「雞」は土方久功の「日記」の中の話を書いたものである。また「夫婦」は『パラオの神話と伝説』の中に原型があり、中島敦がそれを原稿の段階で読んだようである。さらに「夾竹桃の家の女」は二人で一緒に出かけたパラオ一週旅行の際に島民部落で見かけた島民女の姿をもとに書かれたものである。そのほか、土方久功から聞かれた南洋島々の奇談が「幸福」などの細部に使われた<sup>254</sup>。

しかし、これらの〈南洋もの〉に描き出された南洋島民の姿は、土方久功からの素材を参考しながらも、原本とはかなり違う人物像を作り出しているところが注目される。その人物たちは、中島敦が自身の現地での体験や彼なりの考え方を生かし、創作されたものである。南洋と南洋人に対して、彼のもっとも関心のあるところを、これらの作品から見出すことができるからであろう。彼の〈南洋もの〉に描かれた島民たちは、それぞれ異なる性質や社会的立場を持ち、多様性を持つ。南洋滞在中に発表した短いエッセイ「章魚木」

<sup>253</sup> 中島敦の会『図説中島敦の軌跡』（中島敦の会、2009）56頁。

<sup>254</sup> 岡谷公二、前掲書（註36）178-180頁参照。

<sup>255</sup> (1942) を通して、その点を見ることができ。「章魚木」では、「たこの木」が南洋島民を比喻するものとして機能する。そこには、個性的で生き生きとした「たこの木」を見た時の感動と個性のない「たこの木」を見た時の失望が表されている。「環礁」という総題でまとめられた6編のうちの一つである「マリヤン」に登場する島民女も、このような「個性が躍動している<sup>256</sup>」存在である。

まず、「マリヤン」のあらすじから紹介することにする。「マリヤン」はパラオに生きる島民女性マリヤンを主人公にした物語である。マリヤンはコロール島第一名家の出身で、東京の女学校にも勉強したことがあり、英語も日本語も堪能なインテリである。彼女はく土俗学者H氏>のパラオ語の先生である。H氏は十数年以上南洋に住み、地方の伝説、昔話の類を集め、それを邦訳している。そして、彼女は週に三回H氏の部屋に来てその手伝いをする。パラオ役所に勤務する<私>は、唯一の話し相手である<土俗学者H氏>の部屋によく出入りしていたがために、マリヤンと知り合った。<私>はH氏の部屋で彼女のパラオ料理をご馳走になることもしばしばあり、また彼女の盛装姿や労働奉仕するときの姿を見たこともあり、H氏と一緒に彼女の家に訪問したり、大晦日の日で散歩に出かけたりするなど彼女との交際を深めていく。しかし、結局H氏も<私>も個々の事情で内地に帰るところで小説は終わる。

上述したあらすじからも窺えるように、これは一般的な文学作品というより、事件もクライマックスもなく、ただ単に語り手の<私>が淡々とH氏、マリヤンとの交流の中で彼女を観察するものである。しかも、<私>の観察するマリヤンにはモデルがいる。

そのモデルは、土方久功と親しく交流していたカナカ人女性マリヤ(【図15】)である。マリヤは1940年1月28日の土方久功の日記に登場していることから、土方とは前からの知り合いであったと言えよう<sup>257</sup>。作中に登場する<土俗学者H氏>が、土方久功をモデルにしていることは、ほぼ定説となっている。モデルのマリヤは、上田淳一郎と河路由佳の実地調査によって明らかになっている。上田淳一郎は「マリヤンはコロール島の王女と言われ、確かに酋長の娘であり、勉強家のインテリでもある。彼女は戦後、アメリカ軍の病院に看護婦長として勤め、その後島の小学校の先生になり、死ぬまでその仕事を続けていた。また晩年には地区議会の議員もしていたそうである<sup>258</sup>」と指摘されている。そ

<sup>255</sup> 1942年、南洋群島文化協会発行の『南洋群島』の3月号に、親友の三好四郎の名前で発表された。

<sup>256</sup> 中島敦「章魚木」『中島敦全集2』(筑摩書房、2001)20-21頁。

<sup>257</sup> 河路由佳、前掲書(註43)61頁。

<sup>258</sup> 上田淳一郎「三十年目の南洋群島」『中島敦研究』(筑摩書房、1978)281-289頁。

して、

河路由佳は上田淳一郎の調査を受けて、さらに彼女の身内や知り合いを訪問し、「1932年日本三育女学校に2年間留学したことがある。何事も極めて優秀で、明るく自信に満ちた人で、その暖かい人柄で多くの人々に慕われていたようである。54歳で亡くなった時に、人口2万人弱のパラオで、マリアの葬儀の参列者は2000人にも及んだそうである<sup>260</sup>」と述べている。

このように、二氏の調査した結果、「マリヤン」に書かれた島民女マリヤンのプロフィールもエピソードも、実在したマリヤのものと思っ  
てよいと言えよう。これらのマリヤンに関する  
事実情報は、作品の数多くの箇所で「H氏に聞  
くと」「H氏は言っていた」「よく聞くと」「後で

H氏に聞くと」と綴られていたように、土方久功から得たものであることに間違いない。

中島敦の南洋日記にもその名前が確実に残されている。中島敦はパラオにいる間に、ほとんど毎日のように土方久功の家に入出入りしていたので、その時マリヤと出会ったのであろう。日記でのマリヤに関する記述は以下の通りである。

夕方、土方氏宅にて島民料理を食う。(中略)食後、島民の歌(日本語と土語と交  
れるもの)を皆で唱う。今日の料理はマリヤのご馳走なり<sup>261</sup>。

夜土方氏に到り、阿刀田氏高松氏等と飲み食い語る。十一時、外に出て一同マリヤ  
を誘出し、月明に乗じコロール波止場に散歩す、プール際にて小憩。帰途初詣の人に



【図15】1940年頃のマリヤ・ギボン<sup>259</sup>

<sup>259</sup> モデルの Maria Gibbons マリヤ・ギボン (1917-1971)。河路由佳 (註22) から引用したものである。

<sup>260</sup> 河路由佳、前掲書(註43)参照。

<sup>261</sup> 1941年12月21日付日記、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)488頁。

会うこと多し、疲れて帰る<sup>262</sup>。

日記には、マリヤの名前が出るだけで、小説に書かれた彼女の容貌や性格などについては何も記されていない。「マリヤン」のH氏は土方久功がモデルであることは間違いないが、これを読んだ土方久功は、「H氏は私とは違う」と言ったという<sup>263</sup>。さらに上述の12月21日の日記に書かれた一同がマリヤを誘い出して散歩するエピソードは、小説にも生かされている。しかし、土方久功と<私>以外の人物は消されており、また日記に記されていない南洋神社初詣での話を加わったりするなど、作者が新たに作り出していたところが注目される。つまり、マリヤン像は、土方久功から得たマリヤンに関する情報と実在するマリヤをモデルとしながら、中島敦自身の体験と彼の創意によって独自のマリヤン像に改められていたのであろう。

これまで「マリヤン」に関する先行研究では、マリヤン像を文明統治の犠牲者や脱植民地主義思想の象徴として論じられている。山下真史は「この作品から浮かび上がってくるのは、植民地政策の犠牲者とも言えるマリヤンの痛みである<sup>264</sup>」と述べている。また、閻瑜は「マリヤンは植民地の統治者の目から見ると南洋政策の成功例であるが、「私」の目の中には犠牲者といえよう<sup>265</sup>」と主張している。さらに、須藤直人はマリヤンが「ロティの結婚」に不満を漏らし、内地人との結婚を拒否する描写を通して、中島敦の「半植民地主義」「脱植民地化」を表現した<sup>266</sup>と論じている。

日本の植民地支配によって日本語教育を受け、また日本に留学した経験があるインテリであるが故に南洋の生活環境とは釣り合わず、また不幸な結婚生活を辿らなければならなかったということを考慮すると、確かに植民地政策の犠牲者である。しかし、筆者がここで注目したいのは、マリヤンが積極的に植民地側に立ち、必死に内地人になろうとすることである。実際、中島敦が植民地支配下に生きる女性を描くのは「マリヤン」が最初ではない。

第I部で述べてきたように、<朝鮮もの>の中でも植民地下に置かれる女性像がしばしば取り上げられている。例えば、「巡查のいる風景」(1929)の金東連、「プールの傍で」

<sup>262</sup> 1941年12月31日付日記、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)489頁。

<sup>263</sup> 河路由佳、前掲書(註43)51頁。

<sup>264</sup> 山下真史、前掲書(註47)182頁。

<sup>265</sup> 閻瑜、前掲(註248)150頁。

<sup>266</sup> 須藤直人「太平洋の異人種間恋愛譚—植民地ロマンスとその「書き換え」—」『比較文学研究88号』(すずさわ書店、2006)37-58頁。

(1933) の娼婦など、従来中島敦が描き出した女性像は大抵、植民地支配に抑圧され、極めて無気力に抵抗するか、または社会の底辺にもがくかといった存在である。ところが、マリヤンはまさにその逆である。彼女は日本の植民地支配に抵抗するどころか、積極的にその一員になろうとし、また底辺の存在でもなく、島の名家の出身でありインテリでもある。なぜ中島敦は彼女のような女性を主人公にし、観察したのであろうか。

以上を踏まえ、本章では「環礁」の中的一篇「マリヤン」を取り上げ、植民地南洋に生きるインテリ女性の生き方に注目したい。

### 第1節 インテリ性質にこだわるマリヤン

「マリヤン」は、語り手の〈私〉がマリヤンという人物の名前、年齢、容貌を説明するところから始まる。マリヤンは三十に間がある年齢で、実際の名前はマリヤであり、聖母マリヤのマリヤである。パラオ地方の島民は、すべて発音が鼻にかかるので、マリヤンに聞こえるわけである。そして、マリヤンの容貌と体格について、〈私〉は次のように認識している。

マリヤンの容貌が、島民の眼から見て美しいかどうか、これも私は知らない。醜いことだけはあるまいと思う。少しも日本がかつたところがなく、また西洋がかつたところも無い（南洋でちょっと顔立てが整っていると思われるのは大抵どちらかの血が混じっているものだ）純然たるミクロネシア・カナカの典型的な顔だが、私はそれを大変立派だと思ふ。人種としての制限は仕方が無いが、その制限の中で考えれば、実にのびのびと屈託の無い豊かな顔だと思ふ。（中略）

豊かといえば、しかし、容貌よりも寧ろ、彼女の体格の方が一層豊かに違い無い。身長は五尺4寸を下るまいし、体重は少し痩せた時には二十貫とっていた位である。全く、羨ましい位見事な身体であった<sup>267</sup>。（下線は筆者）

このように、作者は作品の冒頭でマリヤンの容貌について詳しく描写することによって、彼女の容貌に対する〈私〉の関心の強さを示している。しかも、〈私〉は彼女のその

<sup>267</sup> 中島敦「マリヤン」『中島敦全集1』(筑摩書房、2002) 282-283頁。以下テキストの引用は頁のみ。

「純然たるミクロネシア・カナカの典型的な顔」と体格を、「大変立派」、「実にのびのびと屈託のない豊か」、「羨ましい位見事」だと好意的に描写している。



【図 16】カナカ族の女<sup>268</sup>



【図 17】美人のチャモロ娘<sup>269</sup>

当時、南洋の島民には、【図 16】と【図 17】が示したように、チャモロ族とカナカ族に分けられていた。チャモロ族は石造の家で住み、服や靴などを着用している一方、カナカ族は床のある家を持ち、裸の格好が少なくなるのは大分その後の話である。また、チャモロ族はカナカ族とスペイン人およびフィリピン人との混血だと言われ、生活の様式は欧風化し、容貌風姿も幾分カナカ族よりも優れているという<sup>270</sup>。上述した情報からわかるのは、チャモロ族の混血した容貌はカナカ族のそれより立派だという事実である。

ところが、なぜ<私>はマリヤンの原始的な容貌に執着していたのだろうか。結論を先に言えば、中島敦自身の南洋行前に抱いていた南洋島民に対する認識が大きく関わっていると言える。

では、中島敦の南洋行以前の作品に描かれた南洋島民のイメージとは、いかなるものであったのか。中島敦は 1936 年に書き下ろした「狼疾記」で、主人公の三造が南洋題材の

<sup>268</sup> 西野元章『海の生命線 我が南洋の姿（南洋群島写真帖）』（二葉屋呉服店、1935）12 頁。

<sup>269</sup> 能仲文夫『復刻版 南洋紀行 赤道を背にして』（南洋群島協会、1990）15 頁。

<sup>270</sup> 矢内原忠雄、前掲書（註 232）14 頁。小菅輝雄「南洋群島とはどんな所か」『南洋群島写真帖』（南洋群島協会、1978）。外務省条約局編『委任統治南洋群島 前編（「外地法制読」第 5 部）』（外務省条約局法規課、1962）などを参照。

映画を見ながら、考える場面がある。それは以下の通りである。

スクリーンの上では南洋土人の生活の実写が映されていた。目の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女たちが、腰にちょっと布片を捲いただけで、乳房をブラブラさせながら、前に置いた皿のようなものの中から、何かしきりにつまんで食べている。

(中略) 原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、その写真を見たりする度に、自分も彼らの一人として生まれてくることはできなかつたものだろうか考えたものであった。(略) そして輝かしい熱帯の太陽の下に、唯物論も維摩居士も無上命法も、ないしは人類の歴史も、太陽系の構造も、すべてを知らないで一生を終えることもできたはずではないか<sup>271</sup>? (下線は筆者)

スクリーンに映された南洋土人の姿、また「原始的な蛮人」という言い方から、当時中島敦の島民イメージが如何なるものなのかが垣間見られる。輝かしい太陽の下で、全てを知らないで何も考えないで生きていく姿。これは、常に「存在の不確かさ」や自意識過剰に襲われる主人公三造の姿とは対極的な存在であるといえよう。このような島民像は、中島敦の詠嘆する「ある時はゴーガンの如く逞しき野生の命にふればやと思う<sup>272</sup>」(1937)という歌からも読み取れる。また「光と夢と風」(1941)の中においても類似する描き方が見える。

教育なき・力溢れる人々とともに闊歩し、明るい風と光との中で、労働に汗ばんだ皮膚のしたに血液の循環を快く感じ、人に笑われまいとの懸念を忘れて、真に思うことのみを言い、真に欲する事のみを行う。(中略)

欧羅巴の豚のような、文明のために去勢されてしまったもとは、全然違う。実に野生的で活力的で逞しく、美しいとさえ言っていいかもしれぬ<sup>273</sup>。(下線は筆者)

以上引用した抜粋から窺えるのは、中島敦にとって南洋島民とは、「原始的」で、「教育なき・力溢れる」人々であり、存在のあり方に苦悶するようなものとは無縁な存在である。

<sup>271</sup> 中島敦『中島敦全集 1』(筑摩書房、2002) 405-406 頁。

<sup>272</sup> 中島敦『中島敦全集 2』(筑摩書房、2012) 264 頁。

<sup>273</sup> 中島敦、前掲書(註 271) 107 頁。

その中島敦によって造型された「マリヤン」の語り手の〈私〉がマリヤンの原始的なカナカ容貌に執着した所以である。

しかし、〈私〉の好意的な評価と対照的なのは、マリヤンは「自分のカナカ的な容貌を多少恥ずかしいと考えているようである」。それは、マリヤンがほかの島民と一緒に労働奉仕している時に〈私〉に見られた後の態度から見られる。その場面は以下の通りである。

窓から覗くと、すぐ側のバナナ畑の下草をマリヤンが刈り取っているのだ。(中略) 色の褪せた、野郎仕事用のアッパッパに、島民並の裸足である。(中略) 私を認めると、ニット笑ったが、別に話にも来ない。てれ隠しの様にわざと大きな掛け声を「ヨイショ」と掛けて、大籠を頭上に載せ、その儘さよならも言わずに向こうへ行ってしまう。(288頁)

〈私〉から見れば、島民姿はマリヤンの本来のままの姿である。しかし、〈私〉に見られた時のマリヤンは「てれ隠し」という態度と「さよならも言わずに」行ってしまう行動を取る人物である。これらの反応から、マリヤンは自分の島民姿を恥ずかしく感じており、できるだけそれを隠し、〈私〉に見られたくないというような心理が反映していることがわかる。では、一体なぜ彼女は自分の容貌や島民血統に対して恥ずかしく感じたのだろうか。

マリヤンがカナカ族の容貌を恥ずかしく感じた理由として、〈私〉は二つの解釈を挙げている。第一に「彼女はインテリであって、頭脳の内容はほとんどカナカではなくなっているからだ」、第二に現地では、「島民の間にあっても、文明的な美の標準が巾をきかせているから」である。この2点について、詳しく考察してみたい。

マリヤンは原始的なカナカの容貌をしているが、〈私〉は彼女との交流の中で、マリヤンが「教育なき」、「なにも知らないで」いる純粋な島民イメージからかけ離れたインテリであることに気づく。

〈私〉が初めてマリヤンに出会ったのは、土俗学者H氏の部屋においてであった。マリヤンはH氏のパラオ語の先生である。前述した通り、H氏は土方久功のことで、彼はパラオ地方の古譚詩の類を集めて、それを邦訳している。それゆえにマリヤンが時々その作業を手伝いに来る。その日、二人は〈私〉をそばに置いてすぐに勉強を始めた。その勉強の

様子を<私>は次のように語っている。

パラオには文字というものが無い。古譚詩は全て H 氏が島々の故老に尋ねて歩いて、アルファベットを用いて筆記するのである。マリヤンはまず筆記されたパラオ古譚詩のノートを見て、そこに書かれたパラオ語の間違いを直す。それから、訳しつつある H 氏のそばにいて、H 氏の時々の質問に答えるのである。「ほう、英語ができるのか」と私が感心すると、「そりゃ、得意なもんだよ。内地の女学校にいたんだものねえ」と H 氏がマリヤンの方を見て笑いながら言った。マリヤンはちょっとてれたように厚い唇をほころばせたが、別に H 氏の言葉を打ち消しもしない。 (284 頁、下線は筆者)

パラオは「文字というものが無い」ところである。しかしながら、マリヤンは英語も日本語もできるインテリである。<私>は「厚い唇」を持つ典型的なカナカ族の容貌をしているマリヤンが、「ほう、英語ができるのか」と非常に驚く。一方、マリヤンは<私>の感心や H 氏の褒め言葉に対して「ちょっとてれたように厚い唇をほころばせたが、別に H 氏の言葉を打ち消しもしない」。H 氏に褒められた時のマリヤンは多少恥ずかしがるが、「H 氏の言葉を打ち消しもしない」という行動から、彼女は自身の能力に自負心を持っていることが窺える。

後で H 氏に聞くと、マリヤンの実母はコロールの第一長老の家の出である。パラオは母系制をとっているために、マリヤンはコロール島第一の名家の出身なのである。また、彼女の養父はパラオで相当に名の通ったインテリ混血児（英人と土人）である。英語ができるようになった背景にはこの養父の存在が大きい。そして、島民学校を出てから内地の女学校に進学していたため、日本語も内地人と変わらないほどの素養を持っている。

当時現地の教育では、「国語ヲ常用スル児童」と「国語ヲ常用ゼザル児童」を区別して日本移民の児童は小学校へ、現地住民の児童は島民学校（公学校）へと分けた。島民学校は三年制の本科と二年制の補習科がある。本科で優秀な学生は、補習科に進学し、大工徒弟養成所、実業学校といった専門教育を受けることができる<sup>274</sup>。また、これら島民の卒業後の進路について、荒井利子は次のように指摘している。

---

<sup>274</sup> 荒井利子、前掲書（註 235）136 頁、能伸文夫、前掲書（註 69）44 頁を参照。

パラオ人は、卒業後に運良く就職できても、事務職、通訳、家政婦、店員といった仕事がほとんどで、かなり優秀な生徒でも、村の巡警になるくらいだった。(中略) 公学校三年間だけで卒業しても、日本人と接する機会が少なければ、日本語を使うこともなかった。また、補習科に進んでも、日本人のように漢字を使って書けるまでにはならなかったのだ<sup>275</sup>。

上述した当時の教育事情を見れば、マリヤンは島民の中の優秀な島民よりも遥かに文明化され、教養が優れていることがわかる。マリヤンは相当な家柄と内地教育に恵まれたパラオでの僅かなインテリであることはいうまでもない。

<私>はマリヤンの家に一度訪ねたことがある。島民の家と全く変わらない一方、机の上には厨川白村の「英詩選釋」と岩波書店の「ロティの結婚」が置いてある。コロールには、「岩波文庫を扱っている店が一軒も無い」。ここにいる内地人でさえ、本を読む習慣も無い。だから<私>はマリヤンが「内地人をも含めてコロール第一の読書家かもしれない」と言う。また、その部屋の隅のみかん箱のような物の中にも、いろいろな書物や雑誌の類が詰め込んであり、その一番上には、女学校の古い校友会雑誌が載っていた。マリヤンはまだ日本での留学生活への懐かしさと未練を感じていることが窺える。

そして、マリヤンの友達も、どうも日本人ばかりのようである。夕方など、何時も内地人の商人の細君連の縁臺などに割り込んで話しているマリヤンは、大抵の場合、「その雑談の牛耳を執っているらしいのである。さらに、マリヤンはインテリであり、「頭脳の程度の相違」であるため、夫の島民男を2回も追い出したことがある。

上述したように、マリヤンはカナカの容貌を持ち、島民の間に生きていることは間違いないが、彼女の考えや精神はすでに他の島民たちとかなりかけ離れたところにいることはいうまでもない。彼女は留学して、本を読んで、日本語も英語も話せて、日本人の友達ばかり作って、内地人のような優れた能力を持ち、一所懸命頑張って日本人になろうとしていた。だからこそ、彼女は自分のカナカ人種の血統と容貌に恥ずかしく感じており、精一杯島民イメージから離れようとした。

つまり、<私>の目に映るマリヤンは自分の島民血統に劣等感を感じているほどイン

---

<sup>275</sup> 荒井利子、前掲書（註235）138-139頁。

テリ性質にこだわり、一所懸命頑張って島民イメージから離れようとし、日本人になろうとしている姿である。このようなマリヤンの姿の背景には、当時の南洋社会の社会状況が深く関わっている。これは彼女が自分の容貌を恥ずかしく感じた第2の理由である。次節では、マリヤンが置かれるコロールという町の社会環境について見てみる。

## 第2節 矛盾を孕む南洋社会

中島敦がパラオに赴任した1940年頃の南洋群島は、すでに多くの日本人移民がおり、制糖業、農漁業、鉱石採掘、通信業など様々な事業が展開されていた。言い換えれば、当時の南洋はもはや未開の島ではなかった。特に日本の南洋での最高統治機関南洋庁が置かれたコ



【図18】南洋庁<sup>276</sup>

ロールという町は、南洋では一番文明化が進んでいるところである。1940年頃のコロールについて、三田牧は次のように指摘している。

日本統治時代には南洋群島の首都機能がパラオのコロール島におかれたため、コロールには多くの日本人が住み、インフラ整備が進められた。日本人の人口は1938年にはパラオ人口6,377人に対し、日本人人口は15,669人である。(中略)

コロールの目抜き通り「本通り」はマンゴーの並木が美しく、商店が軒を並べていた。町の中心部には海軍の無線電信塔がそびえ立ち、病院や郵便局、公園、百貨店もあった。小高い丘の上には南洋庁長官邸があり、こぎれいな官舎群がその周りに建っていた。「本通り」に並行する「芸者通り」には食堂や遊郭が立ち並んだ。もう一本の並行する通り「本願寺通り」には沖縄出身者が多く住み、三線の音色が聞こえたものだという。この日本人のために作られたような「町」コロールにおいて、もともと

<sup>276</sup> 西野元章、前掲書（註268）14頁。

の住民であり地主であるパラオ人達は、日本人に埋もれるようにして暮らしていた

277。



【図 19】南洋庁時代のコロール（3 丁目）<sup>278</sup>



【図 20】近代化とは無縁な島民部落<sup>279</sup>

このように、当時のコロールは島民よりほぼ 2 倍も多い日本人、整備されたインフラ、日本らしい近代的な町並みを持っている町であった。つまり、コロールは植民地支配によって内地と変わらない近代風の町に変貌していたのである。しかし、その一方、コロールは近代化されていたにもかかわらず、南洋の島民たちの生活は必ずしも豊かではなかった。彼らは自分たちの住む場所が日本人によって奪われ、日本人に埋もれるように生きるしかなかった。

実際、中島敦が滞在した時には、時局が逼迫するにつれて、それまで内地と周辺の島々から食料の補給を仰いできたロコール島も、いざという時に備えるためにできる限りの食料の自給を目指さざるを得なくなり、多くの土地が強制的に変えさせられた<sup>280</sup>。この事態は中島敦の日記の中にも見られる。彼の 9 月 10 日付の日記には、「往昔の石畳路の掘起されて軍用道路となるを見る、島民また転居するもの多きが如く、（中略）椰子樹多く伐倒され、石畳変じて畑となる<sup>281</sup>」と書き留めている。つまり、コロール町は近代化されたとはいえ、結局のところ、その近代化は日本移民のためであり、大多数の島民は近代化とは無縁な生活を送っていた。次の文は<私>がみたコロール町である。

277 三田牧「想起される植民地体験-「島民」と「皇民」を巡るパラオ人の語り-」『国立民族学博物館研究報告 33（1）』（国立民族学博物館、2008）92 頁。

278 小菅輝雄『南洋群島写真帖一昔の micronesia』（グアム新報社東京支局、1978）。

279 南洋群島文化協会『南洋群島写真帖』（南洋協会南洋群島支部、1938）42 頁。

280 岡谷公二、前掲書（註 36）148 頁参照。

281 1941 年 9 月 10 日付日記、中島敦『中島敦全集 3』（筑摩書房、2002）464 頁。

マリヤンの住んでいるコロール（南洋群島の文化の中心地だ）の町では、島民等の間にあっても、文明的な美の標準が巾をきかせているからである。実際、このコロールという町（中略）には、熱帯でありながら温帯の価値標準が巾をきかせている所から生ずる一種の混乱があるように思われた。（中略）此处では、熱帯的のものも温帯的のものも共に美しく見えない、というより、全然、美というものが、——熱帯美も温帯美も共に——存在しないのだ。熱帯的な美を有つ筈のものも此处では温帯文明的な去勢を受けて萎びているし、温帯的な美を有つべき筈のものも熱帯的風土自然（特にこの陽光の強さ）の下に、不均合な弱々しさを呈するに過ぎない。この町にあるものは、唯、如何にも植民地の場末と云った感じの・それでいて、妙に虚勢を張った所の目立つ・貧しさばかりである。（283 頁、下線は筆者）

このように、コロールという町は、熱帯的価値観と温帯的価値観が混乱している場所であると〈私〉は認識する。

周知のように、南洋群島は 17 世紀初頭にスペイン、19 世紀末にドイツの領有を経て、1914 年日本海軍による占領の後、1919 年ベルサイユ講和条約により日本の委任統治領となっていた。つまりここは、スペイン、ドイツ、そして日本の統治を受けていた複数の価値観を混淆しているところである。スペイン、ドイツ、日本を含め、早く近代化を成し遂げた文明社会での「温帯基準」は、南洋の昔ながらの「熱帯基準」にぶつかり、融和しながらもその社会の複雑さを広げていく。

「マリヤン」の中だけではなく、実際、中島敦は島々を巡る視察旅行中で、こうした複数の植民地統治の跡による混淆する社会に目を向けたのである。例えば、中島敦はヤルート滞在中、当地の大酋長カブアの家を訪れる時のことである。これは 1941 年 10 月 1 日付妻たか宛ての書簡の内容であるが、のちに「環礁」の一篇である「風物抄」にも見られる。

午後は、（中略）カブアという大酋長の家をたづねた。ちょっとハイカラな洋風の家だ。（中略）酋長は三十位のおとなしい青年で、日本語も英語もできる。（中略）彼の細君が、非常な美人だ。色も内地人位。（中略）その細君の妹も出てきたが、これもキレイだ。二人とも日本人との混血なんだ。（中略）この酋長の家の入り口に、標

札がかけてあって「嘉坊」と書いてある。おかしいだろう<sup>282</sup>? (下線は筆者)

洋風の家、日本語も英語もできる酋長、混血児と日本語の標札は、当時の南洋社会が「熱帯でありながら温帯の価値標準が巾をきかせている」混乱する様子を如実に描き出している。そして、「おかしいだろう」という言葉に象徴されているように、中島敦は南洋群島の風景に関心を持ちつつも、強い違和感を抱いていたことが窺える。同様のことは、土方久功と一緒にパラオ離島を旅行する際に見かけた島民部落オギワル村の村長エラッテウヰズ宅の風景からも見られる。

蓄音機。(中略) 動かぬ時計三つ。その中の一つは鳩時計。皇室の写真多数掲げらる。(中略) 富士山の額一つ。(中略) ミシン。天井よりぶら下がる豪華なるランプ。シャンデリヤの如し。独逸時代のものなるべし、東郷元師の画<sup>283</sup>。

つまり、中島敦は時計や蓄音機、ミシン、ランプ、シャンデリヤと共に皇室の写真や富士山、東郷元師の画などがごっちゃ交じっている村長の家の様子を描写することによって、混乱する南洋社会を浮き彫りにしている。

このような価値観混乱の現状と同じく、<私>は一生懸命インテリ性質を見せようとすればするほど、カナカ容貌が目立つマリヤンの身に起きている混乱と不調和を見た。その一つの例としては、彼女の家を訪ねた時に見た風景である。彼女の家は、他の島民たちの家と変わらなく、原始的な南洋風の家である。

天井に吊るされた棚には椰子バスケットが沢山並び、室内に張られた紐には単着の類が雑乱に掛けられ(中略)竹の床の下に鶏共の鳴き聲が聞こえる。室の隅には、マリヤンの親類でもあろう、一人の女がしどけなく寝転んでいて、私どもが入って行くと、うさんくさそうな目をこっちに向けたが、又そのまま向こうへ寝返りを打ってしまった。(285 頁)

<sup>282</sup> 中島敦、前掲書(註23)605頁。

<sup>283</sup> 1942年1月19日付日記、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)492頁。



【図 21】原始的な島民の家<sup>284</sup>

ところが、その彼女の家には『ロテイの結婚』や『英詩選釈』など西洋文明を代表する本が置いてあったのである。〈私〉は「なんだか変な気がした。少々痛ましい気がしたといってもいいくらいである」と述べている。

マリヤンの身の上に起こっている不調和は彼女の家の風景だけではなく、彼女の盛装姿もまたそうである。「真白な洋装にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にした」彼女の姿は、〈私〉は「短い袖からは鬼をもひしぎそうな赤銅色の太い腕がたくましく出ており、園柱の如き脚の下で、靴の細く高い踵が折れそうに見え」た。そして、〈私〉は再び彼女の家の様子を見たときと同じような「可笑しさ」と「痛ましさ」を感じるのであった。

つまり、彼女は文明人を象徴する本や洋装を積極的に取り入れ、頑張って文明人になろうとしていたのである。しかし、彼女が文明人や内地人の側に立とうとすればするほど、原始的カナカの容貌に象徴される被植民者としての姿が敢えて目立ってしまい、矛盾も拡大していく。このように、〈私〉の目に映るマリヤンは、価値観が混乱する全く美しくないコロール町と同じく、ただ「可笑的」光景としか映らないのである。

### 第3節 島民女のサンプル〈ララフ〉とインテリ女性〈マリヤン〉

前述したように、マリヤンの家を訪ねた〈私〉は、その原始的な南洋風の島民宅に『ロテイの結婚』と『英詩選釈』を発見する。一見無造作に置かれていた書籍であるが、これ

<sup>284</sup> 南洋群島文化協会、前掲書（註 279）25 頁。

らの書物は「マリヤン」を論じるにあたって、実に重要な意味を持っている。次の文はマリヤンが『ロティの結婚』について述べているところである。

其の「ロティの結婚」については、マリヤンは不満の意を漏らしていた。現実の南洋は決してこんなものではないという不満である。「昔の、それもポリネシアのことだから、よく分からないけれども、それでも、まさか、こんなことはないでしょう」といふ。(286頁)

このように、『ロティの結婚』が読めるインテリ女性マリヤンは、『ロティの結婚』について「現実の南洋は決してこんなものではない」と不満を言っている。なぜなら、彼女は書物に描かれた南洋と現実の南洋との差異を知っているからである。では、『ロティの結婚』には南洋世界がどのように描かれているのか。

19世紀末イギリスの海軍少尉候補生ロティは、滞在先のタヒチでマオリ族の少女ララフと出会って結婚する。しかし、ロティは彼女を置いて帰国し、捨てられたララフは苦悩の末に命を落としてしまう。ララフは、ロティに対して深い愛情を持っているがあまりに舞踏会で別の女性と踊るロティに嫉妬し、彼をその場から無理やりに連れ出す。一方、ロティはララフとの結婚を一時的な結婚としか思っていない。彼はララフが別離に耐えられないと知りながら、彼女とタヒチから離れる。南洋でのロティの眼差しと感心が向けるところは、特定の女性との恋愛ないし結婚ではなく、現地人を観察するためであった。従って、ララフはタヒチ女性という枠組みの中ではほかの女性と置き換えられる存在に過ぎないということである。これについてカバ・加藤メレキは次のように指摘している。

作品全体において彼女（筆者：ララフ）はタヒチ文化や生活様式を体験・観察するための媒介となっている。テキストにはララフの内面描写が現れず、ただマオリ族を代表する身体として彼女のいわゆる特徴が分析されている。ララフはその民族の生活様式を具現化する人物として対象化され、それがゆえにロティの感心を惹いているのである。（中略）ロティの眼差しにおいてララフは、誰でもよいタヒチ女性のサンプルそのものである<sup>285</sup>。

---

<sup>285</sup> カバ・加藤 メレキ「ピエール・ロティ『ロティの結婚』-民俗学者的な眼差しとフランス領ポリネシア」『文学研究論集 28』(筑波大学比較・理論研究会、2010) 57頁。

つまり、ララフは「誰でもよいタヒチ女性のサンプル」なのであった。ララフはロティに契約結婚され、恋に落ち、ロティに捨てられた後も彼を愛し続けた。結局、彼女は寂しさのあまり乱れた生活を送ったあげくに死んでいったのである。このように、ララフはロティに尽くす女性として、自己を持たない存在として描かれている。

一方、マリヤンはこのような『ロティの結婚』に対して強い不満を抱く。これまで見てきたように、彼女はララフと違い、英語と日本語を勉強し、島民女性のイメージから離れようとするインテリ女性である。また植民地側の男性に翻弄される存在ではなく、積極的に植民地側に近づこうとする。つまり、マリヤンはララフのような南洋女性になることを拒否していることが、『ロティの結婚』に対する彼女の不満の言葉から明確に読み取ることができるのである。

ところが、マリヤンは「現実の南洋は決してこんなものではない」と強く主張しながら、そのことを具体的に言わず、「決してこんなもの」「こんなこと」という抽象的な言葉でしか用いていない。同様の躊躇する姿は、内地人の男性との結婚に直面した際にも見られる。マリヤンが結婚相手のことを聞かれた時の場面を見てみよう。



【図 22】 コロールの波止場<sup>286</sup>

大晦日の夜、H氏とマリヤンと<私>と三人は南洋神社に初詣をするために、コロールの波止場の方へ歩き、その先のプールに腰を下ろした。H氏はその場でオペラを

歌

い、マリヤンはフォスターの甘い曲を吹いている。<私>はそれを聴きながら、ふと、マリヤンが吹いているのが「元々北米の黒人共の哀しい歌」だったことを思い出す。そこでH氏はマリヤンに内地人との結婚話を持ちだした。

<sup>286</sup> 南洋群島文化協会、前掲書（註 279）101 頁。

「マリヤン！マリヤン！（中略）マリヤンが今度お婿さんを貰ふんだったら、内地の人でなきゃ駄目だな。え？マリヤン！」

「フン」と厚い唇の端をちょっとゆがめたきり、マリヤンは返事をしないで、プールの面を眺めていた。（中略）暫くして、私が先刻のH氏の話のつづきを忘れてしまった頃、マリヤンが口を切った。

「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ。」

なんだ、此奴、やっぱり先刻からずっと、自分の将来の再婚のことを考えていたのかと、急に私はおかしくなって、大きな声で笑い出した。そうして、尚も笑ながら「やっぱり内地の男は、どうなんだい？え？」と聞いた。笑われたのに腹を立てたのか、マリヤンは外っぽを向いて、何も返辞をしなかった。（289頁）

マリヤンはH氏から内地人との結婚を進められると、その提案を断るのではなく、「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」と言っている。これは、彼女が内地人の男との結婚を本気で考えながらも、何かの事情で断念せざるを得ない事情を抱えているように受け取られる。＜私＞が「やっぱり内地の男は、どうなんだい？え？」と続けて質問をすると、彼女ははっきりした態度を見せず、ただ「外っぽを向いて、何も返辞をしなかった」のである。

H氏が考えたように、二度も離婚するなど結婚生活が幸福ではなかったマリヤンにとって内地人との結婚は、植民地統治層への参与が可能となり、島民男の夫との頭脳の差も解消できる。しかし、マリヤンは南洋女性が植民地側に翻弄される存在であり、捨てられる運命から逃れたいと考えていたためだろうか。彼女は内地人との結婚を躊躇っている。

これまで見てきたように、マリヤンは内地人のように生きようと努力した結果、インテリ女性になった。しかし、彼女の中にはやはり一般島民女と同質な考えを持っていて、内地人との間に越えられない壁を痛感するのであった。

このように、内地人に劣らない素養と能力を持つインテリ女性マリヤンから、＜私＞は厚い唇を象徴するカナカ容貌を見出し、また「労働奉仕」の姿から彼女の被支配者としての一面を発見し、そして彼女の吹いている曲から「北米の黒人共の哀しい歌」を思い出す。やがて、＜私＞はマリヤンが内地人との結婚を断念する理由を知る。次の文は、H氏と＜私＞が一時内地へ出かけることになったことを伝えた時に彼女が示した反応である。

この春、偶然にもH氏と私とが揃って一時内地へ出かける事になった時、マリヤンは雞を漬して最後のパラオ料理をご馳走をしてくれた。

正月以来絶えて口にしなかった肉の味に舌鼓を打ちながら、H氏と私とが「いずれ又秋頃までには帰って来るよ」（本当に、二人ともその予定だったのだ）という、マリヤンが笑ながら言うのである。

「おじさんはそりゃ半分以上島民なんだから、又戻って来るでしょうけど、トンちゃん（中略）はねえ。」

「あてにならないというのかい？」と言えば、「内地の人といくら友達になっても、いぺん内地へ帰ったら二度と戻ってきた人はないんだものねえ」と珍しくしみじみと言った。（289-290頁）

マリヤンは、内地人にとって南洋は「二度と戻って」こない場所、つまり一時的な場所であると認識していた。だからこそ、彼女は内地人との結婚に一步を踏み出せなかったのである。

以上のように見てくると、マリヤンという人物は『ロテイの結婚』に描かれた内容に不満を漏らし、内地人の男との結婚を断念するなど、強い自我の持ち主でありながらも、内地人との間に立ちはだかっている厚い壁は永遠に越えられないものだとして認識していたインテリ・カナカ女性として描き出されている。

#### 第4節 南洋表象の中における<マリヤン>の存在

前述したように、中島敦が南洋群島に出かける前に持っていた想像上の南洋島民とは、「原始的」で、「教育なき・力溢れる」人々である。このようなイメージは、実は、ロテイ、スティブソン、ゴーギャン、ランボーなど19世紀末の芸術家たちがもたらした「原始的国」「夢の国」といった南洋社会のイメージと同質なものである。しかも、彼らがもたらしたのは南洋社会のイメージだけではなく、『ロテイの結婚』や『ノア・ノア』に代表される<南洋ロマンス>でもあった。

第3節で述べてきたように、『ロテイの結婚』は、白人男性のロテイと、島民女性のララフとの恋愛と結婚を描いたものである。須藤直人が指摘しているように、『ロテイの結

婚』に代表されるように、近代西洋は植民地人と被植民者とのロマンスを描く際に、常に白人男性と非白人女性との組み合わせを取り扱う。それは、＜愛情＞を通して＜支配＞し、後者の＜自発的な服従＞と＜文明の恩恵＞を主張して植民地支配を正当化・美化する西洋の植民地主義の言説であり、一種の植民地支配の構図である。しかしその一方、宗主国人の女性と植民地現地人の男性の組み合わせは、植民地支配に伴う不安、先住民に対する恐怖心の表徴であるため、隠蔽され、忌避されてきた<sup>287</sup>。

周知のように、日本は明治維新以来、「文明開化」というスローガンを掲げ、西洋文明を唯一の指標として目指し、西洋文明を無分別に吸収してきた。また、欧米列強と肩を並べられる文明先進国になるために、彼らを習って対外拡張し、戦争を起し、台湾、朝鮮、南洋群島などの国を植民地にした。このような中で、白人男性と植民地現地人女性との結婚の構図も、そのまま白人男性＝内地人男性と現地人女性として模倣していた。そして、それは朝鮮の場合は内地人男性と朝鮮人娼婦(妓女)、南洋群島の場合はまさにゴーガン、ロテイ型の内地人男性と島民女との＜南洋ロマンス＞だった。

当時日本では＜南洋ロマンス＞を描く流行歌や小説が多く出版された。1920年代に入ってからには南洋の地名や風俗を歌詞に取り入れた大衆歌謡が登場し、そのうち1930年には「酋長の娘」が大ヒットした。この曲は、天祐丸に乗ってミクロネシアのトラック島に移住し、酋長の娘と結婚した内地人男性森小弁<sup>288</sup>をモチーフにしたものである。

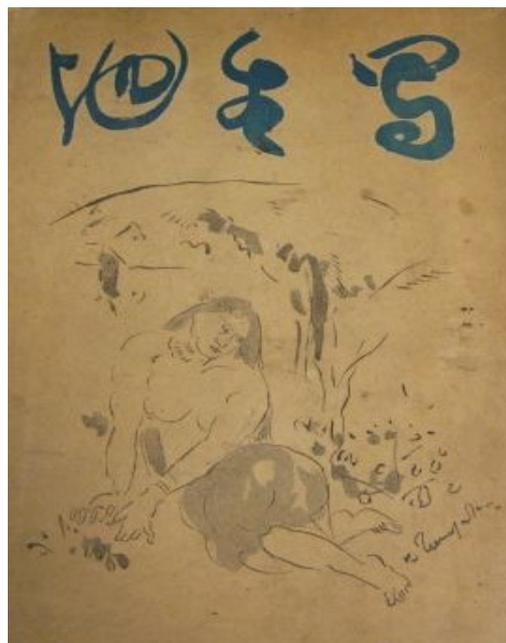
また、南洋を題材とした小説においても、こうした内地人男性と島民女のロマンスが描かれた。大久保康雄の「島妻」(『小説集 年輪 I』(妙齢会、1940))では、内地人男性と内地人男性に尽くす島民女が登場する。また、丸山義二の『帆船天祐丸』(萬里閣、1941)では、内地人男性が土人の娘と結婚したのは「土人の娘を嫁にして、この島に根付くくらいの覚悟があてこそ、はじめて、わが南方発展の実績があがるのだ」とされており、その結末では、「時はちやうど、第一回帝国議会が開かれたばかり、東京日比谷の原頭に、黎明日本の鐘が高らかに鳴り響いていた。天祐丸もまた、赤道直下の絶域に、南進日本の道標をうちたてたのである」と結ばれている。

---

<sup>287</sup> 須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島—ポストコロニアル異人種間恋愛譚—」『立命館言語文化研究 20 (1)』(立命館大学国際言語文化研究所、2008) 55 頁参照。

<sup>288</sup> 主に南洋諸島のトラック諸島で活躍し、現地の女性と結婚したあと水曜島の大酋長も務めた人物。また、歌謡曲の『酋長の娘』や島田啓三の絵物語『冒険ダン吉』(講談社の雑誌『少年倶楽部』に連載された)のモデルとされている。具体的な人物紹介に関しては、荒井利子『日本を愛した植民地 南洋パラオの真実』(新潮新書、2015)をご参照ください。

そして、この島民女性のイメージはいうまでもなく、原始的な姿を有するカナカ女性に求められた。早くから帝展画家上野山は、紀行『写生地』（中央美術社、1926）の表紙に、南洋女性の裸体画を掲げ、1933年には、「サイパンうしろにヤップ島 跳ねて出てくるカナカの娘 腰蓑重ねてさらさらと あなたと住む島どれにしよ 年は十三恋を知る<sup>289</sup>」という「カナカの娘」の歌が流行し、さらに能仲文夫は『南洋紀行 赤道を背にして』（中央情報社、1934）には「カナカの娘」を取り上げる自身が作詞し



た歌「憧れの南洋」が採用され、本文において 【図 23】 上野山『写生地』表紙も「カナカ女の情熱は魅力的」「カナカ娘と恋の立往生」などのタイトルが付けられ、「カナカの女」と内地人男性の恋物語が執筆されたことなどから、島民女のイメージを原始的なカナカ女性に求める日本の風潮が窺える。

つまり、当時の日本国内では、西洋文明の吸収によってもたらしたロテイやゴーガンの〈原始的〉、〈南洋ロマンス〉といった南洋表象が流行歌、絵画、文学作品などを通して広く伝えられ、そのまま再現されたのである。中島敦もロテイやゴーガンなどがもたらした南洋表象に深く影響された一人である。

中島敦は1937年に書かれた「歌でない歌」の中で「ある時はゴーガンのごとくたくましき野生のいのちにふればやと思う/ある時はスティブンソンが美しき夢に分け入り酔ひしれしこと」という二首の歌がある。また、1941年9月29日付の日記には次のような記述がある。

終日の饗宴の準備の後、夕暮、歌ひつれつつ花輪を手へのせる少女等が饗宴場に来り、一人一人、渠の頭に肩に花輪を掛けるといふ。さて焚火。石焼、料理のかぐはしき数々、など、スティブンソンやロテイの世界の如し<sup>290</sup>。

<sup>289</sup> 「カナカの娘」 <https://www.youtube.com/watch?v=02s9eZb1K3E> (2018年7月29日検索)。

<sup>290</sup> 中島敦、前掲書（註23）470頁。

さらに、1941年10月1日付妻たか宛の書簡には、「僕は今までの島でヤルートが一番好きだ。一番開けていないで、ステイブンスンの南洋に近いからだ<sup>291</sup>」と記されている。これらの記述から明らかなように、中島敦の南洋行は、ステイブンスン、ロテイ、ゴーガンに深く影響されていることが窺える。そもそも彼は、ステイブンスンの〈サモア〉行やゴーガンの〈タヒチ〉行などを強く意識して、それらを自らの南洋行と重ね合わせようとする意向があったといえよう。本章で取り扱ったカナカ女性マリヤンを主人公にした「マリヤン」も、まさにロテイやゴーガンの〈南洋ロマンス〉を呼応するようなものにはかならなかった。

しかし、8ヶ月間の南洋滞在を通して、中島敦は自分の想像した世界とは全く異なる南洋の現実に気づく。南洋は書物の中の原始的な楽園ではなく、熱帯的な価値観と温帯的な価値観が混淆する土地であった。また、マリヤンも簡単に〈南洋ロマンス〉に組み込まれる島民女ではなく、極めてインテリな頭脳を持つ女性であった。しかも、彼女は『ロテイの結婚』を読むことが可能な、そして「昔の、それもポリネシアのことだから、よく分からないけれども、それでも、まさか、こんなことはないでしょう」と『ロテイの結婚』に対して不満を漏らす女性である。さらに、彼女は「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ」と内地人男性との結婚を断念する女性でもある。このような南洋女性は〈南洋ロマンス〉に描かれた植民地側の男性に尽くし、彼らに翻弄される存在としての島民女とは立場を異にしている。

南洋行後に執筆された「真昼」という作品の中で、中島敦は次のように自己省察するようになる。

お前は今、輝く海と空とを眺めていると思っている。あるいは島民と同じ目で眺めていると自惚れているのかもしれない。とんでもない。お前は実は、海も空も見てをりはせぬのだ。ただ空間の彼方に目を向けながら心の中で（中略）（見つかったぞ！何が？永遠が。陽と溶け合った海源が）と呪文のように繰り返しているだけなのだ。お前は島民をも見てをりはせぬ。ゴーガンの複製を見てをるだけだ。ミクロネシアを見てをるのでもない。ロテイとメルブイルの画いたポリネシアの色褪せた再現を見てを

---

<sup>291</sup> 中島敦、前掲書（註23）607頁。

るに過ぎぬのだ。そんな青ざめた殻をくっつけている目で、何が永遠だ。哀れな奴め

292 !

このように、中島敦は南洋や島民を見ている自分のまなざしが、実はロテイやゴーガンから借りたまなざしにほかならなかったことを痛切に反省している。南洋から帰った中島敦が、当時日本国内で広く認識されていた南洋表象とは一線を画す作品を次々と描き出したのは、このような自己反省があったことを私たちは見逃すわけにはいかないであろう。

---

292 中島敦「真昼」『中島敦全集1』(筑摩書房、2002) 278-279 頁。

## 第6章 奸悪な老人像 — 「雞」 (1942)

「雞」(1942)は「南島譚」との総題のもとで纏められた「幸福」、「夫婦」、「雞」の中の一編である。これら3つの作品は、中島敦の南洋における風習や民話などを基に描かれたものであるが、「環礁」の中の作品と比べると、「譚」という題名が付けられているように物語化されて、虚構性の強い作品群とされている。というのは、「南島譚」は中島敦が8ヶ月間の南洋生活で実体験したものというより、いずれも元々あった素材を用いて再創作し、あるいは南洋滞在中に聞いた話を素材にして書いた物語である。

例えば、「幸福」は中国の古典「列子」「周穆王第八」の一小話を原典<sup>293</sup>にした「今は世に無きオルワンガル島の昔話」であり、「夫婦」は中島敦が南洋にいた時に聞いたパラオ地方の風俗と土方久功の著書『パラオの神話と伝説』の草稿<sup>294</sup>から得た素材である。そして、「雞」は中島敦が南洋での体験を直接に語る形式をとっている作品であるが、その素材も土方久功の「日記」の中の同名小説「鶏」から得ている。土方久功は後年、「これらの材料が、このように取り扱われていることにも、小説の創作過程を知らない私には、大変に面白く考えているし、感心してしまう<sup>295</sup>」と述懐しているように、中島敦は土方久功から素材を求めながらも取捨選択をし、素材とは全く異なった作品世界を描き出したと言える。

その作品世界を見てみると、「幸福」は下僕と長老の夢の世界と現実の世界の不可解な転換を描いている。「夫婦」では、未婚女の男性への奉仕という「モゴル」制度、女同志喧嘩「ヘルリス」と夫婦固めの式「ムル」といった慣習を持つ独特な南洋社会を取り上げている。ギラ・コシサンと淫奔な妻、そして貞淑な娼婦に関する不思議な恋愛譚と不可解な色彩を持つ物語に仕上げられている。特に「南島譚」の最後に配列されている「雞」は、

「土人の気持ちは私にとって一層不可解になって来た」とその不可解さが強調され、不可解な南洋老人の姿を描き出している。中島敦の構想メモ「ノート第四」の「2ウ」に残された「雞」の原題—「何故」<sup>296</sup>と付けられていることから、不可解さという作品の主調

<sup>293</sup> 佐々木充「中島敦<南島譚>について」『帯広大谷短期大学紀要7』（帯広大谷短期大学、1970）37頁。

<sup>294</sup> 岡谷公二、前掲書（註36）178-180頁参照。

<sup>295</sup> 土方久功『日記』第39冊、23頁。国立民族学博物館所蔵。

<sup>296</sup> 中島敦「ノート第四」『中島敦全集3』（筑摩書房、2001）257頁。

低音が読み取れる。

これまでの先行研究でも、主に作品に見られる南洋の人間の不可解さについて論じられてきた。例えば、奥野政元は「南島譚」や「環礁」の特色は、中島敦と南洋の人間の間「同じ人間としての基盤そのものを共有し得ないところからくる<sup>297</sup>」不可解さの認識にあると指摘している。和田博文は「「不可解」を「不可解」のままに見つけようとする眼差しは、「南島譚」「環礁」に偏在している<sup>298</sup>」と述べ、木村一信も「「不可解」な存在、不可知さとの遭遇<sup>299</sup>」と指摘している。さらに、杉岡歩美も南洋の人間が「「わからない」存在」とし、中島敦の「「島民」を「島民」として見る視線、つまり、「不可解」なものとして他者を認める視線<sup>300</sup>を評価している。

このように、これらの先行研究は作品を論じるに当たって、常に中島敦と語り手の〈私〉を同一視し、〈私〉の態度や行動に着目し、それによって中島敦あるいは〈私〉の「不可解」な南洋島民を認める姿勢を見出すところに重点を置いている。また、当時の南洋に出かけた多くの日本人とは違い、島民を対等的に見る中島敦のまなざしは、南洋行以後に描かれた「弟子」「李陵」などの名作を生み出していく上で不可欠なものだと好評されている。

しかし、果たして作者は単純な語り手であり、〈私〉と同じ眼差しを持った同一人物であろうか。不可解さが繰り返し表現された背後には、いかなる作者の考えと意思が含まれたのか、改めて検討しなければならない。そこで本章では、土方久功の「鷄」と中島敦の「雞」<sup>301</sup>の相違を比較した上で、「雞」の特徴を見出す。そして、その特徴を詳しく分析することによって、「雞」に込められた作者の意図を明らかにしたい。

## 第1節 土方久功の「鷄」と中島敦の「雞」

序章で述べてきたように、中島敦は教科書編集書記として南洋庁に赴任していた時に、

---

<sup>297</sup> 奥野政元『中島敦論考』（1989、双文社出版）186-187頁。

<sup>298</sup> 和田博文、前掲書（註252）166頁。

<sup>299</sup> 木村一信「南洋行-新たな認識との出会い」勝又浩・木村一信編『中島敦』（双文社出版、1992）56頁。

<sup>300</sup> 杉岡歩美、前掲書（註35）36-37頁。

<sup>301</sup> 中島敦のタイトルは「雞」という漢字を使い、土方久功は「鷄」を使っている。本論ではそれに従うこと。「鷄」と「雞」は同字。『説文解字』巻4・隹部に、「雞知時畜也。从隹奚聲。鷄，籀文雞从鳥」とあり、「雞」の字が本字であることが知られる。よって、中国の漢籍では、およそ「雞」という字が使われる。中島敦は「鷄」ではなく「雞」を使ったのは、幼い頃から親しまれてきた漢籍の影響が大きい。

彫刻家・画家・民族学者である土方久功と親しく交友し、短い間ではあったが、二人は「あの無くてはならないはずの友達になっていたのだ<sup>302</sup>」。中島敦は南洋群島に滞在していた時には、小説の素材を探すために、南洋の状況に詳しい土方久功の所によく出入りし、彼に南洋の奇談や見聞を求めていた。そして、土方久功も中島敦のことを大歓迎し、家の本棚や机の上に置かれている南洋群島の調査記録、文章や日記などを自由に読むことを許していた<sup>303</sup>。岡谷公二や川村湊<sup>304</sup>などに指摘されているように、中島敦の〈南洋もの〉が書き上げられたのは、土方久功に負うところが大きい。冒頭で述べたように、本章で取り扱う「雞」も土方久功から材を得たものである。そこで第1節では、中島敦の「雞」を分析する前に、まず素材である土方久功の「鶏」と比較しながら、中島敦の「雞」の特徴を明らかにする。

土方久功の「鶏」が最初に発表されたのは、戦後1956年に刊行された2番目の詩集『青蜥蜴の夢』（大塔書房、1956）である。そして、没後1982年に刊行された『土方久功詩集 青蜥蜴の夢』（草原社、1982）に収められた。その後、1991年三一書房から刊行された『土方久功著作集』第6巻に収められている<sup>305</sup>。

土方久功の同名小説「鶏」には、「以上は私の当時の日記の一節であるが、私は少し後日譚をさせて貰う」と記されているように、当時の日記の一節と後日譚という二つの部分に分けられる。以下、土方久功が書かれた「当日の日記の一節」の部分のあらすじをまとめてみる。

恐ろしげな顔とは似てもつかない優しい心を持ったギラメスブズお爺さんは彫り物が上手で、頼まれた木彫りの小道具などをいつも丹念に彫って持ってくる。このお爺さんは何かひどい病気になり、コロールの病院に通ったが治らないため、レンゲさんに診てもらいたいが、病院のお医者様にそんなことを言うのは怖いから、病院長と親しい私に頼んだ。なお、そのレンゲとはドイツからきた新教の宣教師で、キリスト教を布教しながら、国から沢山持ってきた薬を島民に施して、島民間に評判を得ている人である。さて、私は早速病院長にそのことを話し、あれはもうダメなのだから、思うようにさせてやるがいい

302 土方久功「トン」『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991）。

303 岡谷公二、前掲書（註36）178頁。

304 川村湊「これらの作品の素材については、パラオで知り合って無二の親友となった詩人・彫刻家・民俗学者の土方久功（1900-1977 中島の南洋からの夫人宛書簡及び『土方久功著作集』八巻〈三一書房〉など参照）に負う所が大きい。」「解説」『中島敦全集1』（筑摩書房、2002）588頁。

305 清水久夫「中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」『跡見学園女子大学文学部紀要 第52号』（跡見学園女子大学、2017）87-88頁参照。

とのことだったので、私は再びお爺さんを訪ねて、その旨を彼に伝えた。その後、お爺さんは間もなく亡くなった。そして、ある日、一人の若者が生きた鶏を一羽届けに来た。「私はギラメスブズの使い者です。爺さんは亡くなりましたが、亡くなる前に、先生の所に鶏を届けてくれと言ったので持ってきました」とのことである。ところで、翌日にはまた、さらに翌々日も違う島民が来て、生きた鶏を持ってきた。これは「お爺さんは、「確かな上にも確かであるようにとの心から、二人にも三人にも、それも念をおして言いつけたものと見える。」私はこんな純粋な気持ちえ、こんな一途な気持ちを島民が持っていたことを知り、敬虔な祈りを祈ったのだったと感動する<sup>306</sup>。

以上は土方久功の日記 1942 年 1 月 20 日付の一部であり、中島敦はその日記を読んでいたのである。清水久夫の調査によると、土方久功の「鶏」に登場するギラメスブズお爺さんは実在する人物であり、土方久功の 1929 年 8 月 7 日から 1930 年 5 月 21 日までの日記の何箇所にも書かれているという。また、鶏の事件があったのは、1930 年 5 月 21 日のことだったので、土方久功がパラオへ来てからまだ一年二ヶ月しか経っていない時である<sup>307</sup>。つまり、土方久功の「鶏」は十年前の出来事を思い出す形で描かれたものであると言える。あらすじから窺えるように、土方久功はギラメスブズお爺さんの一途な優しい心と純粋な気持ちを強調し、彼の島民に対する暖かい眼差しが感じられる作品である。

では、次に、中島敦が書いた「雞」のあらすじを見てみよう。

<私>は教育関係の役人で、この島に来て 5 年目になる。ある時島の公学校を参観した<私>は新任先生の就任挨拶を聞き、島民児童に対する彼の態度に不信感を抱く。そして、島民の接し方や島民理解について、<私>は思考に耽る。「南洋にきた最初の年よりも三年目の方が、三年目より五年目の方が、土人の気持は私にとって一層不可解になって来た」と、<私>は島民の気持を飲み込めないことを考える。その一例として、マルクープ老人がいた。「民間俗信の神像や神祠などの模型を蒐集していた」<私>は、老人に模型を作らせた。しかし、哀れな恰好をした愚鈍そうな老人は、道具製作の不審、金銭相場の競り上げ、神様事件や懐中時計の盗難事件など様々な事件を通して、<私>は彼がとんでもない食わせものだと決めつける。その後、老人は病気にかかり、<私>にパラオ病院の院長からレンゲさんに診てもらおう許可を取ってほしいと頼む。<私>はその願いを叶えてやるが、老人は間もなく亡くなる。その後、<私>の所に三人の青年がそれぞれ違う日に来

<sup>306</sup> 土方久功『土方久功日記』Ⅴ(国立民族学博物館、2014) 442-443 頁。

<sup>307</sup> 清水久夫、前掲書(註 305) 91-92 頁参照。

て、老人に頼まれたと3羽の雞を届けてくれた。この老人の行動から、<私>は「南洋の人間はまだまだ私などにはどれほども分かっていないのだ」と感嘆し、筆を擱く。

中島敦の「雞」は土方久功と考えられる人物が一人称で語っている。あらすじから分かるように、中島敦が書いた「雞」は土方久功の「鶏」のあらすじとほぼ同じであり、確かに土方久功から素材を取っている。しかし、両者には相違点も多々ある。それを表にまとめると以下の通りである。

【表2】土方久功「鶏」と中島敦「雞」の相違<sup>308</sup>

	土方久功「鶏」	中島敦「雞」
前書き	無し	公学校新任先生の挨拶、南洋島民不可解さの3つの例
お爺さんの名前	ギラメスブツ	マルクープ
病名	下腹が痛い	「喉頭癌」「喉頭結核」
事件	① 道具の製作 ② 病気の治療の依頼	①道具の製作②神様事件③懐中時計の盗難事件④病気の治療の依頼
お爺さんの性格	純粹な気持ち、優しい心	とんでもない食わせ者、奸悪さ
お爺さんへの態度	感動、感謝	奸悪さと雞の贈り物の不調和

【表2】からわかるように、中島敦は土方久功の「雞」を素材としながら、自分なりに変更している。具体的に見ると、中島敦の「雞」は土方久功の「鶏」に比べて、以下のような特徴が見られる。

第一に、中島敦の「雞」には、前書きが設けられている。佐々木充は公学校を参観した冒頭の部分に限っては、敦自身の体験に基づくものと思われる<sup>309</sup>と述べられているように、前書きの部分では、中島敦の南洋での実体験が綴られている。その部分はマルクープ老人を取り上げるための伏線であると言えるだろう。

第二に、主人公の名前が違う。中島敦の「雞」に登場するマルクープ老人の名は、実際

<sup>308</sup> 閻瑜「中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響—「鶏」を中心に—」『国際日本学：文部科学省21世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築研究成果報告集12』（法政大学国際日本学センター、2015）99-101頁を元に、筆者作成。

<sup>309</sup> 佐々木充『中島敦の文学』（桜楓社、1973）164頁。

はマルクップという名で、土方久功の1930年9月11日、10月5日、10月12日付の項に見られる<sup>310</sup>。マルクップは土方久功達が離島カヤンガル島に滞在していた時に出会ったその島の住民だった。中島敦はただ単にその名前を借りたのである。

第三に、中島敦の「雞」では、マルクープの人物像を描く際に、道具製作時の様子を描き方が違うだけではなく、そのほかにも「神様事件」と「懐中時計の盗難事件」を書き加えている。「神様事件」(モデクゲイ)については、土方久功の日記の旅行記に事実として書かれたものである。中島敦がそれを読んでマルクープの身の上の出来事に変えて書いたと思われる。また、「懐中時計の盗難事件」に関しては、前述した土方久功「鶏」の後日譚の部分に触れている。それが以下である。

敦の鶏話のマルクップは、およそこのギラメスブヅとは違うが、あのウオルサムの時計盗人はまた別にあるのである。私がガラルヅ村に居た時、家の留守兼料理人として、片脚どうしたのか膝から下がちょんぎれている、アマラエルという爺さんを家に置いたことがある。この爺さんがまた実に忠実に、何でも気を回して、料理から掃除から、恐らくは退屈まぎれからでもあったろうが、よくもと思うほど、不自由ないざり姿でやってくまれたが、それがあつた時どうした出来心か、私の目の前で金を盗んで、頑として唾になり糞になってしまったことがあつた。結局、一時間もして、赤くなって持ち上げた半分脚の下からその金は出来てたのだったが<sup>311</sup>。(下線は筆者)

「懐中時計の盗難事件」はアマラエルという爺さんの出来事であり、「鶏」の主人公とは別である。つまり、マルクープ老人の出来事である「懐中時計の盗難事件」も、実は違う人から借りたものである。このように、マルクープ老人に関わる事件は彼一人のものではなく、いくつかの人物と事件が統合されたものであるといえる。

第四に、両作品の主題が違う。土方久功の「鶏」の人物像は優しい心を持つ人間である。作者の土方久功はこの老人に感謝の気持ちを込めている。それに対して、中島敦の「雞」のマルクープ老人は奸悪さと優しさを兼ね備えた不調和な性格の持ち主であり、南洋人間の不可解さが強調されている。

上述したように、中島敦の小説「雞」は土方久功の「鶏の事件」を取り入れながらも、

<sup>310</sup> 土方久功『土方久功日記』Ⅲ(国立民族学博物館、2011)338頁、343頁、344頁。

<sup>311</sup> 土方久功「鶏」『土方久功著作集』第6巻(三一書房、1991)73-76頁。

土方久功の日記に見られる「敦はこれらをこの様な形出す筈ではなかったので一少なくとも「鶏」は<sup>312</sup>」という言葉のように、中島敦によってかなりの部分に変更されている。その変更の背後には、8ヶ月間の南洋体験から得られた認識と実感と共に、読者に伝えたいという中島敦の想いが込められている。次節から、中島敦の「雞」の変更された部分に焦点を当てて、その変更の意図を探る。

## 第2節 新任講師への不審

「雞」の冒頭は、「我々文明人」と自己主張する<私>が、島の公学校を参観し、そこで新任教師の挨拶を聞いた時の様子から始まる。前述したように、この部分は中島敦の「雞」に新たに書き加えられた部分であり、土方久功の「鶏」にはない場面である。その挨拶内容とは次のようなものである。

「今日から先生がお前等と勉強することになった。先生はもう長いこと南洋で島民に教えとる。お前等のすることは何から何まで先生にはよう分かっとる。先生の前でだけおとなしくして、先生のをらん所で怠けとつても、先生にはすぐ分かるぞ。」一句一句ははっきりと句切り、怒鳴るような大聲であった。

「先生をごまかそうと思つても駄目だ。先生は怖いぞ。先生のいうことを良く守れ。いいか。分かったか？分かった者は手をあげよう！<sup>313</sup>」

<私>は、小学校の教師とは思えない新任教師の傲慢な態度と怒鳴るような言い方、そして子供たちを威圧する挨拶の内容に驚く。当時の南洋では、このような威圧的な島民への接し方は必ずしも珍しいことではなく、島民の性質を理解する上での「最上の老練さ」とされていた。

周知のように、日本の台湾、朝鮮などの植民地獲得は、英国とインド、フランスと北アフリカ、オランダとインドネシアといった西欧近代の視点によるもの<sup>314</sup>であり、「文明」

<sup>312</sup> 土方久功『土方久功日記』第39冊（国立民族学博物館所蔵）21-23頁。清水久夫「中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」『跡見学園女子大学文学部紀要第52号』（跡見学園女子大学、2017）を参照。

<sup>313</sup> 中島敦「雞」『中島敦全集1』（筑摩書房、2002）240頁。以下、テキストは頁のみ。

<sup>314</sup> 川村湊、前掲書（註236）39頁。

を名乗る国々が、「未開」と見做した国々を教化すべきだと主張した時代の流れ<sup>315</sup>を受けたものである。そのうち、南洋群島の委任統治は、「まだ自立し得ざる人民の居住するものに対しては、人民の福祉及び発達を計るは文明の神聖なる使命なること」と「国際連盟規約第二十二條」に記載されているように、「文明」国の使命としての委任統治にほかならない。従って、当時南洋に派遣された人々は、「雞」の〈私〉が「我々文明人」と名乗るように、文明人の目で南洋とそこに生きる人々を見ていた。

では、文明人の日本人が見た南洋の島民はどのような人間であったのだろうか。当時、日本国内では、南洋島民、特にカナカ族を怠け者とみるのが一般的に受け入れられていた。石川達三は「航海日記」(『赤虫島日記』(1943))の中で、「カナカも居るけれど怠け者ですからね。実際あの連中にはかなわんです。どんな貧乏暮らしをしても平気なんですからねえ」と言い、矢内原忠雄は『南洋群島の研究』(1935)の中で、一般的な島民の性質に対して「カナカ族は度々無気力懶惰であり労働を厭ふとの非難を受ける<sup>316</sup>」と指摘されている。

当時日本では、無気力で怠惰なものと見なされている島民たちを従順な忠誠心のある人間に育てるためには、彼らを厳しく教化することが当然のように思われていた。作中の新任教師もこのような考え方を持つ支配者の一人である。

第1節で述べたように、冒頭の公学校参観の部分は中島敦自身の体験に基づくものである。南洋に赴任した中島敦は多くの小学校を訪問しており、その際に参観した授業の様子を日記や手紙に書き残している。次の文はサイパンの公学校を訪れた時の様子を書いた日記の一部分である。

午前九時公学校に到り小山田校長と語り、授業を見る。凡てこの学校の軍隊式、形式的訓練の徹底は驚くばかりなり。その可否はまだいふべからず。(1941年11月27日、下線は筆者)

校長及び訓導の酷烈なる生徒取扱に驚く。オウクニヌシノミコトの発音をよくせざる生徒数名、何時までも立たされて練習しつつあり。(中略)帽子を脱ぐにも一、二、と号令を掛けしむるは、如何なる趣味にや。(1941年11月28日、下線は筆者)

<sup>315</sup> 杉岡歩美、前掲書(註35)8頁。

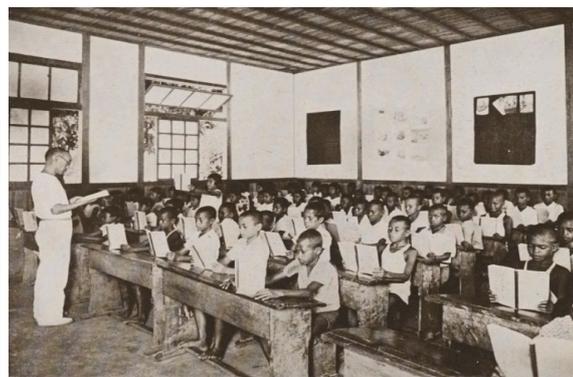
<sup>316</sup> 矢内原忠雄、前掲書(註237)14頁。

次の文は、サイパン滞在中に書いた 1941 年 12 月 2 日付妻たか宛の書簡である。

ここの公学校の教育は、ずいぶん、ハゲシイ（というよりヒドイ）教育だ。まるで人間の子を扱っているとは思えない。何のために、あんなに怒鳴り散らすのか、僕にはわからない<sup>317</sup>。（下線は筆者）



【図 24】サイパン公学校<sup>318</sup>



【図 25】島民学校における授業の風景

319

以上のように、中島敦は公学校参観時の見聞を基にして、「雞」の冒頭部分を書いたのである。「その可否はまだいふべからず」、「如何なる趣味にや」、「僕にはわからない」と、植民地支配者側への疑惑と不信感が日記や手紙の随所に述べられているように、「雞」の中の〈私〉もまた、この新任教師の挨拶に「不審」を感じている。この不審の理由に対して、〈私〉は以下のように解釈する。

我々の常識にとって再び困ったことに断乎たる強圧が彼らを単に表面ばかりでなく、本当に心底から驚嘆感服せしめる場合も確かにあり得るのだ。「怖い」と「偉い」とがまだ分化していない場合が多く、しかし何時でもそうかという、必ずしもそう一律にはいかないように思われる。(241-242 頁)

<sup>317</sup> 中島敦、前掲書（註 23）648 頁。

<sup>318</sup> 南洋群島文化協会、前掲書（註 279）77 頁。

<sup>319</sup> 南洋群島文化協会、前掲書（註 279）50 頁。

「断乎たる強圧」は、最初のうちは彼らを「感嘆敬服せしめる」ことができる。しかし、そのやり方に慣れてしまうと、彼らは本当の心を隠し、ただ従うふりをするだけである。そのことに気づいていない新任教師は、赴任挨拶の際に子供たちの前で高圧的な態度をとるが、そのようなやり方では彼らを統括するどころか、むしろ彼らの本当の姿を見えづらくさせることになる、＜私＞は次のような感想を漏らしている。

要するに、私にはまだ島民というものが飲み込めないのだ。そうして、この島民の心理や生活感情の不可解さは、私にとって、彼等に接することが多くなればなる程ますます増していく。南洋にきた最初の年よりも三年目の方が、三年目より五年目の方が、土人の気持ちは私にとって一層不可解になってきた。(242 頁)

南洋に住み始めて五年も経った今なお、＜私＞は島民のことがよく呑み込めないと言っている。この島民の不可解さの一例として、＜私＞は一人の土民老翁との会話の場面を取り上げている。老翁は、初めの頃は＜私＞のたどたどしい土民語をおとなしく嬉しそうに笑いながら、「頗る上機嫌」に聞いてくれた。しかし、二人の関係がうまくいっていると思われたまさにその時、老翁はまったく突然急に口を噤み、顔つきも索然たるものとなって、＜私＞の存在を全く認めないような行動をするのである。その態度に＜私＞は茫然とした。

何故？如何なる動機が此の老人をこんな状態に陥れたのか？どんな私の言葉が彼を怒らせたのか？いくら考えて見ても全然見当さえつかない。とにかく、老翁は突然目にも耳にも口にも、あるいは心にまで、厚い鎧戸を閉ててしまった。彼は今や古い石の神像だ。(中略) いずれにせよ、我々は、怒鳴っても宥めても揺すぶっても決して脱がせることの出来ぬ不思議な仮面の前に茫然とせざるを得ぬ。こうした一時的痴呆の状態は全然本人の自覚を伴わぬものか、それとも、実は極めて巧妙に意識的に張り廻らされた煙幕なのか、それさえまるで見当がつかないのである。(242-243 頁、下線は筆者)

つまり、愛想がいいと思っていた土民の翁は、突然石の神像になり、＜私＞を含む周囲

のすべてをまったく認めなくなり、周囲と隔絶してしまうのであった。前述の生徒達の畏敬の表情の本当の意味がわからないように、＜私＞は老人がなぜそのような行動をとったのか、全く見当がつかず、再び島民の不可解さについて、次のような感想を漏らすのであった。

南洋に四五年もいて、すっかり島民が分かったなどという人に会うと、私は妙な気がする。椰子の葉摺の音と環礁の外にうねる太平洋の波の響きとの間に、十代も住みつかない限り、到底彼らの気持ちはわかりそうもない気が私にはするからである。

(243 頁)

新任教師の威圧な挨拶に「不審」な気持ちを抱くのと同じく、＜私＞は当時の南洋に派遣された人々の島民認識に疑惑を覚えている。なぜなら、彼らは島民については「何から何までよう分かるとる」「すっかり島民がわかった」と言っているが、実は、島民のことなど全く分かっていないからである。その思いをより明らかに示すために、中島敦はマルクープ老人の例を持ち出した。次節からマルクープ老人に関する話を詳しく見ていく。

### 第3節 食欲な老人像

第1節で比較したように、土方久功の老人像は、道具製作の話と病気の話を用いて老人の優しく純粋な心を描き出している。一方、中島敦の老人像はより多くの事件が取り入れることによって奸悪で食欲さが溢れる人物像に変更されている。その変更の意図は何なのか、以下では、中島敦の「雞」における老人の人物像の変更部分を中心に考察してみたい。

#### 3-1 食欲な持ち主

＜私＞は南洋に来たばかりの時、パラオ民俗を知るために島民老人マルクープに頼んで、民間俗信の神像や神祠などの模型を作ってもらった。この老人の容貌は次のように描かれている。

幾分傴僂らしく、何時も前屈みになって乾いた咳をしながら歩いていた。可笑しか

ったのは彼の眼瞼が著しく弛んで下垂していることで、そのために彼はほとんど目を開けていることが出来ない。彼が他人の顔をよく見ようとする時は、顔を心持仰向けた上、人差し指と親指とでたるんだ瞼をつまみ上げ、目の前を塞ぐ壁を取り除かねばならぬ。それが、何かカーテンかブラインドでも捲き上げるような工合で、私は何時も失笑させられたものである。(244 頁)

<私>はマルクープ老人の容貌の中でもとりわけ、目や瞼を「可笑しかった」「失笑させられた」と言っている。このようなマルクープ老人の容貌に対する<私>の態度からは植民者としての優越感が読み取れる。このような優越感は、のちに彼と接触する時の<私>の態度にも影響する。一方、この「哀れな様をした愚鈍そう」な老人が「とんでもない食わせもの」だということを、<私>は様々な出来事を通して発見していく。



【図 26】南洋島民の彫刻品<sup>320</sup>

マルクープ老人は最初の段階では、「中々巧く」出来たものを作ってくれた。<私>も彼に与えた代金の相場を大抵決めていた。しかし、時間が経つにつれて、彼は自分で模型

<sup>320</sup> 南洋群島文化協会、前掲書（註 279）44 頁。

を作るのではなく、時にはどこから本物を持ってきたこともあった。

盗ってきたのか？と聞いても黙ってニヤニヤしている。神様のものを盗ったりして怖くないのかと聞くと、自分とは部落が違うから大丈夫だ、それにすぐ後で教会へ行ってお祓いをしてもらふから心配はないといい、そっと左手を差し出して私に催促する。そんないらぬ心配よりも早くお金をくれということである。(245頁)

老人は金欲しさに神様のものをも盗む人物として描かれている。後述するように、そもそも島民の間では人のものを盗むという考えは無論、神像を盗むという行為などなかった。

矢内原忠雄によると、南洋の固有の宗教の神々は大別して天神、地祇、および精霊の三種があるという。島民はこれらを甚だ恐れており、その怒りを避けるべく、あるいは宥めるために南洋には幾多の禁忌と巫術、巫術師が生まれた。そして、神々を冒すと、その怒りを招き、災禍に遭うと考えられていた<sup>321</sup>。つまり、島民は神様に対して絶対的な畏怖と恐れを持っていたが、マルクープ老人は神様のものを盗んでも怖がらないし、盗んだ時は教会に行ってお祓いをして貰えば良いと考えている。

当時の南洋はドイツ、スペインの植民地支配を受け、キリスト教などの外来宗教の渡来によって島民本来の風習や禁忌を喪失し、「白人の神様の威力」に圧倒されていた。つまり、古い神々を恐れず神像を盗み、教会へ行ってお祓いをして貰えばよいというマルクープ老人のような考え方は、近代的な価値標準が島に導入されたことによって出現したものにはほかならない。

また、老人は神像を盗むだけではなく、決められた報酬にも満足できなくなり、常に約束した以上の値段を要求した。彼が<私>に値上げしてほしいと頼む場面は、次のように描かれている。

ある日、一個の小さな鳩型護符の代金として私が例によって五十銭紙幣を一枚彼の掌に乗せてやっても、彼は手を引き込めないのである。瞼をつまんで掌の上を見、それから私の顔を見てニヤリとしてから瞼の扉を下したが、紙幣を乗せた手は引き

---

<sup>321</sup> 矢内原忠雄、前掲書（註 237）370-378頁。

込めようとしな。 (中略) しばらくして又臉をつまみ上げた。ニヤリと笑おうとして私の視線に会うと、慌ててカーテンを下したが、それでもそのまま左手は出し続けている。 (中略) その中に六十銭が七十銭になり、七十銭が八十銭となり、臉を上げ下しするだけの無言の応酬の中に、到頭一円に迄相場がせり上げられて了った。(245頁)

中島敦はマルクープ老人を極めて貪欲な持ち主として描いている。中島敦は南洋島民の由来の性質について妻たかに送った書簡の中で「パンのミ・ヤシ・バナナ・タロ芋は自然にのみり、働かないでも、そういうものさえ食べればよかったんだ。後は、居眠り、と踊りと、おしゃべり、とて、日が暮れていったもの<sup>322</sup>」と書いている。そもそも自然の恵みに頼って生活している彼らにとって、お金は必要のないものであり、使う道もない。つまり、マルクープ老人の貪欲さは、島に導入された近代資本主義による経済観念からもたらされたものであることは言うまでもない。



【図 27】 パンの実<sup>323</sup>



【図 28】 島民のヤシの実取り<sup>324</sup>

<sup>322</sup> 1941年11月9日付妻たか宛書簡、中島敦『中島敦全集3』(筑摩書房、2002)631頁。

<sup>323</sup> 南洋群島文化協会、前掲書(註279)182頁。

<sup>324</sup> 同上、21頁。

さらに、＜私＞に持ってくるものも手を省いた代物か、それとも偽物であったりした。結局、＜私＞がそれに「気が付いて、以前買上げた彼の製作品の全部を調べ直して見ると、迂闊にも半ば以上は極く気の付かぬ箇所で手の省かれた代物だったり、実際には存在しないマルクーブ爺さんの勝手な創作だったりした」。＜私＞が、マルクーブ老人が作ってくれたものが偽物であったことを発見した時の場面を見てみよう。

私が腹を立てて叱っても、始めは自分の製作品が正確なことを主張して容易に譲らない。種々な動かしがたい証拠を示して決めつけると、遂に、何時ものニヤニヤ笑を浮かべたまま黙ってしまう。(中略) 模型は絶対に正確でなければならぬ、金が欲しさに怪しげな贋物を持ってきてはならぬ、と私が厳しく言うと、おとなしく頭を下げたて帰って行く。(246頁、下線筆者)

＜私＞は「模型は絶対に正確でなければならぬ」と考えており、そのためマルクーブ老人が持ってきたものを「怪しげな偽物」と判断した。しかし、そもそも正確さを求める行為は近代人の常識である。＜私＞は老人に正確な模型を作らなければならないと要求した時点で、南洋社会の価値標準ではなく、近代的な価値基準で彼の行為を捉えていたのである。つまり、文明人である＜私＞は文明人の規則で彼らを無理やりに規範しようとし、彼らに自らの文化習慣を捨てさせようとした。

このように、老人は道具製作の謝礼がエスカレートするだけでなく、偽物を持ってくるような狡く、貪欲な性格の持ち主であると＜私＞は考えた。前述したように、土方久功が描いた老人は生まれつきの優しさを持っている人物である。では、中島敦が作り上げた老人も生まれつきの貪欲さを持っている人物であろうか。答えは否である。老人をずるくさせ、貪欲のある人間にさせたのは、まさにスペイン、ドイツ、そして日本の植民地支配によって持ち込んできた近代的な規則や論理基準の侵入によるものにほかならない。後述もするが、マルクーブ老人の人間性を変え、悪に追い込んだのは環境の影響であり、近代文明の導入であった。しかも、それは彼を狡くさせただけではなく、不可解な異質な行動に走らせたのである。それについて、神様事件の話を見てみよう。

### 3-2 神様事件の密告者

さて、中島敦は「雞」において、マルクーブ老人を貪欲な持ち主に変えさせただけでは

なく、彼を神様事件の密告者にする。当時、パラオ地方では、「神様事件」が起こり、マルクープ老人はその常習的な密告者だったらしい。「雞」には、「神様事件」が書き込まれている。

当時パラオ地方に「神様事件」と言われるものが起こっていた。パラオ在来の俗信と基督教とを混ぜ合わせた一種の新宗教結社が島民の間に出来上がり、それを治安に害ありと見なされて、「神様狩」の名の下に、その首脳部に対する手入が行われていた。(246 頁)

このように、「神様事件」とは「モデクゲイ<sup>325</sup>」と呼ばれた宗教運動を検挙する事件を指す。モデクゲイは日本委任統治領下に入って間も無い 1915 年に立ち上がったカトリックとパラオのシャーマニズムとが融合した新宗教である<sup>326</sup>。このような新宗教は近代以前には存在せず、島が近代化されることによって形成されたものである。富山一郎は、この宗教運動について次のように指摘する。

この運動は反日を掲げて幾度もなく検挙され、一九三八年末には二六名が一斉検挙された。この時の南洋庁は、「南洋庁有史以来の大事件」と報告している。モデクゲイは、南洋庁の報告においては「邪教」として扱われ、また人類学者の杉浦健一においては、「島民固有」の宗教が外来宗教の影響の中で変化し、さらにそれが政治的に利用されたことにより成立したとされている<sup>327</sup>。

当時、モデクゲイはパラオ地方において単なる新宗教だけではなく、一種の反日独立運動とみなされていた。前述したように、日本は「断乎たる強圧」で南洋群島を植民地統治するが、島民はそれに反抗することができなく、ただおとなしく従順する姿を見せるのみだった。しかし、モデクゲイという反日運動が行われたことから、島民が支配者の前に現れた畏敬と従順さは、「本当に心底から驚嘆感服」するものではなく、「単に表面ばかり」のものであることが読み取れる。日本の為政者たちは島民を「よう分かっとる」つもりで

<sup>325</sup> モデクゲイとは「一緒になること」ないしは「最終的に共同すること」を意味するパラオ語。

<sup>326</sup> 青柳真智子『モデクゲイ ミクロネシア・パラオの新宗教』（新泉社、1985）124 頁。

<sup>327</sup> 富山一郎「熱帯科学と植民地主義-「島民」をめぐる差異の分析学-」酒井直樹編『ナショナルリティ』（柏書房株式会社、1996）所収。

彼らを支配するが、実はモデクゲイが起こったように、島民の心理や生活感情を全く分かっていなかったのである。

マルクープ老人は、この神様事件においてもっとも常習的な密告者であり、金欲しさに親しい友人まで裏切るような下劣な人間であると<私>は思う。老人の貪欲さに反感を持つ<私>は、この事件で「甚だ不愉快」を感じた。そして、実際<私>はそれをきっかけに彼との関係を断絶する。

というのは、この事件のせいで、数日後、<私>は彼のちょっとした製作上の無精とちょっとした貪欲に対して、「酷く」腹を立て、「後で考えて見ておかしく思った程むきになって怒鳴り立て」、金欲しさに親しい友人まで裏切るような下劣な奴に、もう仕事を頼またくないと言った。一方、怒鳴り立てた<私>に対して、老人は抵抗も言いつけも一言の弁解もなく、ただ「神妙に、というより呆気にとられたように」、不思議な状態に陥るのである。

しばらくしてひょいと気がつくと、老人は何時か石のような無表情さになっており、私の声も聞かなければ私の存在をも認めていない様子である。先ほど述べたあの不思議な状態、全ての感覚に蓋をした・外界との完全な絶縁状態に陥っていたのである。私は驚いたが今更急に折れて機嫌をとる訳にも行かない。それに今となっては、何を言おうが何をしようが、全てを閉じ丸くなって武装したアルマジロのように、彼は何ものをも知覚しないであろう。(247 頁、下線は筆者)

前述した「石の神像」になった老翁のように、マルクープ老人も「石のような無表情」に陥る。彼は<私>に何かを主張し、説明するよりも、<私>との交流を完全に諦め、<私>と絶縁状態になる。この不思議な状態に対して<私>はただ驚くばかりで、どうすることもできなかった。いったいなぜマルクープ老人はこのような状態に陥ったのだろうか。

その疑問を解くために、<私>と老人との関係を改めて検討してみよう。<私>は、マルクープ老人の「比較的故実にも通じ手先も器用である」ことを知り、彼を、「民間俗信の神像や神祠などの模型を蒐集」するために利用していた。これまで二人の交流する場面を振り返ってみれば、<私>は老人に対して、常に彼を見下し、「腹を立てて叱り」、「厳しく言う」、「後で考えて見ておかしく思った程むきになって怒鳴り立」てるなど、彼のち

よつとした貪欲や製品製作上の無精に対して、すぐに怒鳴るような威厳ある支配者の態度をとっていた。つまり、常に文明人の基準で物事を判断し、彼を軽蔑していたのである。それに対し、マルクープ老人は<私>の前では、常に「ニヤリと笑」い、「何時ものニヤニヤ笑ひを浮かべたままだまってしまう」、「大人しく頭を下げて帰って行く」など、いつもおどおどしく従順する態度をとっていた。つまり、彼は<私>の前ではすべての非難を受け止め、絶対に抵抗しない存在なのであった。

ところが、彼は「石のような無表情」になり、絶縁状態になることによって、<私>の怒鳴りや非難から免れることができた。つまり、抵抗しても仕方がない彼にとって支配者の前で「石になる」ということは、強圧な植民地下を生き抜くための最後の出世術なのではなかろうか。

このような二人の関係は、懐中時計の盗難事件からも見られる。この事件は、前述の事件と同様、中島敦が老人の欲深さと奸悪さを際立たせるために、書き加えた部分である。

### 3-3 盗難事件の窃盗者

マルクープは<私>に叱られた後に姿を消すが、彼と一緒に「机の上に置いた懐中時計」も消えた。<私>は時計がなくなったのは、老人がそれを盗んだからだと思った。その理由は、以下の通りである。

一時間ばかりして、私は、先刻——老人が来る前に確か机の上に置いた筈の懐中時計が見えなくなっているのに気が付いた。(中略) 以前マルクープが此の時計を、殊に其の銀の鎖を大変珍しがって、手に取ってはおもちゃにしていたことのあったのを、私は思い出した。私は直ぐに表へ出て彼の小舎を訪ねて行った。小舎の中には誰もいなかった。(中略) それから二三日続けて毎日寄って見たが、何時も小舎は空っぽである。(中略) 爾後、マルクープ老人は再び私の前に現れなかった。(247 頁)

このように、<私>はマルクープ老人がかつてこの時計を珍しがっていたこと、また人が見つからなくて直ぐに何処かへ行ってしまったこと、そして再び私の前に現れなかったことを理由に、彼を自分の時計を盗んだ窃盗者と断定する。しかし、そもそも他人を窃盗者と決めつける行為こそ近代人の意識にほかならない。

土方久功は、島民の「原始共産-原始共同」的な生活における所有について次のように

述べている。

持っているものが、有るものを、持っていない者に、無い者に與えるのが当然であり、持っていないものが、無いものを、持っている者から貰ふのは何と当然ではないか。否、持っている時に、有るものを、持っていない者に與るのが当然であり、自分が持っていない時に、持っているものから貰ふことは何と当然ではないか。(中略) 無い時には一日中の食べ物でも他人の所から探して来、乞い受けて来る。そのかわり、たった半分の芋でも小魚の一匹でも、有るものは分けてやる<sup>328</sup>。

つまり、自然の恩恵に頼って生活している島民にとって、全てのものは共同共有の財産である。従って、彼らには他人のものを盗むとか「窃盗」するという意識などはそもそももっていなかった。〈私〉がマルクープ老人を窃盗者にしたのは、近代人の価値標準で彼を判断したからであろう。

一方、南洋は「潮気と暑気とのために懐中時計の狂い勝ち」な場所であり、「一体、時間という言葉がこの島の語彙の中にあるだろうか?<sup>329</sup>」(「真昼」)といった土地である。中島敦は1941年9月2日妻たかに送った書簡のなかで次のように書いている。

島民たちは(公学校を出た者は別だが)自分の年を知らないんだよ。春も冬も無いから、一年のたったのがわからず、従って、自分がいくつになったかも知らないんだ。(中略) 以前は、島民の食事は時間が決まっていなかった。回数も。腹が減れば喰い、客が来れば喰い、寂しければ、食ったもんだそうだ<sup>330</sup>。

このように、前近代の南洋には時間という概念がなく、時間を数える習慣もなかった。よって、時計が存在する必要もないのであった。しかし、近代文明と産業発展に伴って生じた精密な時間概念は、植民地支配による文明化の導入によって浸透されてきた。マルクープ老人は本来島民にとって不必要のない時計を珍しがり、そして盗みまでにし、奸悪な人間になったのは、近代文明の侵入によるものであろう。

<sup>328</sup> 土方久功『流木 ミクロネシアの孤島にて』(未来社刊、1974) 350-351頁。

<sup>329</sup> 中島敦「真昼」『中島敦全集1』(筑摩書房、2002) 278頁。

<sup>330</sup> 1941年9月2日妻たか宛書簡『中島敦全集3』(筑摩書房、2002) 581頁。

このように、中島敦のマルクーブ老人は、貪欲な食わせ物ぶりを発揮し、部落のものを密告する。そして<私>の懐中時計まで盗む。近代文明の侵入によって、それまでに島にはなかった窃盗などの悪徳な行為、正確さを求める科学意識、近代的な時間などの論理標準や概念が南洋にも生まれてきた。つまり、マルクーブ老人の「悪」は彼の生まれつきのもものというより、島の文明化によってもたらされたものであると言っても間違いはないだろう。その点をより明確にさせたのは、鶏の事件である。鶏の事件を通して、<私>は彼のもう一つの側面を見るのである。次節では、鶏の事件について考察する。

#### 第4節 3羽の鶏の真意

懐中時計の盗難事件以来、マルクーブ老人はそれっきり姿を消した。<私>も土俗調査のため離島へ出かけた。そして、2年間経て再びパラオに戻ってきた<私>は「島民などが大変に如才無く狡くなってきたように感じた」。この<私>の感想からも近代文明の侵入が島民の人間性を変えたことが読み取れる。その後、パラオへ帰って一ヶ月も経ったある日、マルクーブ老人は再び<私>のところを訪ねてきた。

再び現れたマルクーブ老人は、2年前より10も歳を取った具合であった。声も非常にかすれてしまって内緒話のように聞こえた。このような老人を前にして、<私>はさすがに懐中時計の話を出さず、ただ彼の近況を訪ねるだけだった。そして、老人は病気が悪いと言い、そのことでお願いがあると言った。老人は半年ほど前に病気



【図 29】南洋庁パラオ病院<sup>331</sup>

にかかり、パラオ病院（【図 29】）で診てもらったが、一向に治りそうもないので、レンゲさんの所へ診てもらいたがっている。前述の通り、そのレンゲとはドイツからきた宣教師としてキリスト教を布教しながら、本国から持ってきた薬を島民に施し、島民間に評判を

<sup>331</sup> 南洋協会南洋群島支部編『日本の南洋群島』（南洋協会南洋群島支部、1935）。

得ている人である。しかし、老人は自らパラオ病院をやめてレンゲさんの所へ行く勇気がなかった。その理由は次のように書かれている。

パラオ病院は役所の病院だから、勝手に其処をやめてレンゲさんの所へ行ったら、院長さんにも怒られるし、警務の人にも怒られる。(249 頁)

このマルクープ老人の話から、当時の島民教化による強制力が見て取れる。〈私〉のほうもまた瀕死の老人の願いを聞かなければならないと思ひ、彼の依頼を引き受け、事情を院長に伝えた。

院長の所へ行って話して見ると、あれはもう喉頭癌とか喉頭結核とかで(どちらだか今は忘れた) 到底助かる見込みは無いのだから、レンゲの所へ行くなり何なり、もう本人の好きなようにさせた方がよかろうという。(249 頁)

土方久功のギラメスブズ爺さんがかかったのは「下腹が痛い」という病気であるが、中島敦は「喉頭癌」「喉頭結核」という病気になっている。病名の変更は何を意味するのだろうか。杉岡歩美は南洋における病気について次のように述べている。

条約局法規課編『委任統治領南洋群島 後編』に、〈南洋〉に置ける「地方病」として、例えば中島が実際に罹患した「デング熱」とともに、外来の〈病〉として、「結核」「性病」「癩」が挙げられ、それらは、「島民は衛生思想乏し」かったために、蔓延したと述べられている<sup>332</sup>。

つまり、「喉頭癌」「喉頭結核」は南洋にはなかった近代的な病である。中島敦は、本来南洋に存在しない「結核」などの病気が、近代文明の侵入とともに島民の健康を害するようになったことを描き出しているのである。

さて、〈私〉はマルクープ老人の願いを叶いてやったが、その後しばらく彼の消息を聞かなかった。その後、三ヶ月ばかり経ったある日、一人の土人青年が老人の病死を告げ、

---

<sup>332</sup> 杉岡歩美、前掲書(註35)134頁。

マルクープ老人に頼まれた鶏を渡しに来た。そして、二三日後、また一人の別の土人青年が来て老人の遺言だと鶏を渡した。さらに、翌日また老人の親戚の一人が鶏を持ってきて、「爺さんは生前先生には大変お世話になったとっていましたから」と言った。「何故三羽も——それも三回別々の人間に持たせてよこしたのか」という<私>の疑問について、その親戚は次のように説明した。

恐らく、一人だけに頼んだのでは、猫婆される懼が充分にある故、老人は万全を期して三人に同じ事を委嘱したのであろうと。「島民の中には約束を守らぬ者が多いですから。」というのが、最後にその島民の付け加えた言葉である。(250 頁)

この説明に<私>はなかなか満足できなかった。島民の生活において鶏が如何に大切なものであるかを熟知している<私>は、3羽の生きた鶏を前にして、感動すると同時に、複雑な心境をも引き起こした。この鶏の贈り物は医者を紹介してくれた<私>の「親切に対する報い」だろうか、時計事件への「謝罪」であろうか、<私>には彼のとった行動がなかなか理解できず、困惑は募っていくばかりであった。その困惑の理由は「鶏」の最後に示されている。

そうして恐らくは、「人間は」というのではなしに、「南海の人間は」という説明を私は求めているのもあろう。それは兎も角として、南海の人間はまだ私などにはどれ程も分っていないのだという感を一入深くしたことであった。(251 頁)

つまり、<私>は文明人の眼差しで島民を見ているが故にマルクープ老人が理解できなかったのである。

前述したように、<私>は正確さを求める近代人の常識で老人の作ってくれた製品を鋭く非難し、所有意識を持って彼を窃盗者にし、悪人にした。<私>はマルクープ老人達の固有文化や習慣、彼らの立場で立って彼らを見るのではなく、自らの価値観で彼らを判断し、自分たちの価値観に押し付けようと厳しく教化した。それに対して、哀れなマルクープ老人は強圧に対して全く抵抗する力がなかった。彼ができることは<私>の前で本当の姿を隠し、ただ「石になる」だけであった。これは植民地下を生きていく上での生き方であり、本来の姿ではなかった。<私>は彼の本当の姿を見ることができなかった。従

って、文明人の〈私〉が繰り返し「わからない」と言うのは、〈私〉にとっては本当のことだろう。日本の植民地支配による文明化の侵入は島民を理解しづらくさせたのである。

一方、我々はこの3羽の生きた鶏から、マルクープ老人が奸悪で「とんでもない食わせ者」であるにもかかわらず、彼の心の中に存在する真意を確実に受けることができたのであろう。この鶏事件から明らかになったのは、マルクープ老人が下劣で奸悪な人間になったのは、生まれつきの性質ではなく、文明化の侵入という環境に追い込まれたものであったことだ。

### 第5節 「鶏」に示される批判性

南洋体験直後の中島敦は作品「真昼」（1942）の中で、

お前は島民をも見てをりはせぬ。ゴーガンの複製を見てをるだけだ。ミクロネシアを見てをるのでもない。ロテイとメルブイルの画いたポリネシアの色褪せた再現を見てをるに過ぎぬのだ。(278頁)

と、南洋体験時に、自分の文明化された思考が島民理解を妨げていることを反省し、文明人の眼差しと感覚は、南洋の現実を直接見たり体験したりすることを阻むと述べている。しかし、前述の「鶏」では、中島敦はあえて島民を理解できない文明人としての〈私〉を設定している。

このように見てくると、語り手の〈私〉は、そのまま作者というより、当時南洋に出かけた多くの日本人の中の一人としての中島敦自身が投影されていたのではないか。その〈私〉を、中島敦は皮肉を込めて描いている。つまり、中島敦は「鶏」において、新任教師への不審を通して日本から南洋に渡ってきた人々の島民理解への疑問と、マルクープ老人の理解しがたい人間像を描き出すことによって、先行研究でしばしば取り上げられている植民地支配への批判を表しただけではなく、その背景には文明化による人間性の喪失という文明化への批判も表現したのである。川村湊は文明化によってもたらされたものとして、次のように指摘している。

日本人たちは近代医学とともに新しい病毒を持ち込み、近代教育とともに差別を、

近代資本主義とともに貧窮と窃盗と詐欺と破産を島の中に導入したのである。

売春、飲酒、賭博、不倫、怠惰といった悪徳は、すべて文明人が植民地支配といっしょに持ち込んできたものといっている。なぜならそうした悪徳は、現地の人々の論理基準や道徳律から生み出されたものではなく、あくまでも支配者側の打ち立てたモラルや法令によって必然的に生じてきたものなのだから<sup>333</sup>。

文明人たちは植民地支配によって本来島には不必要な価値標準やなかった悪徳を持ち込み、島民の生活習慣を変え、彼らの性質を変えた。「雞」はまさにこのような文明化がもたらした影の部分を端的に表現したといえよう。

中島敦の〈南洋もの〉の中では、「雞」と同じ系列なものとして、「環礁」に収められた「ナポレオン」という作品がある。ナポレオンの話は土方久功の『南方離島記』の草稿を読んで創作したものであることが判明している。土方久功のナポレオンは「悪質な窃盗常習」のためにプル島に流された少年であり、2年ほどで母語のパラオ語を忘れてしまった人間として描かれている。中島敦はこの人物像をもとに、植民地支配側の警官や巡査という登場人物を登場させるだけではなく、ナポレオンの犯した罪を加重し、さらに逃亡やハンガー・ストライキなどの事件を加わり彼の悪逆性を強調し、権力を恐れない人間として変更している。

しかし、同じく悪少年として描き出されているが、土方久功のナポレオンの「悪」と中島敦のそれとは違う。というのは、土方久功のナポレオンの「悪」は、「世の中の悪事という悪事は、もちろん出来心や環境の影響から生まれる場合がずっと多いとはいえ、このような、より運命的なものがあるのではないか<sup>334</sup>」と述懐されたように、「運命的」「生まれついた悪性」とされている。それに対して、中島敦の「ナポレオン」の最後では、ナポレオンをT島に送り、船が出帆する時の場面が綴られている。この場面はもちろん土方久功の「ナポレオン」にはない。それが、以下である。

船が愈々汽笛を鳴らして船首を外海に向け始めた時、ナポレオンが居並ぶ島民どもとともに船に向かって手を振ったのを、私は確かに見た。あの強情な不貞腐れた少年が、一体どうしてそんな事をする気になってものか。(中略)ただ少年らしく人々

<sup>333</sup> 川村湊、前掲書（註236）105頁。

<sup>334</sup> 土方久功『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991）275-280頁。

の真似をしてみたくなったのだろうか。あるいは、その言葉はすでに忘れてしまっても、やはりパラオが懐かしく、そこへ帰る船に向かって、つい手を振る気になったのだろうか。どちらとも私にはわからない<sup>335</sup>。

我々は、「雞」のマルクープ老人が3羽の生きた雞を送る行為を通して、「どんでもない食わせもの」の中に存在する純粹さと優しさを発見したように、パラオに帰る船に向かって手を振る少年の姿から、「強情で不貞腐れた少年」の中に存在する純情が印象付けられるだろう。少なくとも彼の悪を運命的な悪と見ることができないだろう。そうだとすれば、中島敦のナポレオンの悪は、土方久功の言葉を借りれば、「環境の影響から生まれる場合」に当てはまるだろう。ナポレオンを悪に追い込んだ環境が何かは、言うまでもない。中島敦は1941年11月9日付妻たかに送った書簡の中で、次のように書いている。

僕は島民（土人）が好きだよ。南洋に来ているガリガリの内地人より、どれだけ好きか知れない。単純で中々可愛いところがある。大人でも大きな子供と思えば間違いない。昔は、彼らも幸福だったんだろうがね。パンのミ・ヤシ・バナナ・タロ芋は自然にみのり、働かないでも、そういうものさえ食べればよかったんだ。後は、居眠り、と踊りと、おしゃべり、とて、日が暮れていったものを、今は一日中こき使われて、おまけにヤシもパンの木も、どんどん切られてしまう。全く可哀そうなものさ<sup>336</sup>。

単純で純粹な島民は、日本の植民地支配によって最末端の労働者として使い潰され、固有の生活習慣や生き方も崩壊された。文明化によって、本来彼らに属する幸せな生活は二度と戻れない。植民地南洋体験があったからこそ、中島敦は植民地側のやり方の不当さを痛烈に味わっただけではなく、文明化によって人間性を喪失してしまったといった事実も認識しなければならなかった。そこには、文明化への批判とともに、中島敦自分自身が「土人たちを不幸にする」文明人の一人であるという苦い認識があったに違いない。

<sup>335</sup> 中島敦「ナポレオン」『中島敦全集1』（筑摩書房、2002）276頁。

<sup>336</sup> 1941年11月9日付妻たか宛書簡、中島敦『中島敦全集3』（筑摩書房、2002）631頁。

## おわりに

第Ⅲ部では、中島敦の「マリヤン」と「雞」を取り上げた。この二作品は南洋で知り合った民族学者兼彫刻家兼画家である土方久功の著書や草稿や日記などから素材を取ったものである。しかし、この二作品は、土方久功のものとは異なる新しい作品として生まれ変わっている。「マリヤン」の主人公のマリヤンは英語と日本語が堪能なインテリ女性である。しかも、彼女は内地人男性との結婚を拒否する。その姿は従順で無智な故に内地人の男たちに翻弄される同時代の一般的な島民女性のイメージとは程遠い。一方、「雞」のマルクープ老人は貪欲な持ち主で、友人を裏切ったり、窃盗したりする下劣で奸悪な人間として描かれている。彼もやはり大人しく従順な島民像から程遠い人物である。つまり、中島敦が描き出した島民像は、当時日本社会に広まっていたステレオタイプの島民イメージを覆すものばかりである。

なぜ、中島敦は同時代の島民イメージとは程遠い南洋人を描き出したか。第Ⅲ部ではその目的と背景について分析を行なった結果、次の2点が指摘できた。

まず、中島敦が同時代の島民イメージを覆す新しい南洋人を描き出していたことは、先行研究が指摘するような日本の植民地支配への批判にとどまらず、文明化されつつある南洋社会に暮らす島民たちは如何なる生を送ればいいのか、その人間存在のあり方を問うためであったことを浮き彫りにする事ができた。

もう一点は、＜南洋もの＞を通して、中島敦の人間認識が深まっていたことを指摘することができた。具体的には「プールの傍で」と「雞」の二作を比較してみる。本論文では取り上げられなかったが、「プールの傍で」(1933)は＜朝鮮もの＞の一つである。これは日本人学生の三造が、中国旅行の帰途中に朝鮮に寄り、かつて朝鮮での記憶を母校の京城中学校のプールで思い出したものである。その記憶の一つとして朝鮮人娼婦とのエピソードがある。龍山小学校、京城中学校の同級生である山崎良幸によれば、1933年京城にいる山崎の下宿を訪れた中島敦の体験がもとになっているという。その詳細は以下の通りである。

昭和7年、大学三年生の時、夏の終わり頃でしたか、中島君が京城の私の下宿にや

ってきました。(中略)「プールの傍で」は、その時のことですが、彼の行動については何一つ私は知らず、彼は一人で行動していました。(中略)ただ夜、「付いてくるな」と言って自分は色街に行ったらしく、その模様をこと細かく教えてくれました。そのことについては、何も知らなかった私でしたが、いかにもさらっとした話で、少しも卑猥な感じのしなかったのが不思議なほどです。なお彼は新町の日本人用の方には行かず、韓国人用の方に行ったようです<sup>337</sup>。

このように、「プールの傍で」における色街での話は中島敦の実体験に裏付けられたものである。まず、このエピソードのあらすじを見てみよう。

ある晩、三造は友達と一緒に初めて京城の色町へ行った。それは暗い露地にある、低い朝鮮家屋の並ぶ朝鮮人遊廓だった。遊廓に入ると、三造たちはすぐに娼婦たちに呼びかけられた。しつこく呼び止める女たちに狼狽した三造たちはそこから逃げ出したが、逃げ遅れた三造は道に迷い、ある小さな土の門がある家の前に来てしまった。一人の女が立っていた。その女は小さな手で三造の上衣を掴んで、部屋に連れて行こうとした。三造は反射的に女を突き放して身を引いた。そのはずみに制服のボタンをむしり取られた。三造は制服のボタンを取り戻そうとしたが、女はそれを返さず部屋の方を指差した。腹を立てながらその場を離れた三造は、友達の後を追って遊廓から出ようとした。

ところが、女がボタンを返しに追ってきた。三造はボタンを渡すために出された女の柔らかに冷たい手を握って妙な混乱を覚えた。しかしながら、彼は女にさよならと言ってその場を立ち去った。日本人町の大通りへ出てから、三造は家に帰ると嘘をいい、友達と別れた。しかし、三造は家へ帰らなかった。財布の中を検めた三造は、今降りてきた道を再び登り始め、女に会いに行った。三造を連れて部屋に入った女は、早速布団を敷き始めた。しかし、三造は女には一切手を出さず、お金を払い、女の部屋でただ本を読み、夜を明かした。

本来ならば、女を買いに売春宿に入った三造は女と寝なければならないはずである。がしかし、三造はお金を払ったまま彼女とは寝なかった。むしろ、「とにかく、お前は寝ろ」「寝るだよ」「いいから銭をとって、お前だけ寝ればいいんだよ」と、彼女に寝るように勧めるのである。

---

<sup>337</sup> 山崎良幸「中島君を思う」『中島敦全集別巻』(筑摩書房、2002) 240-241 頁。

では、三造はなぜこのような行動をとったのだろうか。これについて、川村湊は次のように指摘している。

三造は、金銭を代価として少女を「買った」のに、彼女の体には手を触れない。その束の間の安眠を代わりに買い取ってやったのだ。こういう日本人、男性が、植民地朝鮮において「よい日本人」であり、「よい男性」であることは疑えないだろう。朝鮮人を差別することなく、彼らと人間的な交わりを持つとうとする。民族のへだてをなくして、貧しき者、弱き者への同情を隠そうとはしない<sup>338</sup>。

つまり、三造が娼婦の部屋で何もせず本を読み続けたのは、彼女を休ませるためだったのである。これは三造の彼女に対する心遣いであり、恩恵であった。言い換えれば、三造は朝鮮人を差別する当時の一般の日本人とは違い、善意と好意を持つ「良い人間」、「良い日本人」を演じたのである。

このような「良い人間」としての人物造形は三造だけではなく、ほかの〈朝鮮もの〉の中でもよく見られる。例えば、「巡查のいる風景」の「ちょっとお尋ねいたしますが」と頭を下げて、非常に丁寧な言葉で朝鮮人巡查に場所を尋ねる親切な紳士、また「虎狩」の、「相手に、自分が半島人だという意識を持たせないように努めて気を遣った」〈私〉はまさにそうである。つまり、朝鮮体験を通して、中島敦は植民地に生きる「良い人間」を観察したのである。

しかしながら、このような親切的で良心的な「良い人間」、「良い日本人」は果たして「良い日本人」なのであろうか。「プールの傍で」の売春婦の娘は、結局のところ、三造の好意が全く理解できず、「困惑した面持」「怪訝な表情」ばかり見せていた。また、「虎狩」の趙大煥も〈私〉の気遣いを非常に気にしていたように、朝鮮時代の中島敦は自分から見る「良い人間」は相手にとって必ずしも「良い人間」ではないということには気付かなかった。

ところが、〈朝鮮もの〉以後の作品には「良い人間」といった恒常的で単一とした人間理解は姿を消していく。その代わりに「雞」のマルクープ老人の人物像が創られたのである。

---

<sup>338</sup> 川村湊「中島敦と朝鮮」『アジア遊学 (51)』(勉誠出版、2003) 135 頁。

では、「雞」のマルクープ老人はどのように描かれたのだろうか。土方久功の原作では、老人は道具製作にも真面目で、また死後も親戚を通して 3 羽の生きた鶏を土方に送ったなど、一貫として優しくて「良い人間」であるが、中島敦はあえて人工的な仕掛けをし、生前の老人像を貪欲の持つ奸悪な人間として描く。そして、その生前の「悪さ」と死後の「優しさ」とのギャップを通して、中島敦は人間のわからなさという主題に導く。作品の中では、奸悪な人間として老人を把握していた語り手の〈私〉は、送られた 3 羽の鶏を見て、感動すると同時に困惑し、そして人間というものについて思考に耽る。

あの時計の事件によって私の心象に残された彼の奸悪さと、今のこの雞の贈り物をどう調和させて考えればいいのだろう。人間は死ぬ時には善良になるものだ、とか、人間に性情は一定不変なものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ、とかいう説明は、私をほとんど満足させない。(中略) そうしておそらくは、「人間は」といふのではなしに、「南洋の人間は」という説明を私は求めているのもあろう。それはともかくとして、南洋の人間はまだまだ私などにはどれほどもわかっていないのだという感を一入深くしたことであった。(250-251 頁)

つまり、語り手の〈私〉は結局マルクープ老人を奸悪な人間でも親切な人間でも捉えきれない「わからない人間」にしている。

人間は「良い／悪い」に分けられる恒常とした性質の持ち主ではなく、心が複雑なものであり、不可解なものであるといった中島敦の人間存在に対する形而上学的な認識は「雞」の中だけではなく、〈南洋もの〉の中ではよく見られる。例えば、「夾竹桃の家の女」の女性は、最初に見かけた時には「目付きの中に異常なもの」を漂わせて〈私〉を見つめていた。しかし、病後衰弱な〈私〉は彼女の凝視に断わってさよならと言った時、彼女は「ひどい侮辱をうけでもしたように、明らかに怒った顔つき」になった。そして三十分後、〈私〉は再び家の近くの敷石路で彼女とすれ違った時、彼女は「怒っている顔つきではなく、全然私を認めないような、すました無表情な顔であった」。

この作品を通して、中島敦は女性の気持ちの変化の速さを描き、人間の不可解さを描き出した。また、「ナポレオン」では、土方久功の「生まれついた悪性」的なナポレオンの姿とは違い、中島敦は船での「強情で不貞腐れた」姿と T 島に送り、出帆する船に向かって少年らしく手を振った純情の姿が調和できないナポレオンの人間像を作った。「一体ど

うしてそんなことをする気になってものか」と語り手の〈私〉は疑問を投げ、「ただ少年らしく人々の真似をしてみたくなったのだろうか」、あるいは「パラオが懐かしくて、そこへ帰る船に向かって、つい手を振る気になったのだろうか」と感想を漏らし、「どちらとも私にはわからない」と不可解さを伝えている。

このように見てくると、〈南洋もの〉における中島敦の人間認識は「良い／悪い」のみでは捉えきれない複雑な人間性への理解まで到達していたことが分かる。

## 終章 植民地体験と中国古典もの、そしてその関連性

周知の如く、中島敦が生きていた時代は日清・日露両戦争を経て国際的な地位を高めた日本が、朝鮮や台湾など周辺諸国を植民地支配し、さらなる植民地確保のためにアジア諸国と戦争を行っていた、いわゆる戦争の時代である。この時代に生まれつきた中島敦は、好むと好まざるとにかかわらず、時代の波に巻き込まれるだけではなく、その人生もまた植民地とともに運命を共にするものであった。彼は家庭の事情で初めて植民地朝鮮へ連れられてから自らの意志で植民地南洋群島へ出かけるまで、彼は人生の三分の二を植民地と深くかかわりながら生きてきた植民地体験抜きでは語れない文学者なのである。本研究は、まさしく植民地体験が彼の人生と文学世界、そして作家形成にどのような影響を与えたかを浮き彫りにしたものである。

これまで見てきたように、少年時代の朝鮮体験は、中島敦の人間観察の原点とも言える。彼はそこで反日運動者、差別主義者、同情者、親日派、社会底辺の朝鮮人、両班の末裔など日本人朝鮮人を問わずそこに生きる人間達の生と運命を目の当たりにした。そして、若い頃に朝鮮で見かけたこれらの人間の存在が、中島敦のその後の中国・満州体験、さらに南洋体験における人間存在の見方に深い影を落としていたことを私たちは見逃すわけにはいかない。

というのも、反日運動者の趙教英の姿は、〈中国もの〉では権泰生に引き継がれ、朝鮮人を軽蔑する差別主義者の小僧は、〈中国もの〉において白夫人の特質的な性格に生かされ、かつ深まれている。そして、三造や親切な紳士といった「良い日本人」の姿は、〈南洋もの〉では「悪い人間」の人物造形に深く影響しているからだ。

これまでの作品の分析を通して、中島敦は単なる植民地体験談を描いただけではなく、植民地に生きる様々な人間像の表象を通して、人間存在のありようを問っていたことを明らかにした。しかも、朝鮮から中国、南洋へとまったく異なる性質をもつ植民地社会を体験していくにつれて、人間存在のありようの問い方も深まっていった事実を浮き彫りにした。具体的には、次の3点にまとめられる。

一つ目に、植民地体験によって読み取れた人間性質への理解が恒常で単一としたものから複雑で豊かなものになっている。〈朝鮮もの〉では、反日運動家や娼婦、人種差別主

義者、良い日本人といった人物が繰り返し取り上げられているばかりではなく、その人物像も固定的かつ断片的に描かれている。それに対する〈中国もの〉では、朝鮮人の権泰生や日本人の白夫人などのように複雑な内面世界を持っている豊かな人物像へと変貌を遂げている。さらに〈南洋もの〉に至ると、その人間理解が単なる多面的で複雑なものだけではなく、マルクープ老人やナポレオンなどのように不可解で得体のしれない訳の分からないものへと深まっていく。

二つ目に、登場人物から見られる存在の不確かさ、矛盾、苦悩、不安、懐疑といった複雑な内面感情が形而上学的なものから人間的で現世的なものになっている。〈中国もの〉では「自分とは何だ」と三造が陥る自意識過剰の状態と、「神とは何だ」と疑問し「存在の不確かさ」に襲われる伝吉の精神世界は、自己や宇宙というものへの根源的な懐疑である。それが〈南洋もの〉では、内地人の男との結婚問題に苦悩するマリヤンの精神状態はあくまでも現実の生活に則した現世的なものへと変わっている。

三つ目に、過酷な運命に対峙した人間存在の無力さと悲劇的な感覚への認識を深めている。〈朝鮮もの〉では、現地人の抑圧された生活や悲惨な現実が描かれているが、それは未だ支配／被支配といった民族レベルでのものに止まっている。そして〈中国もの〉においては、冒険に出かけたものの夢破れ、異国にさまよう人間たちの悲劇性と無力さは、支配／被支配の問題にとどまらず、根無し草の不安、形而上学的苦悩、自己嫌悪、憎悪と怨恨など様々な角度から探求されている。さらに、〈南洋もの〉では文明化によって人間性が喪失されてしまう島民たちの無力さと不幸がストレートに描かれず、ゆとりとユーモアを交えて表現されている。

このように、中島敦は少年時代の朝鮮体験、青年時代の中国・満州体験、晩年の南洋体験を通して、その人間存在への認識が受け継がれながらも、深化していったのである。

南洋体験後の中島敦は、これまでの植民地体験によってもたらされた人間認識を基に、優れた漢文素養を生かして、中国の歴史や古典作品から素材を求め作品創作に没頭した。植民地体験を通して作り上げられた人物像は「弟子」「李陵」などの〈中国古典もの〉の中に確かに受け継がれ、また植民地体験によって深められた人間認識もその中に満ち溢れていったのである。〈中国古典もの〉の人物造形と植民地体験との影響関係について、具体的には次の表で表すことができると思われる。

【表 3】 <中国古典もの>の人物造形による<植民地もの>の影響

人物造形	植民地もの	中国古典もの
誇り高い自尊心の持ち主	「虎狩」 趙大煥	「山月記」 李徴
思索者と行動者の間で	「北方行」 三造	「我が西遊記」 悟浄 「弟子」 子路
復讐者	「北方行」 傳吉	「牛人」 堅牛 「盈虚」 己氏
境界者	「マリヤン」 マリヤン	「李陵」 李陵

【表 3】では、<中国古典もの>と<植民地もの>とのつながりを表示し、人物造形の特質を表した。その影響関係の合理性を証明するために、本論では表の中から3つ例を取り上げてその詳細を考察する。

### 1. 誇り高い自尊心の持ち主

#### －「虎狩」（1934）から「山月記」（1941）へ

第2章で取り上げた「虎狩」は、両班の弟子である朝鮮人少年趙大煥が登場し、<私>の目を通して彼を観察し見聞した作品である。前述したように、趙大煥は日本人社会にいる時と朝鮮人社会にいる時の振る舞いが異なっている。本節では、特に日本社会における被支配者としての趙大煥の人物像を中心に見ていく。

趙大煥は日本人の前では、生意気で誇り高い自尊心の持ち主である。彼は半島人でありながらも、内地人には負けたくない、馬鹿にされたくないという意識を常に持ち続けていた。以下の3点はその主な特徴である。第1に、彼はいつも人を小馬鹿にしたような笑いを浮かべ、人から見透かされまいと常に嘲笑的で、冷笑的な表情で身構えていること。第2に、学校で行われることには真剣に取り組まないこと。第3に、威張る日本人上級生に

対して従順しないこと。

しかしその一方、彼は弱虫で、傷つきやすく、臆病な存在でもある。その特徴は次の3点にまとめられる。第1に、半島人という意識を持たせる同級生や先生からの同情が堪らないこと。第2に、威張る上級生に対しては生意気な態度をとっているが、心の中では恐れていること。第3に、上級生に殴られた後に弱い姿を見せていること。

このように見てくると、被支配者としての趙大煥は、実は誇り高い自尊心を持ちながらも、臆病な人間である。では、「山月記」の李徴はいかなる特徴を持っているのか。

「山月記」は中国唐代李景亮の伝奇小説「人虎伝」に取材した作品である。そのあらすじを簡潔にまとめると、詩人として出世したかった李徴は出世できず、止むを得ず役人になった。そして、公用に出かけたある日に、李徴はついに半人半虎に化した。その後、たまたま道端で高官になった旧友に会った彼は、虎になってしまった原因を語りだす。最後に、彼は人間の心を諦めて猛獣、すなわち虎になったのである。

李徴は自分が虎になった原因は、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に分裂した心理の所産であると自己反省する。彼は旧友に対して、次のように語る。

人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所為である<sup>339</sup>。

李徴は才能のないことが暴露されるのを恐れるがあまりに人との交わりを避け、逆に他人より優れた才能を持っていることを信ずるが故に人と交わる必要性を持たなかったと訴えている。つまり、「自分の弱さと逆の優越感<sup>340</sup>」という矛盾した心理によって身動きが取れず、苦悩のみ増大させてしまった結果、虎に変身したと、李徴は自己分析したのである。

<sup>339</sup> 中島敦『中島敦全集1』(筑摩書房、2001) 27頁。以下テキストの引用は頁のみ。

<sup>340</sup> 藤村猛『山月記』論『安田女子大学紀要22』(安田女子大学、1992) 33頁。

このように、李徴は誇り高い自尊心を持っている一方、傷つきやすい心性を持つ趙大煥のイメージと一致している。この誇り高い自尊心の存在としての李徴と趙大煥の姿は、実は両作品が共通に取り上げている〈虎〉のモチーフからも裏付ける。「山月記」の中の〈虎〉はそのまま李徴の変身後の姿として登場し、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という人間の特質の象徴として捉えられている。このような特質は「虎狩」の中でも見られる。「虎狩」の中では、〈私〉は動物園で本物の〈虎〉と対面する場面が描かれている。それは以下である。

私が此處に佇んでゐた小一時間の間、この獣は私に一瞥さえ與なかつたのだ。私は、侮辱を受けたやうな気がして、最後に、獣の唸るやうな声を立てて、彼の注意を惹かうと試みた。併し無駄だった。彼は、その細く閉ぢた眼をあげようとさえしなかつた。

(91 頁)

動物園の檻の中の虎は、自分を見に来た「私に一瞥さえ與なかつた」。「侮辱を受けた」〈私〉の目に映った虎の姿は、まさしく傲慢かつ孤高な存在そのものであった。これは趙大煥の性格と非常に類似する。南富鎮が『虎狩』では虎を人間の性格、とくに自尊心の象徴として捉えているが、これは中島敦の代表作『山月記』の中でも見られる<sup>341</sup>と指摘しているように、〈虎〉というイメージを通して、李徴と趙大煥の人物像に見られる誇り高い自尊心の持つ主としての性質はより際立ち、強調する役割を果たしていると言えよう。

しかし、両者は類似する性質を持ちながらも、趙大煥から李徴への変化が見られる。「虎狩」の中では、趙大煥の心理的な描写が少ないため、中島敦は様々な行動や事件を取り入れて解釈している。それに対し「山月記」の中では、誇り高い自尊心の持ち主という心性について、中島敦はより明確かつ深い認識を持って李徴の自省自責を表わしている。この変化こそ中島敦の深まった人間認識の表出とすることができよう。

## 2. 思索者と行動者の間で

「北方行」(1933-1936) から『わが西遊記』(1942)、そして「子路」(1942) へ

---

<sup>341</sup> 南富鎮「中島敦『虎狩』の展開：虎をめぐって」『稿本近代文学 19』(筑波大学、1994) 96-104 頁。

中島敦文学の典型的な人物像の一つとして懷疑者、あるいは思索者が指摘される。例えば「北方行」の中では、墮落地獄に苦しむ白夫人や虚無主義者の伝吉がまさにそれである。

「北方行」のもう一人の登場人物三造は思索者の性質を持ちながらも、異なる姿として造形されている。この三造の人物像は晩年の古典作品でも見られる。

第3章で述べた通り、三造は「生とは何か」と真剣に考え、自意識過剰に苦しむ人物である。また、彼は現在の生活に不安と焦燥を感じ、己の存在に疑問を抱く人物でもある。つまり、彼は思索者、懷疑者なのであるが、実は、彼はこれまでの中島敦文学の同様の主人公に見られない新たな一面がある。それは現実にはぶつかると、行動によって自意識過剰の病から脱出したいと願っていることだ。三造は思索者から行動者になろうとした。そのため、彼は渦巻きの最中にある北平へ旅立ち、中原大戦の最前線へ行くことを希望した。しかし、第4章で述べたように、三造は北平という古都の雰囲気にもまれて無力な幸福と快い無為だけを感じるだけであって、自己改造の夢も戦場へ行く決意を行動に移さないまま終わってしまう。結局、三造は何の行動も起こさず相変わらず懷疑者・思索者の立場にとどまってしまったが、それでもなお彼の中には自意識過剰からの脱出を望み、実践しようとする行動願望の側面がある。

このような行動願望を持つ思索者としての三造の姿は、『わが西遊記』（1939-1942）の悟浄からも見られる。三造が自意識過剰の病にかかっていたのに対し、悟浄は懷疑癖があり、「因果の病」にかかっている。その病状は、次のように書かれている。

いつのころから、また、何が因でこんな病気になったか、悟浄はそのどちらをも知らぬ。ただ、気がついたらそのときはもう、このような厭わしいものが、周囲に重々しく立罩めていった。（中略）今まで当然として受取ってきたすべてが、不可解な疑わしいものに見えてきた。今まで纏まった一つのことと思われたものが、バラバラに分解された姿で受取られ、その一つの部分部分について考えているうちに、全体の意味が解らなくなってくるといった風だった。（中略）この病に侵された者はな、すべての物事を素直に受取ることができぬ。何を見ても、何に出会っても『なぜ?』とすぐに考える。（312-313頁）

これは中島敦の文学作品に見られる典型的な懐疑主義者のパターンといえよう。彼は自らの苦しみを軽くし、解決方法を求めて5年間遍歴に出かけた結果、自分の欠けている点を自覚する。彼にとっての救済方法はほかでもなく、「一切の思念を捨て、ただただ身を動かす」ことである。その身を動かす方法として、三蔵法師に従って西方に赴くことである。そのため、彼は三蔵法師を保護する役割を果たす孫悟空に出会った。孫悟空はいかなる困難があっても喜んで迎え、すぐ行動して解決につなげる性質を持つ人物である。

困難な現実も、悟空にとっては、一つの地図—目的地への最短の路がハッキリと太く線を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識と同時に、その中であって自分の目的に到達すべき道が、実に明瞭に、彼には見えるのだ。(中略)我々鈍根のものがいまだ茫然として考えも纏まらないうちに、悟空はもう行動を始める。目的への最短の道に向かって歩き出しているのだ。(343頁)

このように、孫悟空は悟浄と正反対の、絶対的行動者として描かれている。悟浄も行動的な孫悟空に魅了し、圧倒される。

とにかく、今のところ、俺は孫行者からあらゆるものを学びとらねばならぬだ。他の事を顧みている暇はない。(中略) この旅における俺の役割にしたって、そうだ。平穩無事の時に悟空の行き過ぎを引き止め、毎日の八戒の怠惰を戒めること。それだけではないか。何も積極的な役割がないのだ、俺みたいなものは、何時何処の世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるだろうか。決して行動者にはなれないだろうか。(中略) もっと悟空に近づき、いかに彼の荒さが真剣に応えようとも、どしどし叱られ殴られ罵られ、此方からも罵り返して、身を以てあの猿から全てを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけでは何もならない。(352-353頁)

ここに至ると、すべてのことに対して懐疑を持つ思索者、観察者である悟浄は、孫悟空のような行動者になりたい願望を明確にする。

実践しようとする思索者の悟浄は、自意識過剰の状態を癒そうとする三造のイメージと重なる。しかし、行動的になろうとする特質は三造からも悟浄からも見られるが、その程度と性質は全く異なる。戦場へ出かけることは「無気力な幸福に酔いしれている自分にとって、いい刺激になる」ことだと思ふ三造の願望はぼんやりとしたものに過ぎない。それに対して、悟浄のそれはより集中的かつ深刻的に表現されている。

生意気をいう前に、とにかく、自分でも知らないでいるに違いない自己を試み展開してみようという勇気が出て来た。躊躇する前に試みよう。結果の成否は考えずに、唯、試みるために全力を挙げて試みよう。決定的な失敗に帰したっていいのだ。今まで何時も、失敗への危惧から努力を放棄している渠が、骨折れ損を厭はない所にまで昇華されて来たのである。(331頁)

悟浄は決定的な失敗をしても全力を出して自らの世界を展開しよう決心する。悟浄の行動者になる目標は、願望というより、そうせねばならない覚悟といえよう。この文章からは三造から悟浄への人物の飛躍と成長が窺える。

しかし、悟浄は結局、孫悟空に学ぶと決心をするだけであって、行動には移さなかった。彼は行動する覚悟をしたにもかかわらず、所詮懷疑者、思索者の立場に立つことしかできない人間なのであった。

一方、南洋から帰国した後に創作された「弟子」の主人公子路には顕著な変化が見られる。先行研究では、子路の人物像は「悟浄嘆異」の孫悟空、「斗南先生」の中島斗南と結びつけて論じられる場合が多い。例えば、佐々木充は「中島にとって斗南-悟浄-子路は、おのれの持たざるものを持つ存在であり、激しい憧憬の対象であった<sup>342</sup>」と指摘している。また、山下真史も斗南と子路がともに「純粋な没利害性」という点において、同じような気質を備えた人物である<sup>343</sup>と捉えている。二人は子路の行動者としての人物像に焦点を当てて論じている。指摘の通り、確かに子路は行動者としての気質を備えている人物である。

しかし、ここで注目してほしいのは、子路は行動者としての側面だけではなくて、三造や悟浄のような思索者としての一面も持っていることである。それについて、郭玲玲

---

<sup>342</sup> 佐々木充『中島敦研究』（桜楓社、1973）329頁。

<sup>343</sup> 山下真史、前掲書（註47）216-217頁。

は悟浄、孫悟空と子路の人物像を比較し、悟浄は単なる思索者、孫悟空は行動者、そして子路は「行動者と思索者が一体となる」存在として捉え、子路像とこれまでの主人公との違いについて述べ、「自分の運命に対して能動的に参与する意欲が起こり、己の存在に対して肯定できる<sup>344</sup>」子路の姿を指摘している。筆者は子路の行動者と思索者の性質を重ね備える指摘に大いに賛同する。しかし、氏は悟浄の行動的な一面には注目せず、悟浄とは違う人物像として子路を捉えており、両者の繋がりについて指摘していない。

以下、筆者は先行研究を参考にしながら、子路の二面性に重点を置いて考察する。その上、両者の繋がりや相違点を明らかにしたい。

まず、悟浄と同様に、子路という人物から思索者の一面が見られる。子路は子供の頃から「邪が栄えて正が虐げられるという・ありきたりの事実」について常に疑問を抱いている。この事実にぶつかる度に、子路はいつもなぜだ、天とは何だ、天は何を見ているのだと悲憤を発している。

天は人間と獣との間に区別をも受けないと同じく、善と悪との間にも差別を立てないのか。正とか邪とかは畢竟人間の間だけの仮の取決にすぎないのか？子路がこの問題で孔子の所へ聞きに行くと、いつも決まって、人間の幸福というものの真のあり方について説き聞かせられるだけだ。善をなすことの報は、では結局、善をなしたという満足のほかにはないのか？（461-462頁）

子路は正義が見られない世の中について天に不満を覚え、疑問を感じる。師の教を聞いてもどうしても承知できない様子だった。このように、悟浄と子路はともに「なぜ」と思索するが、その内実は明らかに異なる。悟浄は「己とは何者か」、すなわち自己と世界の究極的な意味に対して「なぜ」と発するが、子路のほうは世の中の不公平に疑問を持っている。つまり、己の存在に疑問を感じる悟浄とは違い、子路は己の正義感を絶対視している。子路の「なぜ」は自己を堅持するために発した疑問なのである。

また、子路は悟浄と同じく思索的な一面を持つと同時に、行動的な性質をも持っている。子路は作品の中では、遊侠の一人で長剣を好み、素直で単純な剽悍な人間として描かれている。作品の冒頭では、近頃子路は「賢者の噂が高い」孔子の話聞くや否や、彼を辱め

---

<sup>344</sup> 郭玲玲「中島敦『弟子』論-己を堅持する子路像の成立をめぐる-」『東アジア研究 13』（山口大学大学院東アジア研究、2015）32-37頁。

ようと思ひ立ち、すぐに行動に移る。

似而非賢者何程のことやあらんと、蓬頭突鬢・垂冠・短後の衣という服装で、左手に雄雞、右手に牡豚を引提げ、勢猛に、孔丘が家を指して出掛ける。雞を揺り豚を奮ひ、嗷しい唇吻の音を以て、儒学の絃歌講誦の聲を擾さうというのである。(449 頁)

このように、噂を聞くとすぐに行動し、雞と豚を引提げて儒学の講誦を乱そうとする子路はまさに乱暴的で直情径行な性格の持つ極めて行動的な生き方をする人間であるといえる。つまり、悟浄の行動者としての性質は覚悟を抱く所で止まってしまうが、子路は典型的な行動者なのである。

そして、三造や悟浄は行動者になるために自らの思索者としての性質を嫌悪し、精一杯潰そうとするが、子路は思索しながら行動する存在として描き出されている。

というのは、子路は孔子の門に入り、孔子に感化されてその教えを受けつつ、精神的に変化し、成長していく。一つの例として、彼の親孝行に対する考え方の変貌が挙げられる。行動者の子路は形式主義的なものに対して本能的な忌避していたが、孔子の門に入って以来、師に教化され、親孝行を実行するようになる。最初の頃は親孝行という行為は偽りとし、「我儘を云って親を手こずらせていた頃の方が、どう考えても正直だったのだ」と考えていたが、後年になって親が老いたことに気づき、急に涙が出てくる。その時以来、彼の親孝行は無類の献身的なものとなる。本能的に忌避した所から、偽りと思っても親孝行をするところを経て、献身的なものに至るといった子路の変化から見せるのは、まさに思索者としての柔軟性であろう。彼は師の話を聞き入れ、自らの人生と照らし合わせ、実行に移る。思索しながら行動する子路の身の上から、我々は彼の生を肯定しながら能動的かつ意欲的に生きる姿勢に気づくに違いない。

以上見てきたように、三造、悟浄と子路の3人は共に思索者と行動者の特質を持っていると言えよう。しかし、行動者の面で言うと、三造と悟浄は行動者の願望を持つだけにとどまってしまったのに対し、子路は実際に行動者として逞しく生きていた。また、思索者の面では、三造と悟浄は己の存在に不安を感じるが、子路は己を堅持し、自分の人生を肯定的に見る所に辿り着く。さらに三造と悟浄は思索者としての自己を一方的に嫌悪し、懐疑を抱き続けるが、子路は思索しながらも変化をし、自らの生に合わせて行動する柔軟な姿勢を持つようになった。このような子路の人物像は三造や悟浄よりさらに魅力的で、豊

かに見える。

### 3. 境界線に置かれる存在

#### －「マリヤン」(1942) から「李陵」(1942) へ

このように、行動者と思惑者の特質を持つ人間像が晩年の作品に受け継がれたほか、二つの文明の間に苦悩する人物像も見られる。「マリヤン」のマリヤンと「李陵」の李陵はその典型的な人物である。

第5章で述べたように、マリヤンは温帯文明を持つ<日本>と熱帯的な風土自然をもつ<南洋>の間に生きる存在である。<文明>と<未開>の境界線に置かれた彼女は一方で英語・日本語を勉強し、精一杯文明人に近づこうとしながらも、一方で永遠に日本人になれず文明人になれない自覚を持つ。彼女は二つの文明の狭間に矛盾し葛藤する人間であった。南洋体験によって新たに認識された島民像(マリヤンの姿)は、帰朝後書き上げた「李陵」の李陵からも読み取れる。

洪瑟君はマリヤンと李陵との関連について「マリヤンのような、異なっている価値観の間に彷徨する人物像は、その後の「弟子」と「李陵」にも見られる」と述べ、李陵を「漢(文明)と匈奴(未開)との間で絶えず揺らぐ人物」<sup>345</sup>として捉えている。陸嬋は中島敦の<南洋もの>に見られる「文明と未開の<境界>的な位相に置かれる」南洋の両義的な空間と「李陵」の社会的空間との類似点を示し、マリヤンと同じく「二つの社会に揺るがされる存在」として、李陵も「漢と匈奴の間で動揺しつつある<境界者>」<sup>346</sup>であると指摘している。

しかし、これらの先行研究は、マリヤンと李陵との人物像の類似点について言及されているだけであって、具体的な分析は行われていない。しかも、マリヤンと李陵の相違点と、

<sup>345</sup> 洪瑟君「中島敦「マリヤン」論—島民に投影された作家の自己イメージ」『国文学叢 203』(広島大学国語国文学会、2009) 11-12 頁。

<sup>346</sup> 陸嬋「中島敦の南洋行に関する一考察—「南の空間」における<境界線>を中心に」『言語・知識文化研究 (19)』(東京外国語大学大学院総合国際学研究所、2013) 118 頁。

人物像の変貌についても指摘されていない。本節では、李陵の人物像の心理的な変化の過程に焦点を当てて分析することによって、李陵とマリヤンとの類似性と相違点を確認し、人物像の変貌について考察を加えたい。

李陵は「飛將軍」李広の孫として騎射の名手と知られている。作品の冒頭では、李陵は五千の歩卒を率いて漠北の敵匈奴の勢力圏内に深く進んで戦ったが、ついに惨敗の目に遭った。李陵は重傷を受けて失神し、匈奴の捕虜になり、大漢帝国から胡族の世界に入る。こうして李陵の生きる舞台は漢朝から匈奴の地に移る。

当時、漢武帝の支配の下で、漢朝は発展の頂点を迎えた強大な国家であり、文明の中心地であった。李陵は初め胡地の風俗を「野卑滑稽としか映らなかった」もの、「卑しきもの」と考えていたように、漢朝は周辺の異民族の匈奴に対して絶対的な優越感を抱いていた。漢族と匈奴の関係は、当時の文明国日本と未開世界の南洋の構図と類似している。

さて、乱軍の中に気を失って単于の帳房の中で目覚めた以来、李陵は単于やその臣民から賓客の礼を持って厚遇された。単于は李陵の善戦を讃え、強き者が辱められることは決してないと言った。それにもかかわらず、李陵は「自ら首刎ねて辱めを免れるか」、それとも「今一応は敵に従っておいて其の中に機を見て」、単于の首級を土産として脱走するかと考えた末、彼は後者を選ぶことに心を決めた。しかし、このような機会がなかなか恵まれず、彼は辛抱強く待つだけだった。

半年がたったある日、武帝は他人の讒言で、李陵が祖国に残してきた一族全員、老母から妻、子、弟に至るまで悉く殺害した。それを耳にした李陵の憤怒は極に達した。その後彼は人間が変わったように進んで右校王となり、単于の娘と結婚し、子を設けた。また、単于の息子左賢王に「友情のようなものを感じる」ようになった。それだけではなく、彼は段々胡地の風俗に対して認識の変化を見せた。

初め一概に野卑滑稽としか映らなかった胡地の風俗が、しかし、その地の実際の風土、気候等を背景として考えて見ると決して野卑でも不合理でもないことが、次第に李陵にのみこめてきた。(中略) 胡俗の粗野な正直さの方が、美名の影に隠れた漢人の陰険さよりはるかに好ましい場合が屢々あると思った。諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかかるのは、あまりにも漢人的な偏見ではないかと、次第に李陵にはそんな気がして来る。(514-515 頁)

このように、李陵は匈奴の文化の良さを理解するようになる。彼は寝返りし、匈奴の生活に馴染んでいった。しかし、それにもかかわらず、李陵はやはり匈奴の軍を率いて自分の同胞である漢軍と戦うことができなかった。彼の心の中では、一体自分はどこまで祖国の漢に対して忠節を守るべきか、それとも身とともに心をも匈奴に引き渡すかという問題に苦悩する日々を送っていた。

匈奴の右校王たる李陵の心は未だにハッキリしない。母妻子を族滅された怨は骨髓に徹しているものの、自ら兵を率いて漢と闘ふことができないのは、先頃の経験で明らかである。再び漢の地を踏むまいとは誓ったが、この匈奴の俗に化して終生安んじていられるかどうかは、新単于への友情を以てしても、まださすがに自信が無い。

(513-514 頁)

李陵は漢への怨恨を感じながら未練をも持ち、匈奴へ親しみを感じながらも完全に現地に溶け込むことができず、匈奴の人間になっていくしかなかった。結局のところ、彼も漢と匈奴の境界線に置かれて不安と動揺を示す人間なのであった。

このように、李陵の心は揺れ動きながらも一切を運命に任し、匈奴の世界に生活の根を下ろし始めるが、蘇武との出会いによって、再び心理的な危機に直面する。

蘇武はそもそも漢の平和の使節として捕虜交換のために遣わされたが、偶々匈奴の内紛で使節団全員が囚えられ、蘇武一人を除いて皆降参してしまった。その後、単于は何度も勸降を続けるが、いずれ拒絶され、蘇武もつい遠い北海の人無き所に流されてしまうのである。李陵は単于に頼まれて蘇武の降伏を勧告するために、前後 2 回に北海を訪れた。

「飢餓も寒苦も孤独も苦しみも、祖国の冷淡も、己の苦節」が人に知られざることを憂えず、「譬へやうも無く清冽な純粹な漢の国土への愛情」を持つ蘇武の姿を前にして、李陵はこれまでの生き方、己自身に対して「冷汗」が出るほど「恐れ」、「暗い懷疑」に追いやられるのであった。

何を語るにつけても、己の過去と蘇武にそれとの対比が一々引っかかってくる。蘇武は義人、自分は売国奴と、それ程ハッキリ考えはしないけれども、森と野と水との沈黙によって多年の間鍛え上げられた蘇武の厳しさの前には己の行為に対する唯一の弁明であった今までの我が苦悩の如きは一溜まりもなく圧倒されるのを感じない

訳にいかない。(519頁)

このように、純粋で偉大な蘇武は、李徴にとって「崇高な訓誡でもあり、いらだたしい悪夢でもあった」存在であり、彼自身の過去を恥ずかしく思わせる存在であったのである。

その後漢が新しい統治者を迎え、そして匈奴と再び友好関係を結ぼうと動き出した際に、李陵は漢使の「帰ってくれ」という希望に対して、「又辱めを見るだけのことではないか?」と思い、やはり動揺しながらも帰国の誘いを断った。結局彼は苦悩、懐疑、自己嫌悪に満ちた余生を匈奴の地で悶々と過ごしてしまうのである。

このように、李陵は始終胡地に溶け込もうとして完全に溶け込むことができず、漢に未練を持ちながらも、胡地の家族や友人への情愛も捨てがたく、漢と匈奴との間に引き裂かれて葛藤する人物なのであった。その姿は、文明人になろうとしてなれなく、島民のイメージから離れようとして逆に島民に引き戻ることになるマリヤンが<文明>と<未開>の間で苦悩するその姿と重なるのである。つまり、マリヤン同様に彼も二つの文明の境界線に置かれる存在なのであった。

しかし、同じ性質を持ちながらも、その相違点も見られる。これまで述べてきたように、マリヤンの心理的な葛藤に対して、李陵の精神の変化は実に複雑で激しい。彼の精神的な苦悩の深さが窺える。一方、マリヤンの人物像は変化を見せながらもわりと恒常とした性質と生き方を持っているが、李陵のそれは現実の状況に応じて常に変化を見せ続けている。彼は単于の首級をお土産として漢に捧げようとしたが、一族が殺害されたと知った時、漢を裏切って匈奴の生活に入っていく、「卑しきもの」と思われる匈奴の文化に理解の眼差しを向け、左賢王とも友情を築ける。

その後、やっと生活が落ち着こうとしたところで、蘇武と出会って過去の生き方に恥ずかしく思い、恐れ、懐疑し、逆に漢への未練を持つようになる。蘇武は漢への絶対的な愛情を持ち、いかなる困難に直面しても目を背けず真っ直ぐな生き方をした人物と言える。一方、李陵の生き方には、置かれた現実に対して心を揺らぎ、苦悩し葛藤しながら、その時々々の状況や性情に柔軟に応じられる姿勢が見られる。同じく境界線に置かれる存在でありながら、李陵の人間像がマリヤンのそれに対してより豊かなのは至極当然なことであろう。

以上、<植民地もの>と<中国古典もの>の人物像を巡る類似性と相違点について考察を行なった。その結果、植民地体験によって作り上げられた人物像は確かに<中国古典

もの>の中に読み取ることができる。しかしながら、<中国古典もの>には<植民地もの>にはない幾つの特徴が見られる。

その一つ目は、主人公たちがいずれも複雑な内面世界を持っている人物として描かれている。子路は懐疑を抱き続けながらも変化し、自分の生に合わせて行動する人間であり、また李陵は置かれた現実に対して極めて複雑な精神的な変化を見せている。

二つ目は、登場人物はみんなそれぞれの現実の生活に対して不安や苦悩、懐疑を抱いている。詩人を目指した李徴は「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に悩まされた挙句に現実社会から孤立してしまう。子路は正義が見られない世の中について天に不満を覚え、懐疑を感じている。また李陵は漢と匈奴との間にゆれ、自らの帰属について動揺を見せ続けている。

三つ目に、運命の悪意に操られている人間の悲劇と無力さが描かれている。詩人になろうとした李徴は結局虎に変身し、詩人としての自分を葬る。子路は衛の政変に巻き込まれて悲惨な最期をとげる。李陵は漢と匈奴の間に葛藤しながら余生を悶々と過ごしてしまう。

このように、<中国古典もの>の3つの特徴と、前述した植民地体験によって得られた3つの人間認識とを照らし合わせてみると、植民地体験によって深まった人間認識は確実に<中国古典もの>の中に受け継がれていったと言えよう。

#### 4. 中国古典の世界へ

晩年の中島敦は中国古典の世界に入り、作品を描き続けた。序章で述べてきたように、中島敦が中国の古典・古実を題材にした作品を執筆していた頃は戦争の時代である。日本国全体が一つの魂になるような熱狂の状況に陥ってしまい、文壇も時局便乗的な空気に包まれていた<sup>347</sup>。このような状況の下で、ほとんどの作家たちは好むと好まざるとにかかわらず、時流に沿って戦争を賛美する作品を数多く発表し、戦争に協力した。彼らは「東亜新秩序」「八紘一宇」「鬼畜米英」といった蠱惑的なスローガンの下で<sup>348</sup>、<私>を捨てて生きていかねばならなかった。

ところが、中島敦はこのような価値観喪失の時代に、「弟子」や「李陵」などの中国古

<sup>347</sup> 閻瑜、前掲書（註3）275頁。

<sup>348</sup> 山下真史、前掲書（註47）27頁。

典を素材にした作品を次々と書き上げ、この暗黒な時代における人間存在の生き方を模索した。子路は絶対的な師である孔子の下で教えを受けつつも、己を堅持し、自分の人生を能動的かつ肯定的に生きた人物である。李陵も司馬遷は漢武帝という絶対的な価値観と権力の下で運命に翻弄されながらも、それぞれの性情に従って、自分なりの生を堅持し遂げた人物である。つまり、中島敦は古典ものを通して、時代風潮に乗る知識人達の生き方を批判し、確固たる自己を守り、そうでない人生の生き方を提示したのである。

<植民地もの>との比較から明らかになったように、晩年の中島敦が中国古典に取材した主流的、絶対的な価値標準に従わない様々な人間の生き様を描き上げることができたその背後に、植民地体験によって深まった人間観察が据えられていたことはいくら強調してもし過ぎることはないであろう。

## 参考資料

### 1、基本資料

中島敦『中島敦全集 1』(筑摩書房、2001)

中島敦『中島敦全集 2』(筑摩書房、2001)

中島敦『中島敦全集 3』(筑摩書房、2002)

高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊『中島敦全集別巻』(筑摩書房、2002)

### 2、単行本

#### <中島敦に関する専門書>

閻瑜『新しい中島敦像-その苦悩・遍歴・救済』(桜美林大学北東アジア総合研究所、2011)

伊藤整等編『日本現代文学全集 82 梶井基次郎・田畑修一郎・中島敦』(講談社、1964)

岡谷公二『南海漂蕩 ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』(富士房、2007)

オクナー深山信子『世界文学の中の中島敦』(せりか書房、2009)

奥野政元『中島敦論考』(1989、双文社出版)

勝又浩・木村一信『中島敦 昭和作家のクロノトポス』(双文社出版、1992)

川村湊『南洋・樺太の日本文学』(筑摩書房、1994)

河路由佳『中島敦「マリヤン」とモデルのマリア・ギボン』(港の人、2014)

佐々木充『中島敦-近代文学資料1-』(桜楓社、1969)

佐々木充『中島敦の文学』(桜楓社、1973)

佐々木充『中島敦研究』(桜楓社、1973)

鷺只雄『中島敦論「狼疾」の方法』（有精堂、1990）

杉岡歩美『中島敦と＜南洋＞同時代＜南洋＞表象とテキスト生成過程から』（翰林書房、2016）

清水雅洋『求道者の文学 中島敦論』（文芸社、2002）

島内景二『中島敦「山月記」の真実』（文春新書、2009）

杉岡歩美『中島敦と＜南洋＞』（翰林書房、2016）

瀬沼茂樹「梶井基次郎・田畑修一郎・中島敦入門」『日本現代文学全集 82 梶井基次郎・田畑修一郎・中島敦集』（講談社、1964）

孫樹林『中島敦と中国思想－その求道意識を軸に－』（桐文社、2010）

田村秀明『中島敦「李陵」創造』（明治書院、1999）

田村秀明『中島敦「弟子」創造』（明治書院、2002）

村山吉廣『評伝・中島敦』（中央公論新社、2002）

濱川勝彦『中島敦の作品研究』（明治書院、1976）

諸坂成利『中島敦「古譚」講義』（彩流社、2009）

諸坂成利『虎の書籍 中島敦とボルヘス、あるいは換喩文学論』（水声社、2004）

山下真史『中島敦とその時代』（双文社出版、2009）

若森繁男『中島敦生誕100年、永遠に越境する文学』（河出書房新社、2009）

渡辺一民『中島敦論』（みすず書房、2005）

#### <関連書籍>

青柳真智子『モデクゲイ ミクロネシア・パラオの新宗教』（新泉社、1985）

芥川龍之介『芥川龍之介全集 8』（岩波書店、1996）

浅野豊美『植民地－帝国 50年の興亡』（読売新聞社、1995）

阿部知二『北京』（第一書房、1938）

荒井利子『日本を愛した植民地 南洋パラオの真実』（新潮新書、2015）

家永三郎『太平洋戦争』（岩波書店、2002）

一戸務『現代支那の文化と芸術』（松山房、1939）

伊藤永之介他『コレクション戦争と文学 満州の光と影』（集英社、2012）

加藤聖文『満鉄全史＜国策会社＞の全貌』（講談社、2006）

河原理子『戦争と検閲 石川達三を読み直す』（岩波新書、2015）

川村湊『ソウル都市物語 歴史、文学、風景』（平凡社、2004）

川村湊『満州国 砂上の楼閣「満州国」に抱いた野望』（現代書館、2011）

川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、1990）

金原左門編『地方文化の日本史第9巻 地方デモクラシーと戦争』（文一総合出版、1978）

姜在彦『世界の都市の物語7 ソウル』（文藝春秋、1992）

北川桃雄『古都北京』（中央公論美術出版、1969）

菊池秀明『ラストエンペラーと近代中国 清末中華民国』（株式会社精興社、2005）

久保喬『南洋旅行』（金の星社、1941）

倉沢愛子等編『岩波講座アジア・太平洋戦争第2巻 戦争の政治学』（岩波書店、2005）

小菅輝雄『南洋群島写真帖一昔の micronesia』（グアム新報社東京支局、1978）

小林信介『人々はなぜ満州へ渡ったのか』（世界思想社、2015）

酒井直樹編『ナショナルテイ』（柏書房株式会社、1996）

下野新聞『満韓観光団誌』（下野新聞社、1910）

塩出浩之『越境者の政治史』（名古屋大学出版会、2015）

杉本幹雄『データーから見た日本統治下の台湾・朝鮮プラスフィリピン』（龍溪書舎、1997）

国書刊行会『写真で見る昔日の朝鮮上』（国書刊行会、1986）

大内力『ファシズムへの道』（中央公論新社、2006）

高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波書店、2002）

高崎隆治『文学の中の朝鮮人像』（青弓社、1982）

高浜虚子『朝鮮』（実業之日本社、1912）

田中益三「遍歴・異郷-朝鮮・中国体験の意味」『中島敦 昭和作家のクロノトポス』（双文社出版、1992）朝鮮総督府『施政二十五年史』（朝鮮総督府、1935）

朝鮮総督府『師範学校修身書巻2』（朝鮮総督府、1926）

丁貴連『媒介者としての国木田独歩 ヨーロッパから日本へ、そして朝鮮へ』（翰林書房、2014）

陳祖恩『上海に生きた日本人 幕府から敗戦まで』（大修館書店、2010）

塚瀬進『満州の日本人』（吉川弘文館、2004）

東京高等商業学校東亜倶楽部『大正中国見聞録集成「中華三千里」』（ゆまに書房、1999）

徳富健次郎『死の蔭に』（大江書房、1917）

徳富蘇峰『大正中国見聞録集成「支那漫遊記」第8巻』（ゆまに書房、1999）

中根隆行『<朝鮮>表象の文化誌 近代日本と他者をめぐる知の植民地化』(新曜社、2004)

永井均『道徳は復讐である ニーチェーのルサンチマンの哲学』(河出文庫、2009)

南洋庁『南洋群島写真帖』(大空社、2008)

西井一夫『決定版 昭和史 別巻 I』(毎日新聞社、1999)

西澤泰彦『図説大連都市物語』(河出書房新社、1999)

西野元章『海の生命線 我が南洋の姿 (南洋群島写真帖)』(二葉屋呉服店、1935)

能仲文夫『復刻版 南洋紀行 赤道を背にして』(南洋群島協会、1990)

南洋協会南洋群島支部編『日本の南洋群島』(南洋協会南洋群島支部、1935)

原安三郎『山本条太郎翁追憶録』(山本条太郎翁伝記編纂会、1936)

朴春日『近代日本文学における朝鮮像』(未来社、1985)

土方久功『土方久功著作集』第6巻(三一書房、1991)

土方久功『土方久功日記Ⅲ』(国立民族学博物館、2011)

土方久功『土方久功日記Ⅴ』(国立民族学博物館、2014)

土方久功『流木 ミクロネシアの孤島にて』(未来社刊、1974)

松岡静雄『ミクロネシア民族誌』(岩波書店、1943)

村松定孝等『近代日本文学における中国像』(有斐閣、1975)

矢内原忠雄『南洋群島の研究』(岩波書店、1935)

藪景三『朝鮮総督府の歴史』(明石書店、1996)

有精堂編集部『講座昭和文学史第2巻 混迷と模索<昭和十年前後>』(有精堂、1988)

劉建輝『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』(筑摩書房、2010)

渡辺一民『<他者>としての朝鮮 文学的考察』(岩波書店、2003)

和田博文『単独者の場所』(双文社出版、1989)

### 3、論文及び学術誌

安龍洙「清国人の日本留学に関する一考察—1980年から1910年まで—」『社学研論集第18号』(早稲田大学、2011)

上田淳一郎「三十年目の南洋群島」『中島敦研究』(筑摩書房、1978)

上田万年「清国留学生に就きて」『太陽第4巻第17号』(博文館、1898)

浦田義和「中島敦と土方久功—日本近代文学と南」『沖縄国際大学文学部紀要国文学篇 18

- (2)』(沖縄国際大学、1989)
- 閻瑜「中島敦の南洋物に見られるその時代意識-「マリヤン」を中心に」『大妻国文第 45 号』(大妻女子大学、2014)
- 閻瑜「中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響-「鶏」を中心に-」『国際日本学 : 文部科学省 21 世紀 COE プログラム採択日本発信の国際日本学の構築研究成果報告集 12』(法政大学国際日本学研究センター、2015)
- 王玉珊「中国人日本留学の歴史問題について」『中央学院大学社会システム研究所紀要 10(2)』(中央学院大学社会システム研究所、2010)
- 岡田英樹「李輝英「万宝山」-事実と虚構のはざま」『石井芙蓉雄教授追悼記念論集第 620 号』(立命館文学、2011)
- 岡田鴻城「内鮮言語の種々相」『朝鮮土木建築協会々報』(朝鮮土木建築協会、1932)
- 外務省亜細亜局「昭和九年天津総領事館北平分署警察事務状況(同警察署長報告摘録)」
- 郭玲玲「中島敦『光と風と夢』論-ゴーギャンと『ノア・ノア』を中心に-」『アジアの歴史と文化 19』(山口大学アジア歴史・文化研究会、2015)
- 郭玲玲「中島敦『弟子』論-己を堅持する子路像の成立をめぐって-」『東アジア研究 13』(山口大学大学院東アジア研究、2015)
- 梶田隆之「『山月記』論考」(『津山高専紀要』第 44 号、2002)
- 楠井清文「中島敦「虎狩」論」『論究日本文学第 90 号』(立命館大学日本文学会、2009)
- 鐘声の会「戦前の歴史教科書にみる朝鮮像」『季刊三千里 32 号特集教科書の中の朝鮮』(三千里社、1982)
- 川村湊「中島敦伝(3) 大連とハルピン」『アイ・フィール 15(1)』(紀伊國書店総務部、2005)
- 川村湊「中島敦伝 植民地の“虎”」『アイ・フィール 14(4)』(紀伊國書店総務部、2004)
- 川村湊「中島敦伝(4) 北方彷徨」『アイ・フィール 15(2)』(紀伊國書店総務部、2005)
- 川村湊「中島敦と朝鮮」『アジア遊学(51)』(勉誠出版、2003)
- カバ・加藤 メレキ「ピエール・ロティ『ロティの結婚』-民俗学者的な眼差しとフランス領ポリネシア」『文学研究論集 28』(筑波大学比較・理論研究会、2010)
- 権錫永「『ヨボ』という蔑称」『北大文学研究科紀要 132』(北海道大学、2010)
- 洪瑟君「中島敦とラフカディオ・ハーンの世界比較-「光と風と夢」と「佛領西印度の二年間」を中心に-」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域

(56)』(2007)

洪瑟君「ラフカディオ・ハーンの民俗学と中島敦」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域 (58)』(2009)

洪瑟君「『光と風と夢』の一試論-「光」を巡って」『国文学攷 (200)』(広島大学国語国文学会、2008)

小菅輝雄「南洋群島とはどんな所か」『南洋群島写真帖』(南洋群島協会、1978)

佐々木充「中島敦<南島譚>について」『帯広大谷短期大学紀要 7』(帯広大谷短期大学、1970)

清水久夫「中島敦『南島譚』とその素材としての「土方久功日記」」『跡見学園女子大学文学部紀要第 52 号』(跡見学園女子大学、2017)

徐己才「もう一つの<内地>からの便り-大正期における『旅行案内』と朝鮮旅行」『日本文学 50 (3)』(日本文学協会、2001)

徐東周「1929 年の<内地>で呼び起こされた 1923 年の<朝鮮>-中島敦の『巡査のいる風景』の表象する文化政治の日常」『日本近代文学 81』(日本近代文学会、2009)

須藤直人「太平洋の異人種間恋愛譚-植民地ロマンスとその「書き換え」-」『比較文学研究 88 号』(すずさわ書店、2006)

須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島-ポストコロニアル異人種間恋愛譚-」『立命館言語文化研究 20 (1)』(立命館大学国際言語文化研究所、2008)

全遇容「植民地都市イメージと文化現象-1920 年代の京城-」『日韓歴史共同研究報告書 第一期第 3 分科報告書』(日韓文化交流基金、2005)

田川真理子「満州移民事業の理念と現実<前篇>」『言葉と文化 4』(名古屋大学、2003)

張赫宙「僕の文学」『文芸首都』第 1 巻第 1 号(文芸首都社、1933)

丁貴連「もう一つの<小民史>-国木田独歩と日清戦争(下)』『外国文学 61 号』(宇都宮大学外国文学研究会、2012)

丁貴連「もう一つの旅行記-柳宗悦の朝鮮紀行をめぐって-」『宇都宮大学国際学部研究論集第 15 号』(宇都宮大学国際学部、2003)

南富鎮(「中島敦の初期-<朝鮮もの>の展開を中心にして-」『日本文化研究:筑波大学大学院博士課程 日本文化研究学際カリキュラム紀要』(筑波大学、1995)

南富鎮「中島敦『虎狩』の展開-<虎>をめぐって」『稿本近代文学』(筑波大学、1994)

南富鎮「<娼婦>と<虎>の朝鮮表象-中島敦」『人文論集 56 (2)』(静岡大学、2005)

- 西川伸「滝川事件とはなんだったのか」『大阪市立大学史紀要』（大阪市立大学、2016）
- 濱崎一敏「日本における戦時下の文学者たち」『長崎大学教養部紀要（人文科学篇）終刊号第38巻第1号』（長崎大学、1997）
- 平林文「中島敦『北方行』の研究-その成立と構成と撤退-「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』-」『高崎商科大学紀要（27）』（高崎商科大学、2012）
- 藤村猛「中島敦〈D市七月叙景（一）〉論」『安田女子大学紀要34』（安田女子大学、2006）
- 藤村猛「『巡査のいる風景-1923年の一つのスケッチ』論」『安田女子大学紀要30』（安田女子大学、2002）
- 藤村猛「『山月記』論」『安田女子大学紀要22』（安田女子大学、1992）
- 丸山鶴吉「関東大震災当時の朝鮮」解説『朝鮮人虐殺に関する植民地朝鮮の反応』（緑蔭書房、1996）
- 三浦穂高「一高〈校友会雑誌〉における中島敦-『巡査のいる風景-1923年の一つのスケッチ』を中心に-」『国学院雑誌 第111巻 第7号』（国学院大学、2010）
- 三田牧「想起される植民地体験-「島民」と「皇民」を巡るパラオ人の語り-」『国立民族学博物館研究報告33（1）』（国立民族学博物館、2008）
- 森山茂徳「日本の植民地支配と朝鮮社会 植民地統治と朝鮮人の対応」『日韓歴史共同研究報告書 第3分科篇 上巻』（日韓歴史共同研究委員会編、2005）
- 守屋栄夫「朝鮮の開発と精神的教化の必要」『東洋』第25巻1号（朝鮮総督府、1922）
- 与謝野鉄幹「観戦詩人」『太陽』（博文館、1904）
- 安福智行「〈D市七月叙景（一）〉論-〈満州日報〉-を視座として-」『京都語文8』（佛教大学、2001）
- 山本卓「太平洋を描く：中島敦のステイブンスンとステイブンスンのサモア」『言語文化論叢（15）』（金沢大学外国語教育センター、2001）
- 李英哲「中島敦における〈朝鮮〉-挑発する植民地-」『朝鮮大学校学報6』（朝鮮大学校、2004）
- 陸嬋「中島敦の南洋行に関する一考察-〈南の空間〉における〈境界性〉を中心に」『言語・地域文化研究19』（東京外国語大学大学院総合国際学研究科、2013）
- 李月順「中島敦と朝鮮-「巡査のいる風景」を中心に-」『アジア社会文化研究（8）』（アジア社会文化研究会、2007）
- 廖秀娟「中島敦「虎狩」論」『台湾日本語文学報』（台湾日本語文学会、2007）

林語堂「古都北平」『改造』「支那事変増刊号」1937年11月付

渡辺晴夫「中島敦と中国・朝鮮-その朝鮮、中国観について-」『東アジア比較文化研究(10)』  
(東アジア比較文化研究国際会議日本支部、2011)

渡辺ルリ「中島敦<北方行>に見る1930年中原大戦下の中国-<北方行>序論-」『東大阪  
大学短期大学教育研究紀要7』(東大阪大学、2009)

#### 4、新聞・雑誌、インターネット資料

中島敦の会『図説中島敦の軌跡』(中島敦の会、2009)

平壤名勝 白衣の雑踏する朝鮮人市場

<http://www.tobunken-archives.jp/DigitalArchives/record/1C54AD1A-4C92-51DE-1896-8907C1BD6402.html?lang=ja> (2018年9月1日検索)

国防研究会「天皇機関説事件概略」

[http://www.kokubou.com/document\\_room/rance/rekishi/seiji/tennoukikansetu.htm](http://www.kokubou.com/document_room/rance/rekishi/seiji/tennoukikansetu.htm)  
(2018年5月18日検索)

カナカの娘

<https://www.youtube.com/watch?v=02s9eZb1K3E> (2018年7月29日検索)

1910年代北京正陽門

[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_491bcbfd0102v42v.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_491bcbfd0102v42v.html) (2018年9月1日検索)

1920年代の北京

[http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog\\_14ecb017b0102y1pm.html](http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_14ecb017b0102y1pm.html) (2018年9月1日検索)

時代と流行 魔都上海 1930年代

<https://cragycloud.com/blog-entry-81.html> (2018年9月1日検索)。

満州写真館 苦力

<http://www.geocities.jp> (2018/9/1 検索)。

## 初出一覧

本論文は、以下の既発表あるいは発表予定の小論文によって成ったものである。ただし、発表したものに基づいて修正・加筆を行った。

序章 中島敦とその時代、そして植民地体験 — 書き下ろし

第Ⅰ部 植民地に生きる様々な群像 — 少年時代の朝鮮体験

第1章 植民地に生きる様々な群像

— 「巡査のいる風景—1923年の一つのスケッチ—」(1929)

「中島敦の朝鮮認識—「巡査のいる風景」(1929)を手がかりとして—」

2016年2月『宇都宮大学国際学部研究論集』第41号(宇都宮大学国際学部)

第2章 両班の弟子としての少年 — 「虎狩」(1934) —

「もう一つの〈朝鮮もの〉—1930年代前後の日本文壇と中島敦「虎狩」(1934)」

2018年2月刊行『比較文化研究127号』(日本比較文化学会)査読付

第Ⅱ部 冒険を求める日本人達 — 青年時代の中国・満州体験

第3章 不安に生きる日本人たち — 「D市七月叙景(一)」(1930)

「人間認識の場としての植民地体験—中島敦「D市七月叙景(一)」(1930)を手掛かりとして—」

2015年2月『外国文学』64号(宇都宮大学外国文学研究会)

第4章 1930年の北京に暮らす在留日本人—「北方行」(1933-1936)— 書き下ろし

第Ⅲ部 島民イメージを覆す南洋人 — 晩年の南洋体験

第5章 植民地に生きるインテリ女性 — 「マリヤン」(1942) — 書き下ろし

第6章 奸悪な老人 — 「雞」(1942) — 書き下ろし

終章 <植民地もの>から古典の世界へ — 人物像の変貌を通して — 書き下ろし

付録

年譜：中島敦（1909-1942）

- 1909 東京市四谷区四谷筆筒町で生まれる。
- 1910 父田人が奈良県立郡山中学校に転勤。
- 1911 祖父中島撫山死去、久喜町の祖母中島きくに預けられる。
- 1914 父田人が生母チヨと正式離婚、カツと再婚。
- 1916 郡山男子尋常高等小学校入学。
- 1918 田人の転勤に伴い、浜松市浜松西尋常小学校3年2組に転入学する。
- 1920 四年成績全甲、優等賞を授与。父の朝鮮、龍山中学校への転勤により、京城龍山公立尋常小学校第5学年ロ組に転入学。
- 1921 優等賞授与、水練場に通って「水泳五級」修了の証書もらう。
- 1922 龍山小学校を卒業。朝鮮京城府公立京城中学校に入学。
- 1923 異母妹澄子出産後、第二母カツ死去。
- 1924 第三母コウを迎える。原稿用紙をノート形にした市販の「創作ノート」に断片や詩を書き付ける。
- 1925 父が龍山中学校を退職、関東庁立大連第二中学校教諭となる。修学旅行で南満州を旅行。
- 1926 第三母3つ子の弟妹を出産する（男児二人は間もなく逝去）。京城中学校四年修了で第一高等学校文科甲類に合格、入学する。
- 1927 春、友人と伊豆旅行。夏、大連帰省中肋膜炎に罹り、満鉄病院に二ヶ月ほど入院、その後を別府の満鉄療養所で養い、一年間休学となる。「下田の女」を「校友会雑誌」に発表。
- 1928 「ある生活」、「喧嘩」を「校友会雑誌」に発表。

- 1929 「短編二つ」と題して「蕨・竹・老人」「巡査のいる風景—「1923年の一つのスケッチー」を「校友会雑誌」に発表。父大連第二中学校を退職。
- 1930 「D市七月叙景（一）」を「校友会雑誌」に発表。東京帝国大学文学部国文学科に入学。伯父中島端死去。
- 1931 高橋タカと知り合う。
- 1932 伯父比多吉を頼り、大連、京城等を旅行する。卒業論文「耽美派の研究」を提出。
- 1933 東京帝国大学文学部国文学科に卒業し、同大学院に入学。横浜高等女学校教諭となり、横浜転居。長男たけし出生。「北方行」に着手。「プールの傍らで」脱稿か。「斗南先生」の一次稿成るか。
- 1934 大学院を中退。「中央公論」の新人募集の懸賞小説に「虎狩」を応募、選外佳作となる。
- 1936 小笠原諸島への旅に出て、この旅に取材した短歌を歌稿「小笠原紀行」にまとめる。第三母コウ死去。中国南方旅行に出発、この旅行に取材した短歌を歌稿「朱塔」にまとめる。「狼疾記」「カメレオンの日記」の一次稿なるか。
- 1937 長女正子誕生するもまもなく逝去。
- 1938 ハックスレイの「パスカル」訳了。
- 1939 「悟浄歎異」の一次稿成るか。喘息の発作が酷くなり、体力衰える。
- 1940 二男のぼる出生。「光と風と夢」の執筆に着手する。喘息がひどくなり、転地療養を真剣に考え始める。
- 1941 「古譚」四編を深田久弥に託して帰る。南洋庁内務部地方課国語編修書記としてパラオ赴任。妻子、横浜から世田谷の田人宅へ転居。南洋諸島の視察旅行。
- 1942 土方久功とパラオ本島一周の視察旅行。「文学界」2月号に「古譚」（「山月記」「文字禍」）掲載、好評を博す。土方久功とともにパラオ出航、横浜帰着。「文学界」5月号に「光と風と夢—五河荘日記抄」掲載。「政界往来」7月号に「古俗」（「盈虚」、「牛人」）掲載。筑摩書房から『光と風と夢』刊行。「光と風と夢」が第15回芥川賞候補となる。今日の問題社から『南島譚』刊行。「文庫」12月号に「名人伝」掲載。世田谷区の岡田病院で永眠。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、始終暖かい激励とご指導、ご鞭撻を下さいました指導教員の丁貴連先生に心から厚く御礼申し上げます。先生には、修士課程在籍中から、7年間の長きにわたりご指導を頂いたほか、様々な面でお世話になりました。

また、有益なご意見とご協力を頂いた磯谷鈴先生、松村史紀先生、松金公正先生、米山正文先生に心より感謝申し上げます。

そして、論文を完成するまでいつも貴重なご意見、ご助言をくださり、暖かく励ましてくれた檜宿英子様と丁研究室の皆さんにもこの場を借りて感謝を申し上げます。

最後に、中国と日本で応援し続けてくれた家族にも感謝の気持ちを伝えたいと思います。

2018年12月

陳佳敏